

---

# 天使の皮を被った悪魔と俺と受難の日々

八 - ネット

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使の皮を被った悪魔と俺と受難の日々

### 【Nコード】

N0002E

### 【作者名】

ハ・ネット

### 【あらすじ】

実体験や、実体験をオバーバにしたのやら、理想やら、空想やら色々混ぜたものです。かなり自分の価値観が入ってます。別に何を伝えようと言うわけではありません。気軽に読んで下さい

## 第1話：あいつとの出会い

とある高校のとある教室に真剣な顔をしている男とめんどくさそうな顔をしている男がいた

「なあ、達也」

男は切羽詰まった声で話しかけた

「なんだよ」

もう一人の男はめんどくさそうだった

「女の子が男に惚れるのって、どうゆう所なんだろうな」

「顔だろ」

「それをいつちやおしまいだろうが……」

「いや、現実的に考えればそうだろ。」

「違うだろ。性格とか頼りがいがあるとかさもつとあるじゃん」

「そんなもんは年をとったらであって、高校生はまず顔から入るだろ」

「うるせえ……恋愛経験のないお前が何語ってんだよ」  
男はいきなりキレだした

「うぜえ……」

「こいつまじでうざいですよ」

「じゃあ、聞くなっつての」

まあ、しょうがないな

目の前にいる男は山口太一といって、顔も身長も性格も勉強も運動神経もすべて平均的だからな

「お前、何かひどい事考えてるんだろ？」

「いや、事実しか考えてないけど」

「お前の事実はいつつもひどい事だろうよ」  
にがにがしくいった

「気にするな。友よ」

それより、お前は恋愛経験のない俺が語るなどいつていたが、じゃあ、恋愛経験の豊富な男子か女子に聞けばいいだろ」  
俺はめんどくさそうにいった

「だって、俺お前しか友達いないし」  
ぼそぼそとしたしゃべり方だった

確かにこいつは俺以外としゃべっている所を見た事がない

「じゃあ、そういうことを言うべきではない  
人にものを尋ねといて、キレるとは人間として最低の人がやる事だぞ」

俺は理論整然と言った

「わかったよ。もう言わない」

「それだけか、人に悪い事しておいて、それだけで済ますのか  
お前は親に教わらなかったのか？」

「じゃあ、何て言えばいいんだよ？」

「そうだな。俺は童貞です。だから今すごく女の子とやりたいです  
誰か俺としてくれませんかと大声で言えば許してやる？」

「そんな事いえるわけないだろう  
そんな事したらクラスの女子全員に嫌われるだろうが」

「それが俺の望みなのだが」

「お前は悪魔だ  
人間の皮を被った悪魔だ」

「人間は誰でも心の中に天使と悪魔を飼っているんだよ」

「じゃあ、お前の天使はいつも眠っているのか、悪魔の方が上かだ  
な」

「そんなことより、言っつのか言わないのか」

「スル・するな  
そんなのは絶対言わないねえよ」

「そうか、それならお前のベッドのしたにあるエロ本のタイトルを  
言っつてやるっか？」

「それだけはやめて下さい」  
太一は土下座して謝ってきた

「じゃあ、言うんだなあ？」  
多分今俺はすごい悪い顔をしているだろう

「わ、わかったよ」

そう言つと、太一はすうつと息をはいて、

「俺は童貞です。だから今すごく女の子とやりたいです

誰か俺としてくれませんか」

大声でいった

クラスが一瞬でシーンとなって、みんな啞然となっていたが、言った言葉を理解しだすと、男子はニヤニヤ笑ったり、女子は軽蔑の目で見たり、きもつと口に出すものさえいた

太一は今にも泣きそうな感じだった

そして、とうとうこのクラスの空気に耐えられなくなったのか、わあんと泣きながら、走って教室を出ていった

それを俺は、ちょっとやりすぎたかなあと思って見ていると、

「また山口先輩いじめてたんですか？」

振り向くと、女の子がいた

平均的な女の子ではなくめちゃくちゃかわいい子がいた

名前は水樹亜紀

髪は黒で肩までかかっている

身長は160センチぐらいでもちもちとした白い肌に、くつきりとした二重の<sup>まぶた</sup>瞼。薄茶色の瞳

そのきつそうな瞳からは意志と気が強いのがわかる

この少女には媚びようという感じが見当たらないためか、美少女であるのにも関わらず、男女共に人気がある

しかし、それはこいつの性格をしらないからである

「あれはいじめていたんじゃないからかっていたんだ」

「相手がいじめられていると感じたらそれはもう立派ないじめです」

「お前はどっかの教育評論家か？」

「女の子はお前って言われるのは嫌なんですよ」

「ツッコむところ？」

「もっと違う所ツッコメよ」

「い もでいってました」

「え、スル - されっちゃった？

しかもい も情報

お前の友達から聞いたんじゃないの？」

「私友達と呼べるのは二人しかいませんから

ほ きがMCの女の常識〓男の非常識でいってました」

確かにこいつの性格だと友達少ないだろうなあ

「何でそんなに詳しいの？」

その時間学校じゃん」

「ワンセグというものがあるじゃないですか？」

「え、そこまでして見たいの？」

「5番目ぐらいに大事ですよ」

「微妙、すごい微妙。」

「それぶつちゃけ、見なくてもよくない？」

「見ないと不機嫌になります」

「え、5番目ので不機嫌になっちゃうの？」

「じゃあ、1番目はどんななの？」

「1番目は自分の命です」

「それがないと死んじゃいます」

「うわあ、めっちゃベタなの来た。もうちょっと違うの言おうぜ」

「じゃあ、達也さんは何か思い付くんですか？」

「え、ええつと」

「うん……」

「思いつかないならベタとか言わないでください」

「1めんなさい」

「お詫びに私と」

「嫌です」

「まだ何も言ってますんよ」



「言ったじゃん  
お詫びに私とって」

「そこですか、まだ重要な部分を言ってますよ」

「どうせ、私と結婚して下さいって言うんだろ」

「そうなんだ、こいつは会うたんびに結婚してくださいと言うのだ

なぜこうなったかというと、俺が学校が終わった後、一人で帰って  
いる時だった

〈回想〉

「ふぁー、ねみいー」

学校行って帰るだけっていうのはつまらないなあ

かといって、どっか行くのはめんどくさい

そう思いながら、歩いてると、目の前に何かを探してると思われる  
女の子がいた

「何か探してるんですか？」

「ヘアバンドを探してるんです」

「じゃあ、俺も探すの手伝いますよ」

30分ぐらい探していて、ヘアバンドを見つけた  
これかなあと思って、

「これじゃないですか？」

「あ、これです。ありがとうございます」

「よかったですね。じゃあ、俺はこれで」

「あ、待って下さい」

何かお礼をさして下さい」

「そんなもんいいですよ

俺がしたかったただけだから」

そうなのだ

俺は困っている人を見ると、放っておけないと言っ訳ではないのだが、そこを通りすぎるのがなぜかためらわれるのである  
でも、お礼とかめんどくさいから受けないのである

それがあってから、三日ぐらい経ってから、めっちゃくちゃかわいい女の子が俺を教室まで訪ねてきたのだ  
一年生だ

スリッパの色でわかる

まあ、先輩のを借りている人もいるが

「えっと、俺に何か用？」

「あの、この前のお礼をしたいと思って」

「この前？」

「はい、ヘアバンドを探してくれましたよね？」  
確かに探したけど

この女の子だったか？

正直高校生の女の子という事はわかっていたが、顔はよく見なかった  
ので、こんなかわいい子だとは思わなかった

「別にいいのに」

俺はこんなかわいい子だとしても、めんどくさいなあと思った

「だめです

それでは私の気持ちをおさまりません

だから、言います

私と結婚してください」

「は？

えっと、もっかい言ってくれない？」

「だから私と結婚してください」

「え、何言ってるの？

お礼をしにきたんじゃないの？」

「はい、だから私をもらって下さいという意味です。」

はあ、何言ってるんの子

お礼は私だあ

ばっかじゃねえの

そんな事漫画とかでしかありえない展開だよ

普通はお礼は昼ご飯おごるとかだろうが

「あの、それじゃ恋人になるでもいいんじゃないの？」

俺は突然の展開にパニックになっていた

「え、男の人は結婚して下さいというと嬉しいと思っただんですけど」

「高校生で結婚して下さいって言われて嬉しい男はいねえよ」

「え、こんな美少女に言われて嬉しくないんですか？」

「自分で美少女っていうな」

この子はかわいいけど、痛い子だと思って、教室から逃げたしかし、それから毎日教室に来て結婚して下さいと言ってきて、現状に至るのである

「なあ、何であの時しょっぱなから、結婚して下さいって言ったんだ？」

「あれはゲームでそういつてたからです」

ゲーム？

どういうゲームだよ

そんな事言ってるのは

「なあ、そのゲームってもしかして」

「もちろん、ギャルゲーです」

自信満々で言った

「やっぱりかあ」

それは絶対に間違ってるよ

ゲームと現実をごっちゃにするなあんなの現実ではありえないから」

「え、そうなんですか？」

亜紀は驚いたような顔でいった

「え、お前本気で信じてたの  
だとしたら、今から認識を改めろ」

そうこいつは世間と常識がずれてるのだ  
別になぜか悪いわけではないのだが、現実ではありえない事ばかり  
りいなのだ

その他にもまだあるのだが、まあそれはおいおいこれから俺の受難  
の日々を話していく事にしよう

## 第1話・あいつとの出会い（後書き）

次回から後書きは作者の言い訳やどこが実体験やら愚痴に使います

## 第2話：Sなあいつとオヤジな俺

ある教室に美少女と嫌がっている男がいる

「達也さんって童貞ですよね？」

「何いきなり聞いてんの？」

「質問に答えて下さい」

「何で答えなくちゃいけないの？」

「ごまかすって事は童貞ですね？」

「ああ、そうだよ

それがどうしたんだよ」

「だったら、どうして、私を抱きたいと思わないんですか？」

「はあ、何言つての？」

何で童貞〃女を抱きたいになるの？」

その理由を教えて欲しいよ」

「童貞は女に飢えてて、早く捨てたいと思ってますから、普通以上の顔だったら誰でもいいと思ってます。」

「お前それは偏見だろ

そう言う奴もいるかもしれないけど、俺は好きな人としかないし、好きだからって、愛があるからって、すぐしたいとは思わないだろ」

「普通は高校生までで終えちゃいますよ」

「いいか、平均的な人間はいるかもしれないけど、普通な人間はいないんだよ」

「はあ、何いつちやてるんですか？」

「普通とは何だ？」

普通とは大多数が認める事を普通と呼ぶのだよ

そして、少数派はおかしいとか異常とか言われるのだよ  
果たして、少数はおかしいのだろうか？

別に童貞や処女だっていいじゃないのか？

誰とでもいいから、早く捨てたいからといって、好きでもない人して、好きな人が出来たときに、初めては好きな人としたかったと後悔しないのかい？

更にHをするというのは、そう軽々しくするものではない

性病になるかもしれないし、コ　ムが破れて妊娠するかもしれないんだよ

絶対妊娠しない日なんてないんだよ

数パ-セントはなるんだよ

だから、

現代の初体験を平均すると、高2ぐらいであって、決してそれは普通ではないのだよ」

「長〜い説明ありがとうございます

聞いた感想なんですけど、は？だから何？

達也さんは結局何が言いたいんですか

それってただの負け惜しみでしょ？」



「何が言いたいかというと、現代の初体験が早ければ早いほど、かつこいとか羨ましいましいとかいう風潮は如何なものかと思ってるんだよ」

確かに負け惜しみも入ってるかもしれないけど、俺は初体験が早いからといって、かつこいとか羨ましいとかは思わない」

「達也さんって、良くいえば純ですけど、悪くいえば、重いですよな？」

「ぐはあ」

言われてしまった

前にも女の子に話したら、重いつて言われた  
もうちょっと軽くなったらって言われた

「今時の高校生はそんな事思ってたなくて、もうちょっと軽いですよ。それは、年をとったら思うかもしれないですけど  
達也さんって考え方オヤジですよな？」

「グスン、そこまで言わなくてもよくない？」

「男がめそめそ泣くのって気持ち悪いですよな？」

「お前には思いやりってものがないの？」

「思いやりって何ですか？」

米軍にあげているお金の事ですか？」

「それは思いやり予算だよ」

何で俺もお前もこんな事知ってるの？」

高校生は知らないだろう？」

「ひどい、それこそ偏見ですよ。  
ニュー・スを見ている人だっていますし、演歌が大好きな高校生だっ  
ているんだし」

「確かにそれは偏見だった  
謝るよ」

「じゃあ、」

「断る」

「何ですか？」

「また結婚して下さいって言うんだらう？  
ずっと言われてればわかるよ。  
っていうかいい加減あきらめろよ」

「嫌です。

結婚OKしてくれるまであきらめません」

「俺は28まで結婚しないって決めてるから」

「すごい微妙な年齢ですね。

私にそれまでまてと言ってるんですか？」

「別に待ってなくていいよ。誰もお前と結婚するなんて言ってないし  
そもそも、お前と付き合っていないし」

「ひどいです」

私は遊びだったんですか？他に本命がいるんですか？  
私に散々あんな事したのに」

「人聞きの悪い事言うな  
お前に触つてすらいないよ  
しかも、俺は一途だよ」

「やっぱ重いわ」

「嫌、良い事だろう  
一途のどこが重いんだよ？」

「一途は私も良い事だと思っんですけど、達也さんが言つと重く聞  
こえるんですよね？」

「何で？」

「何で俺が言つと重く聞こえるの？」

「だって達也さん  
今日はどこに行つてたのとか、昨日はだれに会つてたとか、知られ  
たくなかったり、忙しい時もあるのに  
スト・カ・化しそうですから」

「そんな事しねえよ  
しかもお前には俺がそんな風に見えてたのかよ？」

「そんな風に見てたから言つてるんですよ  
私は事実しか言いませんから」

「事実つて、俺がそういう奴になつちゃうから」

違うからね

しかも、なんでそんな重い奴と結婚したいんだよ  
おかしいだろ」

「それは達也さんの事が好きだからですよ

好きな人だから、多少の束縛や性癖や趣味は許せますよ  
もちろん、浮気は死刑ですけどね」

亜紀は笑顔でいった

「変な趣味はねえよ

俺はいたって、平均的だよ

浮気は死刑ってなんだよ

冗談だよな

やめて、笑わないで

亜紀さん、目がすわってるよ」

怒ってるより笑ってる方が怖い時ってあるよね？

「浮気はそれぐらい重罪って事です

もし、浮気をしたら、ただでは死なせません

まずは、毎日指を切り落として、その次は腕と脚を切り落として」

「やめて、想像しちゃったから

それなら一思いに殺して欲しいよ」

「え、達也さん死にたいんですか？

自殺はダメですよ」

「ちげえよ

そんなに地獄を味わうならって事だよ

まだ俺17だよ

恋だっけしたいし、童貞だし」

「恋したり、童貞卒業したら、死んでもいいんですか？」

「お前は言葉のあやってもんがわからないのか？」

「あや？」

また他の女と遊んでたんですか？」

「何でその部分だけ食いつくの？」

もつと他の部分食いつくけよ」

「達也さんのお            とかですか？」

「それは食いつくじゃなくて、くわえるだろうがつて何言ってるの？」

女の子がそんな事言っちゃダメでしょ」

「え、男は女の子に言わせるのは常識でしょ男はそう言われると、もつと犯したくなるって」

「何情報？」

何情報なのそれ？」

「え、SM系雑誌ですけど？」

「それ完璧に18禁じゃん」

何でお前がそんなん持ってるの？」

「私の趣味です」

ちなみに店員が男の人の時しか買いません」

「お前はMじゃなくて、明らかにSだからそれに男の時しか買わないって変態じゃん」

「ベッドの上ではMなんです」

男の人がどういう反応するのか見たいんですよ

おもしろいのはやっぱり、童貞とかおもしろいんですよだって顔真っ赤になるんですもん」

「今、一瞬想像した自分が情けないよ」

「え、私に欲情してくれたんですか？

嬉しいです

お礼に私のパンツをオカズに毎日 していいですよ」

「だから、真顔でそう言う事言うな

もうちょっと恥ずかしがれよ」

こいつには恥じらいっていうものがないのか

「何で、真顔で言わなきゃいけないんですか？

演技とかめんどくさいですもん」

「男は真顔で言われたら引くって

演技でもいいから、ちょっとは恥ずかしがる振りをしる」

「それって偏見ですよ

男は下ネタ言っているのに、なんで女の子は言っちゃいけないんですか??女の子だって興味ありますもん」

「それはそうだけどさ

でも、これは理論の問題じゃなくて、本能っていつか生理的に無理なんだよ。」

「はあ？」

本当男って自己チューですね

男は女に幻想を抱きすぎなんですよ」

「そうかもね？」

でも、逆に言えば、女も男に幻想を抱いてるだろう  
少女マンガの男って、清潔すぎないか？

もって男はエロくて、野蛮だろ？」

「それはお互い様でしょ

所詮理解はできても、本当の事はわかりませんよ」

「そうかもしれないな」

「じゃあ、私もうそろそろ行きますね

帰りに今履いているパンツあげますんで、楽しみにしてください」  
そう言うといっちは去って行った

「お前のパンツなんていらねえっての

俺はそんなんできねえって」

そう独り言をつぶやきながら、授業が始まるのをまった

第2話：Sなあいつとオヤジな俺（後書き）

俺の女友達に気が強い子がいて、重いつてよく言われました。しよ  
うがないじゃないですか。そういう価値観なんだから。



### 第3話：媚びる先輩とあいつと俺

ある日のある教室に泣き崩れている男と申し訳なさそうにしている男がいる

「なあ、太一そろそろ元気出せよ」

「ドウアって」

涙をぼろぼろ流している

あのく俺は童貞です事件くからクラスの対応はひどかった

男は『よう、童貞』と名前で呼ばなくなつて、女の子は太一が消しゴムを拾つてあげたのに、きゃあ、けがれちゃつた

もう、これ使えないとか、太一が通るだけでサツと道をあけるのだクラス内だけなら良かったのだが、女の子は他のクラスの友達にもいってしまったのだ

「人の噂も75日つて言うじゃん？」

「元はと言えば、誰のせいだと思つてたんだよ？」

「俺です。すいません」

そう、クラスの対応より俺の方が最低だ

こんな事になるのは、予想できたのに、嫌、予想できなかったとしても、させるべきではなかった

今俺は心から恥じた

「女の子紹介してあげるから、泣くなよ」

俺は自慢じゃないが、男友達より女友達の方が多い

「どうせ、その女の子も、この事は知ってるから、意味ないよ  
ちよっと一人になりたい」

「おい、まさか自殺する気はないよな？」

「自殺したら、真っ先にお前の所に化けてでてやりたい所だが、あいにく、お前はただ一人の友達だから、今回は許してやるよでも、次やったら、許さないからな」

「ごめん」

俺は心の底から謝った

「そんなに謝らなくていいってじゃあ、どっか一人になってくるわ」  
笑って教室を出て行った

「あいつ、大丈夫かな？」

もう、これからは、ああゆう事は言わないようにしようと思ってる  
と、

「達也あゝ」

と声をかけてきた

かわいいと言うより綺麗な女の人だった

この人は先輩で、(ついでに言うと、俺は二年生だ) 名前は浅見里奈  
髪は茶髪で、首までかかっているぐらいだ

身長は160センチぐらいで、透き通った白い肌にくりくりっとした瞳だ

胸も程よく出ていて、良い感じの女の子だった

でも、里奈先輩は、亜紀とは違って、男に媚びている感じだった  
それゆえに、女の子からは嫌われてるようだ

「どうしたんですか？」

そんな落ち込んだ顔して  
もしかしてまた振られたんですか？」

「そうなの〜」

里奈先輩は今にも泣きそうな顔で言ってきた

里奈先輩は綺麗だから、結構告白されるのだが、なぜか、一、二週間振られるのだ

「ねえ、なんで私ってすぐ振られるのかな？」

私のどこが悪いの？」

「うーん、里奈先輩は綺麗ですし、性格も悪くないと思うんですけど」

「じゃあ、何で？」

達也は私の相談相手でしょ」

そうなのだ

俺は里奈先輩の恋愛相談相手なのだ

なぜ、こうなったかというところ、俺が部活に二年生で途中入部した時、里奈先輩がいて、部活内の男どもはメロメロだった

俺は綺麗だとは思ったけど、顔で選ばないし、ギャル系は嫌いだったので、見向きもしなかった

そしたら、先輩は私に興味がないのと聞いてきたので、驚いたが、興味ないですと答えると、じゃあ、私の恋愛相談相手になってと言われたのである

どうゆう訳かというところ、他の男は私に好意を持っているから、好きな人を悪く言うかもしれないと

その点、俺は先輩に興味ないから、正直に言うし、更に男の気持ち

もわかるからと言っただ

「もしかして先輩って、スト・カ・化してませんか？」  
振り向くと、亜紀が居た

「何だよ？」

スト・カ・化って？」

「だから前にも達也さんに言いましたけど、今日はどこに行っただのとか、昨日はだれに会ってたとか、知られなくなったり、忙しい時もあるのについて事ですよ」

「ああ、そう言う事が

先輩、心当たりはありますか？」

「うっ、あ、あるよ

今日は用事があるからって言ってたのに待ってたりとか、昨日はどうしてたのって、逐一聞いたりしてた」

「重いです

先輩は達也さんぐらい重いです」

「だから俺は重くねえって」

「ああ、なんか、軽いと思って付き合っただのに、イメージと違っって言われた

重いとも言われた

それが理由なのかな」

先輩は涙ぐみながら思い出していた

「確かに先輩って見た目と正反対ですもんね？」  
「そうなのだ」

先輩は見た目はギャル系だけど、尻軽女じゃないというか（別にギャル系が尻軽女と言うわけではありません）、初々しいというか、  
純粹なのだ

俺も最初は正直驚いた

「だったら、尻軽女になればいいんですよ」  
亜紀は突拍子のない事を言った

「はあ、お前馬鹿じゃないの？」  
尻軽って事は誰とでもやるって事だろ？  
先輩は好き人としかしくないだろう？」

「そっちの方が馬鹿ですね」  
いろんな男とやって、軽くなれば問題解決です」

こいつ正真正銘の馬鹿か？  
「それは問題解決になんねえよ」  
それに俺はそういう女は嫌いだ  
先輩、顔だけ見て性格を知ろうともしない男はろくでもない男が多いですよ  
先輩は変わらなくても、大丈夫です」

「じゃあ、達也、私と付き合っつてよ」

「え、どこにですか？」

「ばっかじゃないですか？」

付き合うつていうのは恋人になるつて事ですよ」

「ええ、俺とですか？」

「なんで、俺となんかと？」

「だつて達也優しいし、本当の私でもいいんでしょ？」

「え、いや、まあ、そうですね」

「私じゃ嫌なの？」

先輩はウルウルした目で見てきた

「うわあ、そんな目で言われたら、嫌でも嫌つて言えないでしょ」

「なんて、冗談」

私イケメンが好きだから

達也つてかわいい系つて感じだし

後20センチ背が高かつたら、付き合つて欲しいけど」

このあま -

俺は女は殴らないつて決めてるけど、今無性に先輩を殴りたくなり  
ました

そうなんです

俺は身長154センチで、ちよつとの化粧とエクステをつければ、  
そこいらの女の子より可愛いよつてよく言われるんですよ

男に向かつて女の子みたいつてなんなんじゃ -

でも、不細工よりはましかもしれないけど、男としては微妙なんですよ

「もお、俺女の子から好かれるのはあきらめて、新宿二丁目で働こ  
うかな？」

最近まじで思うようになってきた

「ダメですよ

そしたら、私と結婚できませんよ」

「あーあ、どこかに俺を好きな女の子いないかあ？」

「だから、ここにいますって」

「ふふ、二人を見て元気が出たわ

そうね、本当の私を知っても嫌にならない人探すわ  
ありがとう

じゃあ、私これで帰るね？」

「はい、じゃあ、また」

そうして、先輩は自分の教室に戻っていった

「そう言えば、お前なんで付き合ってたって言われた時ダメですって  
言わなかったの？」

「ああ、あれは嘘だとわかってたからですよ

女は女の嘘を見抜くものですよ

でも、男は演技を見抜けないんですよね？」

「まあ、基本的に男は馬鹿だからな」

男の嘘はすぐばれるけど、女の嘘はしたたかで、ばれにくいからな  
恋愛に関しては数的に言えば、女の方が上手だよ

そう思いながら、一日が過ぎていくのだった

### 第3話：媚びる先輩とあいつと俺（後書き）

身長とかは事実です。女の子みたいだねってよく言われるんです（涙）。女友達が多かったのは、モテるからではなく、男として見られてなかったような気がします。はあ男して見られたいですね



#### 第4話：あいつとロリコンな俺（前書き）

1は面白かったのに、2、3になればなるほど、つまらなくなるの  
つて、結構ありますよね。俺の作品がそんな感じですよ。なんかマン  
ネリ化してくるんですよ

#### 第4話：あいつとロリコンな俺

とある教室に機嫌が悪い美少女と迷惑そうな男がいる

「達也さんはなんでロリコンなんですか？」

「え、断定しちゃった

童貞の時みたいに疑問系じゃないの？」

「童貞かどうかはわからなかったけど、ロリコンは確定ですよ」

「お前はどこで、ロリコンって決めつけたんだ？」

「まず第一に、達也さんはちっちゃい子が好きです

第二に、成人女性にこっぴどく振られた事がある男の人はロリコンになる可能性が少なからずあります

第三に、身長が低いとコンプレックスがあるので、なりやすいです」

「お前は心理学でも勉強してるのかよ

まず、俺は背がちっちゃい子が好きなのであって、6歳とかが好き  
なわけではない

更に成人女性に振られた事はない」

「え、そうだったんですか」

亜紀は初耳だという顔だった

「そうだよ

背がちっちゃければ、年上でもいいんだ」

「でも、教育実習生に告って振られましたよね？」

「え、告ってないよ  
いつ俺がした？」

「実習生に『いや、先生綺麗ですよ』

こんな綺麗な人が彼女だったらしいのになあ』って言ってましたよ」

「ば、か、それは綺麗な人やかわいい子にだったら、そう言う事を  
言うんだよ」

「達也さんって、遊び人だったんですか？」

「何でそうなるの？」

男はさ、一回ぐらいは綺麗な人やかわいい子と付き合いたいわけ  
よ」

「でも達也さんは違いますよ

だって、目の前に美少女がいるのに付き合いたいと思ないんから」

「自分で美少女って言うな

それに、顔で選ぶんじゃないで、性格で選ぶから」

「さっきと言ってる事が違うんですけど  
性格重視って嘘でしょ？」

「お前は性格重視を勘違いしてるよ  
あれだろ、美人だけど性格悪いのと、めちゃくちゃ不細工だけど性  
格が良いの、どっちって聞くタイプだろ？」

「そののどこがいけないんですか？」

「極端過ぎるだろ

性格重視って比率の問題だろ

顔3：性格7って人もいれば、顔1：性格9って人もいるだろ？

逆に顔重視だつて、顔9：性格1だつて、顔7：性格3の人もいるだろ」

「私は5：5ですね」

「ええ、5：5はないよ

人間って、絶対どつちかに偏るよ」

「じゃあ、顔6：性格4で」

「ああ、顔重視なんだなあ

残念だなあ。俺はかっこいくないから、除外されるわ  
かなり棒読みだった

「大丈夫ですよ

私はかわいい系が好きですから

それに、私より身長が低い方が良いんです  
なんか、征服できる感じがして」

「おまえやっぱリドSだよ」

「だから、ベッドの上ではMなんですって」

「絶対嘘だね

もしそうなら、証明して見ろよ」

話した瞬間に、自分の過ちに気付いた

「言いましたね？」

証明する為には　　をしなければいけないですよね？」

「だから、付き合っていないのにしちゃだめだって」

「何変な想像してるんですか？」

私が思ったのはキッスですよ」

「ええー、話しの流れからして、明らかにエ　チだよね？」

しかも、キッスって？」

お前はいつの人だよ？」

「何言ってるんですか？」

ベッドの上で私が下になって、キッスをしたらMって言う証明になりますよ

全く、欲求不満ですか？」

ちゃんと処理しないとダメですよ」

「ああ、最近忙しくて、してねえなあ

って、そんなんで、Mの証明になるの？」

「なりますよ

とにかく、家に行ってナニをしましょう！」

「お前ん家に行くの？」

「他にどこに行くんですか？」

達也さんの家は親がいるし、バイトしてないから、ラブホもいけないでしょ」

俺は亜紀の家に行くと、既成事実を作られそうで、怖かったのだけれど、  
家に来ないと、大声で達也さんにレイプされましたと言うと脅されたので、泣く泣く放課後に行く事にした

#### 第4話：あいつとロリコンな俺（後書き）

最初は俺はホモだと思われてました。女の子に囲まれてるの、何も思わないのはおかしいって。次はロリコンって思われてました。あ、言っときますが、ホモでもロリコンでもありません。幼い子を可愛いととは思いますが、それは親目線な感じですよ

## 第5話：痛いあいつの妹と俺（前書き）

痛いあいつの妹みたいなのって、あいつが痛いのか妹が痛いのかどっちにもとれますよね。だから、区切ったりする方が良いでしょう。この場合は、敢えてどっちともとれるようにしています



## 第5話：痛いあいつの妹と俺

そして、放課後に亜紀と俺は亜紀の家の前に来ていた

「はあ、お前ん家つて一軒家だったんだあ」

「そうですよ」

母と妹と3人で住んでます」

「え、妹がいるの?」

それは初耳だった

「はい、中2です。」

達也さんのストライクゾーンばっちりですよ  
このロリコン」

「ロリコンじゃねえよ」

しかも、高2が中2を好きになってもロリコンじゃねえよ」

17歳だったら、13歳を好きになっても、ロリコンじゃないですよね?

27歳ぐらいだったら、ロリコンですけど

要は年の差の問題ですよ

「まあ、いい加減にロリコンって認めたらどうだ?

田舎のお袋さんもないてるよ

カツ丼でも食うか?」

「いきなり安っぽい刑事ドラマになった」

しかもカツ丼は食わせてもらえねえよ」

「え、そうなんですか？」

「そうだよ」

あれはドラマの中だけだよ」

これは刑事さんから聞いた情報だから、确实だ

「そんな事より、早く家の中に入りましょう  
外に立っていたら、寒いですから」

「お前が変な事言うからだろうが」

そう言いながら、俺達は家の中に入って行った

居間に行くと、女の子がテレビを見ていた

「紹介しますね」

私の妹の小夜です」

やっぱりかぁ

髪は黒で、髪は肩より下にかかっている

亜紀を幼くした感じだから、当然美少女になる

「よろしくね、お兄ちゃん」

「俺は君のお兄ちゃんになった覚えはない」

「え？お姉ちゃんと結婚するんだから、義理の妹になると思うんだ  
けど」

それにお兄ちゃんと呼ばれるとうれしいって聞いたんだけど」

「俺は亜紀と結婚するつもりはないし、お兄ちゃんと呼ばれて嬉し

がるのは、一部の男だけだよ」

そう、お兄ちゃんと呼ばれて喜ぶのはオタクの更に妹好きな方々だけだと思います

そう言えば、太一も妹好きだったなあ

特に義妹が最高って

正直気持ち悪かった

「なあ、亜紀？」

もしかして、小夜ちゃんもギャルゲやってんの？」

「そうですよ

二人で楽しくやってます」

亜紀はさも当然のように言った

「王道の妹は朝起こしにきて、お兄ちゃん起きてって言うんだよね

」

小夜ちゃんは楽しげに言った

「そんな妹いねえよ

しかも、俺は一人で起きたいの」

眠りを妨げて欲しくないからな

例え、学校に遅れたとしても

「それもそっか

だって朝立ちしてる所見られたくないもんね」

はい、この子も亜紀と一緒に顔を赤らめずに、平然と下ネタを言う子だとわかりました

減点10

「全員が全員してるわけじゃないし、毎日するわけじゃないから」

「達也さんは朝立ちしませんよ  
だって毎日夜に　　してるから、そういうのは大丈夫です」

「お前何言ってるの？」

「そんな事しないから」

「小夜ちゃんも信じるのやめて」

「そんな蔑んだ目で見ないで」

「大丈夫ですよ」

「男は皆するんですから」

「達也さんは異常じゃないですよ」

「何が大丈夫なの？」

「言ってる意味がわからないんだけど」

「そっか」

「喉渴きませんか？」

「何飲みます？」

「亜紀はサラっと言った」

「話を逸らすな」

「私カシスオレンジ」

「わかった」

「達也さんは？」

「はあ、俺も同じのでもいいよ」

「俺は諦めた」

「冷蔵庫にないので、コンビニ行って買ってきますね」  
そう言うと、亜紀は財布を持って、コンビニに行った  
そうすると、必然的に小夜ちゃんと二人きりになる  
小夜ちゃんと会ったばかりなので、気まずい雰囲気

小夜ちゃんは俺の顔をじっ - と見てくる  
女の子、それもかわいい女の子に見つめられると、恥ずかしいんで  
すけど

「身長は低いけど、顔はまますまね」

ああ、品定めですか？

俺が亜紀に相応しいかどうか見てたって事ですか

「そりゃ、どうも」

亜紀とは付き合う気は全くないが、褒められるのはうれしい

「問題は性格ね」

あいつの性格に問題ありだと思っただけど

「お姉ちゃんの性格を包み込めるぐらい、心が広い人じゃないとダメね」

「よくわかってるね」

「そりゃそうよ」

私も似たようなものだから  
確かに亜紀と同じ匂い、いやもっとすごい感じがする

「あのさ、別に言いんだけどさ、何で敬語じゃないの？」

一応あの亜紀でも敬語だよ

「別に言いなら聞かないで  
聞かって事は気にしてるって事だよ」  
正論だ

「でもさ、先生とか年上の人とかには敬語でしょ？  
何で俺はタメ口なの？」

「私は先生とか年上で決めるんじゃないで、人で決めるから  
この人は敬語の方がいいとかね  
単位とかもらう時には敬語だよ」  
この子結構黒いよ

「第一、敬語って言うのは敬うって書くんだから、敬えなかったり、  
尊敬できなかったら、使う必要ないと思んだけど」

「間違っではないけど、  
日本には本音と建前があつて、一応嫌な奴でも、年上には敬語を使  
わなきゃいけない訳よ」

「ほら、やっぱり気にしてる  
でも、名前はえつと？」

「麻倉達也って言うんだ」

「達也は年上に見えないんだよね  
背低いし、童顔だし

よく女の子みたいって言われるでしょ？」  
この女

呼び捨てかよ

しかも、人が気にしてる事を言うな

女を殴りたいと思ったのは君で3人目だよ

もちろん、里奈先輩、亜紀、小夜ちゃんの三人ね

「そう言えば、お姉ちゃんと出会ってどれぐらい経った?」

「何いきなり?」

うーん、一ヶ月ぐらいかなあ

「よくそんなに持ったね

普通はしゃべりかけた瞬間に固まって、泣いて去って行くんだよ  
達也を除いたら、最高は一日だよ」

顔はかわいいから声をかけたとしても、確かにあいつの口の悪さにかかったら一たまりもないだろうなあ

「ホント俺よく持ってるよなあ」

「なんか、お姉ちゃんとやってける秘訣とかあるの?」

「秘訣?

ないなあ

俺も何度が驚かされるし、泣かされるから、会いたくないのに、あいつが毎日来るからしょうがないんだよ」

「うーん、じゃあ、何で私達の家に来たの?」

「それは・・・」

「何?」

「引かないでね？」

それからなぜ俺が家に来る事になったか説明した

「ごめん、かなり引くわ」

小夜ちゃんは、引き攣った顔で言った

「でも、元はと言えば、あいつがベッドの上ではって言うからいけないんだよ」

「うーん、少なくともお姉ちゃんには好かれてるって事が」

「俺は好きじゃないよ」

「諦めた方がいいよ」

お姉ちゃんは嫌いな人にはとことんきついけど、好きな人には猛アタックするし、どんなひどい事言われても、めげないから」

確かになあ

あいつそれ以上にひどい事言うからなあ

「でも、俺本当に好かれてるの？」

「いっつもひどい事言われるんだよ」

「好きだと思うよ」

そうじゃなかったら、毎日教室に行かないと思うよ

それも、男の所に」

「そうかなあ」

「うん、だってお姉ちゃん男嫌いだもん」



「レズって事？」

「達也って馬鹿？」

レズだったら、達也好きにならないでしょ

あ、達也は女の子っぽいから、好かれるかもね」

小夜ちゃんは笑顔でそう言った

この子は亜紀以上に鬼だな

「それに、男嫌い」レズになるとも限らないでしょ

達也は聞いた話しだけど、女嫌いらしいけど、ホモではないでしょ」

「確かにな

って、俺は女嫌いじゃないよ

今時の女の子が嫌いなだけ」

「そうなんだ」

まあ、とにかくお姉ちゃんは達也が好きって事はわかっていて」

「ああ、わかった

それにしても亜紀遅いなあ」

「それは私がそういう風に仕向けたからだよ

まず家にはカシスオレンジがない事は予め知ってて、近くのコンビニ

二にはない、そこで、お姉ちゃんは遠くのコンビニに行くからね」

「随分計画的だね

何でそこまでしたの？」

「それは達也がどんな人か知りたかったからよ

後、お姉ちゃんの事も知って欲しかったから」

「そうなんだ -  
随分お姉ちゃん思いなんだね」

「当たり前よ  
家族だからね」

この子は口は悪いし、性格きついけど、悪い子ではないと思う  
まあ、亜紀も悪い奴ではないからな

「そう言えばなんで、お父さんは家にいないの？  
単身赴任とか？」

そう言くと、小夜ちゃんは気まずそうというか、しかめっつらな顔  
になった

なんか、俺悪い事言ったか？

「お父さんは浮気したから、離婚したの  
それで、今はお母さんが働いてるから、あまり家にいないんだ」  
深刻そうに言った

「ごめん  
辛い事聞いちゃって」

「ううん  
でも、今幸せだから大丈夫だよ」  
小夜ちゃんは無理して笑ってるように見えた

「そっか  
だから、亜紀は浮気は死刑って言ってたんだな」

「そつだね

達もお姉ちゃんと付き合っているんだから、浮気はダメだよ」

「俺は浮気しないよ

って、亜紀と付き合ってるねえ。」

「チ、もう少しだったのに」

小夜ちゃんは舌打ちをした

危ねえ

あやうく、付き合ってる事にされそつだった

「小夜ちゃんは好きな人とか彼氏はいないの？」

「どつちもないよ」

「嘘……？」

小夜ちゃんかわいいから彼氏いそつなのに」

「それを言うなら、お姉ちゃんにもいないでしょ

それに、私男嫌いだから」

確かに二人とも可愛いけど、性格がなあ

里奈先輩も付き合うけど、すぐ振られるからな

ってか、姉妹共に男嫌いって

過去に何かあったんだろうか

それを聞くまでに仲良くないから、言ってくれるまで待つか

後はたわいない話しをして、亜紀の帰りを待つ俺達だった

## 第5話：痛いあいつの妹と俺（後書き）

俺はギャルゲ - をやった事はありません。男友達がやってるのを見てだけです。よく、友達の話しなだけさ - って言うのって、だいたい自分の話しですよ。でも、俺はやった事ありません。現実の恋愛の方が面白いから

## 第6話：あいつとびびる俺（前書き）

前の話し書いた後に思ったんですけど、今時の女の子って何なんでしょうね？。説明してって言われたら、ちゃんと説明できませんよ。今時の女子高生なら、なんとなく説明できますけど。誰か今時の女の子を説明できる方がいたら、教えて下さい

## 第6話：あいつとびびる俺

亜紀の家に行った翌日  
とある教室で

「いや、お前の妹はお前以上に凄かったよ  
いろんな意味で」

「そうですよ

顔はいいんだから、性格と喋り方を直せば、モテると思うのに」  
お前もなと言いたい所だったが、後が怖いのでやめた

「それにしても、お前が料理がうまいとは思わなかったよ」

「そんなに驚く事ですか？」

「うん、だって、可愛いくて気の強い奴は料理が殺人的まずさって  
いうのは漫画や小説のお約束だろ？」

「漫画と現実をこっちゃんにしないで下さい  
本当にこれだからオタクは嫌なんですよ」

「ギャルゲと現実をこっちゃんにしている奴に言われたくねえ  
しかも俺はオタクじゃない」

「でも、お約束返しと言うのもありますよ」

「でもの使い方間違ってるよ  
それにお約束返して何？」

「お約束返しって言うのはお約束の反対をする事です  
さっきのように、可愛い子が料理もつまかったりとか、朝食パンを  
かじりながら走ってくる女の子とぶつかるはずが、男の子とぶつか  
つちゃうとか  
結構漫画とかでも使われてます」

「二つ目は微妙じゃねえ  
しかも、食パンをかじりながら走る女の子は昔も今もないと思う  
ぞ」

「もう何で達也さんは子供の夢を壊すんですか？  
本当に夢のない男ですね」

「だっていないもんはいないんだもん  
しかも、子供って年齢？」

「もんって男が言うときモイですよ  
オタクの人達はいつまで経っても子供の心を持ってるんですよ」

「一人でできるもんっていうNHKの番組あったよね？」

「現実逃避しないで下さい  
逃げるのなら私の胸に飛びこんで来て下さい」

「意味わかんねえ  
しかも、それって女の子が飛びこんでくるんじゃないの？」

「それって昔の考えですよ  
女から告白なんてしたらいけなかった時代の」

「古すぎるだろ」

第一今も女の子から告白しない人いるじゃん」

「それは恥ずかしいからですよ」

それと、やっぱり男の子から告白されたいと思っている子がいるからでしょ？

プロポーズもほぼ男からするでしょ？

結婚したいなどと言うかもしれないけど」

「俺は自分から告白はしないなあ」

だって、自分から告白したら、あいてに従う事になるし、相手が好きかどうかわからないだろ？」

自分から告白したら、色々ななきやいけないから、面倒だからな

「それは人を好きになった事がないからですよ  
本当に好きだったら、そんな事思わないですよ  
その人の為に何かしてあげたいと思うはずですよ」

「すみませんね」

はい、そうですよ

わたくしめは一度も人を好きになった事はありませんよ」だ」  
俺は厭味つたらしく言った

「でも、告白は一度された事あるよな？」

振り返ると奴が居た

奴とは無論太一だ

「そうなんですか？」

亜紀は意外そうだった



「う、うん

そ、そうだよ

ちゅ、中3の時に後輩からね」

太一は亜紀の目を見なくて、更におどおどしていた

そうだ

太一は女の子としゃべるのがすごい苦手なんだった

女の子と意識するからなのか、おどおどする奴って結構いるよね  
俺はそんな事ないけど

「う、うん

その女の子が俺にラブレターを渡して、達也に届けてくれといったんだ」

太一は完璧に後ろを向きながらしゃべっていた  
これならある程度普通にしゃべれるらしい  
でも、それだと嫌われてるように相手は思うぞ

「太一はすごいショック受けてたなあ

俺に告白するのかと思ったら、なんで達也なんだってわめき散らしてたからなあ」

あの時はすごい面白かった

「言わないでくれ」

太一は涙声で言った

よっぽど、あの時は悲しかったのだろう

「何で直接渡さなかったんですか？」

「直接は恥ずかしかったらしい」

「でも、どこかで会うんでしょ？」

「きつと二回会うのはすごい恥ずかしかったんだよ」

太一はわかったような口を聞いた

お前に女心がわかるのか？

「で、どこで会ったんですか？」

定番の体育館の裏ですか？」

「あれは、人目につかない為を選ぶんだろ？」

生憎、うちの体育館はどこからも見えるようになっていたから、焼却炉の所だな」

「なんかロマンがないですね

ごみと一緒に恋も燃え上がれって事ですか？」

「上手い事言っただけに言うな

中2でそんな事思うか？」

「それで、どうしたんですか？」

「それが達也のやつ、面白いんだよ

その女の子に付き合っただけで下さって言われたら、どこに言ったんだよ」

太一はまだ後ろを向いてたが、声で笑いを我慢している事はわかった

「馬鹿じゃないですか？」

ラブレターをもらったなら、普通付き合っただけで下さって言うのは恋人になって下さい事でしょ？」

亜紀は心底あきれたようだった

「しょうがないじゃん  
俺その頃精神的に幼かったから、好きとか恋人とかよくわからなかつたんだよ」

まあ、今でもよくわからないけど

「そしたら、その女の子はどうしたんですか？」

「え？つて、顔をしたらから、だからにどこに行くの？」

つてもつかい聞いたら、その子泣きながら、走っていつちゃったんだよね」

「多分何とも思われてないと思ったんだなあ

好きじゃないと言われるよりごまかされる方がつらいからな  
だから、お前にわかるのか？と問いたい

「それは最低ですよ

その子本当に傷ついたと思いますよ」

「だから、太一にその事言ったら亜紀と同じ事言われて、悪いと思つたからそのクラスに行つたんだ」

「そしたら、どうなつたんですか？」

「どうもこうも、その子結構男女から人気あつたらしく、女の子からどうしてそんなひどい事言うんですかって集団で囲まれて、男はもっとやれつて言つて大変だつたんだから」

男は恋愛事に対しては、あまり集団にならないけど、女の子は集団でくるから怖いですよ

想像して下さいよ

怖い顔した女の子に回りを囲まれてるんですよ  
まじで、おしっこちびりそうでしたよ

「まあ、自業自得ですよね」

「そつだ、そつだ」

告白されるだけ、ありがたいと思え」

「好きじゃない人に告白されてもうれしくないけど」

「今お前はモテない男達の怨みを買ったぞ」

「そんな事言ってるからモテないんじゃないのか？」

「うわぁん」

太一は泣きながら教室を出ていった

「あいつつてよく、泣きながら、教室を走って出ていくよな？」

「それは達也さんがいじめるからですよ」

「俺は事実を言ったまでだが？」

「事実だからってと言ってても言って良い事と悪い事がありますよ  
不細工な子にブスと言って傷ついたら、どうすんですか？」

「確かにな」

「そこまで考えてなかったな」

「じゃあ、私と結婚して下さい」

「いや、久しぶりにそれ聞いたな  
なんだか、懐かしいよ」

もうツツコむの面倒だったから、さらりと流した

「何でツツコまないんですか？」

「愛の安売りって知ってるか？」

好きだ、好きだと毎日言っていると、その言葉が薄くなるんだよ」

「でも、何にも言わないと相手が自分を本当に好きなのか不安になりますよ」

「そこが難しいんだよ

多すぎてもダメ、少なくてもダメなんだよ」

料理と一緒に、多すぎると濃くて、少なすぎると薄くなる

そう思いながら、空を眺める俺だった

## 第6話・あいつとびびる俺（後書き）

ギヤルゲ - とかオタクの方を否定しているわけではありません。でも機械だと予想がつくでしょ。現実だと予測不可能ですよ。だから現実の方法が俺は面白いと言っただんです。人生はわからないから面白い

第7話：今日はバレンタインデー1（前書き）

本命のチョコって一つしかもらった事ないんですよ。中2の時な  
んですけどね。義理なら10個ぐらいは貰えたんですけど。義理  
10個と本命一個と交換して欲しいです

## 第7話：今日はバレンタインデー1

ある日の一時間目の前

「なあ、太一？」

なんで、男共はあんなにそわそわしてるんだ？」

「わからないのか？」

今日は何月何日だ？」

太一はすごい驚いたようだった

「今日？」

2月14日だな

ああ、そういう事が」

「そうだ

今日はバレンタインデーなのだ」

「だから何なんだ？」

そもそもバレンタインデーとはロ・マの司教の聖バレンタインが殉教した日だよ

それがどうしてこういう風になったんだろっな？」

「そんな事はどうでもいい

女の子からチョコを貰える日なんだよ

普通はうれしいだろ？」

「外国ではチョコじゃないし、男から家族や愛する人にあげるらしいよ



別に女からあげてもいいらしい」

「質問スル - された -

じゃあ、何で女の子から好きな人にチョコをあげるんだよ？」

「それはな会社の策略だよ

昔は男からだと恥ずかしいとか愛しているをあまり言わなかった時代だから、女の子にしたんだよ

チョコだと、いっぱい作れるし、めちゃくちゃ高いのもあるし、それに加えて他のも買うからな

ちなみに、ホワイトデーは日本が作ったんだよ」

「そんな事言ってる奴はモテないから、そう言っで自分を慰めてるんだよ」

「いや、だっで事実だよ」

「じゃあ、チョコ何個貰えるか勝負だ

俺より多かつたら、モテると認めてやるよ」

「基準低いな

お前に勝てる奴は大勢いると思うぞ」

「うるさい

そう言うのは勝っでからにしろ」

そして、5時間目が終わった

「なぜだ、なぜ俺が負ける」

太一はうなだれていた

「お前一個も貰えなかったな」  
俺は義理だが、6個もらった

「なぜだ、ウンチクをたれる奴はモテないって、相場が決まってるの」

「どういう相場か教えて欲しいよ」

「達也…?」

「何ですか?」

「里奈先輩?」

「はい、チヨコ」

色々相談に乗ってくれたお礼だよ」

「ありがとうございます」

あの、太一にはないんですか?」

太一があまりにうなだれていてかわいそうになったので、聞いた

「なんで山口にあげなきゃいけないの?」

あげたら、勘違いされそうで、やだ」

先輩は顔がすごい嫌そうだった

そんなに嫌がらなくても

「うわぁーん」

太一は泣き出してしまった

あ、今日は走らないんだな

進歩したな

「じゃあ、またね」

「チョコありがとうございます」

「太一このチョコあげようか？」

「馬鹿にするな」

俺はチョコが欲しいんじゃない  
女の子から貰う事に意味があるんだ」

「そんなにうれしいか？」

俺はそこまでうれしくないけど」  
俺も男だから、貰えたらうれしいけど、めっちゃくちゃ欲しいって  
い訳ではないな

「それはお前がチョコを毎年貰えてるからだ  
モテない男は今年こそはと思うから、喜びがあるんだよ」  
確かにな

毎年もらってたら、有り難みが薄くなるかもな  
家族と一緒に住んでると、うざいかもしれないが、一人暮らししたら  
家族の有り難みがわかるって奴か

「麻倉先輩」

振り返ると、部活の後輩がいた

「どうしたの？」

「あの、これ受け取って下さい」  
モジモジしながら、言った

「チョコ？」

ありがとう」

「お口にあうといいんですけど  
食べたら、感想聞かせて下さい」

そう言つて顔を赤くしながら、去つていった

「なぜなんだ」

なぜ達也ばかり女の子に、しかも可愛い子に貰えるんだ

世の中不公平だ」

「世の中に公平な事なんてないんだよ

不公平だからこそ、優劣を決めれるんだよ」

「何悟つたみたいなさ言つてるの？」

前から思つてたけど、お前本当に高校生か？」

「正真正銘の高校生2年生で」

俺は生温い考えは嫌いなんです

関係ないけど、引きこもりの大半は万能感が消えないからなるらしいよ

何でもできる自分と今の自分にギャップがあまりにも多すぎるから、なるらしい

現代教育の弊害だな」

「何でそんな事知ってるの？」

太一は驚いたようだった

「そう言う事に興味があるからだよ

恐竜とか犯罪心理とか考古学とか色んな事にね」

「そう言う事を知りたいと思うから、達也って冷めてるんだな」

「それと冷めてるとは関係がないと思うが」

「関係あると思いますよ」

いつの間にか亜紀がいた

こいつ神出鬼没だな

「なぜなら、そう言う事を考えるには論理的でなければいけません  
そうすると、物事を客観的に見る為、人からは冷めて見えると言う  
事です」

それに、達也さんは基本的に人に無関心ですから、冷たいと思われ  
るのは当然です」

「確かにそうかもな

俺に危害や困らせるような事をしなければ、人が別に何をしようと  
どうでもいい」

「そんな事より、達也さんにプレゼントがあるんです」

「お前は同意して説明までしたのに、なんで軽く流すの？  
お前完璧に自己チューだよ」

「プレゼントと言うのはこれです」

「だから、人の話を聞け

って、これは俺の大好きなシフォンケ・キではないか」

「達也さんはチョコよりシフォンケ・キの方が嬉しいって言ってま  
したから」

「ありがとう」

このふわふわ感と食べた感じが大好きなんだよ」

「ふふふ、これで達也さんは私の物？」

「俺は物じゃない」

そう言えば人間は演技する生き物なんだよ」

「はあ、いきなり、何言い出すんですか？

まあ、いつもの事ですけど」

折角、愛してるよって言葉が聞けると思ったのに

まあ、でも、達也さんのつまらない話を聞いてあげましょう」

「ありがとうと言っべきかな」

しかし、その話は次回に続くぜ」

## 第7話：今日はバレンタインデー1（後書き）

多分もうそろそろ、この作品終わると思います。理由は二つあって、一つは才能がないために、空想や想像ができなくなってるため、もう一つは、この展開だと長くは無理な気がするんですよ。ただしゃべってるだけですから。買い物とか外にいきませんからね。

## 第8話：今日はバレンタインデー2

「で、人間は演技する生き物って、どうゆう意味なんですか？」

「まずは、仮面を被っているという説から始めよう。人間は会社だと課長とか部長なら、上司という仮面を、家に帰る時、家族がいれば、お父さんであり夫という仮面を被るんだよ  
もちろん、意識的じゃなくて、無意識にな」

「最近の仮面ライダーって、カッコイイ系が多いですよネ？」

昔は藤　　しみたいに渋い系が多かったのに  
やっぱり、時代の流れですかね」

「微妙に話しがずれてる」

「そもそも、なんで仮面ライダーなんでしょうね？仮面じゃなくて、着ているのにな」

やっぱり仮面と言ったら、仮面パ・ティ・ですよね」？」

「子供の夢を壊すような事を言うな  
やっぱりってなんだよ

お前は日本語の勉強をし直せ」

「仮面パ・ティ・って言うのは顔がわからないのを言い事にハメを外して、乱交しちゃうんですよね

大物政治家や金持ちがよくやるんですよ」

「聞いてないのになんか答えちゃってる  
しかもそれ完璧に18禁じゃない？」



「行為の話をしてないから、ぎり15禁です  
男は女の濡れた秘部を」

「やめて」

それ以上言つと、官能小説になるから」

「と、まあ、これが18禁に当たりますね」

「わかつたから、もう言わないでくれ  
あれ？何の話をしてたんだっけ？」

「人間は演技する生き物だと言う話ですよ  
自分で言つた事も覚えてないなんて」

「お前にツッコミしてて、忘れちゃったんだよ」

「突つ込むなんて  
達也さんのエッチ」

「何で？」

今どこにエッチな要素があつた？」

「男は熱く硬い肉」

「てい」

俺は亜紀を軽く叩いた

「痛！」

何するんですか？

女の子を叩くなんて最低ですよ」

「俺だって叩きたくねえよ

でも、お前そうでもしないとやめないだろ」

「は - あ

心の狭い男ですね

それぐらい愛嬌で許して下さいよ」

「これは愛嬌で済ませれる問題じゃないだろ」

「わかりましたよ - だ

さっさと、つまらない話しを進めて下さいよ」

亜紀は拗ねたようだった

なぜ、拗ねるのか理解不能だが

「もう一つは人間は知らず知らずの内に人によって接し方を変える  
と言う説だ」

「それって当たり前じゃないですか？

だって、嫌いな人に愛想よくはしないでしょ？」

「それが演技していると言う風に捉えられるって事だよ

好きな男の前では、女の子がかわいこぶったり、男が女の子の前で  
はカッコ良く見せようとしたりするような事だな」

「当たり前の事が演技してるって事ですか？」

「当たり前の事だからだよ

当たり前って知らず知らずの内に当然って思ってる事だろ？

無意識に演技している事に気付かないんだよ  
まあ、この二つが主要な説だな」

「そう言う事ばかり考えたり、そう言う本を読んでるから、世の中や人間を冷めた目で見てるんですね」

「そうかもな

冷たいで思い出したんだけどさ、女友達が好きなタイプは冷たくて優しい人って答えたんだよね？

「どんなんだよって思ったんだけど、意味わかる？」

「いつもは冷たいのに、病気になった時お見舞いに来たり、怪我した時に看病されたりすると、ドキドキするって事じゃないですか？」

「ああ、それはあるかも

こいつ、結構いい奴じゃんって思うからね

男友達もちよつとした怪我して、教室に戻って来た時に、女の子に大丈夫って聞かれて優しい子だなって好きになった奴がいるからね」

「それって山口先輩の事ですか？」

「あいつは怪我しても、女の子に声なんてかけてもらえないよ」

「そうですよね」

山口先輩に声かける女の子なんていませんよね？」

「太一って、『童貞です事件』の前から嫌われてたんだよね  
何でなんだろう？」

「なあ、なんで太一って女の子にそんなに嫌われてるんだ？」

「ああ、それは山口先輩がエロ本を読んでたからですよ」

「はあ？」

男ならだいたいエロ本読んでるだろ？  
学校で堂々と見てる奴だつて居るし」

「タイトルが問題だったんですよ

確か『お兄ちゃんと一緒に』って本でしたよ」

「それはちよつと引くなあ」

平均的なエロ本だとしても女の子は結構引くが、ロリコンならすい引くわあ

「でしょ？」

だから、山口先輩は嫌われてるんですよ」

「でも、あいつ本当に妹好きがどうか怪しいぞ？  
だって同い年の女の子を狙ってたりするじゃん」

「それは焦ってるんじゃないですか  
彼女ができなくて」

「そうなのかな

俺は別に彼女いらないけどな」

「達也さんみたいな人なんて高校生、特に男では少ないですよ  
それに、達也さんはロリコンですからね」

「まだ言うかあ

何度も言うが、俺はロリコンではない  
背がちっちゃい子が好きただけだから」

「それがロリコンなんですよ  
ロリ体型とか言うでしょ？」

「それは使い方間違ってるよ  
それに背がちっちゃくても、胸が大きい子はいるよ」

「じゃあ、ロリフェイスも間違いなんですか？」

「そつだよ」

ロリコンとは年齢の差なんだよ  
中2がまだ成長途中の中2を好きになっても、ロリコンじゃないだ  
ろ？

でも、27歳が高校生を好きになったら、ロリコンなんだよ  
最近の高校生は発育が良いだろ？

だから、ロリ体型とかロリフェイスと言うのは間違いなんだよ」

「じゃあ、どうゆう風に言えば言いんですか？」

「ロリ体型は成長途中とか貧乳で、ロリフェイスは童顔だろ  
わざわざ間違った英語にすんなってえの」

「そつですか」

達也さんはロリコンではないんですか  
残念です」

「お前は俺をどんだけロリコンにしたいんだよ」

「私に振り向いてくれないから、ロリコンにしたら、諦めもつくじ

「やないですか？」

「そんな事でロリコンにしないでくれ」

「そんな事ですって？」

「恋する乙女にとっては重要な事ですよ」

「自分で乙女って言うのはどうかと思っぞ」

「しょうがないじゃん」

「お前は悪い奴じゃないけど、俺今時の高校生にはなぜか嫌悪感を持つっちゃうから」

「何でですかねえ？」

「どうゆう風に家庭で教育をされてきたんですか？」

「それを家庭で教育はされねえだろ」

「性格によるんじゃないの？」

「後は環境とか」

「達也さんって人嫌いな所もありますからね」

「それも要因の一つじゃないですか？」

「俺は人嫌いじゃないよ」

「人嫌いだったら、お前や太一としゃべってねえよ」

「友達はいたら、いたらでいいけど、いなかったら、いなかったでいいって言ったんだよ」

「でも、一人が好きっていうのはあるかもな」

「確かに」

「移動教室の時とかも、さっさと一人でいっちゃいますもんね」

「人間って一人になりたい時があると思うんだよ  
要はそれは多いか少ないかの問題だよ」

「まあ、そうですね」

達也さんは、超然としてると言うか、一人でも生きてけそうですね？」

「一人で生活はできるけど、一人では生きてけないよ」

食べ物を作る人と販売する人がいるから、生きれるんだよ」

「それは違いますね」

食べ物で自分で作ってそれを自分だけ食べたり、家を一人で作ったりできますよ」

「でも、種とかもらったり、作り方を教えてもらったり、家の材料は人からだろ」

頼りすぎるのはどうかと思うけど、頼るのは別に悪い事じゃないんだよ」

一人で群れないのが強いと思っている人は間違ってるんだよ  
信頼できる友や大切なものを守りたいと言う気持ちが人を強くするんだよ」

「信頼できる友や大切なものがない人に言われても、説得力ないですけど、心には留めときますよ」

「まあ、覚えててくれれば、それでいいよ」

あれ、そう言えば太一は？」

さっきから、太一が話しに入ってこないのは変だとは思ってたけど  
太一を見ると、なぜか放心状態だった

「どうしたんだ、太一？」  
俺はびっくりした

「どうやら、自分が一つもチョコを貰えない事に耐え切れなくなっ  
たようですな

あ、今魂が身体から飛び出しました

山口先輩

永遠にさようなら」

「待て・

太一、戻ってこい

おい、太一~~~~」

俺は太一を何回もゆさぶった

「あれ？

俺はどうしてた？

今お花畑でおじいちゃんに会ってたよ」

「良かったな

おじいちゃんの所に行かなくて

行ってたら、お前は恋もせず、童貞卒業もせず死んでたよ」

「それだけは絶対やだ・」

太一は涙を流しながら言った

「死んじゃえば良かったのに」

亜紀は真顔で言った

「うわぁ・ん」

太一はまた教室を走って出ていった



「人に死ねなんて簡単に言っちゃいけないんだよ  
言った方は冗談でも、相手は傷ついてるかもしれないんだよ」

「傷ついていれば、やった……って感じですよ」

「もし、死んだとしたらお前にも傷が残るんだよ」

「そうですね」

相手に残るのは言いけど、自分に残るのは嫌ですね  
わかりました  
できるだけ言わないようにします」

「相手にも残っちゃだめだと思っただけど、まあ、分かったから良しとするか」

その後は亜紀とたわいない話しをして、時間が過ぎていった

第9話・けっごうシリアスな話し（前書き）

レイプや痴漢は犯罪です。やめましょう。こう言ったとしてもやる奴はやるんですよ。こう言う事する奴大嫌いなんですよね。殺されたとしても、やった・って喜んじゃいますよ。喜んじゃいけないと思うけど

## 第9話：けっごうシリアスな話し

3月14日ホワイトデー

シフォンケ・キのお返しに亜紀の家に行く事になった

「はあ、めんどくさいなあ」

亜紀の家の前にいる俺

いつもお返しは相手に何がいいか聞くんだけど、一日買い物に付き合つてとかならまだいいんだけど、ブランド物のバッグ買ってとか、明らかにチヨコの20倍以上の言ってくるのは困る  
更に亜紀の家はもつと嫌だ  
小夜ちゃんと亜紀と言う鬼がいるからな

「しょうがねえ」

俺は呼び鈴を押した

「はい」

出て来たのは小夜ちゃん

「あ、おはよう

達也

今日もちっちゃいね

小夜ちゃんは笑顔で言ってきた

「相変わらずの毒舌だね」

「へへっ、ありがとう」

褒めてないんだけどなあ

「入りなよ」

「うん、ありがとう」

「おじゃましま-す」

「そう言っただけに入っただけ」

「あれ？」

「亜紀は？」

「お姉ちゃんは部屋で着替え中だよ  
もう少しで降りてくるよ」

「そっか」

「なあ、小夜ちゃん」

「何で俺は今日呼び出されたの？」

「え？うん」

「あの、大事な話があるんだ」

「小夜ちゃんは深刻そうな顔だった」

「もしかして、二人は実の姉妹ではなくて、片方が堤防の下に置かれていたとか？」

「そんな訳ないでしょ」

「もし、そうだったとしても、達也に言っても意味ないでしょ」

「確かにな」

「本当に達也さんは馬鹿ですね」

「亜紀が2階から降りて来た」

「来てそうそう、馬鹿呼ばわりかよ  
二人ともホントに毒舌だな  
俺精神的にすごい強くなっちゃったよ」

「良かったじゃん

これで、ちよつとの事でくじけないよ」

「そう言う問題じゃないと思うんだけど

あ、小夜ちゃんから大事な話があるって聞いたんだけど、何？」

「えっと、それは

小夜と私が男嫌いって言うのは言いましたよね？」

「うん、聞いたよ」

「あの、その理由なんですけど驚かないで下さいね」

「ええ・マジで・？」

つて痛

何するの？」

小夜ちゃんが頭を殴ってきた

「真面目に聞け」

小夜ちゃんは怒ってるようだ

「はい、すみません」

「その理由なんですけど、父が浮気したから離婚したって言ったんですけど、違うんです」

実は私と小夜にレイプしたからなんです」

「え、ごめん、もっかい言ってくれる？」

「だから私とお姉ちゃんはお父さんにレイプされたの」

「え、嘘だろ？」

「本当です」

それで小夜と私は男が怖くなって嫌いになったのです  
信じられなかった

確かにテレビなどで、レイプされたと言う話しは聞いた事があるが、  
こんなに身近にあるとは思わなかった

「え、何で？」

俺はまだイマイチ信じられなくて、頭の中がこんがらがっていた

「そんな事知らないよ」

何で私達が知ってるの？」

小夜ちゃんは心底怒ってるようだ

「そつだよな」

ごめん

頭がこんがらがってて、自分でも何言ってるかわからないんだ」

「いえ、いいんです」

こんな事いきなり言われたら、そうなるのは普通ですから  
それで、話しの続きなんですけど、私達はお父さんに一週間ぐらいさ  
れてました」

「え、お母さんは？」

「一週間されてたら、さすがにわかるでしょ？」

「うちは共働きだったので、わからなかったんです

私達が泣いているのを見て、何かあったのか聞かれて事情を話したら、激怒して、すぐに父を追い出したんです」

「そうだったんだ」

「はい、それ以来母は私達にすごい気を遣うようになりました」

「お母さんは何も悪くないのに

悪いのはお父さんなのに」

「確かにな」

「他に何か言う事ないんですか？」

小夜ちゃんは不満そうだった

「確かにの他に何を言えば言いんだよ

カニカニとも言うのか

くはぁ - ？」

小夜ちゃんは思いつきり腹を蹴ってきた

ちっちゃいのにすごい力だ

「ゲホゲホ？

いって -

何すんの？」

「私が言ったのは慰めの言葉とかかけられないのって事

どうして、真面目になれないの？」

「すみません  
俺最低なんだけど、シリアスなのに耐えられなくて、どうしても手  
ヤラケちゃうんです」  
土下座して謝った

「しょうがないよ、小夜  
達也さんはこんな人だもん  
こんなのを好きになった私が悪いんだから」

「本当にごめん  
お願いします  
許して下さい」  
心の底からあやまった

「もういいですよ  
許してあげます」

「いいの、お姉ちゃん？  
許しちゃって」

「うん、だってこんなに謝ってるから」

「お姉ちゃんは甘いなあ」

「本当すみませんでした」

「もういいですよ  
顔上げて下さい」



「お姉ちゃんに感謝しなよ」

「はい、ありがとうございます」

それから俺は何度も謝った後に、これでもかと言つぐらゐに二人の機嫌をとつた

その後、

「そう言えば、あんな事されたのに、なんで二人とも下ネタ言つたの？」

「私は確かめてたの

男がどう言つ反応するかって

喜んだら、不合格つてね。達也は合格だよ」

「それはどうも

じゃあ、亜紀は？」

「私も最初はそうだったんですけど、だんだん、男の人がアタフタしたり、顔が真っ赤になったりするのが、面白くなって」

「お前はやっぱり鬼だよ

あ、ごめん」

「謝らなくていいですよ

こんな話しをしたのは達也さんにはわかってもらいたかったからで、恐縮させるためではありませんだから、いつも通りでいて下さい」

「そう言われてもなあ」

「達也つて本当にヘタレだよね  
顔だけじゃなく、内面も女の子なんじゃない？」

「何だと…？」

俺はヘタレじゃないし、それにそう言う言い方は、女の子に失礼だ」

「そう、それよ

それをやって欲しいの」

「ああ、そうか

そう言う事が

わかったよ」

「そうですね

変に気を遣われると、こっちも疲れますから」

「そうだな

よし、シリアスな時はシリアスに  
遊ぶ時は精一杯遊ぶって奴だな」

「ちよっと違うと思うけど」

「あはは。気にするな

こう言うのは気にした方が負けだぞ」

「そうよ、小夜

馬鹿にならなきゃ、損よ」

そう言っつて、俺達は夜遅くまで遊んだ

第10話：買い物にLet's go（前書き）

シリアスからコメディに戻ります。笑えるかどうかはわからないけど。そう言えば、愛想笑い作り笑いを俺に惚れてるって思う勘違いやろうっていますよね。俺も作り笑いとかしよっちゆうするから本当に笑ってるかどうかわかるんですよ

## 第10話：買い物にLet's go

「ある晴れた昼下がり

子牛を連れていく

かわいい子牛売られていくよ

悲しそうな瞳で見ているよ

ドナドナド・ナド・ナ 子牛を乗せて

ドナドナド・ナド・ナ

荷馬車がゆーく」

なぜか、俺はドナドナを歌っていた

憂鬱ゆううつになりたい時はこの歌を歌うとすぐなれるよ

つて、だれが好き好んで憂鬱ゆううつになりたいねん

一人でノリツツコミをしていた

端から見れば、かなり痛い人間である

もちろん、外ではなく、家でやってるいるので、大丈夫だと思って

いたら、

「達也、何やってんの」

振り向くと、俺の妹がいた

「何もやってないよ

みゆちゃん」

「イヤイヤ、ドナドナ歌ってたでしょ

それにみゆちゃんやめてキモいから」

あはは、妹好きな皆さん

現実の妹なんてこんなもんです

「つてか、ノックしないで入るなって言ったでしょ？」

「何女の子みたいな事言ってるの？」

キモいんだけど」

数十秒でキモい2回言われました

まあ、いつもの事だけど

「馬鹿、男だって何やってるかわからないでしょ

」

「キモい

しかも、さっきからちよっとお姉言葉になってるのが余計にキモい  
うーん、今日はキモいの回数が少ないな

「で、俺に何の用？」

「達也に電話

女の子から

達也って、キモいくせにモテるよね？」

「モテてはないよ

女の子って誰？」

「それぐらい自分で確かめろ

じゃあね」

「相変わらず口が悪いなあ」

なんで、俺の周りには口の悪い奴しかいないのかなあ  
類は友を呼ぶって奴か？

じゃあ、俺も口が悪いのか

「ま、いいや」

そう思って、俺は居間に行って受話器をとった

「はい、達也ですけど」

「あ、達也？」

私、私」

「俺は詐欺には引っかけりません」

「何言ってるの？」

「え？」

「私私詐欺じゃないの？」

「何それ？」

それを言うのなら、俺俺詐欺じゃない？」

「知らないの？」

「今や俺俺詐欺も進化してるんだよ」

「グループで警察や弁護士の真似をするんだよ」

「夫に電話しても、そのグループが電話しているから、繋がらないんだよ」

「何で夫なの？」

「別に孫とかでもいいじゃん」

「ツッコむところこそ……？」

「って、いい加減疲れたからやめよう、小夜ちゃん」

「私ってわかってたんだ」

「それに達也から始めたんじゃない」

「うん、声でね

俺さ、聞いた瞬間に飽きるんだよね。」

「それすごい最低じゃん」

「そんな事より、何の用？」

「うん、お姉ちゃんと私と買い物に行くから、達也も来い」

「なぜ命令形？」

行くの決定なの？」

「当たり前だよ

だって、私チヨコあげたじゃん

そのお返しだよ」

「ああ、そうか

つて、俺チヨコ貰ってねえ……」

「まあまあ、細かい事は気にしない

細かい事気にしていると、女の子にモテないぞ？」

「別にモテなくてもいいけど

いいよ、別に

暇だから」

「じゃあ、1時に 駅前の銀時計に集合ね」

「わかった、じゃあな」

電話を切った後に思ったんだが、なぜ小夜ちゃんは家の電話番号を知ってるんだ

亜紀にすら、携番もメルアドも教えてないのに  
なぜ、教えてないかと言うと、家まであいつに侵略されたくないからだ

と言いながら、二人と買い物に行く俺って？

甘いのかなあ

「達也、ご飯」

みゆちゃんが呼んでいる

今日は母親がばあちゃん家に行ったので、妹と二人だけだ  
それに、妹は料理を作れない

「わかった、チャ・ハンでいいな」

「うん、いいよ」

さあ、料理の開始です

ご飯は炊いてあるるので、鶏肉を食べやすい大きさに切る  
卵を二個割って、ボウルの中で溶く

そして、卵をフライパンに入れる

すぐに、鶏肉とご飯を入れる

しばらく炒めたら、醤油と料理酒と塩・こしょうをませたのを、  
飯の上にかける

それでかきまぜて終わり

「いつも通りのまあまあの味ね」

「ありがとう」



みゆちゃんが俺を褒めるのは料理だけだ

昼飯を食べ終えて、服を着替えて、

「知らない人は家にいれちゃダメだよ」

「子供じゃないから、わかってるよ」

口の悪い妹でも、家族だ

心配なのは当たり前だ

「じゃあ、行つてきまゝ」

そう行つて、俺は家を出た

1時5分前

俺は銀時計前に着いた

ここは、わかりやすいので、友達やカップルの待ち合わせ場所になるから、人が多い

俺は見渡して見て

「まだあいつら来てないのかあ」

20分ぐらい待ってようやく二人が来た

「待った」

小夜ちゃんが聞いてきた

「うん、結構待ったよ」

「そこは、全然待ってないよって言うのが、常識だよ」

「どんな常識だよ」

ドラマの見すぎじゃね」

「好きな子にはそう言う心遣いが必要ですよ」

亜紀が悟ったように言ってきた

「だって、二人とも好きじゃないから  
俺も結構平気でひどい事言うな

「もおー、照れちゃって  
達也さんの気持ちはわかってますから  
全然わかってねー

「買い物って何買うの？  
野菜とか買いに行くの？」

「何言ってるの？  
女の子は買い物と言ったら、服を買いに行くだよ」  
「何で小夜ちゃんの頭の中では女の子の買い物＝服を買いに行くにな  
ってるんだろ？  
もっと色々あると思うけど

「それは言いんだけど、どこの服屋に行くの？」

「服屋と言ったら、駅中にある　ですよ」

「あそこか  
確かに品揃えは豊富だな  
じゃあ、行くか」

「「おー」「  
二人は掛け声を上げた  
遠足気分なのか？」

歩いて10分ぐらいで に着いた

「わぁ、ここやっぱ俺苦手だわ」

ここは今時の流行のファッションがたくさんあるので、10代と20前半が多い

こうゆう所はあんまり好きじゃない

「そんなん事じゃ、彼女なんてできないよ」

「このまんまでいいんですよ」

そうしたら、私だけの物になりますから」

「俺は別に彼女は欲しくはないし、お前の物でもない」

「それより早く服探しましょう」

「お前はパスをだいたいスル、するな  
サッカー選手に向いてないよ」

「なるつもりはないから大丈夫ですよ」

正論なので、反論はできなかった

「ねえねえ、早く服を見に行こう」

小夜ちゃん飽き飽きしてるようだった

「ごめんごめん

じゃあ、行こうか」

そう言って、中に入って行って服を見てみると、

小夜ちゃんは気に入ったのがあったようで、走って行って、服を取って戻ってきた

その服は胸がかなりあいていた

「小夜ちゃん、それは胸が大きい人が着るのであって、Aカップ  
いたっ」

小夜ちゃんは真っ赤になって、殴ってきた

「Aじゃないもん

ぎりぎりBあるもん」

「そうだとしても、もっと他にあるんじゃないか

人にはそれぞれ似合う服があって、似合わない服を着ても意味がな  
いよ」

「そっか」

わかった」

小夜ちゃんは肩を落としながら、戻しに行った

「達也さんは、これはどうですか？」

亜紀はワンピースっぽいのだった

俺はファッションに興味はないのでよくわからないが

「いいんじゃないか

亜紀によく似合ってるよ」

こいつは可愛いし、胸もけっこうあるから、何でも似合いそうだ

「えへへ、そうですか？」

じゃあ、これは一着目ですね」

「そんな簡単に決めていいの？」

女の子はもつと服を決めるのに時間がかかると思ったんだけど

「好きな人がいって言うてくれたのだから、いいんです」

「そうなんだ

それならいいんだけど」

どうしたんだ、俺

いつもなら好きとか言われても、あ、そうとしか思わないのに、今はちょっと嬉しいと思った

亜紀を好きになったら、苦労するのは目に見えてるぞ

俺よ、正気に戻れ

「どうしたんですか？

深刻そうな顔して」

「何でもないよ

それより、まだ服選ぶんだろ？

選んで来いよ」

「わかりました

じゃあ、ここで待ってて下さいね」

それから、亜紀と小夜ちゃんは8着ずつ持ってきて、その中の3、4着を買った

小夜ちゃんは似合わなさそうな大人っぽい服ばかり持ってきた  
そんなに大人っぽくなりたいのか？

外見だけ大人になっても意味ないと思うぞ

「そう言えば、お母さん一人だけが働いてるんだったら、服買ってお金あるの？」

「うん、父さんが慰謝料と養育費が送ってくれるから大丈夫だよでも、学校のお金を払うには足りないから働いてるんだ」

「そうなんだ」

「やっぱり慰謝料とか払うんだ」

「相場ってどのくらいなんだろう」

「でも、これを聞くとなんか金にがめついと思われるわから聞かないとこう」

「私達もバイトしてるんですよ」

「自分の分は自分で働こうって事で」

「はあ、二人とも意外に母親思いなんだね」

「意外にって何よ」

「私は人に優しいよ」

「そうですよ」

「地球にも優しいですよ」

「ええ、自分で優しいって言う奴に優しい奴はいないと思う。それに地球に優しいは関係ないと思う」

「確かに自分で私は優しいって言うのって、なんか押し付けがましいですよね」

「そうだね」

「自分の評価を上げたいなら、人から言ってもらった方が上がるよ逆もそうだけだね」

「人から、それも大勢からあいつって嫌な奴なんだよって言われると、そいつは嫌な人じゃないのに嫌な奴だと思ってしまうんだよ」

そう思わない人もいるけどね

「人間の心理をついてるね・  
達也は

それなのにモテないのはなんでだろうね・」  
小夜ちゃんはニヤニヤにしがら言った

「それとモテるのは関係ないと思うんだけど  
だって、イケメンと不細工が同じ事やっても、女子は違う反応をす  
ると思うぞ」

「確かにそうですよね  
でも、山口先輩『モテるための心理学』って言うのを読みました  
よ」

太一~~~~  
お前はどんだけモテたいんだよ  
そんなに彼女が欲しいのか

「あいつはそんなの読んでも無駄だと思うぞ  
それ以前に女の子とまともにしゃべれないからな」

「え、そうなの？  
そいつダメじゃん」

「そっか、小夜ちゃんは太一の事知らないか  
そうなんだよ  
それにあいつは妹好きだからな  
小夜ちゃん見たら嬉しがるだろうなあ」

「え？」

そいつすごいキモいんだけど」

小夜ちゃんはかなり引いたようだった

「そうね

それに山口先輩顔もパツとしませんしね」

「ダメダメじゃん」

やっぱりこの二人は鬼だ

当事者がいない所で、悪口は言うのはどうかと思っぞ

しかも、この二人にかかれれば、どんな奴でもこけにされるな

そうしゃべりながら、歩いていると、亜紀の家に着いた

「じゃあ、俺はこれで帰っていい？」

「えー、もう帰るの？」

まだいいじゃん」

小夜ちゃんは不満そうだった

「買い物に付き合っただけだったよね？」

「可愛い女の子二人ともっとしゃべりたくないんですか？」

亜紀は意外そうだった

「はは、もっとしゃべりたいけど、俺用事があるからさ」  
嘘だ

本当は鬼二人から早く離れたいのだ

「それじゃあ、しょうがないですね」



「じゃあ、またね」

「ああ、またな」

そう言いながら亜紀の家を去った

歩いていて

「まあ今日は亜紀と小夜ちゃんの違う一面が知れてよかったかな」  
最初は口悪いし、性格きついし、嫌な奴だと思ってたけど、生い立ちや母思いなのを聞くと結構良い奴じゃんと思うようになってきた  
まあ、惚れてはないけどね

家に帰って

「みゆちゃん、ただいま」

「達也、ご飯」

「帰って来てそうそう、それ？  
ただいまとかないの？」

「早くご飯作れ」

「はいはいわかりましたよ」  
俺つくづく妹に甘いよなあ

友達にはよくシスコンって言われるんだよね

「みゆちゃんは何が食べたい？」

「キャビア１キロ」

「そんなのではないし、それに買うお金もないから」

「じゃあ、豚丼が食べたい」

「わかった、今から作るから待っててね」

豚丼は作るの簡単だから、よかった

ご飯は出かける前に時間予約してたから、ちゃんと炊けてるしな

「達也、みゆ達也の事大好きだから目玉焼きも作って」

「わかった」

「ふ、ちよろいもんだぜ」

聞こえちゃいましたよ

しょうがないなあ

嘘でも、みゆちゃんに好きって言われると嬉しいからなあ

あ、妹に惚れてるわけではないよ

家族として嬉しいって事だよ

あ、そう言えば

「僕は妹に恋をする」って言う少女漫画あったよね？

そして、みゆちゃんと一緒に夕飯を食べて、風呂に入って、布団に入って一日が終わった

第11話：豆腐で人は殺せるか？（前書き）

現実に一個下の妹がいるんですよ。妹は俺の事呼び捨てにするんですよ。妹の方が身長2、3センチ高いから、兄として見られてないのかな。一回でいいから妹からお兄ちゃんって呼ばれたいですよ

## 第11話：豆腐で人は殺せるか？

「なあ、太一？」

お前つて『モテるための心理学』読んでるんだって？」

「何だそれは？」

そんなもん知らねえな」

太一は目が泳いでいる

「亜紀から聞いたから確かだと思っただけど」

「なぜ、あいつがそれを？」

あれは教室では読んでなくて、図書室で読んでたのに」

「どっちでも一緒だと思うんだけど」

まず、学校で読む自体が間違ってないか？」

達也は呆れはてていた

「学校で読んで、女の子を見てそれを確かめたかったんだよ」

「友達だから言うけど、それは当てにならないと思っぞ」

「なぜだ？」

太一は驚いていた

「例えばだ、めちゃくちゃ可愛い子がお茶を間違えてお前の服にこぼしたらどうする？」

「それは当然、大丈夫だよ、気にしないでって言う」

太一は自信満々に言った

「じゃあ、もしそれが不細工な子だったら？」

「それは多分怒ると思う」

太一は気まずいような顔をした

「だろ？」

違う人が同じ事をやっても、反応が違うんだよ

爽やかな奴が下ネタを言っても大丈夫だけど、ネチネチした奴が言うど気持ち悪がられるのと一緒にだよ」

「じゃあ、これを実践しても無駄って事か？」

「うーん、無駄とは言わないけど、たいして変わらないと思うよ」

「そうなのか」

太一はかなりへこんだ

「それに書いてあるかどうかは知らないけど、脚を組みかえたら、  
の合図とか書いてある本があったな」

「それは本当なのか？」

太一は身を乗り出して聞いた

「本当なわけねえだろ

んなもん。脚を何回もくみかえる女の子なんかいくらでもいるだろ  
それに、それはフロイトの考え方だ」

「フロイト？」

「何だそれ？」

「そうか、お前は知らないか  
フロイトって言うのは18世紀のオーストリアの精神分析学者でな  
人間の生活を深層意識の性欲衝動に求めたんだよ」

「は？」

「どう言う意味だ - 」

「太一は理解できないようだった」

「例えば、花を捨てたとする」

「それは欲求不満と解釈するんだよ」

「なんでだよ」

「花につぼみがあるだろ」

「女性の性器の一部と言つかまあ何かをつぼみと比喻する場合がある  
んだよ」

「それを捨てると言う事は処女を捨てるとかエッチしたいと言う意味  
に考えるんだよ」

「それはごじつけじゃないのか？」

「まあ、心理学って言うのは主観が入るし、考えた人の生い立ちや  
考え方によるからな」

「それにフロイトの説は現代の心理学者では間違っていると言う人が  
多い」

「何でだ？」

「フロイトの説は科学的でないからだ  
主観が入らないということは有り得ないから、少しならいいのだが、  
フロイトは主観が入りすぎているからだ  
それを偏見とも言う」

「じゃあ、心理学は信用してはいけないと言う事か？」

「嫌、そう言うわけではない  
ある程度の成果は得ている

ただ、人間の心なんて100パーセントわかるわけではない」

「どうゆう事だ？」

「他人にその人の事がすべてわかるのか？」

それが家族や恋人や親友だとしてもだ  
人には秘密や人に知られたくない事だってあるし、第一その人自身  
にだって、自分の心がわからない時だってあるのに」

「ああ、そう言う事が

確かにそれはあるが・・・」

太一はまだふに落ちないようだった

「これは哲学の話になるが、太一の言ってる赤と俺の赤は違うか  
もしれない」

「何言ってるんだ？」

「元々物に色はないらしい

よくはわからないが線があたって、屈折して見えるらしい

だから、お前が赤と言ったとしても見てるのは青かもしれないと言

う事だ」

「いや、それは青だろ？」

「違うよ。」

お前が世間一般で言う青を見てたとしよう  
しかし、大多数の人はそれは赤と呼ぶ  
そうすると、お前はそれは赤と呼ぶんだ」

「じゃあ、俺が世間一般で言う赤を見てたら、それは何と呼ぶんだ  
よ？」

「それは大多数の人が青と呼ぶかもしれないし、緑と呼ぶかもしれない  
よって、言葉でわかりあえると言うのは限界があると言う事だ

その結果、人間は100パーセントはわかりあえないと言う事だ」

「じゃあ、わかり合おうとするのは無駄だからやめろって言う事が  
？」

「お前はさ、何でそう極端なの？」

お前には100か0しかないの？」

「じゃあ、何だっけ言うんだよ？」

「人は100パーセントわかり合えないと思っていてもなお、10  
0パーセントに近づけようと努力したり、わかり合おうとするもん  
なんだよ

だから人は友達になったり恋人になるんだよ」

「お前って、いつからそんな事考えてるの？」



太一は驚愕の目で見た

「うーん、中1の終わりぐらいかな  
だって、面白いじゃん  
ワクワクしてこない？」  
達也は楽しそうに語った

「いや、頭痛くなってくるだろう?」

「そうかな

面白いのに」

達也は残念そうだった

「自分は面白くても、他の人が面白いとは限らないだろ?」

「確かにな

自分がかわいいと思っけていても、相手はそうか?と言う事があるか  
らな」

中2の時あるアイドルの事を全然可愛くないといたら、友達がは  
あ?、お前ばかじゃないの?お前の目は節穴か?

東京湾に沈めてやるうかという事件があったからな

「10人が10人可愛いと言うのはいるかもしれないけど、万人が  
可愛いと言う女の子はいないからな」

太一は当たり前のような言った

「今思っただけけど、なんかお前に言われるのって、すごいムカッ  
くんだけど」

「何でだよ?」

「多分お前が『お兄ちゃんと一緒に』って言うエロ本を読んでるからだよ」

「なぜそれを？」

太一はかなりびっくりした

「これも亜紀情報だ」

「あいつはスパイか？」

「それに近いな」

あいつはなぜか人の情報や弱みを知っているのだ

俺の家の電話番号も、タウンページに載せてないのに知ってるし

「それで、思ったんだか、太一お前は、＜童貞です事件＞の前から女子から嫌われてたと思うぞ」

「え、そうなの？」

確かにそんな感じはしてたけど」

「ああ、お前は教室で堂々と妹系のエロ本を見てたらしいなあ  
それをクラスの女子が見てたらしいぞ  
平均的なエロ本でも女子は引くんだから、まあ当たり前っちゃ当たり前だな」

「なぜだ」

尾行のコツは、コソコソせずに堂々とする事なのに」

「それは怪しいと思わせない為だろ？」

工口本読んでる時点で怪しいだろ？」

「怪しくなんかない

男して当然の事だ

女の子はそれをわかってない」

太一は嘆かわしいねえと首を振った

「うーん

それは心の中で思っけていても、口に出さない方がいいと思っつよ」

「俺は思っけた事は口に出す男なんだよ」

うーん、裏表がないというか、馬鹿というか  
多分後者の方だと思っつけど

「そう言えば、心理学はある程度成果は得てると言っけていたけど、  
具体的にはどんなんだ？」

「まあ、わかりやすい例で言えばプロファイリングかな」

「ああ、羊達の沈黙という本の中のか？」

「あれは誇張されてるかな

プロファイリングだけで犯人を捕まえる事はできない」

「どうゆう事だ？」

「プロファイリングとは魔法のようなものではない  
ドラマや小説のように犯人をつきとめれるものでもない  
あくまで、科学的に犯人の対象を狭めるものなんだよ」

「そうなのか？」

「そうだ。またプロファイリングは統計的なものであって、1000人100色なのだから必ずそれが当てはまるわけでもないそれに歩いて聞く捜査がなくなるわけでもない  
プロファイリングは一つの道具であるので、最終的にはお偉方がそれを決めるのさ」

「へえ、でも前の事件では失敗したじゃん」

「太一にはよく知ってるな」

前の事件はプロファイリングがあたらなかったと言われているけれど、あれは限られた情報でやったからだ

何度もいうが、プロファイリングは魔法ではないので、確かな情報があればあるほど、精度が上がるんだ

しかしこれは素人ができるものではない

テレビで心理学の教授がでてあれこれいつているが、所詮犯罪心理学に関わっていないので、素人同然なんだよ」

「でも、それってさプロファイリングを知っている人がいれば、関係ない証拠をたくさん残して捜査を攪乱する事ができるんじゃないの？」

「だから、プロファイリングをする人（心理捜査官）はつねに情報をあつめて慎重に事を行なわなければいけないんだよ」

「そうなんだ」

きっとこれが愛なんだ」

「わあ、何か歌詞パクってる」

何の曲かは言わないけど」

「それって昔のジャニーズの曲の歌詞ですよね？」

「わっ、お前いつからそこにいたんだよ」

達也は驚いた

それも当然だ

なぜなら達也の後ろに亜紀がいたからだ

「なあ、太一？お前ってモテるための心理学からですよ」

「最初からじゃん

太一何で言ってくれなかったんだよ

それ以前に何で俺気付かないの？」

「山口先輩が言わなかったのは、私が目で脅したからです

達也さんが気付かなかったのは私が気配を消してたからですよ」

亜紀はさも当然のようにいった

「お前は忍者か？」

「達人クラスになれば、気配を消すことも、読み取る事もできますよ」

「高校生が達人クラスになれるなんて無理だろ？」

「無理と思うから無理なんですよ

本当に近頃の若者はすぐ無理って言うからのお」

「いきなりおじいちゃんになっちゃった？」

痛、痛いから殴るのやめて」

亜紀は達也の頭を思いつき殴った

「今のはおばあちゃんの真似です  
間違えないでください」

亜紀は怒っている

「う、ごめん」

何で俺が謝らなきゃいけないんだ？

でも、謝らなきゃまた何か言われるからな

「そう言えば、太一って義妹を欲しがっていたよな？  
達也は話題を変えた

「お前の妹くれるのか？」

太一は目が爛々（らんらん）と輝いている

「え、達也先輩って妹いたんですか？」

亜紀は驚いたようだった

「ああ、一人な

お前に俺の妹はやらねえよ

第一人にくれるって言う言葉はおかしい

それは人買いの言うセリフだぞ

それにお前みゆちゃんに嫌われてるだろ？」

「ぐはあ」

太一は精神に100のダメージを受けた

「みゆちゃんって誰ですか？」

亜紀は首を傾げた

「俺の妹だよ」

「自分の妹にちゃん付けなんて気持ち悪いですよ」

「ふ、それはみゆちゃんに言われ慣れてるから傷付かないぜ」

「話しがそれてるよ」

俺に義妹をくれるんだろ？」

「だれもお前に義妹をあげるなんて言っていないよ  
それあげるくれるはおかしいって言っただろ？」

「じゃあ、何だよ」

太一は拗ねた

「亜紀の妹を紹介するぜ」

「え？水樹つて、妹いたの？」

太一は達也の方を向いてしゃべっている  
まだ女の子には慣れてないようだ

「いますよ」

でも、山口先輩嫌われてるし、堪えられないと思いますよ」

「何でだ？」

「それは亜紀の妹は亜紀以上に毒舌だし、お前の話したらキモい  
って言ってたからだ」

「それはやだな

一応聞くけど、妹にどんな話したの？」

太一は恐る恐る聞いた

「女の子とまともにしゃべれないって事と妹好きって事を言った」

「私は顔はパツとしないって言いました」

「何でお前らそんな事いつたの？」

太一はしくしく泣いている

「嘘言つて気に入られたつて意味ないじゃん

それにな、いい奴がいい事をやっても、普通って思われるけどな、嫌な奴とか悪い奴がいい事やると、こいつ結構いい奴じゃんと思う  
だろ？」

「ああ、いつつも、テストで90点取ってる人が70点取るとどうしたんだつて聞かれるけど、30点のが70点取るとすごい褒められる奴ですね？」

「それ微妙に違うねえ？」

達也はちよつと違和感を感じたようだ

「どつちもちげえよ

それはちよつとやな奴がやったらの話しで、挽回できないぐらいダメな奴はだいぶ頑張らないといけないだろ？」太一は苦々しげに言った

「じゃあ、だいぶ頑張ればいいじゃん」

達也は簡単じゃんと感じていった



「そうですよ

最初から諦めちゃだめですよ」

亜紀も同じ様に言った

「そんな簡単に言うな

頑張ろうにも避けられてちゃ意味ねえだろうが」

「ああ、それもそうか」

達也は納得したようだ

「まあ、どっちにしても山口先輩なんかには妹はあげませんけどね」

亜紀は平然と言った

「お前の妹なんていらねえよ」

太一は吐き捨てるように言った

「太一諦めよ

お前の描いてるような妹は二次元にしかないんだよ

いい加減目を覚ませ」

達也は太一の肩をゆさぶった

「うるさい

いるかもしれんだろ

血がつかがっていたら無理かもしれないけど、再婚で妹ができたり、養子で妹になったら、わかんねえじゃん」

太一は力説した

「そりゃあないとは言いきれないけど、少なくともお前は好かれな  
いんじゃないのか？」

達也はさも当然のように言った

「確かに私も絶対好きになりませんもん」  
亜紀も当たり前のように言った

「なぜだ」

俺のどこがいけないんだ」

太一は手をグーにして言った

「全部ですよ

そのパツとしない顔も下心丸出しな所も性格も全てです」

亜紀は本当に嫌そうな顔をした

「うわーん

豆腐の角に頭打って死んでやる」

太一はいつものように泣きながら教室を出ていった

「豆腐の角で人は死なないと思うな」

「液体窒素で固めたらどうですか？」

「液体窒素で固めた豆腐は表面が凍るだけで、中までは固まらないよ  
だいぶ痛いけど、死にはしないよ」

「何でそんな事知ってるんですか？」

亜紀は驚いたようだった

「太一に試した事があるから

一回それで殴ったら角がかけちゃったんだよね

その時に太一が痛そうにしてたから」

達也は懐かしそうに言った

「まあ、山口先輩なら別にいいですけど」  
亜紀はどうでもよさそうだった

「やった人が言うセリフじゃないけど、よくねえよ」  
もし、これをやったら犯罪になりますよ  
これをやられていい人なんていませんから

「じゃあ、液体窒素で固めた豆腐をたくさん用意すれば死ぬんじゃないですか？」

亜紀は疑問をていした

「そうまでして、豆腐の角で人を殺したいの？  
しかもそれは完璧に犯罪だよ  
死刑になるかもしれないじゃん」  
達也は亜紀の事が怖くなってきた

「日本では一人殺しただけではなかなか死刑になりにくいですよ」  
「基本的にはな  
でも、計画性があったとか、殺し方が残酷だと死刑になるぞ」  
これは間違ってるかもしれないから、実行するのはやめましょう

「では、豆腐で人を殺すのは？」  
亜紀はなおも食いついてきた

「さあ、判例がないからわかんねえな  
なにしろ、豆腐で人を殺した奴いないし  
まあ、残酷かどうかは微妙だけど、殺意は明らかにあるよな」  
どっちにしろ、刑務所は確定だろうな

「まあ、刑務所に入ってまでそんな事したくないから、やりませんけど」

亜紀は真顔でいった

「ああ、しない方がいいな」  
達也はウンウンと頷いた

「豆腐の種類によってはどうなんでしょうかね？」  
亜紀はまた聞きだした

「何でまた言い出すんだよ」  
達也は頭が痛くなってきた

「やらないにしても、考えるだけは自由ですよね？」

「まあ、自分の頭ん中までは束縛はされねえな」  
行動に出した時に道徳に反するって言われるぐらいだからな

「だから言っただっていいじゃないですか？」

「なら答ておくが、どんな豆腐だろうと、人は殺せないよ」

「そうですか」  
でも、相手も惨めですよ  
豆腐で死ぬなんて

どうせなら、美少女を守って死にたいですよ  
亜紀はしみじみ言った

「いやいや、まず前提が間違ってるよ」

まず死にたくないでしょ  
しかも、それ完璧男目線じゃん」

「しかし、男は一命をとりとめる

美少女は助けしてくれたお礼に治るまで看病をするんです

そして、そうしていく内に二人の間に愛が目覚める

しかし、二人には障害があった

なんと彼女の父は大会社の社長で彼女を政略結婚をさせてようとしていた

この障害をどう乗り越えるのか？

果たして、二人は結ばれるのか？

この内容を見たいなら、月9をご覧ください」

「何そのベタなドラマ？

どうせ、最後には結ばれるんだろ？

しかも、月9でそんなんやってねえよ」

「最終回で男は父親によつて職を失わされるんです

美少女も家に監禁されるんです

しかし、女はなんとか家を出て男に会うんです

男は心神共に衰弱してるんです。

女は現世では結ばれないと思ったから、あの世でと、二人で心中してしまつて終わりです」

「何そのバッドエンド？

月9ではハッピーエンドでないにしても、バッドエンドはないと思うよ」

「現実なんて所詮そんなもんです」

こいつ本当にいい性格してるよなと思った今日この頃であった

第12話：遂に四人が出会った（前書き）

面白さはどうかわからないけど、最初よりは文章技術はほん・・・のすこしだけ上がったような気がします。まあ、・・・からやっと0になっただけですけどね

## 第12話：遂に四人が出会った

「あー暇だ」

俺は今家でゴロゴロしている

暇だったら、友達と遊びに行けばいいのだが、わざわざ外に出たくないのである

でも、暇だーという自己中人間なのである

「なんかする事ないかな？」

「達也ー」

買い物行くよ」

みゆはいきなりドアを開けて言った

「うん、わかった

今用意する」

さっき外に出たくないと言ったのに、なぜ承諾したかと言うと、俺はみゆちゃんが大好きだからさ

「リビングで待ってるからね」

そう言うともみゆは達也の部屋を出て行った

達也はパジャマから洋服に着替えて、リビングへと向かった

「お待たせ

これなんかデットみたいだね？」

「はあ？」

ばっかじゃないの？



何が悲しくて達也なんかとデ・トしなくちゃいけないのよ  
それに家の中で待ち合わせなんかしないわよ」「  
みゆは嫌そうな顔で言った

「そんなに怒らないでよ  
ちよつと言っただけなのに」「  
達也は悲しかった

「言っつて良い事と悪い事がある」  
みゆは怒っている

「ごめん」  
あれ？これ前に誰かに言われた気がする  
亜紀だ  
でも、亜紀に言われるより納得する

「はあ、もういいよ  
じゃあ、行くよ」  
みゆはため息をついた  
そして、本当にもうと言う顔で言った

「うん」  
そうして、二人は家を出た

「そう言えば、今日はどこに行くの？」  
達也はどこに行くか聞いてなかったので、尋ねた

「駅中の　だよ」  
みゆは当たり前前の様に言った

「ああ、あそこか  
あそこってそんなに人気なのかな  
前も女友達と言っただけだ」

「そこそこ人気かな  
でも、女の子と行ったなんて、ホント達也ってモテるよね  
デートよくするもんね」  
みゆはウンウンと頷きながら言った

「いや、モテてないから  
それにデートじゃないよただ単に買い物行っただけだよ」

「でも、女の子と二人だったんでしょ？」  
しかし、みゆは追及の手を緩めない

「いや、女友達とその妹で三人だったよ」

「やっぱりデートじゃん」  
みゆはなんだよと言う感じでつぶやいた

「どこの世界に妹を連れてデートする子がいるの？」  
達也は不思議に思った

「わかんないよ  
姉が好きな人がどんな人か知りたかったとか」

「品定めは友達の家に行った時にされた」

「え、そうなの？」  
みゆはびっくりした

「うん

更に、妹からお姉ちゃんは俺が好きって言われた」

「言われたんだ

妹が言った事は友達を知ってるの？」

「言った事は知らないけど、友達から結婚して下さいとは言われたよ」

「え、そんな事言われたの？」

みゆは目を見開いた

「うん、姉妹共にギャルゲェが好きらしいから」

小夜ちゃんは試す為にやってたかもしれないけど、亜紀は好きでやってるんだろっなぁ

「そ、そうなんだ

変わってるね」

みゆは顔がかなり引き攣っていた

「まあね

顔はめちゃくちゃ可愛いのに、性格きついし口が悪いからそれを直せばモテると思うよ」

「ふうーん、一度会ってみたいなぁ」

みゆはすこし興味をもったようだ

「じゃあ、明日会って見る？」

今日は用事があるって言ってたから」

嘘だ

あの二人に会う時間をのばしたいだけだ

「そうだね

じゃあ、今すぐ電話して」

みゆは満面の笑みで言った

「え、今？

俺電話番号しらないんだけど」

「何それ・・・？

じゃあ、今から行こう」

みゆはちよつと不機嫌になって、それからちよつと笑って言った

「はあ・・・わかったよ」

達也はしかたなしに言った

そんな笑顔で言われたら、断れないよ

そして、二人は亜紀と小夜の家に向かった

「へえ・・・この家なんだ」

みゆはちよつと感心したようだ

「うん、まあね

じゃあ、呼び鈴押すよ」

そう言っつて、達也は呼び鈴を押した

「や、達也久しぶり」

小夜が出迎えた

「なんで、俺ってわかったの？」  
達也は驚いた

「え？、だって呼び鈴の上に防犯カメラがついてるから」  
小夜も驚きながら説明した

達也は見てみると、

「あ、本当だ」

呼び鈴のすぐ上に丸いレンズがついていた

「これって、誰が来てるかわかる奴だよ  
来た人を録画できなかったけ？」

「そっだよ」

女だけだと何かと危ないからね

そう言えば、横にいる女の子って達也の彼女？」

小夜は興味津々だ

「そう見」

「違います」

こんなんが彼氏だなんて

それに彼女をわざわざ女友達の家に連れてきません」

みゆは達也の言葉を遮さえぎるように急いで言った

「そういうのが趣味な人もいるかもしれないでしょ？  
そしたら、誰？」

「ああ、妹だよ」

達也は自慢げに言った

「残念ながら、達也の妹のみゆきです」  
一方こちらは、悲しそうだ

「ひどい」

達也はしくしく泣いている

「みゆきね

よろしく

私は小夜

で、今日は何で来たの？」

小夜は疑問に思ったようだ

「みゆちゃんに二人の事話したら、会いたいって言うからさ」  
本当は会わせたくないけど

「妹にちゃん付けてきてキモいよ」

小夜も亜紀とみゆきと同じ様な事を言った

「やっぱり、そう思いますよね？」

みゆきは同じ考えの人がいて嬉しそうだ

「そんなん人のかってじしょ」

「私は恥ずかしいの」

みゆきは消えいりそうな声で言った

「まあまあ、立ち話しもなんだし、家に入りなよ」  
小夜が家の中に招待する

二人がそれに従い家に入った

「あれ？」

「何で達也さんがいるんですか？」

「亜紀はすごいびっくりしている」

「達也の妹のみゆきが私達に会いたかったんだって」

「小夜は亜紀がわかるように説明した」

「そうなんだ」

「私は達也さんの婚約者の亜紀です」

「よろしくね」

「亜紀はニコツと笑って言った」

「え？」

「そうなんですか？」

「みゆきは目が飛び出るくらい驚いている」

「嫌、違うから」

「付き合ってもないから」

「達也が慌てて訂正した」

「でも、妹に紹介するって事はそう言う事ですよね？」

「亜紀は期待する目で見える」

「いやいや、普通は親に紹介するでしょ」

「それに妹に紹介するぐらいで何でそうゆう事になるんだよ」

「確かに」

「私もお姉ちゃんから紹介されたけど、二人は付き合ってるわけじゃないからね」

小夜は納得したように頷いた

「それはちょっと飛躍してますよね」

みゆきも同意したようだ

「そうかなあ

まあ、そう言う事にしときましよう

それはそうと小夜とみゆきちゃんは二階で遊んできたなら二人は年近いんだし」

「そうだな

みゆちゃんは高1だし、小夜ちゃんは確か中2だったからな」

「そうなんだ

じゃあ、敬語でなくていいね」

みゆきは今まで年上だと思っていたようだ

「私もめんどくさいから、敬語じゃなくていいよね？」

「うん、いいよ

じゃあ、二階行こっか？」

そう言って、二人は二階に上がっていった

「みゆきちゃんってけっこう可愛いですよね」

「だろ？」

亜紀や小夜ちゃん程ではないが、可愛いと思う妹が好きだからというのを抜きにしても

「まあ、納得ですね



だって、達也さんも可愛いですから」

亜紀はなぜか納得したようだ

「殴っていい？」

達也はこめかみがピクピクしている

「暴力反対です」

「言葉の暴力はいいのかよ？」

「事実だからしょうがないじゃないですか」

亜紀は拗ねたようだ

「お前言ったよな

事実でも、言っている事と悪い事があるって」

達也は怒りの限界に近いようだ

「相変わらず頭硬いですね

臨機応変に行かないと」

「言葉の意味としては合ってるけど、この状況で使う言葉じゃない」  
達也はそう言って、亜紀にちょっと強めにデコピンをした

「痛

何するんですか？」

亜紀を涙目になりながら、額をさすっている

「デコピンってデコに指をはじくからデコピンなんだよね？  
じゃあ、肘にしたらヒジピンなのかな？」

達也は疑問に思った

「そんな事今言わなくてもいいでしょ  
今は私の心配して下さいよ」

亜紀はいらついている

「大丈夫だ

致命傷は避けた

命に別状はないはずだ

さあ、もう一本できるか？」

達也は真顔で言った

「何で稽古つけてもらってるみたいになってるんですか？

デコピンで命に別状があったら、その人はすごい指の力が強いです

よ

亜紀はだいたいボケだったが、ツツコミの要素もあるようだ

「いや、わかんないよ

デコピンされる人が爪先で立っていて、デコピンされて耐えれなくて頭からコンクリートに激突したら死ぬかもよ」

「まず、爪先で立ってる自体がおかしいです」

「いや、二人はジュース賭けてたんだよ

爪先で立っていてデコピンされても、爪先で立っていられるか？

でも、かわいそうだよ

ジュースを賭けたせいで死ぬなんて」

「え、それ実話なんですか？」

亜紀は驚いた

「馬鹿じゃねえの

そんな賭けする奴はいねえよ  
もしかして、信じちゃったの？」  
達也は馬鹿にしたように笑った

「ふふふ

嘘ですか

嘘はいけませんよ

お仕置きしないと」

亜紀は顔は笑っているが、目は笑っていない  
しかも、不気味な笑いをしている

「え、何？

お仕置きって？」

達也は苦笑いをした

「お仕置きの道具を持ってきますね

もし、逃げたらもつとひどい事しますからね」

亜紀は不敵に笑った

「わ、わかった」

達也は逃げようと思っていたので、先手を打たれた

亜紀はお仕置き道具を探しに奥に消えていった

「お仕置き道具って何なんだろう？」

そう言えばあいつ、SM雑誌読んでるって言ってたよな

もしかして、鞭でぶたれるとかろうそくを垂らされるとかか？

「嫌だ」

俺にそんな趣味はない」

達也は頭を抱えて叫んだ

「持ってきましたよ」

亜紀がニコニコしながら帰ってきた

「え、鞭とかろうそくとかは？」

亜紀は何も持っていないように見えた

「はあ…？」

そんなの持つてるわけないでしょ？」

亜紀は何言ってるのこいつという顔をした

「だって、SM雑誌読んでるんだよね？」

達也は恐る恐る聞いてみた

「読んではいまずけど、やっぱりはしません

あ、もしかしてやって欲しかったんですか？

やっぱりMなんですかね？」

「俺にそんな痛いのを喜ぶ趣味はない」

「え…」

好きなくせに

わかってるんですよ」

亜紀は何でもわかってるような顔をした

「何もわかつちやいないよ

そついう趣味もないし、Mでもない」

「まあ…、そう言う事にしといてあげますよ

話しがずれちゃいましたけど、お仕置き道具はこれです」

亜紀は自身満々のようだ

「え、ガム？」

それは薄い長方形のガムが何枚も入っている紙の箱みだいだった

「はい、これを引っ張って見て下さい」

達也がそれを引っ張ると、引っ張った指が鉄状の物に挟まれた

「痛

これって、ガムパッチンじゃない？」

正式名称は知らないが、俺達の間ではそう呼ばれていた  
パッチンと音がなるからだ

「そうですよ」

亜紀は直も自身に満ちていた

「何かお仕置き道具って言うからもつとすごい物かと思っていた」  
達也は少々呆れ気味だ

「え、めちゃくちゃすごいじゃないですか？」

亜紀は何でこの凄さをわからないんですかと言う様な顔をした

「お前は小学生か？」

こんなしょうもないのやるの小学生ぐらいだよ」

「今でも子供の心を持つてるんですよ

学者として有名な人のほとんどは子供の心を持つてるんですよ」

「そうだね」

このままやっても勝てそうにないので、適当に相槌を打った

「I won

そう言えば、格闘ゲームで相手が勝つと何でYou winなんでしょうね

あなたは勝つとか意味わかりませんか？」

「何か違う意味か意識があるんじゃないのか？

英語わかんないから、何とも言えないけど」

達也は困ったような顔をした

「確かに意識つて多いですよ

意識つて言う程じゃないけど、mouseってねずみや臆病者以外に内気な女の子って意味もあるんですよ」

「へえ、そうなんだ

まあ、どうでもいいけど」

達也は本当に興味がないようだ

「私もどうでもいいですけど」

「じゃあ、何で言ったんだよ？」

「言わなきゃいけないような雰囲気でしたから」

「どんな雰囲気だよ」

「達也さんにツッコませなきゃいけないと思ってでも、失敗ですね

焦ったばかりに、質の悪いボケをしてしまいましたから」

亜紀は悔しがっている

「そこまでしてくれなくていいから  
ツッコミばかりすると疲れるから」

「ダメです

達也さんからツッコミをとったら何も残りませんよ」

「え？

俺それだけの価値しかないの？」

「そうですね

まあ、でもいいじゃないですか

一個あるんですから」

「そうなのかなあ」

まあ、それでもいいかなと思って、後は亜紀と雑談をした

「そろそろ帰るか」

外を見ると暗くなっていた

「じゃあ、私のみゆきちちゃん呼んできますね」

そう言っただけで亜紀は二人がいる二階に行った

しばらく経って

みゆきが降りてきた

「えー、もう帰るの？」

みゆきは遊び足りないようだ

「だって、外は暗いんだよ」

「高校生で門限のある人なんていないよ」

「いや、ある人は意外といえると思うぞ

親がいない時ならいいけど、母さんもう料理作ったと思うよ  
せっかく作ってくれたんだから、食べに帰ろうぜ」

「うう」

わかった」

みゆきは渋々だか納得したようだ

「じゃあ、帰ろうか？」

三人は玄関の方へ歩いて行くと、

「待って」

小夜は走ってきた

「はい、みゆき」

小夜はみゆきに熊のぬいぐるみをあげた

「え、何で？」

みゆきは驚いたようだ

「だって、みゆきこれ欲しそうにしてたじゃない」

「それはそうだけど、貰えないよ」

「大丈夫

これ二つあるから

お母さんとお姉ちゃんが誕生日の時に同じの買ってきたから」



「でも、そんな大切なのいいの？」

「いいよいいよ」

二人あるんだから、一つぐらい」

「そこまでいってるんだからもらったらどうだ？」

「そうよ」

私はみゆきちゃんが貰ってくれるなら嬉しいな」

「うーん、じゃあ、貰うね」

ありがとうね」

「どういたしまして」

じゃあ、二人ともまたね」

「達也さんは学校で会いましょうね」

「ああ、またな」

本当は会いたくないが

そして、達也とみゆきは玄関を出た  
今道を歩いている

「みゆちゃんって意外とぬいぐるみ好きだよね？」

「女の子はぬいぐるみ好きなんだよ」

「えー？」

ぬいぐるみ大嫌いな女の子だっているよ」

「そう言う達也もぬいぐるみ好きだよね  
部屋にいっぱいあるし」

「あれはちっちゃい頃からの奴がずっと捨てずに置いてあるからだ  
よ」

「何で捨てないの？」  
みゆきは首を傾げた

「なんか捨てたとしても、戻ってきたり、飽きたから捨てるって言  
うのはどうかと思うからだよ」

「びびりって事が  
じゃあ、お被いすればいいじゃん」  
みゆきは事もなげに言った

「そう言う問題じゃないよ  
愛着があるから捨てれないって事も要因の一つかな」

「ただ捨てるのが面倒くさいだけじゃないの？  
達也って面倒くさがりだから」  
亜紀は疑った

「そ、そんな事ないよ」  
凶星だったようだ

「ま、いいけどさ」

「そう言えばさ、みゆちゃんって彼氏や好きな人いないの？」

けっこう可愛いからモテると思うんだけど  
でも、彼氏いたら軽くシヨック受けるな

「いないよ

告白はされるけどね」

「何で付き合わないの？」

「うーん

達也見てると付き合いたくなくなるんだよね」

「え？俺のせい？」

達也はびっくりした

「ほら男って下心がある奴多いじゃん

達也は潔癖症だから、そう言うのが見えないからね」

「俺は潔癖症じゃないよ」

「え？だって、ミニスカとか露出が多い服着てる子嫌いでしょ？」

「それは潔癖症とは言わないでしょ

それに俺は潔癖症じゃないよ」

「え、そうなの？」

みゆきは目を見開いて驚いた

「そつだよ

俺はそういうのがただ嫌いなだけだよ」

「でも、そういうのを汚らわしいって思うんでしょ？」

「汚らわしいとは思わないよ

嫌い＝否定じゃないからね

キヤバクラ嬢やAV女優は嫌いだけど、否定はしないよ

それで、喜んでいる人がいるし、犯罪抑止にもなってるから」

「ふーん、そうなんだ

達也って本当に考え方が大人びてるね」

みゆきは納得したようなしてないような顔をした

「うーん

そうなのかな

まあ、世間とずれてる事は認めるけど」

「そうだね

まあ、達也以上の人が出てこない限り付き合わないよ」

みゆきはそう言って笑った

「珍しいね

みゆちゃんが料理以外で俺を褒めるなんて」

達也はみゆきの言動に驚いた

「褒めると言うか達也見てるから、同級生が幼稚っぽいって言うか、

エロいって感じただから、嫌なんだよね」

「しょうがないよ

高一だったら、考え方も幼稚だし、異性に興味を持ち始めるからね」

達也は苦笑をした

「そんなもんかな」

みゆきは考え深げに言った

みゆちゃんに彼氏ができたら、こつやって買い物とかできないんだ  
ろくな

ちよつと嫌だなと思った今日この頃である

第13話：外見に惑わされるな（前書き）

先に謝っておきますけど、女子高生の皆さんごめんなさい。不愉快になる所があるかもしれないませんが、一部の人がって事です。でも、先に謝っとくのってずるいですよね。だって、だから最初に謝ったじゃんって言えますからね

### 第13話：外見に惑わされるな

今は昼飯の時間

教室がざわざわしている中、ため息をついている少年と嬉しそうな表情をしている美少女がいる

「はあ、何で太一休みなんだ」

達也は憂鬱そうだ

「そんなに私と一緒にご飯食べるの嫌ですか？」

亜紀はそう言いながらも、嬉しそうだ

「やだね

何かクラスの奴らに勘違いされそうだから」

「それなら大丈夫です

もうすでに勘違いされてますから」

「そうか

それなら大丈夫だな

つて、大丈夫じゃねえ」

「うーん

20点ですね

もうちょっとノリとツッコミの間を空けた方がいいですよ」

「俺はお笑い芸人じゃないから、そんな注意はいらない」

「ダメです

前にも言ったように達也さんにはツッコミしか価値がないんだから、もっとレベルを上げないと」

「どうやってレベルを上げるんだよ  
モンスターでも倒すのか？」

「普通の人間にモンスターは倒せないと思いますよ  
そう言えば、ゲームだとレベル1の人間が結構強いモンスター倒せたりしますよね？」

あなたはどれだけ強いんですかって感じですよね？」

「お前っていつも脱線するよな」

「これは脱線ではありません  
話しを広げる為に必要なのです」

「要はツッコミのレベルをどう上げるかわからなかったから、話しを続けさせるために、そうゆづのをやるって事だよな？」

「そうです」

だから脱線とは違います

脱線とは本論から横道にそれる事を言います

これは本論の一つです  
間違えないで下さい」

「ごめんなさい」

達也は軽く頭を下げた

（あれ？

そう言えば、何で俺が謝らなきゃいけないんだ？

あいつがわかからないのにレベルだとか言うからいけないんじゃないかな



いのか

それにあいつの主張は間違ってると思う」

「何ですか？」

そのなんで俺が謝らなきゃいけないんですかっていう目は？」

亜紀は半眼で睨んできた

「いや、めっそもありません

全部俺が悪いんです」

（俺……

だから何で謝るんだよ

悪いのはこいつだぞ

はあ、でも、こいつはなぜか自分が悪いのに相手を謝せる能力があるな

弁護士や検事に向いてるな

検事は言葉や資料で無罪の人を有罪に、弁護士は有罪の人を無罪にできるからな）

「まあ、許してあげますよ

お願いを一つ聞いてくれたらですけど」

亜紀はニコッと笑った

「え？」

何お願いって？」

（俺は嫌な予感がした

こいつのお願いはロクな事じゃない）

「お願いは達也さんのタイプ教えて欲しいんです」

「え？」

そんなんでいいの？」

達也はすごいびっくりしている

「どんなんだと思ってたんですか？」

「うーん

前が結婚して下さいとか家に来いとか買い物に付き合えとかだったから、今度はもっとすごいのかと思った」

「え？」

言っただけですか？

例えば、達也さんとの子供が欲しいとか？」

「それは断固拒否する」

達也は毅然とした態度でいった

「それぐらい、いいじゃないですか」

亜紀は不満そうだった

「全然それぐらいじゃないから

凄い重要な事だから」

「だって赤ちゃん可愛いじゃないですか？」

「確かに可愛いよ

それは認める

あれが、自分の血をひいている子だったらなおさら可愛いよ」

「だったら、いいじゃないですか？」

亜紀はじゃあ、どこに問題があるのという顔つきだった

「見てるだけならいいんだよ  
でも、育てるとなると大変だよ  
夜泣きとかすごいんだよ  
親は寝不足になるんだよ  
赤ちゃんはミルクを一回でたくさん飲めないから、数時間ごとにあ  
げないといけないんだから」

「そんなの人間を育てるんだから、苦勞するのは当たり前でしょ？」

「それは苦勞した事がない奴が言うセリフだよ  
思っている以上に辛いんだから」

それにもし女の子だったら、男親は可哀相なんだよ  
小学生高学年ぐらいでもうお父さんとお風呂入らないとか、中学年  
になったら、お父さんの下着と一緒に洗わないでとか、父が入った  
風呂のお湯を一回捨ててから、もう一回入れ直して入るとか」

「ああ、それはあるかもしれないね」

でも、私は女親だからそういうのはないです」

「お前は自分さえ良ければいいのか？」

「基本的にはそうです」

でも、女親も結構大変なんですよ  
娘と衝突する事は結構あるんですから」

「お前って、けっこう冷たいんだな」

（まあ、なんとなくは分かっていたけど）  
結局子供を育てるって事は大変って事だよ」

「そうですね

あ、これを脱線と言っんですね  
本論に戻りましょう

達也さんの好きな女の子のタイプって何ですか？」

「好きなタイプねえ・

まずは黒髪だな

そして、髪の毛の長さは目が隠れるぐらいだな

それで、眼鏡をかけている

そして、制服のスカートを短くしたり、加工してない買ったまんまの長さで、性格は気の強い子だな」

「そんな女の子いませんよ

山口先輩が思っている妹ぐらいいいですよ」

「それはほぼいないって事？

結構いると思うけど」

「外見なら意外と思うんですけど、そんな格好で、気の強い子なんていないと思いますよ」

「確かに俺も見た事はないけど、世界は広いんだよ  
いるかもしれないだろ？」

「気が強い子だったら、今時の女子高生の方が多いと思いますよ」

「それは気が強いのではなくて、わがままなんじゃないのか  
わがままと気が強いのは違うぞ」

「それは偏見ですよ

おしとやかなか女子高生だっています」

「俺はおしとやかな女子高生は見た事がないね  
第一おしとやかかって何なんだろうね」

「お淑やかとは、言語・動作のおちついて上品な様を言います。また性質がおだやかでたしなみの深い事を言っんですよ」

「大和撫子とは違うのか？」

「大和撫子は芯が強い部分も持ち合わせてるんですよよとしてるお淑やかとは違います」

「まあ、大和撫子自体死語だけだな」

「死語自体が死語だと思っんですけど」

「そうかなあ」

達也は首を傾げた

「今どきの女子高生はお淑やかじゃないから、嫌いなんですか？」

「俺はお淑やかな子はあまり好きじゃない

さつきも言っただけど、気が強い子が好きなんだよ

今時の女子高生はなんか本能っというか生理的に無理なんだよ」

「じゃあ、なんで達也さんは男友達より女友達の方が多いんですか？」

「友達ならいいんだよ」

だって、お前らどこに接点があるんのかって聞きたい仲良いやつらっ  
ているじゃん」

「ああ、いかにも軽そうな現代風の男とオタクみたいな感じの男が  
仲良いとびつくりしますね」

「だから、俺も友達なら女の子ともつるめるんだよ」

「彼女とかは無理って事ですか？」

「無理だな」

めんどくさいから

まあ、これは特殊かもしれないが、学校で会うのに朝おはようって  
メール送ってくる女の子がいるんだよ

それで、返さなくて学校行ったら、何でメール返してくれないのっ  
て、怒られるし」

「それは特殊じゃないですよ  
だって、私もしますから」

「うん、じゃあ、特殊だね」

「ええ、何ですか？」

亜紀は明らかに不満そうだ

「お前の考えはだいたい特殊なんだよ」

「そんな事ないです」

ちよつと、世間と考えがずれてるだけです

それに秋葉原には同じ考え方の人はいっぱいいます」

「世間とずれてるって事は分かってるんだな  
秋葉ねえ -  
なんか微妙だな」

「オタクの聖地秋葉原  
一回言ってみたいです」

亜紀は目を輝せながら言った

「俺は行きたくないな  
それに秋葉原って電機・機械系も有名だろ？  
そっちの方に興味はあるがな」

「じゃあ、一緒に行きませんか？  
二泊三日で」

「俺行きたくないって言ったよな？  
それに東京は新幹線で2、3時間ぐらいでいけるんだから、日帰り  
でいいじゃん」

「日帰りだとじっくり見れないじゃないですか？  
それに二泊三日だと何が起こるかわからないじゃないですか？  
達也と体の関係になるかもしれないし」  
亜紀は何か期待してる見たいだ

「何も起こらねえよ  
それに泊まるとしても、一緒の部屋じゃねえから、体の関係にはな  
んねえよ」

「馬鹿じゃないですか？  
二部屋とるお金があるわけじゃないじゃないですか」

「それを言うなら、新幹線乗るとかホテル代もないだろ？」

「それは大丈夫です」

私バイトして、かなりお金ありますから」

亜紀は自信満々に言った

「ああ、そうだったな」

達也は今思い出したようだ

「二人分の新幹線往復と部屋代なら余裕です」

二泊は無理ですけど」

亜紀はニコツと笑った

「でも、今ゴールデンウィーク前じゃん

そんな時にホテル取れるのかよ」

達也は疑問だった

「大丈夫です」

私の権力を持つてすれば」

亜紀は拳を握りながら、言った

「一高校生が、そんな権力持つてねえよ」

「持つてますよ」

総理とか大物議員とかビルゲイツとか理事長の子供が」

「最後のは学園でしか通用しないと思うんだけど

それにビルゲイツっておかしいぞ

後お前の親は一市民だろうが」



「確かに普通の市民ですけど、私はいろんな人の弱みを握ってますから、脅せばホテルなんてすぐ取れますよ」

「もし、それが本当なら、お前はいつか危ない目に遭うぞ」

「大丈夫です」

私は陰のドンですから

日本の軍隊なんてイチコロです」

「わあ」

どんだん話しが大きくなって来たよ」  
達也は呆れてるようだ

「あ、嘘だと思ってますね

じゃあ、今から証拠を見せますから」

亜紀はそう言っ、どこかに電話をかけた

亜紀はぼそぼそしゃべっている

まるで聞かれてはいけない事を喋ってるみたいだ  
しばらくして、亜紀はニヤッと笑って、何か言っ、電話を切った

「ホテルとれましたよ

それも高級のを一人一泊千円で」

亜紀はどうだと言わんばかりに胸を張った

「嘘だ」

高級ホテルを千円で泊まれるなんて  
普通のも無理だよ」

「本当ですよ

だから、今週の土日は秋葉原に行きましょう」

「だから、俺は行きたくないの」

「行かないと、キャンセル料取られますよ

達也さんの名前で取りましたから」

「ええ -

何でそんな事するんだよ」

達也はかなり怒っている

「そしたら、達也さんは絶対行かないからですよ  
もし、何も連絡しなかったら、キャンセル料以上にお金がかかります  
よ」

「お前は連絡する気はないの？」

「全くありません

しかも、どのホテルかも教えません」

亜紀は毅然とした態度で言った

「はあ -、分かったよ

行くよ」

達也はすごい落ち込んでいる

「最初からそう言えば言いんですよ」

「お前は本当に鬼だな」

「鬼じゃないです

天使の皮を被った悪魔です  
外見は天使で性格が悪魔って事です」

「そんな事は言われなくても分かってるよ  
それによく自分で外見は天使って言えるな  
尊敬するよ」

達也は皮肉を言った

「そんなに褒めないで下さい  
照れちゃいます」

亜紀は手で顔を隠している

「照れるなよ

お前らしくないぞ」

達也は苦笑いだ

(こいつに皮肉は通用しないのか?)

「でも、外泊なんて、お前のお母さんは許可するのかよ?」

「そっか

そうですね

小夜も一人になるから、ご飯も大変だし」

「じゃあ、やめにしないか?」

「うーん、でも大丈夫ですよ

小夜はみゆきちゃんの所に泊まればいいんですから」

亜紀はすこし考えてから言った

「はあ?

何言ってるの？

まずお前の母さんが見ず知らずの男と外泊させるわけないだろ  
それに小夜ちゃんをそんなやつ所に泊まらせるわけがない」

「そんなの女友達の家にと私と小夜で泊まるって言えばいい事じゃないですか

よくある手ですよ

女友達の家に行くふりして彼氏の家

そして、二人は心も身体も結ばれるんです」

亜紀はうっとりした顔だ

「俺は彼氏じゃないし、大勢ならまだしも、二人で外泊は嫌だ」

「え、達也さんって乱交が好きだったんですか？」

亜紀は驚いて目を見開いている

「ちっがーう

大勢なら、友達同士だと思われるかもしれないけど、二人で行ったら、恋人見たいに見えるじゃん」

「いいじゃないですか

どこが不満なんですか？」

「恋人だと思われる事がだ

そう言う目で見られるのが嫌だ」

「じゃあ、どうするんですか？」

「みゆちゃんと小夜ちゃんも連れてけばいいよ」

「え、4Pしたいんですか？」

「だから、そこから離れるよ  
なんで実の妹としなきゃいけないんだよ  
俺にそんな趣味はない」

「っていう事は小夜とはしてもいいって事ですか？」

「揚げ足を取るな  
俺は誰ともしたくないから」

「一生童貞って事ですか？」

「ああ」

もう、だから俺は好きな人としかなしないうって言う意味だよ」

「じゃあ、私とはしてもいいですね」

「お前の事は好きじゃねえよ  
まあ、嫌いではないけど」

「へえ、最初は私の事嫌いだったのに  
一歩前進ですね

このまま行けば、好きになってくれる日も近いですね」

「それはない

それはそうと、もう秋葉に行くのは決定なんだな？」

「そうですね

じゃあ、今週の土日ですから  
また電話します」

亜紀はそう言って、自分のクラスに戻って行った

「何で太一休みなんだ・・・」

いつも太一と食べるのだが、太一は風邪で休みだ

他の男友達は他のクラスの友達や部室で食べに行ってしまった

じゃあ、女友達と食べようと思った時に亜紀が来てしまったのだ

太一が休まなければ、こんな話しにならなかったのに

「太一の馬鹿・・・」

俺はそう毒づきながら、亜紀との外泊に嫌な予感を持つのであった

第13話：外見に惑わされるな（後書き）

次で終わりにしようと思ったんですけど、無理ですね。どうも、俺は最終回に向かわせるのが下手みたいですな

## 第14話：やっぱシリアスは無理（前書き）

俺感動系、恋愛係、友情系大嫌いなんですよね。虫ずが走りますね。この話しを書く時何度も、手が震え、心の奥底から何か湧き出てきそうで、大声で叫びたくなりましたね。でも、話しの流れとしては書かなくちゃいけない。



## 第14話：やっぱりシリアスは無理

今は新幹線こだま538号の中

「はあ、何でお前が横にいるんだよ」  
達也は嫌がっている

亜紀が隣に座っているのだ

「二人で旅行するんだから、当たり前でしょ？」  
亜紀は当然という風に言った

「だって、ほとんどの人が前から切符買ってるんだから、バラバラになる事が多いじゃん」

「私も前持って二人分買ってたんです  
キモいオヤジが横に来たら嫌だから」  
亜紀は本当に嫌そうだ

「キモいオヤジって言うなよ  
オヤジさんはな、家族の為に休みを返上して働いてるんだぞ」

「それなのに、家に帰れば妻と娘に邪険にされるんですね」

「なんで、娘限定なの??」

「その方が悲壮感が増すじゃないですか」

「ああ、確かにな」

ああいうのを見ると、結婚したくなくなるよな」

「男も女も結婚すると変わるって言いますよね」

「そりゃあ、結婚したら変わるだろうな

男は自分のやりたい事が1番じゃなくて、家族が1番になったりするからな。でも、それは悪い事じゃないだろ  
守るものができたんだから」

「じゃあ、悪い事って何ですか？」

「結婚した当初は玄関まで迎えに来てくれたのに、2、3年経つとテレビを寝ながら見て、お帰りも言わなくなるんだよ」

「ああ、それはよく聞きますね」  
亜紀はウンウン頷いている

「でも、それってさある意味当たり前なんだよな  
だって、付き合い始めとかはドキドキするけどさ、付き合いってる期間が長くなると、ドキドキ感は減るんだよ  
後には安定感が残るんだよ  
だから、ドキドキしたいなら、恋人は数カ月で入れ替える事だな」

「人を好きになった事がないのに、よくそんな事べらべらしゃべれますよね？」

「うっせえな

人を好きになった事がないやつは語っちゃいけないのかよ」

「いますよね」

恋愛経験ないくせになんかウンチク語る奴  
そういうのって、うざいですよね」

「悪かったですね -  
人を好きになつた事も付き合つた事もなくて」  
達也は苦々しく言った

「でも、中二の時に告白されたんだから、付き合つてたっておかしくないし、女友達いっぱいいるんだから、好きになつたっていいのにもしかして、達也さんって女嫌いですか？」

「ああ、そう思う事はたまにあるな」  
達也は考えながら言った

「女嫌いって、モテない人や女の人に深く傷つけられた人になると  
思うんですけど」

「そうとは限らないぞ  
女の嫌な部分を見たら嫌いになる人もいるし  
キヤバ嬢の送り迎えする運転手は女嫌いになりやすいって  
嫌な部分をいっぱい見るから」

「そうなんですか  
達也さんはモテるわけじゃないけど、告白されたんだし、女の人に  
深く傷つけられたわけじゃないから、女の嫌な部分を見たんですか？」

「お前に深く傷つけられてるがな」

「それはそうですね、私と出会う前からでしょ？」  
亜紀は考え深けにいった

「傷つけてるのは認めるのかよ  
うーん、そうだなあ

別に女の嫌な部分を見たわけじゃないしなあ」

「今思ったんですけど、達也さんって、女嫌いじゃなくて、ただ単にめんどくさいだけじゃないですか？」

「あ、そうかも」

達也は納得したという顔をした

「達也さんって、基本めんどくさい事嫌いでもんね」

「まあな、自分の命に関わる事や家族に危害が加わる時は別だが、他はどうでもいいしな」

「つまりこういう図式ですね

めんどくさい事が嫌い

女の子はめんどくさい

女の子は嫌いと言う風になってたんですね」

「まあ、多分その通りだろうな」

「えっへん、私ってすごいでしょ？」

亜紀は自信満々に言った

「えっへんって口に出して言う奴初めて見たよ  
それにこんな事すぐ考えればわかるだろ」

「うっ、確かに

だって、達也さん、みゆきちゃん好きですよね?」  
亜紀はちよつと顔を引き攣った

「好きは好きだけど、恋愛感情ではないよ  
家族として好きって事だよ」

「え、そうなんですか?」

亜紀は驚いたようだ

「恋愛感情だと思っていたのか?」  
達也は半ば呆れている

「もちろんです」

亜紀は自信満々に答えた

「いやいやいや、妹に惚れるっておかしいでしょ?」

「おかしくなんてないですよ  
義理の妹に惚れるとかあるでしょ?」

「それは血が繋がってないからだろ  
俺とみゆちゃんは血が繋がってるよ」

「血が繋がってても、惚れる場合もあります  
両親が離婚して二人は離ればなれに  
しかし、10年後二人は運命的な出会いをするんです  
そして、二人は愛を育んでいくんです」

「お前はどこまで、兄と妹に恋愛をさせたいんだよ」

「だって、少ないかもしれないけど、一方だけなら、あると思うん

ですよ」

「一方ね」

うーん、どうなんだろうね

俺の周りには仲が良い兄妹や姉弟がいないから、何とも言えないけど」

「絶対いると思うのに」

亜紀はそう呟いた

まもなく東京駅、東京駅

お降りの方荷物などお忘れ物なきようお願い致します

「あ、東京駅ですって降りないと」

「ああ、わかったよ」

そう言って、二人は降りる準備をしている

そうして、こだまは東京駅に止まった

二人はこだまから降りた

「はあ、ここが、東京駅かあ

広いんだなあ」

達也は目を見開いて驚いている

「田舎もん丸出しですよ

まあ、広いのは当たり前ですよ

23ホ-ムあるんですから」

「23ホム？  
そりやすげえ」

「本当田舎もん丸出しですよ  
これでカメラ持ってたら、ますますそうですよ」

「田舎もん」カメラ持つてるっておかしいだろ  
それより、これからどうするんだよ？」

「JR京浜東北線の大宮方面のホームに行きます  
歩いて10分ぐらいでつきますよ」

「はあ、あ、めんどくさいな」

「いいじゃないですか  
地下鉄よりはましですよ」

乗車率が170パーセントのが普通らしいですよ  
私達の市なんて、最高でも143パーセントですよ」

「まあ、しゃ、ねえか」

そうして、二人は歩き出した  
歩いているとJR京浜東北線の大宮方面のホームについた  
時刻表を見ると

「ふーん、だいたい5・7分ぐらいで来るんだな」

「そうですね」

これは私達の所と変わりませんね」

そうして、電車が来て二人は普通電車に乗った

「何個目が秋葉原なの？」

「二個目ですよ」

「意外と近いんだな  
秋葉原の近くなのか？  
ホテルは？」

「はい、歩いて一分です」

「近、近いよ」

しゃべっていると、秋葉原駅に着いた

「ここが、オタクの聖地秋葉原」

亜紀は目を輝かせている

「嫌、ここは電機街だろ」

オタクの方のは反対側じゃねえのか？」

「ちつ、そんな事わかってますよ  
いちいち細かいですよ  
今情景にひたってたのに」

亜紀は舌打ちをした

しかも、亜紀は鬼のような形相をしている

「ああ、それはごめんなさい」  
達也はちよつと恐がっている



（ああ、そうか  
こいつオタクだったよな  
秋葉原に関してはこいつに従った方が無難だな  
何されるかわからん）

「そろそろ行きますか？」

「え？」

秋葉原に？」

「違いますよ

ホテルにですよ

チエックインしないと」

そう言つて二人はホテルへと向かった

「ここかあ」

「はい、最近建て替えて、今は14階です」

そうして、ホテルに入りフロントまで言った

亜紀はフロントの人としゃべっている

「じゃ、行きましょう

7階の703号室ですって」

「やっぱり一部屋なんだ」

達也は嫌な顔をした

「そうですね

せつかく二人で来たのに、別々なんて」  
亜紀はちよつと不機嫌になった

「はあ、わかったよ  
じゃあ、行こうか」

二人はエレベーターに乗って703号室まで行った  
亜紀がドアを開けて、入ると

「わあ、結構広いな」

「そうですね」

ベッドもフカフカですし、部屋も綺麗ですね」

亜紀が感心しながら言った

「やった」

ベッドは三つある

あれ？

でも、何で二人なのに、三つあるんだ？」

「三人部屋しかとれなかったんですよ

ベッドは一つでよかったのに」

亜紀は不満げに言った

「よくねえよ

付き合ってもない男女が同じベッドに寝ちゃだめだろうが」

「私は達也さんならいいですよ」

「俺はやだね

なんか貞操の危機を感じるから」

「貞操って女の子が使っんじゃないですか？」

「男にも使うよ」

貞操義務って言葉って知らないか？」

「知りません」

「貞操義務って言うのは、夫婦がお互いに負う貞操に守るべき義務っていう意味だよ」

これを破ったら、離婚の原因になるんだよ」

「でも、それって当たり前でしょ」

浮気や不倫は死刑ですよ」

亜紀は怒っているみたいだ

「韓国とか宗教によってはめっちゃくちゃ厳しかったり、死刑になったりするらしいよ」

「へえ、日本もそうなればいいのに」

亜紀は声に心がこもっていた

本当に願ってるようだ

「そんな事になったら、日本の人口はすごい減るぞ。それに浮気の定義って人それぞれだろ」

「私は女の子と二人で遊んだだけで浮気です」

「それ凄く厳しいよ」

二人で遊ぶくらいはいいんじゃないの？」

「ダメです」

「亜紀って束縛が強いんだな  
でも、それだと男に重いつて思われて、すぐ振られるぞ」

「そんな男ならこちらから願ひ下げです」

「それを受けいれる男って少ない気がする  
それに高校生にそれを求めるのは無理な話だ」

「達也さんなら受け入れてくれると思います  
それはそうと、そろそろ夕食ですね  
確か3階のはずでしたから行きましょう」

そうして、二人はエレベーターに乗って3階に行った

「バイキング形式なんだな」

「まあ、ホテルですからね」

そこには、和・中・洋いろんなものが取り揃えてある

「そんなに食べれるのかよ。食べたくなったら、また取りに行けば  
いいだろ？」

達也は若干呆れている

「いいじゃないですか  
人の勝手でしょ」

亜紀はちよつとイラつときたようだ

(バイキングで最初からいっぱい皿に取る奴っていますよね。そのくせ、途中でお腹いっぱいになって食べてって言うんですよ。だから、最初はちょっとだけ取るのがいいんですよ)

「全部食べなくても、俺は知らないからな」

「食べれますから大丈夫です」

その後

「お前本当に大丈夫か？無理してないか？」  
どうみても亜紀は無理して食べてる感じのようだ

「大丈夫ですよ

これくらい」

亜紀は意地を張っている

「そこまでして食べなくていいぞ  
食べ物を残すのはどうかと思うが、吐くまで食べるとは言わないぞ」

「だから大丈夫ですって」

亜紀はそれでも食べようとする

「あゝ、もう貸せ」

達也はそう乱暴に言いながら、亜紀の皿を取って、食べ始めた  
それで、全部食べ終わると、

「あゝ、お腹いっぱい

もう食べられねえ」

達也はぐったりしている

「だから、別に食べなくても良かったのに」  
亜紀はそうつぶやいた

「あんなん見たら、それはできないだろ  
あのなあ、人に頼ってばかりはどうかと思うが、たまには頼れよ  
それが友達つてもんだろ」

「私の事友達だと思ってたんですか」  
亜紀はびっくりしている

「何だと思ってたんだよ  
・・・あ、まさか、恋人とか婚約者っていうじゃないんだろうな」

「そんな事言いませんよ  
私の事友達じゃないと思ってましたから」

「はあ・・・？  
俺は友達じゃない奴と旅行なんて絶対しないよ」

「可愛い女の子となら、するかなと思って」

「可愛い女の子だとしても、よく知らない奴や嫌いな奴と旅行なん  
か行くか  
つまらないし、めんどくさいわ」

「でも、それは私が脅したからで・・・」  
亜紀はおどおどしている

「いくら脅したからって、行かねえよ」

キャンセル料とかは、お年玉とかバイトすればいいだけの話しだろ  
そこまでするほどじゃないだろ

お前は嫌いじゃなくて、苦手なタイプなんだから」

すると、亜紀は涙をポロポロ流し出した

「な、何で泣くんだよ

俺何か悪い事言ったのか？」

達也はオロオロしている

こう言う事には慣れてないらしい

「だって、今日来たのは私が脅したからで、私といるのは嫌なんだ  
と思ってました」

亜紀は涙声で話している

「何度も言うけど、そんなんだったら、絶対ここに来てないって  
ああ、だからもう泣くなって」

「だって・・・」

達也はハンカチを探している

(ああ、ハンカチなんか持ってねえ

まず、男でハンカチ持つてる奴いないな

トイレで手を洗っても自然乾燥だからな)

「ほら、もう泣きやめよ」

そう言って、達也は亜紀の涙を自分の手で拭いた

「え？」

亜紀は目を見開いている

「な、なんだよ」  
達也はおどおどしている

「達也さんってキザですよね」  
亜紀はどうやら泣きやんだようだ

「俺のどこがキザなんだよ」

「だって、自分の手で拭くなんてしませんよ  
するのはホストぐらいです」

「お前はホストがそういうするの見た事があるのかよ  
まず、ホストを生で見た事があるのか？」

「見た事はありません  
私の単なるイメージです」

「それは偏見というのじゃないのか？」

「そうとも言います」

「そうとも言っつてそうだろ」

「まだ判決の余地があるって事ですよ  
・・・達也さん」

亜紀は一転して真面目な顔になった

「な、何だよ」

「ありがとうございました」



そう言って、亜紀は頭を下げた

「へ？、何が？」

達也はわからないようだ

「私の事心配してくれたり、慰めてくれたり、何より私の事友達だ  
とってくれた事にです  
すごいうれしかったです」

亜紀はニコツと笑った

その笑顔にほとんどの男は惚れそうだ

「あ、ああ」

達也はちよっぴびっくりしている

（あれ？

こいつってこんなに素直だったけ？

しかも、不甲斐ない事に今一瞬ドキっとしちゃった）

「さ、そろそろ部屋に戻りましょうか？」

「お、おう」

達也は今の自分の心に戸惑ってるようだ

そうして、二人は部屋へと戻っていった

第15話：メイドさんって大変（前書き）

メイドカフェのメイドって仕事の時何考えてるんでしょうね。こんな事言っている自分をキモイと思うのか、客をキモイと思うのか

## 第15話：メイドさんって大変

今は秋葉原から一分のホテルの部屋の中

「うっ・ん」

達也は目が覚めたようだが、まだ眠たいらしく起きようとしない。

達也は寝返りをうつと、手が柔らかいものにあたった

達也は完璧には脳が目覚めてないようで、その柔らかいものを何度も触ってみた

「枕？」

達也はそう言っ、目を開けて見て見ると、亜紀がいた

「うわぁ」

達也は驚きのあまりベッドから落ちた

「ふわぁ」

その声で亜紀も目が覚めたらしい

「あ、おはようございます」

亜紀もまだ寝ぼけているようだ

「ああ、おはよう。

・・・って、なんで、俺のベッドで寝てんだよ」

「へ？」

ああ、だって、一人で寝ると淋しいですから」

「ああ、そうか

それなら納得  
つて、違・う

男のベッドになんで入って来るのかって事だよ」

「そこに達也さんがいるからです」

「そこに山があるからみたいに言うな」

「いいじゃないですか？

別に減るもんじゃないし」

「それ男のセリフで、女の子が言うセリフじゃないよね？  
それに減る減らないの問題じゃないと思うけど」

「それは偏見です

そう思っている女の子もいますよ」

「それは一部だけのような気がするが」  
達也は亜紀の言動に疑問を持ったようだ

「いえ、三割ぐらいはいますね」

亜紀は自信満々に言った

「ぜって・、三割はいねえよ

女の子とあまりしゃべらない男が言うなら分からなくもないけど、  
お前はおかしいだろ」

「そうですかね？」

亜紀は納得がいかないようだ

「じゃあ聞くが、お前の友達でそんな考えを持つてる奴がいるか？」

「いませんね」

でも、私の友達は少ないから、そういう考えが少数派かもしれないじゃないですか？」

「いや、俺の女友達でも、そういう考えのやつは一人もいねえよ」

「援交している子とかいないんですか？」

「いねえよ」

援交している奴って一部だろ  
絶対三割になんねえ」

「ええ、〇〇〇の〇に行けばいっぱいいますよ」

「何で援交してるって分かるんだよ」

「なんか他の女子高生と雰囲気が違うんですよ」

そう言えば、援交の最低金額って、2万円かららしいですよ。めちやくちや可愛い子だと7万円ぐらいいくんですよ」

「何でお前が知ってたんだよ」

「夕方の番組で言っていました」

「どんな番組だよ」

「そんな番組はない」

「ありますよ」

家出少女は今って言うタイトルでした。  
そこで、出会い系で男の部屋に泊まるらしいです  
体と交換に」

「ああ、確かそういうのを追うのが好きなテレビ局ってあるよな  
何でも王子って付けたがる局とか」

「新聞もそうですよね  
特に〇〇新聞はひどいですけど」

「読んだ事ないからわかんないけど」

「そんなんで、教育とか政治を語っていいんですか？」

「語った事なんかはないよ  
いつ俺が語ったんだよ？」

「あれは去年の春でした」

「その頃はまだお前と出会ってないよ」

「細かい事にこだわりますね。。  
達也さんって、女の子とデートしても割り勘するタイプですよね。  
それも一円単位で」

「そんなに細かくねえよ  
まあ、4分の3は俺が払うな」

「全部じゃないんですね」  
亜紀は少し呆れたようだ

「当たり前だろ

だって、そんなに金ないから」

「じゃあ、バイトすればいいじゃないですか？」

「そこまでして、デートしたくない

なんで、そんなめんどくさい事しなきゃいけないんだよ」

「好きな人の為ならしたいと思いますよ

だって、達也さんなんか好きじゃなかったら、絶対旅行に行きませ  
んもん

考え方古いし、めんどくさいし」

「悪かったな、めんどくさい奴で」

「まあそういう性格だから、好きになっただけですけどね」

「俺はお前がもっと性格よかったら、好きになっただと思うがな」

「これ以上どう性格よくなれって言うんですか？」

亜紀は真面目に言っているようだ

「そう言う時点で性格はよくないと思うぞ

性格いい人って言うのはな、本心でそんな事ありませんよって言う  
よ」

「そんな事より、お腹すきましたね

そろそろ食事の時間ですから、着替えましょう」

「ああ、じゃあ、俺はあっちの部屋で着替えるから」

「何ですか？」

亜紀は不思議そうな顔をした

「お前は俺に着替えを見られて平気なのか？」

「達也さんになら見られても平気ですよ」

亜紀はキョトンとした顔をした

「はあ、俺が嫌なんだよ

とにかく、俺はあっちの部屋に行くから、終わったら来て」

そう言っつて、達也は寝室からテレビのある部屋に行った

「なんであいつには羞恥心ってもんがないだろう」

達也はため息をついている

「羞恥心があれば、もつとぐつと来るのに

……って、何言っつてんだ俺

もつとぐつと来るって事は今でも、ちょっとはぐつと来てるってことだろ

ないない、そんなの有り得ない」

達也は口に出す事で、自分の言葉をなかつたようにしたいみたいだ

「有り得ねえよ」

しかし、言った割りには声が小さかった

「お待たせしました」

亜紀は着替え終わったらしい



「じゃあ、行くか」

そう言つて、二人は三階に行った

「今度はちよつとだけ取れよ

前みたいな事はすんなよ」

「私だつて、馬鹿じゃないんだから、それぐらい分かってますよ」

そうして、二人は三階へ降りて行った

今回は亜紀はちよつとだけ取つて食べた

そして、二人は部屋に戻つていた

「早く秋葉原に行きたいから準備して下さいよ」

「帰つて来てそうそう？」

もうちよつと休んでから行こうぜ」

「秋葉は待つてくれませんか」

「街は消えないから大丈夫だよ」

「ミサイルがふつてきたら壊滅しますよ」

「秋葉に落とす意味がわからん、もっと違う場所を狙うと思うが」

「オタクは国の宝なんですよ

ある国会議員も秋葉原大好きなんですから」

「国の宝ではないと思うよ  
無形文化財ではないからな

こんな事言い合うより、準備しようぜ」

そして、二人は準備をして、部屋を出てホテルのフロントに行つて、  
チエックアウトをした

そして、秋葉原のオタク達がいる所にいった

「ここがオタクの聖地」

亜紀は目を輝かせている

「まず、どこに行くんだよ？」

達也はどうでもよさそうだ

「やっぱりメイドカフェですよ」

「メイドカフェって、真のオタクの人はいかないんじゃないのか？」

「甘いですね

メイドカフェにも大まかに三種類あるんですよ」

「どう言う意味だ？」

「一つ目はオタク文化は知らないけど、メイドカフェに行つて見た  
い人が行く所です

これはテレビでよく放送される所が当たりますね」

「二つ目は？」

「二つ目はオタク文化は知っているけど、メイドカフェには行った  
事がない人が行く店

そして、最後はおタクの常連が行く店です。ここは初心者が行く所ではないですね」

「で、三種類の内のどれに行くんだよ」

「本当は二つ目ですけど、達也さんはおタク文化を知らないから、一つ目ですね」

「俺はメイドカフェ自体行きたくないけどな  
だって、お帰りなさいませ。ご主人様とか言うんだろ？」

「達也さんそう言う女の人嫌いでもんね」

「ああ、虫が走るね」

そういうのを見ると殴りたくなるからね」  
達也は本当に嫌いのようにだ  
顔をしかめている

「殴ったら、捕まりますけどね」

そしたら、獄中結婚か」

亜紀はしみじみと言った

「論理の飛躍すぎるよ」

まだ結婚できないし、それまで刑務所に入ってるわけないだろう」

「早くメイドカフェ行きましょう」

亜紀はさっさと歩いて行ってしまった

「え、スル - ?」

スル - されるのって、辛いんだよ

おい、待てって」

達也は亜紀を追いかけた

二人はメイドカフェの前に着いた

「なあ、本当に入るのか？」

やめようぜ」

達也は嫌そうだ

「何事も経験って言うじゃないですか？」

「使い方間違ってると思うぞ」

「いいじゃないですか

早く入りましょう」

亜紀は達也の腕を掴んで中へと入っていった

「お帰りなさいませ、ご主人様」

メイド服の女の子達が言った

「ただいま帰りました」

亜紀はノリノリで言った

一方達也は

(帰りましたじゃなくて、戻りましただろ)  
違う所に興味を持ったようだ

二人は席についた

「何を召し上がりますか？」

ご主人様？」

(うざい)

今すぐ殴りたい)

達也は我慢してるようだ

「じゃあ、オムライス二つで」

亜紀は達也の分までちゃっかり決めている

「畏まりました」

メイドはそう言っけてキッチンの奥へと戻っていた

「大丈夫ですか？」

亜紀は達也を心配している

「何が」

達也は額の筋がピクピクしている

「ごめんなさい」

そんなに嫌いだなんて思わなくて」

亜紀はそう言っけて頭を下げた

「別に謝らまなくていいよ

まあ、世の中には我慢しなきゃいけない事もあるからな  
それにお前の為なら我慢できるしな」

「え？それどう言う意味ですか？」

亜紀は驚いている

「そ、それは友達だからだよ

友達の為なら何かしたいって思うのは当然だろ？」

達也は焦っている

「それはそうかもしれないですけど、達也さんからは考えられませ  
ん」

「ば、馬鹿だなあ

俺だってそれぐらい考えるよ

そんなに冷たくはないよ」

「そうですか？

まあ、そうしときます」

亜紀は渋々納得したようだ

「お待たせしました

ご主人様、オムライスになります」

そう言つて、メイドはオムライスをテーブルに置いた

「また、何かあつたらお呼び下さい」

そう言つて、メイドは戻つていった

「あれ？オムライスにケチャップで文字は書いてくれないのか？」

達也は疑問に思ったようだ

「ああ、あれは別料金なんですよ」

「そうなんだ

細かく決まってるんだな

そう言えば、メイドの言葉聞いて思ったんだが、オムライスになり  
ますっておかしいよな

オムライスですだろ」

「まあ、バイトの言葉って間違ってるの多いですからね」

「確かにな」

後、チャ・ハン注文したのに、割り箸置いてったりするよな  
本当今時の若者はマニュアル通りにしかできないんだから」

「達也さんも今時の若者でしょ」

それにそう言う時でも割り勘置かないと、怒る客いるんですよ。忙しいからそういうの考えられないし、マニュアル通りにした方が怒られないですから」

「じゃあ、バイト敬語はどうなんだよ」

「それもしょうがないですよ」

そもそもバイト敬語とは、正しい敬語を使い慣れない若いアルバイト店員や学生アルバイトが主になって接客する必要があるから、とりあえず客を不快にさせないために、不文律的にマニュアル化されてきた特殊な接客用語なんです。

他にも覚えなきゃいけない事や、やらなきゃいけない事もあるし、いちいちそう言う事言つと、人間関係が悪くなるんですよ」

「お前はどっかの店長か経営者か？」

「店長に聞いたんです」

この言葉おかしくないですか？って聞いたら、今言った事をいってました」

「本当管理職って大変だよな」

「それは高校生の言うセリフじゃありませんよ」

「あ、早く食べないとオムライス冷めるぞ」

「そうですね」

そう言つて二人はオムライスを一口食べた

「うーん、微妙だな」

達也は渋い顔をした

「というか、あんまりおいしくない」

亜紀はずばつと言つた

「ま、まあ、味のおいしさで人を呼んでるわけじゃないから」

達也は一応フォローのつもりのような

「それってフォローになつてませんよ」

「でもさー、そういう所つて結構あると思うよ」

キャバクラとかホストクラブでお酒とかシャンパン飲むより買った方が安いじゃん」

「それはそうですね、今の話しが味とどういふ関係があるんですか？」

「共通点は、料理を食べにきたり、お酒を飲みにくるつて訳じゃないつて事だよ」

「どうゆう意味ですか？」

「メイドカフェはメイドに会うのが主体で、飯はおまけだろ



キャバクラやホストクラブだって、その人に会いたくて、お酒とか  
シャンパンを頼むだろ

つまり、味がまずかったり、実はロマネコンティのビンだけで、中  
身は安いのもいいって事だよ」

「それってぼったくりじゃないですか？」

「そもそも、メイドカフェやキャバクラがぼったくりだから、別に  
いいんじゃないの？」

「そういうもんですか？」

「そういうもんだよ

さ、さつさとオムライス食べて、早く出ようぜ」

二人はオムライスを食べて、お金を払って店を出た

「うーん」

亜紀は首を傾げている

「何だよ？」

「やっぱりさつきの納得できないんですけど」

「じゃあさ、普通のレストランの話しをしよう

ジュースでも量や味も同じなのに、自動販売機やコンビニよりレス  
トランの方が高いだろ？」

「うーん、確かにそうですね？」

「だったら、これもぼったくりになるだろ？  
でも、そうじゃない」

ここから、経済の話になるからよくわからないけど、原価とかホテル内での売値とか色々複雑なんだよ  
もし、こういう類いのをぼったくりといったら、ほとんどがぼったくりになっちゃうだろ？」

「そうですね」

まあ、なんとなくはわかりましたけど」

「もっと、詳しく知りたかったら、経済勉強しろ  
本屋にそう言うのいっぱい売ってるぞ」

「わかりました」

では、次は本屋に行きましょう」

「は？」

お前本気で経済の本買いに行くの？」

「違いますよ」

アニメの本を書いに行くんですよ」

二人は本屋へと向かった

「これが同人誌って奴か？」

「違います」

同人誌というのはアニメ・マンガ・小説・ゲームなどの世界を用いた二次創作やパロディである本で同人誌即売会や同人誌ショップで売買されている自費出版書籍のことです。更に二次創作に限らずオ

リジナル作品も多いんですよ。

それでこれは商業誌というものです」

亜紀は熱く語っている

「そうなんだ」

達也は若干引いている

(こいつって、ホントこう言う話になると性格変わるよな)

「達也さんもいずれはこういうのを好きになって下さいね」

「なんで？」

「だって、一緒に楽しめたら最高じゃないですか？」

「それはそうだけど、多分好きにならないと思うよ」

「これのどこがいけないんですか？」

亜紀は目が吊り上がっている

「いけないってわけじゃなくて、サッカーが好きな人もいれば、野球が好きな人もいるだろ？」

「そういう意味だよ」

「でも、見てないのに好きにならないっていうのはどうかと思います  
よく知らないのに批判したりする人もどうかと思いますから」

「はあ、わかったよ」

読めばいいんだろ」

(めんどいけど)

「じゃあ、初心者にお勧めの本を買いましょう」

そう言つて亜紀は本を探しに言った

「面倒くさい事になつたな。」

達也はため息をついた

(見たくない物を見せられるほど、辛い物はないぞ)

「お待たせしました

達也さんにお勧めなのはこれです」

亜紀に見せられたのはテレビなどで見た事ある奴だ

「これ？」

「はい

初心者にはテレビで知られてる物がいいんですよ」

「ああ、そうなんだ

じゃあ、買って読んでみるわ」

二人はレジに行つて、その本を買つた

その後二人は時間が許す限りいろんな所を回つた

今は新幹線のぞみの中

「まあ、楽しかたつていえば楽しかつたな」

「来てよかつたですね」

「まあな」

「あの

もしよかったら、また行きませんか？

二人で」

亜紀はちよつとびくびくしながら聞いた

「別にいいよ

面白かったし」

「よかった

断られたら、どうしようかと思いました」

亜紀はホツとしている

「どうせお前はことわったって、無理矢理連れていくだろ？」

「行きたくて行くのと嫌嫌行くのとは楽しさが違いますから  
やっぱり一緒に楽しみたいですから」

「そういうもんかな」

「そういうもんですよ」

時間が過ぎていった

二人は新幹線を降りた

「二日間ありがとうございました

また行けたらいいですね

じゃあ、明日また学校で」

亜紀を軽く頭を下げた

「ああ、またな」

そう言って、二人はそれぞれの家に戻っていった

第16話：どうすれば、妹と結婚できるのか？（前書き）

どうやったら、妹と結婚できるか真面目に考えて見ました。あ、言  
つときますけど、妹と結婚したいわけじゃないですからね。念の為  
に

## 第16話：どうすれば、妹と結婚できるのか？

「太一、お前がギャルゲ - やってるのを横で見てるの思ったんだけど、ギャルゲ - って変だよな？」

「どこがだ？」

「最高じゃないか」

「太一はかなり怒っている」

「まず、主人公がなぜあんなに大勢から好かれるのかわからん」

「それは主人公が誰に対しても優しいからだよ」

「そうかあ？」

「主人公って陰が薄いつていうか顔は平凡な奴多いじゃん  
平凡で優しい奴なんていくらでもいるだろ？」

「それは違うな」

「大多数の男は下心があつて、女の子に優しくするんだよ  
主人公は女男関係なしに優しいんだよ」

「わあ -」

「そいつはすごい人間が出来てるな」

「高校生でそこまで達するなんてすごいな」

「俺は嫌いな奴とかどうでもいいのには優しくなんかしないぞ」  
「達也は何の感情も入れずに淡々と言った」

「俺はかわいい女の子にならすごい優しくする」

「だからこそ、そういうような奴が主人公になるんだよ」



「でも、あんなにたくさんからは好かれないうら？」

「分かってないなあ

達也は。幼なじみとか妹とかがいるじゃないか？」

「そう言えば、もし血が繋がっている妹と恋人になったら、法律上は結婚できないよな  
内縁の妻にはなれるけど」

「内縁の妻ってなんだ？」

「愛人って事か？」

「太一は疑問に思ったようだ

「内縁の妻とは愛人や不倫相手とは違うよ。社会的には正当な婚姻とされるけど、婚姻届が出ていないために法律上の婚姻としての効力を持たないんだよ。でも婚姻届を提出すればすぐに法律上の配偶者となれるんだよ。  
不倫とかはできないだら？」

「はあ、本当お前って幅広い知識があるよな」

「どうも

「そういえば、聞いてももないのにぺらぺら知識をひけらかす奴っていうのは、自慢したい奴が多いよまあ、俺もその一人だが」

「そうなのか

「あ、いとこ同士ってOKなのか？」

「結婚は4親等以上からOKになるんだよ

だから、いとこ同士の結婚はOKだよ。もつと言つと3親等以内の傍系血族、例えば兄弟、姉妹、伯父・伯母、甥・姪はだめだし、直系血族、例えば親、祖父母、子、孫など自分と直接につながっている血族は、4親等以上離れていたとしてもだめなんだよ」  
(ちなみに韓国は9親等から結婚できます  
今言つたのはただ単に自慢したいだけです)

「いとこ同士は結婚できるとはわかったけど、親等ってどこからが、1なんだ？」

「自分自身を0親等として、父母を1親等とするんだよ  
祖父母や兄弟姉妹が2親等って感じでな」

「へえ、、やっぱり妹とは結婚はできないのか？」

「お前はそんなに妹と結婚したいのか？」  
達也は呆れはてている

「妹と結婚したくて何が悪いんだ  
達也だつてみゆちゃんと結婚したいんだろ？」

「お前にみゆちゃんと呼ぶ権利はない  
それに、いつ俺がみゆちゃんと結婚したいって言った？」

「え？」

だつて、達也はみゆちゃんの事好きなんだろ？」

「ブルータス、お前もか？」

「何だそれは？」

太一はキョトンとしている

「世界史で習わなかった？」

「俺は日本史を取ったからわからん」

「いやいや、一年とかで両方習うから知ってるでしょ？」

お前がただ単に寝てただけだろ」

「うつさいわ

俺が言いたいのはなんでそんな事を言ったのかって事だよ」

太一は凶星だったようだ

「亜紀にも同じ事を言われた

そして、言ったのは恋愛感情じゃなくて、家族として好きって」

「え、そうなの？」

太一は驚いている

「うわぁ、亜紀と同じ反応

お前らが俺をどう見てるのかよ、くわかった」

「なんだよ、

お前も一緒に考えだと思って、妹と結婚するぞ同盟に入れてあげようと思ったのに」

「そんな同盟にはお金を貰ったって入りたくはないな

でも、さっきも言ったように妹と結婚できなくはないぞ」

「さっき結婚できないって言ったじゃないか？」

太一は訝しげに聞いた

「二つ方法がある」

「どんなんだ」

太一は興味津々のようだ

はたから見るとただの変態である

「まず一つ目は、結婚には法律上の結婚と事実婚があるって事だ  
事実婚は法的には内縁と同じなんだ  
事実婚と内縁をどちらを言うのかはほぼ主観の問題なんだ」

「それで、それで？」

太一は目を爛々と輝かせている

「ということは、二人が夫婦同然の生活をすればいいんだよ  
そうすれば社会的には結婚した事になる」

「なるほど、その手があったのか」

「しかし、これには問題がある」

「何だ？」

「事実婚は婚姻に準ずるので、医療・保険・年金のような社会保障  
制度の面では、法律婚と事実婚の間に大差はないんだ  
しかし、法律婚と同じように貞操義務などいろいろな条件もあるし、  
事実婚では配偶者の相続権や税金の配偶者控除などは認められない  
し、子供は私生児（婚外子）扱いとなる。  
では、三親等以内の場合の場合はどうなるのか？」

「どうなるんだ？」

「近親婚は公序良俗に反するものだから、法で保護する必要がない。だから、いくら世間で夫婦としての外面的状況が認められていたとしても、内縁関係が認められるべきではない。つて言うのが、現在の所の司法判断ということ、ゆえに三親等の内縁関係に法の保護は及ばない」

「そうなのか  
それは大変だな」

「ああ、多分これは変わらないと思う  
世の中の考え方が変わらない限りな」

「そっか  
で、もう一つは？」  
太一はもう一つの方に賭けたようだ

「もう一つは血縁度がすごい高くても法律的に結婚できる場合がある  
と言う事だ」

「どうゆう事だ？」

「婚外子または非嫡出子って知ってるか？」

「知らない  
なんだそれ？」

「婚外子って言うのは子をみごもる事から出生までの間、父母（夫婦）間に一度も法律上、婚姻関係のなかった子の事を言うんだ」

内縁関係だったり、愛人の子がそれだな」

「そうなのか  
でも、それがどうかしたのか？」

「まあ、話しは最後まで聞けよ

婚外子って言うのは母との法律上の関係は、分娩の事実によって明らかだから、その母子関係は原則として認知をまたないで、分娩の事実によって当然に生ずる。だが、母子関係のように出生という事実だけでは父子関係が判明しないので、法律上の父子関係は、あくまで父の認知がなければ認められない。もしくは、その子が20歳を超えていれば、その認知を拒否する事ができるんだよ  
ゆえに、いくら父親を共有する実の兄と妹であるとしてもあくまでも赤の他人だから、法律上婚姻を妨げる理由はないんだ」

「それはわかったが、それは稀な事なんじゃないのか？」

「婚外子として戸籍に記載されている人は全人口の1〜2%らしいよ  
それに婚外子は差別用語だと言う人もいるよ」

「だめじゃん

やっぱり、俺は妹と結婚できないのかなあ」

太一は嘆き悲しんでいる

「結婚できるできない以前にまず、そう言う人がいないと意味ない  
と思うが？」

「た、確かに

どうすれば言いんだ？」

「誘拐すればいいだろ？」

まあ、確実にお前は犯罪者として、刑務所行きだがな」

「そんな相手が悲しむような事はしたくない」

「へえー、結構マトモなんだな」

達也は感心している

「俺はマトモなつもりだが」

「妹好きなん時点でマトモじゃないと思うが」

「妹好きのどこが悪いんだ？」

人が人を好きになっちゃういけないのかよ」

「いいと思うよ」

愛の形は人それぞれだから

俺が言いたいのは妹に幻想を抱いて妹が好きって言うのはどうかと  
思うって事だ」

「妹に幻想抱いていけないのかよ」

アイドルはトイレにいかないとか幻想抱いた事あるだろ？」

「お前いつの時代だよ」

今のアイドルはそんな事言わないぜ」

「みゆちゃんがちっちゃい頃に私将来お兄ちゃんと結婚するって言  
われて信じてた事なかったか？」

「そんな事言われた覚えはない」

第一、俺は物心付いた時から、みゆちゃんからお兄ちゃんじゃなく

て、達也って呼び捨てにされてたから」

「じゃあ、あれだ

娘がちっちゃい頃、私おつきなくなったらパパと結婚するって奴だ」

「ああ

そう言う事は聞くな

そして、おつきなくなったら、おやじうざいとか、お父さんと一緒に下着洗わないでとか言われて傷つくって奴か？」

「そうだよ

一時期幻想を抱くって事があるだろ？」

「いやいや、それはその人から言われるからだろ？」

お前は妹と言う漠然としたものに幻想を抱いてるだろ？」

「いいじゃないか？」

別に漠然とした物だって

好きなのは好きなんだから、しょうがないだろ？」

「まあ、いいけどな

犯罪を起こさない限り

こう言う事件が現実にあつたんだよ

シスコンの弟が姉をレイプして妊娠させたってのが

「それはすごいな

漫画だけの世界じゃなかったんだな」

「お前が想っている妹も漫画の中だけだろ

それに別に不思議じゃないだろ？」



同性愛だつてあるんだし

意外と思うよ

妹を好きになつたり、弟を好きにったりとかね  
姪と事実婚とかもあるしね」

「はあ、凄いなあ

まあ、目の前に妹が好きなのがいるから納得だな」

太一はウンウンと頷いている

「だから、お前の思つてるような好きじゃねえよ」

「じゃあ、聞くが、もしみゆちゃんに彼氏ができたらどうする？」

「え？」

多分それはすごいショックを受けると思う」

「だろ？」

太一の勝利の笑みを浮かべている

「で、でもそれは父親が娘は嫁にはやらの感じだと思つんだよ」  
達也は焦っている

「私は叶わない恋をしてるんですね」

振り返るとそこには亜紀がいた  
悲しそうな顔をしている

「そう思つんだつたら、諦めて下さい」  
達也は丁寧と言った

「理性で諦めるのぐらいの好きだったら、そんなのは本当に好きではありません。」

「そうかあ」

理性で諦められる恋なんてたくさんあると思うんだけど」

「だから、本当について言う形容詞がついてるでしょ」

それに恋をした事がない人に言われたたくありません」

「いいじゃん」

別に言っただって

周りの状況とかでわかるから」

「恋をした事がないのに恋がどうゆう者かわかるんですか？」

「頭ではわかるけど、心でわからん」

「でしょ？」

恋というのは論理的には説明できないんですよ」

「恋に落ちるのは論理的に説明できるのもあるけどな」

「べつべつ事ですか？」

「ほらよく言うだろ？」

つり橋の上の方が告白が成功しやすいって」

「それはよく聞きますね」

「あれは心理学的にも脳科学的にも実証されてるんだよ」

脳科学的には恐怖する時に出てくる物質と恋をしている時に出る物質が同じなんだよ

心理学的にはドキドキと恋を勘違いしたりな

この事から、愛または恋は思い込みや錯覚と言われるのもある程度は当たってるんだよ

「じゃあ、俺もそうやれば彼女ができるのか？」

「お前は無理だな」

「なぜだ」

太一は悲しんでいる

「キモいからですよ」

亜紀は平気でひどい事を言う

「まあ、それもあるが

これには条件があるんだ」

「どんな条件なんですか？」

「それはだな、好意にもいろいろあるが、この場合は異性に対しての好意にしよう

好きでも嫌いでもない、いわゆる普通の好意度を50にしよう  
さっきの言ったのを成功させるには、最低でも、55なければいけないんだ」

「じゃあ、山口先輩無理ですね

「20ぐらいですから」

「NO……」

太一はそう言って教室から出ていった

「もはやお約束と化してるな」

「他にも方法があるんですか？」

「他の方法はな、バスとか電車が一緒だったとしよう

最初は好きな子の横に立つだけで、しばらく経ったら話しかける

そしたら、その好きな子が自分の事を気になりだすって言うのがある」

「それも異性としての好意度は55以上じゃないとだめなんですか？」

「当たり前だろ

嫌いな奴に横に立たれたら、うざいだけだろ」

「確かにそうですね

でも、なんで異性としての好意じゃないとダメなんですか？」

「それはだな、男して、または女として見られてなかったら、さっきのような事をやっても、意味がないんだよ

友達としては仲良くなるかもしれないけど、それ以上にはならないな」

「確かにそうかもしれないね」

「まあ、こんな事やらなくても、美形な奴は大丈夫だろうけど」

「そんな事ありませんよ

私の女友達は可愛くて、男からモテますけど、肝心の好きな人からは好かれてないみたいです」

「ああ、そう言えば、俺の友達にもいるな  
めっちゃめっちゃカッコいくてモテるのに、好きな子には振られてたからな」

「まあ、カッコイイとか可愛いとかその人によりますからね」

「確かにな」

友達は可愛いと言ってるの俺は全然そう思わないとか、逆に友達は全然言ってるのに、俺は可愛いと思ってるとか  
全員にカッコイイとか可愛いと言われる奴っていないと思うんだよね」

「そうですか？」

「そうだよ」

人には好きなタイプってもんがあるんだからさ  
話しはちよつとずれるが、みんなからいい奴だつて言われてる奴だつて、絶対に嫌いな奴がいるんだよ

そう言うのを妬む奴とかがさ  
味方が100人いれば、敵も100人いるつてさ  
それと同じように、全員からは言われないうら  
あるとしたら、絵画とか漫画だけだろうな」

「確かに絶対こんな人いないよつて言うぐらい美形の人いますからね」

「特に少女漫画に多いな」

女の子とか目大きすぎるだろ見たいなとか、なんでみんな日本人なのに、こんなに西洋系の顔多いんだよ見たいな」

「ああ、そうですね」

小学生の女の子が描く絵ってだいたい少女漫画みたいなのですよね？」

「高校生にもいるけどな」

「でも、なんでそんな事知ってるんですか？

まさか、そう言う趣味が？」

亜紀はびっくりしている

「そう言う趣味ってどんな趣味だよ

男が少女漫画読んじやいけねえのかよ

女の子だって、少年漫画読む奴だっているだろ？」

「それはそうですけど、達也さん、少女漫画って嫌いそうでしたから」

「確かにこれはどうなんだって奴もあるが、中には面白いのもあるからな」

「例えば？」

「例えば、名前がうる覚えだが、フル・ツバスケツトとかのだからな」

「ああ、ああいうのが好きですか？」

「まあな」

「砂時計とかは？」

「今度映画でやる奴か？」

あれは好きじゃないな

笑いが無い」

「純愛物に笑いを求めるのはどうかと」

「俺は基本的にシリアスや恋愛物は嫌いなんだよ

話しを盛り上げる為ならいいけど、恋愛を主軸にする話しは嫌いだ」

「ラブコメが好きって事ですか？」

「ううーん、恋愛を主軸にするんじゃないくて、コメディーなんだけど、たまに恋愛が入るのが好きなんだよね」

「ああ、何となくわかりました

魔法陣グルグル系統ですね」

亜紀は納得したようだ

「また古いの出してきたな

まあ、当たってるけど」

「あれは私的にはどうかと思いましたがけど」

「グルグルを馬鹿にする奴は許さん

馬鹿な事やっとなるようで、意外と考えられてるんだよ

あのナレ・シヨンがいいんだよね」

「そんなにグルグル好きなんですか？」

「本もビデオも全部持つてるよ」

アニメは1は微妙な終わり方だったね。」

「どんな終わり方だったんですか？」

「四天王を倒してこれから魔王を倒そうとつ時に、このまま行くと、帰れなくなるかもしれないって行って、帰っちゃたんだよね」

「何ですか？」

その終わり方」

「知らねえよ」

シャ・マンキングも微妙な終わり方だったけどな」

「あれは打ち切られたんじゃないんですか？」

「そう言う噂もあるな」

魔法陣グルグルを熱く語った達也であった



第17話：男に可愛いって・・・（前書き）

男に可愛いって言うのはダメだと思うんですよ。女の子でも可愛いより綺麗って言われる方が良いつて言う人がいるように、男も可愛いよりはかっこいいって言われたいんです

第17話：男に可愛いつて・・・

達也は憂鬱そうな顔をしている

「なんでそんな顔をしてるんですか？」

亜紀は怪訝そうに言った

「また可愛いつて言われた」

達也はかなり落ちこんでいる

「確かに達也さんは可愛いですもんね  
でも、またって何ですか？」

「中一の頃から言われてるんだよ」

「その頃から可愛いつて言われてたんですか？」

「ああ、なぜか、結構中学校から有名だったな  
有り難くない成り方だけど」

「へえ、どんな風だったんですか？」

「中二の時に、知らない女の先輩達によく声掛けられた  
麻倉君だよ？」

つて言ってから、友達とやっぱり可愛いなって話しあってるんだよ」

「すごいですね」

亜紀は驚いている

「何で知ってるんですか？って聞いたら、ちっちゃくて可愛いって  
中学校では有名だよって言われた」

「モテてたんですね？」

「だから、モテてねえよ

モテてないのに、モテてるって言われる人の気持ちができるか  
すごい辛いんだよ」

「どう言う風に辛いんですか？」

「男友達に言われてモテてないって言ったら、あれのどこがモテて  
ないんだってキレられたり、お前はあれぐらいじゃモテてるとは言  
わないのか、自慢すんなこの野郎って言われたりするんだよ」

「それは悲惨ですね

でも、中三の時に、後輩に告白されたって言いませんでしたか？」

「ああ、一回だけな

あれは辛かった

謝りに行ったら、ひどい事になった事は言ったと思うけど、変だと  
思ったのが、ちょっと可愛いからって調子に乗ってんじゃないわよ  
って言われた事かな」

「すごいですね

それは

亜紀はびっくりしている

「だろ

女の子に言うならまだしも、男に言うんだぜ

あの時はマジでへこんだよ」

「でも、不細工って言われるよりはいいでしょ？」

「それは確かにそうなんだけど、俺も一応男だから、可愛いよりはカッコイイって言われいんだよ」

「それは無理です」

だって、達也さんは、背ちっちゃいし、童顔で女顔だし、腕細いし、色白いですからね」

「わざわざ言ってくれて、ありがとう」

おかげで心に相当のダメージを受けたよ」

「どう致しまして」

「外見で無理だとしても、スポーツやってる時とか、ギター弾いてる時とか、カッコ良く見えない」

「見える事もありますけど、達也さん運動音痴だし、音痴ですよから無理ですよ」

「ギター弾くのに歌うまいのは必須条件じゃないと思うが」

「じゃあ、あれです」

達也さん音感がないから無理です」

「今、無理矢理探さなかったか？」

お前はそんなに俺を否定したいのか？」

「だって、私は可愛い系が好きなんです  
カッコ良くなったら、困りますから」

「何その自己中心的な考え」  
達也は呆れはてている

「好きなものはしょうがないじゃないですか」  
亜紀は開き直った  
本人に開き直っている感覚はないと思うが

「はあ、まあ、いいけどさ」  
達也はもう怒る気力すらないらしい

「そう言えば可愛いのに何か言われましたか？」

「弟にしたいとか、ペットにしたいとかかな」

「わあ、すごいですね」

「先輩とかに言われるならまだしも、同級生が言うのは変だろ？」

「そうですね」

達也さんって、年上に見えないから、大丈夫ですよ  
それに、こんな性格の悪い弟はいりませんね  
皆達也さんの性格知らなさすぎですよ」

「俺もお前みたいのが、妹だったら、家出したくなるね」

「みゆきちゃんならいいんですか？」

亜紀はちよっとむっとしたようだ

「みゆちゃんは可愛いからいいんだよ  
男が放つて置かないんだよ  
あれで、性格もカバ-されるな」

「親バカって言うより妹バカですね」

「みゆちゃんが妹じゃなかったら、彼女にしたいぐらいだね」

「あ、やっぱりみゆきちゃんの事好きなんですか？」

「だから、それは親心みたいなものだっけって言うてるだろ？」

「ふん、どうだか」

亜紀はかなり怒っている

「それに、もし、俺が好きだったとしても、みゆちゃんは俺を兄としか見てないから、永遠の片思いになっちゃうじゃん」

「初恋は実らないものですよ」

「じゃあ、お前の恋も成就しないな」

「私のはします」

特別ですから」

「いやいや、一人一人の恋は特別だろ」

第一初恋は実らないって言い切るのは間違いだ」

「何ですか？」

「だって、それは実らなかった人達がいろんな所で言ってるから、そう言われてだけであって、実ってない人と同じくらい実っている人はいるよ  
要は言っている数の問題なんだよ」

「うーん、確かに私の初恋は実ってますからね」

「へえー、良かったな

好きな人と相思相愛で」

達也は人事みたいに言った

「はい、達也さんとラブラブですから」

「ラブラブって

お前がそう思う理由を教えて欲しいよ」

「だって、逢い引きしましたから」

「逢い引きってお前はいつの時代の人だよ  
しかもデ・トじゃないし

買い物したり旅行したりしただけじゃん

・・・って、もっとすごい事してるじゃん」

「うーん、ツッコミの後に更にノリツッコミとは  
なかなかやりますね」

「そりゃどうも

でも、今までののは、友達として行ったただけだから」

「え？

あんなに熱い接吻をしたのに」  
亜紀は悲しんでいる

「だからお前は何時代だよ  
しかも嘘を言うな」

「私と寝た癖に」

「勘違いされるような事を言うな  
お前が、勝手に入って来たただけだろうが」

「私の胸何回も触った癖に」

「何でお前がそんな事知ってるの？」

「だって、あの時起きてましたから」

「タヌキ寝入りかあ」

おかしいと思っただんだよな。起きてすぐにあんなに言えるなんて

「そんなに私のが触りたかったんですか？  
言ってくれば触らせたのに」

「触りたくないから  
それにはそれは不可抗力だ」

お前が俺のベッドにいるなんて普通思わねえだろ」

「有り得ないと思ってては事故とかは回避できませんよ  
いつも最悪の状況を考えてないと、いざという時に対処できません  
」よ



「あつそ」

達也はどうでもよさそうだ

「例えば、車に乗ってる時、子供が飛び出してくるかもしれないのに、有り得ないとしては、事故りますよ

事故した人の大半が言うセリフは、まさかあんな所から出てくるなんてって言うらしいです

ドライバーがいかに危険予測をしてないかわかりますね」

「でも、自転車が悪い場合もあるだろ？」

「それはあると思いますけど、でも、自転車と自動車では確実に自転車の方が怪我しやすいんです

それに、例え自転車が悪くても、自動車が罪になる場合が多いですから

だから、自動車もそういう事を知っていたら、事故は減ると思いますよ」

亜紀は熱弁をした

「そうかもな」

「でも、自転車だったら、危険予測しなくていいとはなりませんよ自転車だって、凶器ですから

自転車で人にぶつかって殺した事件がありましたから」

「そんなのあつたな

確かにすごい飛ばす奴とかいるよな

自転車は普通に時速30キロぐらいは出るらしいよ」

「でしょ？」

やっぱり自転車も注意しないとイケないんですよ」

「力説してくれてありがとう

ホントにいつつも脱線するよな」

「しょうがないですよ

たまには寄り道しないと」

「たまにじゃないと思うが」

「急がば回れって言う言葉があるでしょ

遠回りしているように見えて、実は一番近い道なんだと言う意味ですよね」

「それと寄り道とどういう関係があるんだ？」

「勉強ばかりしては疲れるでしょ

そういう時に遊んだり、リフレッシュしたりするんです

遊んでる時間を勉強に回した方がいいかもしれないけど、それだと効率が悪くなるんですよ

だから、脱線したり、寄り道も必要って事ですよな」

「何だかな」

達也はあるグルメポーターの真似をした「じゃあ、元の話に戻りますが、達也さんは他に可愛い伝説ありますか？」

「そんな伝説はいやだ」

「いいじゃないですか？」

後世まで残るんですよ」

「そんなのは今すぐ消して欲しいな  
それに、伝説って言うのはいろんな話しが付加されて、話しが大きくなるからダメだな」

「まあ、所詮噂と一緒にですからね  
じゃあ、今だけ伝説を教えてください」

「伝説なんてねえよ  
あるとすれば、体育の時教室で着替える女の子っているじゃん」

「ああ、いますね」

「その事を忘れてて、ガラッとドアって言うか、扉を開けちゃったんだよね」

「うわあ」

「そしたら、女の子達と目があっちゃってさ」

いや、人間って言うのは突然わけの分からない事にあうと、脳から電気信号が止まるって言うか、脳が一時停止になっちゃうんだね  
数秒ぐらい、固まっちゃったから」

「その後、どうなったんですか？」

「その後は、扉をそっと閉めたね」

「え？」

女の子達はキャって悲鳴をあげなかったんですか？」

「悲鳴をあげる女の子は教室で着替えないよ」

「そうですかあ

私達1年は結構教室で着替えますよ」

「お前ら1年はそうかもしれないけど、少なくとも、俺のクラスでは少数だよ」

「で、その後はどうなっただんですか？」

「不可抗力だったし、教室で着替えるのはどうなんだよって事もあったが、一応見ちゃっただし、謝っただよね」

「そしたら？」

「そしたら、女の子達は麻倉君なら、まあいいかなだってなんか女友達みたいだしって言われた」  
達也は声に哀愁が漂っている

「わあ、なんかそれすごいですね  
ある意味伝説ですよ」

「だから、そんな伝説は嫌だ  
あん時はすごい落ち込んだわあ」

「まあ、そりゃ落ち込むかもしませんね」

「すごい辛かったね

男からは、モテていいなあって恨まれたり、女の子からは女友達と

か弟とか言われて落ち込んで、ある意味充実した生活だったな」

「思い出が出来て良かったじゃないですか

中には青春や思い出がなく終わる人もいるんですから」

「もつと良い思い出の方が良かったな」

「贅沢を言っちゃいけません

ホントに人間というのは足るを知るができないんですから」

「足るを知るって何だ？」

「人間というのはある一定の地点で満足しないものなんです

お金を稼いだら、もつとお金が欲しいって限りなく思っんです

その逆の一般的な収入でいいと言っ人もいます

お金だけではなく、心も豊かにならないと思っ人です

この人達を足るを知るって言っんです」

「でも、足るを知らない人が多いからこそ、文明や経済が発達して  
きたんだろ」

「物事には、長所だけと言っ完璧なのはありえません

必ず短所と言っのがあります

だから、そう言っ人もいいと思っますが、足るを知ってる人も  
同じぐらいいるべきなんです」

「高校生にそれを求めるのは無理かと思っが」

「だから、日本の高校生は外国の高校生に比べて幼いって言われる  
んですよ

高校生だからと言って考えなくていい事にはなりません」

「まあ、確かにそうだが・・・」

「でしょ

本来そうあるべきなんです

でも、何でその後輩の子は達也さんに告白したんでしょうね？

他の女の子には異性として見られてなかったんでしょう？」

「日本語の使い方おかしいよ

でもって言うのは、逆接なんだから、前のと反対のを言うはずなのに、全然違う話しになってるよ」

「私の頭の中では考えてたんです

それぐらい理解して下さいよ」

「いやいや、そんなん出来たら、超能力者じゃん」

「ツ・カ・の仲じゃないですか

あ、携帯会社じゃないですよ」

「知ってるよそれぐらい

長年連れ添った夫婦で夫がおいって声かければ、妻がお茶を出すって奴みたいなのだろ

でも、あれは昔の話しで今はないと思うぞ

それに最終的には人の心なんてわかんねえよ」

「心を読む能力を持ってたら大変そうですね

だって人間って、建前と本音で生きてるんですから」

「またスル・された

まあ、俺だつたら堪えられんな」

「自分が聞きたい時だけ聞ければいいんですけどね」

「そんなに都合よくいく訳ないよ

それに聞きたい時に聞けたとしても、悲しむ事だつてあるだろ？」

「ありますね -

もし自分が超能力者で同性が好きで、同性の友達に告白して、でも、その友達は異性が好きだからごめん、でも、友達でいよつて言つてくれたのに、心を読んだら、うわ -、同性愛なんて気持ち悪いって思つてたら、すごいショック受けますからね」

「何その例え？」

「1番わかりやすいと思つて言つたんですけど」

「確かにわかりやすいかつたけど・・・」

「じゃあ、いいじゃないですか

それとも、達也さんは同性愛は気持ち悪いって思つてるんですか？」

「思つてないよ

人が人を好きになる事は良い事だと思つから

それに、男は女を、女は男を好きになつて当然と言う人がいるけど、それには根拠がないからな」

「そうですよね

じゃあ、何に問題があるんですか？」

「お前の例えって、いつつもドラマみたいになるからさ  
それが言いたかっただけ」

「ドラマにした方が面白いし、わかりやすいからいいんです  
これを変えるつもりはありません」

「まあ、いいけどさ」

最終的にはどっちでも良いと思っている達也であった



第17話：男に可愛いつて・・・（後書き）

結局なぜ、俺に告白してきたのかわからずじまいです。聞ける状況じゃないし、もし、好きな理由が優しいだったら、ああ言ってしまう時点で終わりですしね

## 第18話：俺は女嫌いではない

「達也さんって、一目惚れしないんですよね？」

「ああ、絶対にな」

達也は確信を持って言った

「それは何でなんですか？」

亜紀は気になるようだ

「これだとは言えないけど、理由の一つとしては、今は昔より可愛いや美人な人が多いって言うだろ？」

「ああ、言いますね」

「あれはさ、ただ化粧が上手くなったって言うか、そう見えるようにできるようになっただけだろ」

眉毛剃って書いたりとか、目を大きくさせたりとかで」

「まあ、昔よりはいろんなのが出てきてますからね」

「だからさ、化粧とつたら化け物って思うかもよ

眉毛剃ったりしてるから」

「それは言い過ぎだと思いますけど」

「まあ、それは言い過ぎかもしれんけど、俺は作って整えられた顔より、不細工でも、整えてない顔の方が好きだな」

「え、達也さんって、ブス専だったんですか？」

「何でそうなるの？」

化粧をバリバリしているよりは好きって事だよ」

「じゃあ、整えてない不細工より、整えてない美人の方が好きって事ですか？」

「そうなるな」

美人より可愛い人の方が好きだけど」

「ぶりっ子嫌いな癖に」

亜紀はぼそつと呟いた

「顔は可愛い方が言いつて言うだけで、性格は短気で気の強い子が好きなんだよ」

「じゃあ、私ですね」

「あー、まあー、顔的にはそうかもしれないけど、お前天然入ってるだろ？」

ちなみに亜紀はすっぴんのままでも十分可愛い

「全てその人の理想通りの人なんていませんよ」

「確かにな」

「一つや二つぐらいは理想から掛け離れてるもんだけど」

「そうです」

顔もカッコ良くて、勉強も出きて、スポーツも上手くて、性格も良いと思われていて、まさに理想の人なんだけど、実は裏ではあくどい事や女の子にひどい事してるんですから」

「ああ、漫画や小説にはそういう奴出てくるよな」

「現実にもいますよ」

「いるのかな」

俺の周りにはいないけど」

「世界は達也さんの周りだけで回ってるんじゃないですよ  
世界は広いんですから」

「そっだな」

達也はどうでもいいようだ

自分の話しは聞いて欲しいけど、人の話しは聞かない。要は自己中心的なのである

「そう言えば、達也さんの可愛いって思う子ってどつゆつのなんですか？」

「うーん、これというのはないな」

眼鏡を掛けてると可愛いと思ったり、背がちっちゃい子を可愛いとか、いろいろだから」

「ああ、タイプが定まってないんですね？」

「まあな」

性格は定まってるんだけど、顔はどっちでもいいからかもしれんな」

「でも、達也さんが可愛いって思った子の事をもっと知りたいか  
思いませんか？」

「思わないね  
だって、めんどくさいし」

「達也さんってどうやって、友達作ってるんですか？  
すごい疑問なんですけど」

「だいたいあつちから話しかけてくるかな  
席が近かったり、クラスの子と帰りの電車が一緒だったり、友達の  
友達と仲良くなったりかな」

「へえー、そうなんですか  
じゃあ、あんまり自分からは話しかけないんですね？」  
亜紀は納得したようだ

「ほとんど話しかけないね  
友達はいたらいたで楽しいとは思うけど、いなかったらいなかった  
で別にいいしね」

「わあ、さすが達也さん  
すごい冷たいですね？」

「冷たいって言うのをやめてくれない？  
せめて、クールにして」

「ダメです  
達也さんにはクールは似合いません」

「なんじゃそりゃ」  
達也はうなだれている

「いいじゃないですか  
じゃあ、論点を変えますが、友達の中に可愛いって思う子いないんですか？」

「二人ぐらいはいるよ」

「そしたら、しゃべったりするから、好きになった事はないんですか？」

「ないね」

その女友達も含めて5、6人と遊んだ時に、その子の服装が短パン  
って言うか、膝上より短いズボンみたいなのってあるじゃん」

「ああ、ありますね」

「あれ着てきた瞬間に、どうでもよくなったね」

「そんな事ですか？」

亜紀は驚いている

「だって、俺露出が高い服装嫌いだから  
スカートも嫌いだったね  
ジーンズとかの方が好きだから」

「じゃあ、その女の子にそう言うの着るのやめてって言えばいいじゃないですか？」

「彼氏でもないのに何でそんな事言えんだよ。それに、俺が嫌いだからやめてと言うのはおかしいだろ」

「彼氏でもそんな事言われたら嫌ですけど」

「じゃあ、こんな事聞くなよ」

「達也さんなら言いそうだと思うたんで」

「俺ただ自己中なんだよ。俺は自分の価値観を押し付ける程自己中ではない。」

「じゃあ、価値観の押し付けになるかもしれないけど、人を見た目で判断しちゃいけませんよ」

「その言葉よく聞くけどさ、何でよく言われるか知ってるか？」

「知りませんよ」

「何でなんですか？」

「それは人が見た目で判断してるからだよ」

「またいつものが始まった」

亜紀はやれやれと顔を横に振っている

「まず、何で高校生は学校に通う時は茶髪とか髪を染めちゃいけないんだろうな」

これは公立より私立の方が厳しいらしいけど」

「規則だからじゃないですか？」

「じゃあ、なぜ規則にしなければいけないんだ？」

「それは知りませんよ  
学校の勝手でしょ？」

「それはな、生活指導の先生の言葉に頭れてるんだけど、先生はこう言ったんだよ。俺はな別に髪を染めてもいいと思うんだけど、近所の人から言われるからなって言ったんだよ」

「ああ、集会の時にそんな事言っていましたっけ」

「人を見た目で判断しないなら、そんな事言わないだろ？」

「確かにそうですね。」  
そう言っつて亜紀は頷いた

「第一なんで、高校生は染めちゃいけないんだろっとな  
昔は髪を染めてたら、不良だったかもしれないけど、今は髪を染めるとる奴なんていくらでもいるだろ。大人だつて染めてるんだし」

「大人はいいんじゃないですか？」

「よく言っつよな」

俺も父親に食べ物の好き嫌いは言かんぞつて言う癖に、自分は好き嫌いしてるんだよ。

それで、父さんは好き嫌いしていいのかって聞いたたら、大人はいいんだよつて言われたんだよ」

「高校生はまだ身体が成長途中だからじゃないですか？」



「大人だって、栄養が偏つたら、不健康になるだろ？だから、大人だから良いつて事にはならないだろ？」

「そうですね」

「まだ例はあるよ」

アメリカの社会心理学者が実験したんだけど、裁判の時に、人は最初からある程度有罪、無罪を決めてるらしいんだ」

「どうゆう意味ですか？」

「悪そうな顔でいかにも犯罪してますというのだと、有罪だと思い、優しそうな顔だと、無罪だと思う傾向にあるんだって」

「ああ、確かに悪そうな顔だとやっぱり犯罪してるんだと思うし、優しそうな人と、ええこんな人がって思いますもんね」

「だろ。」

「って言う事はだ、人は見た目で判断してるって事だろ？」

「うーん、そうですね」

「俺だって、明らかに不良っぽいのが、お年寄りに席譲ったり、自分のせいじゃないのに、自転車が倒れたら元に戻したら、びっくりするからな」

俺の中では偏見というかそう言う考えを持つてるんだろっな」

「私も達也さんは優しそうと思ったのに、実は冷たいですからね」

「それはよく言われるな

優しそうな顔をしてるのに、喋って見るとすごい冷たいって」

「やっぱり」

「そういう事もさ、やっぱり見た目で判断してるって事じゃん」

「はあ」

亜紀はどンドン、どうでもよくなっているようだ

「それにさ、母親に俺の好きな見た目のタイプ言ったら、ええ、そんなのやだって言ったんだぜ。じゃあ、ギャル系がいいのって聞いたら、それもやだって言うんだよ  
どうしろってんだよ」

「多分、そこら辺にいる女の子見たいなのがいいんじゃないですか？」

「俺はそこら辺にいる女の子は好きじゃない。

やっぱり、黒髪で、前髪の長さは目が隠れるぐらいで、眼鏡をかけて、制服のスカートを短くしたり、加工してない買ったまんまの長さで、性格は短気で気の強い子だな」

「だから、そんな子いませんって

そんな外見な子はだいたい達也さんが好きな性格じゃないですって」

「だいたいだろ？」

もしかしたら、いるかもしれないじゃないか？」

「まあ、そうですね」

「じゃあ、出会えるまで待つよ」

「・・・って、俺が言いたい事はそんなんじゃないんで、やっぱり大人も見た目で判断してるって事が言いたかったんだよ」

「見た目で人を判断してる事はわかりましたけど、じゃあ、なんでわざわざ人を見た目で判断するなって言うんですか？」

「それは自分自身に言ってるんじゃないのか？」

俺はできるって何回も声に出したりして自信をつけるように、何回もその言葉を言って自分自身に言い聞かせてるんだろ？」

「何の為に？」

亜紀は疑問に思ったようだ

「それはその人も親からその言葉を言われてるからだよ。」

だから、見た目で判断しちゃいけないと思ってても、実際はしている。だから、声に出して言い聞かせてるんだろ？」

「そんなもんですかね」

「そんなもんだよ」

後、この話しをすると俺は人を見た目で判断しちゃいけないって言うてるように聞こえてるが、俺は見た目＋中身で判断するから」

「達也さん自身見た目で判断してますしね」

「まあな」

例を言つとな、葬式に赤い服で来たら、俺はその人の品性を疑うね」

「何ですか？」

「いいか赤って言うのはな、少なくとも日本では、血のイメージから生・愛・祝賀を意味する事も多いんだ。例えばだ、結婚式などの吉事祝典には、紅白の幕や紅白の水引が使われるようになる。だから、葬式で着る服ではないんだよ」

「じゃあ、黒はいいんですか？」

「黒は、北の方を意味してるんだよ。」

北は、太陽が最も遠い暗黒の世界を意味する。つまりあの世の色って事なんだよ。」

「そんな事知ってる人が一体何人いるんですか？別に赤い服着て来たって良いじゃないですか」

亜紀は不満のようだ

「知らない人の方が多んじゃないのか？でも、勘違いしてほしくないのが、その人に葬式に赤い服を着てくるのは駄目だって言ってるわけじゃない。価値観とか考え方は人それぞれだから俺がそう感じたただだからな」

「偏見って事ですか？」

「偏見とは違うな」

偏見って言うのはだ、いろんな見方があるのに、ある特殊なものを見方しかしないの言う。

俺の考えはいろんな見方の一つだよ」

「渋谷の高校生は皆援交してるとか？」

「ああ、それは完璧な偏見だな  
お前は、全員に確かめたのかって言いたいよな。  
比率的には多いかもしれないけど、全員は有り得ないだろ」

「そうですね」

「たまたま、親がそこに住んでただけかもしれないのに」

「そもそも、そんな事言う奴おるのか？」

「いますよ」

「達也さんとか」

「俺？」

「言った覚えないけど」

「言葉に表れてるんですよ。」

「露出が高い服嫌い」純粋な子が好きにね」

「いやいや、今どき露出度が高いからって、純粋じゃないとは限ら  
んだろ？」

「それに普通の子でもめっちゃ短いスカートはいてるし」

「じゃあ、援交する子としない子に見た目の差がないって事になる  
じゃないですか？」

「目とかが違うんじゃない？」

「目が死んでるって言うじゃない」

「達也さんだって、死んでますよ」

それに普通の高校生にも覇気が感じられないのいますよ」

「中身も変わらない場合も多いぜ。」

援交以外はマトモな考え方もいるよ。まあ、援交をマトモでないと考えるならばね」

「喋った事あるんですか？」

「二人だけだね」

援交してる以外はそこら辺にいる女の子と変わらなかったよ」

「何でそんな子と喋ったんですか？」

達也さんはそういう女の子嫌いなはずなのに」

「後輩の姉とその友達だったんだよね」

なんか姉に男だけど女の子みたいな人って言っちゃったらしくて、会って見たいって言われたからね」

「そんなんで会ったんですか？」

「まあ、一応後輩の頼みだからね」

「ああ、後輩って可愛い女なんでしょ？」

「男だよ」

第一、太一じゃあるまいし、可愛いとか関係ないよ」

「どつだか」

亜紀は疑っているようだ

「まあ、多少の差はあるかもしれないけど、大して変わんないよ」

「まあ、そういう事にしといてあげましょう  
その二人はやっぱり可愛いかったですか？」

「やっぱりって？」

「援交できるんだったら、ある程度は可愛くないとだめなんじゃないかと思って」

「そうでもないらしいよ」

その二人は可愛いっていうより美人だったけど、顔がちよっと不細工でも、女子高生って言うだけで買う人もいるらしいから」

「ああ、AVでもよくありますね」

顔は普通でも、女子高生って言うタイトルがつくだけで、すごい売れますからね」

「そうなのか？」

達也はよくわからないらしい

「そうですよ」

今や女子高生と言うのが、商品化されていますからね」

「何でお前、そんな事知ってるの？」

「常識ですよ」

亜紀はきっぱりと言った

「それが常識なら、俺はそんな常識なんか知らないな」

「でも、それが業界では常識なんですよ」

「あー、まあ、本当は二十歳なのに、制服を着ていく人もいるらしいからな」

「その方が高く買われやすいんですね？」

「そうらしいな」

でも、なんで援交は駄目で、AV女優はまだ許されるんだろうな」

「法律で決まってるからじゃないですか？」

「それは答になってないんじゃないのか？」

じゃあ、法律で決まってなかったらしいって事になるだろ？」

「18歳未満と18歳以上の違い？」

「援助交際には成人同士の場合もあるんだよ」

「成人だったらいじゃないですか？」

「お前の論理でいくななら、成人も法律で禁止されてるぞ罰則はないみたいだがな」

「自分の身体を傷つけたら駄目だから？」

「それはAVも同じじゃないのか？」

「仕事かそうでないか？」



「今組織ぐるみでやってたりもするから、仕事と言えるんじゃないのか？」

「親が悲しむから」

「どつちも親は悲しむんじゃないの？」

それに、親に愛されてなくてほっとかかれてる子もいるんだぜ

まあ、この問い自体が間違いなのかもな」

「今さら何を言っんですか？」

亜紀は「ご立腹のようだ

「なぜ人を殺してはいけないのかと一緒にさ、人は人を

「殺さない」んじゃない、

「殺せない」ように教育とかいるんなものがさせてるんだと思うんだよ

それと一緒にさ、

「援交はしない」んじゃない、

「援交はできない」ようにさせられてるんじゃないかって事なんじゃないかな？

要はその人の気持ち次第って事だろ？」

「でも、私は殺人や援交は駄目だと思います」

「まあ、一概には言えないけど、99.9%は駄目だろうな」

「残りの0.1%は何なんですか？」

「例えばさ、父親に何年もレイプされてた女の子がいたとするよ  
そして、思い余ってその女の子は、父親を殺してしまった

殺されて当然とは思わないが、この場合と他の殺人を同じにするのはどうかと思うからな」

「それでも、私は殺人や援交は駄目だと思っています」  
そう言った亜紀であった

第18話：俺は女嫌いではない（後書き）

価値観や考え方は人それぞれなので、押し付けるつもりはありません。しかし、この話しは殺人や援交を推奨しているものではありません。そこん所を了解して下さい

## 第18話のおまけ(前書き)

おまけですから、1ページしかありません。しかもいつもの1ページより少ないです。

## 第18話のおまけ

「やっぱり、なんで援交しちゃダメなのかがよくわからないんだよ」  
達也は悩んでいるようだ

「まだ考えてたんですか？」

亜紀は呆れている

「だって、どう考えたって、ダメな理由が見つからないから」

「ダメなもんはダメなんです」

「まあ、女の人が援交はダメって言うのはまだわかるよ  
でも、男が援交しちゃダメって言う理由がわからないんだよ」

「嫌いだからじゃないですか？」

「嫌いだからって、ダメって言うのかよ  
だったら、俺はキリスト教やアメリカって言う国は嫌いだから、  
ダメって排除するのか？」

また、AVや風俗が嫌いだからって、ダメって排除するのか？  
それはおかしいんじゃないのか？」

「それはそうですけど」

「・・・でも、AVや風俗は排除してもいいんじゃないですか？」

「それは違うな」

AVや風俗には減圧機能があるんだよ」

「減圧機能？」

亜紀はわからないようだ

まあ、わからなくて当然だが

「減圧っていうの、その名の通り圧力を減らすって事だ

つまり、AVや風俗がある事によって、性犯罪が減ってるって事だ」

「ええ、本当ですか？」

テレビで、連日のように、性犯罪に被害にあっているって言うってま  
すけど」

亜紀は疑っている

「それは少年犯罪と一緒になんだよ

少年犯罪は凶悪化もしてないし、急増もしてない

さも、たくさんあるようにテレビで流されてるからなんだよ

確かにAVや風俗のせいで、犯行に走った奴もいるけど、AVがあ

るおかげで、犯罪をおかさないう奴もいるから必要なんだよ。

そう考えると、援交してもいいんじゃないかなと思うんだよ」

「何ですか？」

亜紀は明に不満のようだ

「そりゃ、女子高生としたい奴だつて、いるだろうから

そう言う奴は犯行に走るかもしれないだろ？」

その為の減圧機能としては必要なんじゃないかなと思って」

「それは男目線からの考えでしょ？」

亜紀は明に不快のようだ

「何も別にAVや風俗や援交をしろって強制的に言っていないだろ？」

したい奴はすればいいだろ？って言う話だよ」

「もしかして、達也さん、痴漢とかレイプをしていいって思ってませんか？」

亜紀の目付きが鋭くなった

「思ってねえよ

そう言うのは、無理矢理傷付けられるだろ

そう言う事する奴は絶対許せないね

もちろん、殺人や浮気や不倫もね

でも、援交は自分からお金もらってやるからいいんじゃないのか？

もし、援交がダメなら、風俗やAVもダメだろ？」

「でも、好きな人や自分の娘にはして欲しくないですよ？」

「それはその人に対してだろ？  
完璧主観だろ？」

援交自体をしちゃいけない理由にはなんねえだろ」

「それはそうですけど

・・・でも、なんか嫌です」

「それは嫌だから排除する思想が身についてる証拠かもな」  
そう言った達也であった

## 第18話のおまけ（後書き）

何度もいいますが、これは援交を推奨しているわけではありません。それに、俺は援交賛成でも反対でもありません。純粹な疑問からです



第19話：文化祭 俺が模擬長？

「なあ、達也

制服っていいよな」

太一はいきなり変な事を言い出した

「は？

陸軍の制服か？」

達也も変な事を言っている

「ちげーよ

しかも、なんで陸軍限定なんだよ

キャビンアテンダントとかナースの制服とかあるだろ？」

「だって、空軍とか海軍とかのより陸軍の制服の方がカッコイイ、イメージがあるじゃん」

「何でお前は軍隊限定なんだよ  
しかもイメージかよ」

「お前の方こそおかしいだろ  
そんなただのコスプレだろ？」

「好きなもんはしょうがねえだろ  
……って、そうじゃなくて、制服っていうのはセーラー服の事だ  
よ」

「はあ？

ブレザーじゃダメなのか？」

達也と太一とで話しが噛み合っていない

「ダメだな

しかもセーラー服の夏服じゃないとダメだな」

「なんで夏服じゃないとダメなんだよ？」

達也は意味がわからないようだ

「それはな、ブラジャーが見えるのと胸の大きさが分かりやすいからだよ」

太一は熱が入ってるのか、声大きい

そのせいで、クラス中に聞こえた

明らかに女子は軽蔑の目で見ている

「お前が嫌われる理由がよくわかったよ

あのな、そういう事は思っているも、口に出しちゃダメなんだよ」  
達也は小学生に言うように言った

「俺は、裏表がない男だから、そんな事はしない」

太一はきつぱりと言い切った

「いや、ただのバカって事だろ？」

達也は呆れ果てている

「うるさい」

「あれ？」

今日は泣いて教室を出ていけないんだな？」

「今日は一つ頼み事があるからな」

「何だよ？」

「頼みごとって？」

「達也は嫌そうだな」

「イケメンを紹介してくれないか？」

「ラーメン、ツケメン、僕イケメンって言うギャグを持っている芸人がいるけどさ、あいつ面白くねえよな  
早く消えないかな」

「話をそらすな」

「お前とうとう女の子にモテなくて、男に走るのか？  
俺はいいと思うよ」

「男が男を好きになっちゃいけない理由になんてないからな」

「ちげーよ」

「女の子にモテる方法を教えて貰おうって思ってたな」

「ホントお前は正真正銘のバカだな」

「達也は呆れを通りこして、憐れみの目で見ています」

「何でだよ？」

「わかんないのかよ」

「方法以前に顔で負けてるんだから、聞いたって意味ないだろ？」  
「達也は当たり前前の事を言った」

「そうか」

「そうだよな」

太一は納得したようだ

「マジでバカだな」

イケメンに聞くより、普通の顔の人で彼女をいる人に聞いた方がいいんじゃないのか？」

「じゃあ、そいつを紹介してくれ？」

「そんな都合よくいるわけねえだろ？」

「なんだよ」

「使えねーな」

太一は、はああとやって首を横に振った

「（こいつマジでうざいな）」

だったら、自分で捜してくれればいいだろ？

俺以外に友達いないくせに、調子乗ってんじゃねえよ」  
達也はかなり怒っている

「悪かったよ」

「じゃあ、お前でいいよ」

太一は渋々という感じで言った

「はあ？」

「俺彼女いないけど」

「彼女はあきらめるよ」

「お前に聞きたいのは、女友達を作る方法だよ」

「それもお前には通用しないと思うぞ  
俺の場合はあつちから話しかけてきたし、俺を男友達というより、  
女友達と見ている所があるからな」

「確かに俺には通用しないな」  
太一は落ち込んだ

「それ以前に、学校でエロ本読んだり、さっきの話しを大声で言う  
のをやめた方がいいぞ  
それをやめなきゃ、女の子から避けられるぞ」

「それはやめれないな  
なぜなら、それが俺の信念だからだ」  
太一は自信に満ち溢れている

「ある意味、お前の事を尊敬するよ」  
(その、信念というか情熱を勉強にそそげば、東大ぐらい楽勝に受  
かるんじゃないかと思うがね)  
「おーい、お前から文化祭の準備があるから、そろそろ、それぞれの  
クラスに行ってくれ」  
そう達也達の担任は言った

そう言われたので、クラスの子達はバラバラになった  
ちなみに達也と太一はこの教室に残っている

「なあ、なんで模擬って二年生男一人だけなんだろうな？」  
達也は疑問に思ったようだ

「さあ、人気ないんじゃないの」

ここで、わからない人もいるかもしれないから、少し説明しよう  
模擬とは焼きそばやお好み焼きなど料理を作るグループの事を言います

他にもエール（体育祭でグラウンド全面を使って、限られた時間の中でパフォーマンスを発表するグループ）

ガーデン（クラス展示及び垂れ幕制作するグループ）

ア・チ（自分達がグラウンドで座る時の後ろに掲げる縦3m60cm 横7m20cmのでかい絵画を作るグループ）があります

「達也さん」

亜紀が嬉しそうに達也の方へ走ってきた

「はあ、なんでお前のクラスと一緒になんだろうな」  
達也は嘆いている

またまた説明しよう

この学校は、クラスごとや、一年は一年でやるのではなく、1・2、2・5、3・7の様に、一年、二年、三年を合わせて系列を作るのである

その系列からさっきの四つのグループに分かれるのである

「まあ、いいじゃないですか」

やはり、亜紀はすごい嬉しそうだ

「あれ？、その二人ってお前の友達？」

「こんにちわ、麻倉先輩

亜紀から話しは聞いてます」

と、亜紀の友達1号は言った

「こ、こんにちわ」

亜紀の友達2号もおどおどしながら挨拶をした

「おう、よろしく」

達也は元気よく言った

「皆集まったわね」

それでは今から模擬長を決めたいと思います

模擬長は代々二年生がなっているので、なるべく二年生がやって下さい」

そう、三年生は言った

「じゃあ、達也やれば？」

そう、達也の女友達Aが言った

「あ、それいいですね」

亜紀は便乗した

「そうですね」

麻倉先輩でいいと思います」

1号もそう言った

「何でだよ」

他にも二年生いるじゃん

「  
達也はびっくりしている

「ええ、こついうのは男がやるべきだよ」

Aは意味がわからない事を言う

「いやいや、これに男も女も関係ないでしょ？  
男だったら、太一もいるじゃん」

「やだー」

女の子達から一斉に抗議の声が上がった

「何で山口なの？」

Aは明らかに嫌そうだ

「そうですよ

山口先輩気持ち悪いじゃないですか？」

亜紀は目の前に本人がいるのに、平気でひどい事を言う

「山口先輩の噂聞いた事あるんですけど、いい噂ないですよね」

1号も亜紀と似たような感じの雰囲気だ

やはり類は友を呼ぶのか

「うわーん」

太一は堪えられなくなったのか、走って教室を出ていった

「今一応授業中なんだけどな」

達也はぼそつと呟いた

「まあ、出席取られないから別にいいんじゃないですか？」

亜紀はどうでもいいようだ

「山口がいなくなったから、模擬長は達也で決定ね」

「だから何でだよ？」



「だって、達也料理うまいじゃん」

「え？」

「そうなんですか？」

亜紀が驚いている

「うまくはないと思うよ」

母さんがパートでいない時に、みゆちゃんのために作るぐらいだから

「やっぱり、みゆちゃんって呼んでるんですね？」

1号はちよつと引いている

「きもいよね？」

「やっぱりそう思いますか」

亜紀はAの言葉にうんうんと頷いている

「いいじゃん、別に

人の勝手でしょ」

「きもいもんはきもいんだよ」

Aはきつい事を言った

「やべ」

俺も泣きたくなくなってきたよ

「泣け、泣け」

Aは精神年齢小学生のようだ

「それぐらいにしましょう」

もう充分に楽しめましたから」

亜紀は笑いながら言った

「普通、楽しむ前に止めるよね

何で俺の周りにはこんなんしかいないのかな」

達也は悲しんでいる

「最高じゃないですか

だって、達也さんの好きな気の強い子がいっぱいいるんだから」

「そつだそつだ」

Aは噓はし立てた

「うーん

気が強いのはちょっと違うんじゃないか？

これは意地悪って言うんだと思うが」

「そんな事はどうでもいい

これ以上いじられたくないなら、大人しく模擬長になれ」  
なぜか、Aは命令口調だ

「先輩、見てないで止めて下さいよ」

達也は三年生にお願いをした

「ごめんごめん

楽しそうだったからさ」

三年生は笑いながら謝った

「そう言う事が、いじめを生むんですよ」

達也はバシッと言った

「だって、麻倉君も楽しそうだったからさ  
じゃあ、模擬長に決定ね」

「じゃあって何ですか？」

「まあ、いいじゃないですか？」

亜紀は宥<sup>なだ</sup>めすかすかせた

「はあ、」

わかりましたよ

やればいいんでしょ」

達也はもうどうにでもなれという感じだ

「模擬長に拍手」

Aがそう言うと、模擬の子は一斉に拍手し始めた

「ああ、じゃあ、まず、どうゆう風なのをやるのか決めるか？」

達也は嫌そうだ

「メイドカフェがいい」

いつの間にか太一は戻っていた

「神出鬼没だな」

達也は驚いている

「俺は疾風<sup>はやかぜ</sup>のように去って、疾風のように現れるんだよ」

「カッコイイ事言ってるみたいだが、ただ単にいびられて逃げ出して、先生に見つかって戻ってきただけだろ？」

「ちがうわかい」

図星のようだ

「とにかく、俺はメイドカフェがいいんだ」

「嫌、やるのは女子なんだから、女子の意見を聞いた方がいいと思  
うよ」

「却下」

Aは聞かれるとすぐに言った

「山口先輩の案なので、却下」

亜紀は太一のだからダメのようだ

「キモいから却下」

1号もダメのようだ

「何故だ？」

何故なんだ？

ジュリエット

太一は現実を受け止めたくなくて、意味不明の言葉を発した

「まあ、そういう事だから、あきらめろ

・・・でも、服装を考える事はいいかもな

お店の飾りやエプロンのデザインやゴミの分別とかも競って、こ  
の紙に書いてあるし」

「可愛いのがいい」

「じゃあ、やっぱりメイド服だな」

「それはやだつて言ったでしょ  
ちよつとは黙ってなさいよ」

Aは短気のようだ

「メイドカフェのメイド服が嫌なら、本物のメイド服ならいいんじゃない？。スカートの丈も短くないし」

「でっかい豪邸には必ずいるというメイドさんの服ですか？」

亜紀は目がキラキラしている

「必ずじゃないと思うが、まあ、そう言う事だ」

「それならいいかも」

Aはメイド服自体よりも、太一の考えが嫌らしい

「でも、その本場のメイド服はどうやって手に入れるんですか？  
作るにしても、一着ぐらいは本物がないと」  
1号はもつともな事を言った

「そ、それなら、わ、私が持ってます」

そう二号が言った

「何で持ってるの？」

達也はもつとも質問をした

「そ、それは聞かないで下さい」

二号は顔が真っ赤だ

「まあ、いいけど  
じゃあ、二号ちゃんはその明日持って来てくれない？  
みんなに見せないといけないからね」

「わ、わかりました」

二号はさつきよりも顔を真っ赤にして言った

「後は何か決める物ある？食べ物はどうする？」

「オムライス

そして、ケチャップで文字を書いてもらう」

太一はすかさず言った

「だから、それは嫌だと言ってんでしょ」

Aはそう言って太一の（男の）急所を思いっきり蹴った

太一は体をピクピクさせた

そして、あまりの痛さに気絶した

「これでしばらくは静かね」

Aはニヤッと笑った

「相変わらずAはすごいな」

達也は顔が引き攣っている

「やっぱり・・・？」

Aはすごい嬉しそうだ

「いつもこんな事やってるんですか？」

亜紀は驚いている

「まあな

だって、こいつ空手部の主将で、県大会優勝だからな  
そこら辺の男なんて簡単に倒せるよ」

「まるで、名探偵コナンの毛利蘭みたいですね」

「確かにそうだな

しかし、違う所があるな

それは、Aには好きな人もいなければ、好かれているわけでもない  
からな」

「そこ、失礼な事言わない」

Aは達也をバシッと指差した

「ええー、こんなに可愛いのに」

亜紀は驚いている

「やっぱりー？」

Aは満面の笑みだ

「亜紀、そんな事言うなよ

Aはすぐ調子に乗るからさ

こんな性格だと、いくら可愛くても好かれないだろ？」

「遠くから見ればわからないから、A先輩を好きになる人はいる  
と思いますけどね」

1号は亜紀と同じで毒舌のようだ

「それって、近くにいたら、好きにならないって事？」

Aは青筋がピクピクしている

「A先輩がそう思ったんなら、そうなんじゃないですか？」  
1号は馬鹿にした笑いをした

「何ですって。」

Aはかなり怒っている

「まあまあ、二人とも落ちついて。」

達也はなんとか二人を落ち着かせようとしている

が、しかし

「うっさい、達也は黙ってて。」

「麻倉先輩は黙ってて下さい」  
逆効果のようだ

「達也さん、今度の日曜デートしませんか？」  
亜紀は突拍子もない事を言った

「うん、お前はあれだ  
KYだ」

「KYって私使った事ないんですけど」

「確かに俺もTVで言われる前は知らなかったし  
少なくとも、俺の周りでは使ってなかったな」

「やっぱり」

「っていうか、この言葉ってさ、渋谷のギャルが使ってる言葉なん



だろ

「一応ここは大都市だけどさ、ギャルじゃない子は知らないんじゃないの？」

「そう言われてますよね」

「PKって言葉があるけどさ、俺はペナルティー・キックだと思ってただけど、ギャルの間ではパンツ食い込んでるらしいじゃんでもさ、この言葉いつ使うんだよって思ったんだけど」

「Tバック状態みたいにパンツがずり上がるって時に言うんじゃないですか？」

ブルマとか水着とか、お尻からずり上がったパンツを人差し指でパチンとずりおろす見たいに」

「ああ、そうか、なるほどな・・・  
って、ええ、お前の時代ブルマじゃないだろ？  
先輩の時でもなかったって言ってたよ」

「その方がわかりやすいでしょ？」

「そんな理由で？」

でもさっきの例ってさ、プル時とかじゃないの？

学校がある時はスカートなんだから、使うか？

お前どんだけ、スカート短いんだよって話しになるだろ？」

「いるじゃないですか

すごい短いスカート履いてるの」

「確かにな

パンツ見えるんじゃないかってぐらいの履いている子いるよな」

「見えそうで見えない」

そのチラリズムがいいんだよ」

またまたいつの間にか太一は起き上がっている

「お前回復するの早いな」

「俺は不死身なのさ」

「まるで漫画のキャラクターですね」

「ああ、絶対大怪我してるはずなのに、次のページで治ってるもんな」

達也はウンウンと頷いている

「それ以上にチラリズムは最高だよな？」

「何が最高なんですか？」

亜紀は気持ち悪がっている

「あのチラつと見えるのがいいんだよ」

「まあ、わからなくもないな」

全部見えてるより、ちょっとだけ見えてる方が興奮するからな」

「達也さんも興奮するんですか？」

「一応はな」

「それだけではダメだどけな

女の子が恥ずかしがらないとダメなんだよ

女の子の隠す仕草とチラっと見えるので、相乗効果が出るんだな」  
太一は熱く語っている

「気持ち悪っ」

亜紀はボソッと呟いた

「しかし、最近はそれがなくなっている」

「女の子の露出度が高くなったからか？」

「そう、嘆かわしい事に

昔よりチラリズムを楽しめる事が少なくなってきた」

「それはそうかもな

階段上ってる時に、前に女子高生がいたんだけど、見てないのに、見てんじゃないわよって睨まれたからな  
顔なんか赤らめてなかったよ」

「だから、俺はチラリズムを復活する会を結成したのだ」

「あれ、お前、妹と結婚する会も作ってなかったけ？」

「俺にかかれば、会の一つや二つ楽勝だぜ」

「えい」

そう言つて、Aは太一の急所を回し蹴りした

太一は言葉も発せずに、また気を失ってしまった

「ええ」

今はさすがにまずいでしょ」

達也は顔が青ざめている

同じ男だから、痛みがわかるのだろう

「だって、気色い事ばっか話してるんだもん」

「男のあれが使いもんにならなくなったら、可哀相じゃん」

「いいじゃん

それで、山口が犯罪者にならなくなるから」

Aは本気でそう思ってるようだ

「いやいや、太一は犯罪者にならないと思うが」

「犯罪者にならない人なんていないのよ

犯罪者とそうでない人の境界線なんて、曖昧なんだから」

「それ、俺がAに言った言葉じゃん」

「ああ、いますよね」

他人が言った言葉なのに、さも自分が考えたかのように言う人」

1号はAにいちいち突っ掛かていくが、Aの事が嫌いなのだろうか

「何ですって」

またまたAは怒り出した

「1号ちゃんって、いつもあんな感じなの？」

達也は疑問に思ったようだ

「はい、誰にでもあんな感じですよ」

「いつか危ない目に遭うと思うが」

「その点は大丈夫です」

お父さんが合気道の師範だから、合気道を教えてもらってますから」

「すげえな」

でも、合気道って喧嘩とかにあんまり使えないんじゃないの？」

「その点も大丈夫です」

お母さんが空手の師範ですから」

「どんだけすごい家族なんだよ」

「あゝ、もうさっきからいちゃいちゃして」

Aは違う事に怒りだした

「ホントですよ」

私達がいがみ合っている最中に」

1号も怒っている

「これのどこがいちゃいちゃしてるんだよ」

達也もそう言われた事に怒っている

「端から見れば、いちゃいちゃしてるように見えるんですね」

三人と違って、亜紀は嬉しそうだ

「あゝ、もうこの話し終わり」

さっきから、全然話しが進んでないじゃん

もう、食べ物は何レ、プでいいよね？」

「何ですか？」

早速1号が噛み付いた

「地下街にさ、クレ・プ屋さんがあるんだけどさ、そこに女子高生がいっぱい並んでたから、女の子はクレ・プ好きなんだなと思って」

「私は嫌いです」

そう亜紀が言った

「まあ、好きじゃない人もいると思うけど、好きな人が多いじゃん本場のメイド服で、男もくるんだから、ちょうどいいじゃん」

「でも、私クレ・プ作れないよ」

そう、Aが言った

「その点は大丈夫だよ」

みゆちゃんがクレ・プ好きだから、よく作るからね」

「それなら安心ね」

「じゃあ、クレ・プでいい人は手を挙げて下さい」

そう言つと、全員手を挙げた

「じゃあ、決定

店のデザインとかゴミ箱のデザインとかは作りながら決めるからみんな解散していいよ」

「まだ、チャイムなってませんよ」

「あ、じゃあ、自由時間で  
ちよっと、達也は恥ずかしそうだった。」

## 第20話：ラブレター（前書き）

お久しぶりです。この物語は下ネタが多いですが、真面目な下ネタが大半です。真面目な下ネタって何だよっていうツッコミは無しでお願いします



## 第20話：ラブレター

これは達也が模擬長になった日の次の日の2時間目の放課の事である

「学園物の漫画やアニメっておかしい事多いですよね」  
亜紀はなぜか感慨深く言った

「確かにな

主人公が異様にモテるとかな」

達也はウンウンと頷いている

「そうですよね」

平凡な顔で性格も平凡なのがあんなに大勢から好かれませんか」

「後さ、何で出てくる女の子がみんなアイドル級なんだろうな」

達也は不思議がっている

「堀越学園か？って感じですよね」

「堀越ってさ、三つにコースが分かれてるからさ、一般の人もいるんだろ

いいよな、アイドルが生で見られるんだぜ」

「でも、最近は芸能活動に若干緩められている高校が多くなったから、昔ほど輩出しなくなっただですよね」

「そうなんだ」

達也は初めて知ったようだ

「他に学園物の変な所ってありますか？」

「美人の保健室の先生がいるとか？」

「私達の高校の保健室の先生、おばちゃんですもんね」

「後、授業を受け持つ先生に若い美形の先生がいるのかな」

「そうですね」

私立ならありえるかもしれないけど、公立ですからね」

「うちは、みんな30代後半だしね。

若いのは体育の男の先生ぐらいだね」

「体育やっている教師って怖いのが多いですよね」

「確かにヤクザっぽい人はいるよね

後、主役の男友達はどうしようもないエロでバカっていうのもあるな」

「ああ、山口先輩ですね」

亜紀は納得したようだ

「本当にあいつは身体的にも、精神的にも漫画に出てきそうだからな」

「ですよね」

お約束としては、何かに引っかけかかって、女の子の押し倒した時に、胸を触っちゃうってというのがありますよね」

「あんな有り得ないよな  
スカートの中が見えるって事はあるけどさ」

「スカートめくりとかですか？」  
亜紀は首を傾けながら言った

「俺は小学生か  
ちげーよ」

風が強い時にスカートがめくれて見える事があるだろ  
特に最近の女子高生はスカートが短いんだから」

「女子中学生だって、スカートが長い履いてますけど、風が強い  
時は見えちゃいますよ」

「だから、特につて言ったんだよ  
それに、最低でも女子高生の半分は強い風でなくても、見えるがな」

「そうですねー  
達也さんは、スカートが長い子が好きですもんね」  
亜紀は冷ややかに言った

「悪いか？  
別にいいだろ？  
否定してるわけじゃないんだから」

「はあーあ  
本面白い趣味してますよね。この純情好きが」  
亜紀はため息をつきながら皮肉を言った

「中学生以上で純粹や純情って、大きく分けると二つだよな」

「どうゆう意味ですか？」

「一つは、保健などで性行為を生物学的プロセスからは知ってるが、認識はしてない子だな」

「そんな人いるんですか？」

亜紀は首を傾げている

「いるんじゃないか？」

達也はなぜか投げやりだ

「コウノトリが運んでくるとか？」

「それを中学生で信じてる奴はないと思うよ

そうじゃなくて、人工妊娠見たいな物を思ってるかもしれないって事だよ」

「そんな人いますか」

・・・まあ、いいですけど。もう一つは？」

「もう一つは、下ネタを聞かされて、顔を真っ赤にする子だな」

「そんな子いませんよ」

「まあ、確かに高校生だと、嫌悪を表すか、顔をちよっと赤らめるぐらいだけど、中学生だったらわからないじゃん  
でも、これを純粹と言えるのかな？」

「どうゆう意味ですか？」

「顔を真っ赤にするって事は、下ネタの意味が分かってる事だろ？  
知ってるのを純粹と言えるのかな  
純情とは言えるかもしれないけど」

「処女ほど耳年増ですからね」  
なぜか亜紀は自信満々に言った

「一概には言えないと思うけど  
それに知らないんだから、耳年増になるのは当たり前だろ？  
俺も恋愛感情を持った事がないからわからないけど、友達から聞いてこんなもんなって言う風には思うよ」  
「だから耳年増にならない為に、いっぱい恋愛していっぱいHしましょう」

「いや、ダメだろ  
お前本当に極端すぎるよ」

「何ですか？  
じゃあ、もし達也さんが好きになった人が、援交とかセフレがいっぱいいて、100人斬りにしてる女の子だったら、冷めちゃうって事ですか？」

「何その論理の飛躍？  
そんな事言っていないじゃん  
俺はHはダメだと思うけど、恋愛するのはいいと思う。しかし、その理由が耳年増にならない為にするって言うのがダメなんだよ」

「心が狭い男」

亜紀は、はああとため息をつきながら、首を横に振った

「何でだよ

耳年増を理由に付き合ったりしても楽しくないだろ」

「援交だつて楽しくないですよ

なのに、達也さんはダメじゃないって言っじゃないですか」

「あれは小遣い稼ぎや、部屋に泊まる為に自分からやってんだろ  
が」

「仕方なくやってる人もいますよ」

「他の国だったら、大勢いるかもしれないけど、日本では少ねえよ  
それに前も言ったが、援交がダメだったら、AVや風俗もダメだろ  
うが」

「わかんない男ですね」

「わかりたくもねえよ」

「じゃあ、話し変えます

何で痴漢はなくならいんですか？」

「痴漢はなくならないだろう

犯罪や戦争がなくならない様に」

「それではダメです

最初からなくならないって思うよりも、なくして見せると思った方が効果は出るんですよ」

「一理あるけど、現実的に見ればなくらいよ。」

「じゃあ、女性が被害に遭ってもいいんですか？」

亜紀はかなり怒っている

「そうは言っていないよ

でもさー、痴漢をなくすには最終的には人の考えを変えなきゃいけないと思うんだよ

でも、ある程度歳のいった人に、教育をしてもやめる人はほとんどいないと思うよ」

「じゃあ、男のあれを切除すればいいんですよ」

「それはレイプとかにはある程度効果的かもしれないけど、痴漢にはあまり効果はないと思うよ」

「じゃあ、痴漢をした人を殴り倒していい」

「それを許したら、解釈の幅が広められて、日本はやばい事になるだろ

それに冤罪の場合無実の人を殴ったら、今度はその人が犯罪者だよ」

「じゃあ、痴漢を殺人並に刑罰を重くする」

「感情的にはわかるけどさ、そうすると法律的な問題がいろいろ出てくるんだよな」

「何なんですか、さっきから否定ばかりして、達也さんは痴漢をなくそうと思う気持ちがあるんですか？」

亜紀はヤカンが沸騰するぐらいの熱さで怒っている

「正直言えば、あまりない。

実感がわかないんだよ

痴漢された人が周りにいないからな」

「男に私痴漢されたって言う訳じゃないでしょ

泣き寝入りする人だっているんだから」

「でもさー、東京の主要な地域ならまだしも、ここら辺での痴漢率は少ないと思うんだよ

地上の鉄道やバスはそこまで混まないし、地下鉄も東京ほど混まないだろ？」

「分かってないですねー

確かにぎゅうぎゅう詰めの方が痴漢に遭いやすいけど、一番多いのはぎゅうぎゅう詰めと結構空いているの間なんですよ」

「何でだよ？」

「その方がいろいろできるからです」

「そうかあ」

達也は疑っている

「そうですよ

AVみたいにやりまくり放題です」

「あれはヤラセだろ

それにあそこまでいったら、レイプだろうっていうのが多いだろ」



「何で知ってるんですか？  
達也さんでもAV見るんですね？」

「パツケ・ジとかを男友達が持つてきけるのを何度か見た事あるけど、  
映像で見たのは一回だけだよ」

「何で一回だけなんですか？」

「俺も一応男だから、興味あつただけけど、見てみたらこの人達は  
好きでもない人とHできるんだとか、この女の人は演技してるん  
だろつなあとという考えが浮かんできて、見るのが嫌になったからだ  
な」

「普通、AVをそんな観点で見ませんよ」

亜紀は驚いているような、馬鹿にしてるような感じだ

「しょうがねえじゃん」

そう言う風に見ちゃうんだから」

達也はちよつとムキになった

「エロ画像とかも見ないんですか？」

「見ないね」

よくあんな女の子も了承するよなつて思つから」

「だから、だいたいの方はそういう観点で見ませんつて」

「もういいじゃん」

人の勝手なんだから」

「そう言う訳にはいきません  
その論理でいくと、人を殺しても、人の勝手なんだから別にいい  
て事になります」

「どうゆう論理でそうなるんだよ？」  
達也は疑問に思ったようだ

「だって、批判されてそれに反論するのが面倒くさいから、人の勝  
手ってだって言ったら、人を殺したいと言った時に批判されても、  
人の勝手と言う事になるでしょ」

「うーん

一部分では合ってるけど、俺が使っている意味とは違うな」

「どう違うんですか？」

亜紀は達也の言動に噛み付いた

「俺の使った、人の勝手って言うのは、男でもAV好きな奴もいる  
し、嫌いな奴もいるんだから、人に迷惑をかけない個人個人の判断  
だろって事だよ。」

お前が言ったのは、人を殺して相手に被害を与えても良いと言う、  
人をどうしようとする俺の勝手だろと言う使い方だから、俺の使ったの  
とは違うよ。」

「ああ、達也さんがロリコンでも、犯罪者にならなければ、小学生  
を好きになろうとも人の勝手って事ですか？」

「まあ、そう言う事かな

「……って、俺はロリコンじゃねえよ」

達也は真っ向から否定した

「やだな」

例えですよ

例え」

亜紀は馬鹿にしたようにフツと笑った

「（その笑い方は完全に俺をからかっているな）」

「そろそろチャイム鳴るので行きますね

また昼食の時来ますね」

「嫌、こなくていいから

昼飯食べてから来て下さい」

説明すると、この学校は文化祭の一ヶ月前から、午後は文化祭の為に使われるのである

よって午後からの授業はない

その為学力が中途半端な学校なのである

「まあ、遠慮しないで下さい

じゃあ行きますね」

そう言って亜紀は自分の教室へ戻って言った

「水樹行った？」

太一はどこからか教室に戻ってきた

「お前って俺と亜紀が喋っているとあまり近付こうとしないよな？」  
達也は太一の行動が不思議なようだ

「だって、水樹にいつも泣かされてるからな」

太一はしみじみと言った

「お前が変な事言うからだろ？」

「だからって、あそこまで言う事ないじゃん  
あれはもういじめの域に入ってるよ」

「それは亜紀本人に言うべきだろ  
これはいじめだから、そういうのやめろって」

「言ったって聞かねえよ」

「それじゃダメだ  
言ったって聞かないかもしれないが、俺はこう思っているという意  
思を示さないとな  
それに逃げる事は悪い事じゃないけど、逃げてばかりだと、何の解  
決にもならないぞ  
どっち道、亜紀には午後にあうんだしさ」

「そうだな」

俺も変な事言うのやめるよ」

達也は胸を張っていった

そして、昼食

「達也さん」

亜紀は一号と二号も一緒に連れて来た

「やっぱり来たか」

達也は、はああとため息をついた

「も、もってきました」

二号がどもりながら言った

「え、何を？」

達也はいきなり言われて戸惑っている

「あの、メイド服です」

二号は顔を真っ赤にしながら言った

「ああ、あれか

どれ？、見せて」

達也がそう言ったので、二号は鞆からメイド服を出した

「おお、これは本場ヴィクトリアンスタイルの正統派メイド服だな」  
太一はいきなり喋り出した

「見ただけで分かるなんてすごいな  
さすがメイド好きだな」

達也は顔を引きつらせながら言った

「それだけじゃないです

昔上流階級の貴族がお客さんが来た時にもてなしをメイドにさせる  
時のみに着用させたというエプロンドレスタイプです」

二号は吃り（どもり）もせずに、すらすらと喋った

「へーえ

すごい詳しいね」

達也はちよっと驚いたようだ

「二号はそう達也に言われると、自分の言った事に気付いたのか、顔を真っ赤にした」

「二号はオタクですからね」

「一号はそう断言した」

「あゝ、そうなんだ」

「って事はBLとか好きなの？」

(一応説明すると、BLとはBoys Loveの事です。これでもわからなければ、自分で調べて下さい)

「なんでオタク」BL好きってなるんですか？」

「亜紀は呆れている」

「え？」

「だって、オタクの女の子ってBL好きじゃないの？」

「それは腐女子でしょ？」

「亜紀は目を見開いて驚いている」

「俺にとつては、オタクも腐女子も同じようなもんだがな  
そもそもなんで腐女子って言うんだよ」

「だって腐った女の子って意味だよ  
腐った女の子ってどんなんだよ」

「昔BL好きな女の子達が自嘲して、腐女子と呼んだそうですよ  
二号はまた吃りもせず、すらすら喋りだした」

「二号ちゃんって、この手の話しになると、すらすら喋れるんだね」

達也はへ・えと言う感じで驚いている

「そうなんですよ

こういふ話しになると、いつまでも喋るんですよ。」  
「一号はすこし困った声で言った

「ああ、いるよな、そういうの  
太一がそうだもんな」

「俺のどこがそうなんだよ？」  
太一は首を傾げている

「だって、お前妹とか女子高生の事になると異常に喋り出すよな」

「異常ではない  
これが男子の生きる道なんだよ」

「言葉だけかつこよく言うのやめたら？  
なんか余計に阿保らしく聞こえるよ」  
達也はきつく言った

「それでも俺は男の道を行くぜ」  
「そう太一は言いながら、教室を出ていった

「あいつ、昼飯食べないんだな」

「一回ぐらい食べなくても死にはしないからいいんじゃないですか  
？」

亜紀はどうでもいいような感じだ

「まあな

そう言えば、この服ちっちゃいけど、二号ちゃんが着てるの?」「  
達也は疑問に思ったようだ

「は、はい

そうです

ダメですか?」

二号は顔を真っ赤にしながら聞いた

この話しの場合はすらすら喋れないようだ  
喋れるのと喋れないの境目がわからない

「いや、いいと思うよ

二号ちゃん可愛いからさ」

「可愛くなかったら、着ちゃダメなんですか?」

一々一号は突っ掛かってくる

「着ちゃダメって事はないけど、見る分にはきついだろ

例えば、そこら辺にいるおばちゃんがミニス力履いてたらきついだ  
ろ?」

「確かにそうですね」

亜紀は達也の意見に納得している

「じゃあ、黒木瞳ならいいんですか?」

二号はそう聞いてきた

「黒木瞳かあ

いいと思うよ

美人だしね」



「達也さんが熟女好きだとは知りませんでした  
てっきりロリコンと思ってたのに」

亜紀はすごいびっくりした顔をしている

「俺は熟女好きでもないし、ロリコンでもない  
ただ、黒木瞳は美人だって言ったただけだ」

「なんだ

びっくりしましたよ」

亜紀はホツとため息をついた

「俺はお前の思考回路にびっくりしたよ」

「ねえねえねえ」

Aは漫画に出てくるようなキラキラした目をしながら、達也達の方  
にやってきた

「なんだよ？」

達也は面倒くさい奴が来たって言うを顔をした

「これ見て、これ」

亜紀は物を自分の前にバンと出した

それは、手紙だった

「何それ？」

退学届け？」

達也は意味が分からない事を言った

「これのどこが退学届けに見えるの？」

ラブレターよ

ラ・ブ・レ・タ・ー」

Aは一文字一文字を丁寧にはつきりと言った

「へーえ

A先輩でもラブレター貰えるんですね」

一号はとげのある言い方をした

「A先輩を好きになるんだから、変人なんじゃないですか？」  
亜紀も平気でひどい事を言う

「何でそう言う事を言うの？」

Aはちよつと悲しそうな顔をした

「遠くから見てるだけなら、Aは元気な可愛い子だから、Aが好き  
になったのは意外とかつこいい奴かもよ」  
達也はフォローをしてるつもりのようだ

「遠くから見てるだけならって所が気になるけど

・・・そうだよな

かつこいい人かもしれないよね」

「とりあえずその手紙にはどんな事が書いてあるんですか？」

一号はAに聞いたので、Aは手紙を一号に手渡した

手紙が入っている袋の表には

「二年六組Aさんへ」と書いてある

「差出し人は分からない見たいですね」

一号は袋の裏を見ながら言った

「早く中を見よう」

亜紀は一号をせかした

「ホント亜紀はせっかちなだね」

一号はそう言いながら、袋を開けて手紙を取り出した

手紙には、

「放課後に焼却炉の前で待ってますので、来て下さい」と書いてあった

「すっげーシンプルだな

しかも放課後って

時間の範囲広すぎじゃねー」

達也は嫌味っぽく言った

「やっぱり焼却炉で告白するのって流行ってるんですね」

亜紀はしみじみと言った

「いや、流行ってないと思うぞ

何で焼却炉で告白するのが流行ってるんだと思うんだ？」

達也は気になるようだ

「だって、達也さんも焼却炉で告白されたんでしょ？」

亜紀は苦々しく言った

「それは中学生の時だろ？」

しかも、俺一人だけじゃん」

「でも、他にいたかもしれないじゃないですか？」

一号はそう聞いてきた

「そうですね」

亜紀も一号の言葉に乗っかった

「確かに中学もうちの高校も体育館は丸見えだし、焼却炉は離れた所にあるから、あんまり人来ないしな」

達也は渋々だが納得したようだ

「その事で達也にお願いがあるんだけど、達也一緒に着いてきてくれない？」

Aは達也に頼んだ

「何で俺がAの告白される場所にわざわざ行かなきゃいけないんだよ？」

達也は明らかに面倒くさそうだ

「別にいいじゃないですか？

面白そうだし」

亜紀は楽しそうだ

「コソツと着いてけばいいじゃないですか？」

一号も行く気満々のようだ

「それでいいじゃん」

Aはもう決めてる見たいだ

「はあ……しょうがねえな」

達也は抵抗するのを諦めたようだ

「楽しみですね」

「どんな人が来るか」

亜紀は多分変人が来るのを期待してるのだろう

「（Aは初めてラブレター貰って喜んでるけど、付き合っ事は了承するんだろうか？）」

その事に疑問を持った達也であった。

第21話：ラブレターを出した相手は……（前書き）

嵐の「100年先も愛を誓うよ」と言う歌詞の曲ってありますよね（曲名忘れちゃったんですけど）。妹と一緒にテレビを見ていた時、その曲がテレビで流れた時に100年先生きてないじゃんと言った、妹は馬鹿じゃないの、それだけ愛してるって事だよって凄く怒られました。

第21話：ラブレターを出した相手は……

これはAがラブレターを貰った話しをした昼食の後の事である

「達也さん

もう焼却炉に行きませんか？」

亜紀は早くラブレターを出した人物を見たいらしい  
やじ馬根性丸出しである

「まだ早いと思うが

多分相手もまだ来てないって」

達也は面倒くさいと思っているのが見え見えである

「つまんない」

亜紀は机にもたれ掛かった

「じゃあ、一生つまんないままでいる」

達也は突き放した言い方をした

「何その言い方

マジ有り得ないんだけど」

亜紀はギャル見たいな話し方をした

「俺はお前の喋り方の方が有り得ないけどな」

達也はなおも冷たい

「もう

何これ

全然クリアできないんだけど」

AはP Pでゲームをしている

「お前も学校にゲーム持ってくんな」

「何このオヤジ

超うざいんですけど」

Aは亜紀の真似をした

「俺はお前の方がうざいけどな」

「私こういうアクション系苦手なんだけどな」

Aは苦々しく言った

「じゃあ、買うな」

達也はもっともな事を言った

「だって、CMでやってて面白そうだったから」

Aはしょうがないじゃんと言っような口ぶりだった

「何のゲームやってんだよ？」

達也はAが何やってるのかP Pを見た

すると、Aはモン ターハ ターをやっていた

「うわー、学校まで持ってきてやりたいか？」

達也は馬鹿にしたような感じで言った

「ゲームを馬鹿にするな」

Aはちよつとムカツときたようだ

「別にゲームを馬鹿にしてないよ



俺もゲームをしてるし

でも、学校まで持ってきてやりたいかなと思って  
馬鹿にしてないと言っているが、馬鹿にしてるよつに聞こえる

「学校でやってこそ意味があるんじゃない」

Aは自信満々に言った

「どんな意味があるんだよ」

達也は完璧に呆れている

「勉強する所でのゲームって最高だから」

Aは自信を持って答えた

「ああー、スリルがありますからねー」

廃墟の病院でのホラーゲームとか」

亜紀はAの言葉に納得した

「ゲーム以外でスリルを求める必要性はないと思うが」

達也はもつともな事を言った

「人間は安定した生活を送っていると、スリルを求める生き物なんだよ」

Aは分かったような口を聞いた

「でもそれって、本来の生物からずれてますね」

亜紀はぼそつと言った

「確かにな」

生物の本能として、危険をさけようとするはずだからな」

「それは違うよ

人間は安全と分かっている状態なら、スリルを味わいたいんだよ」  
Aは二人の意見に反論した

「もし、幽霊と言うものが存在するなら、廃墟の病院は安全じゃないと思うがな」

達也はもうどうでもよくなってる感がある

「だから、それは亜紀ちゃんが間違ってるんだよ

廃墟の病院に行くロケをテレビで見るのは、安全な場所でスリルを味わえると言う事になるでしょ」

Aは力説をした

「まあ、それなら納得してもいいがな」  
なぜか達也は上から目線だ

「ジェットコースターも安全だと分かっているスリルが味わえるから、乗る人がいるんですよね」

「ジェットコースターは安全とは言いきれんところがな」  
途中で止まったり、地震が起きた時、危険だと思うが」

「何でA先輩には納得して、私には反対するんですか？  
あれですか

好きな子はいじめちゃうって奴ですか？」

亜紀は怒ってるせいか、目を細めて達也を睨んだ

「俺は小学生か

Aの言ったのは安全だけど、お前が言ったのは安全とは限らないから、反論したんだ

別にお前の事が好きな訳じゃないから」  
達也は亜紀の言葉を全力で否定した

「テレビから抜け出して来るかもしれないじゃないですか？」  
亜紀はまだ達也に認めさせたいようだ

「非現実すぎるだろ

しかも、テレビから抜け出してくるって貞子か？  
見たら、一週間後に死ぬのか？」

「助かるには、ダビングして誰かに見せないといけないんですよね」  
亜紀は感慨深げに言った

「皆注目」

一号がそう言ったので、

三人は一号の方を見ると、メイド服の二号がいた

「どうですか？

可愛いでしょ？」

一号が三人に聞くと、

「可愛い

似合ってるよ」

Aはニコっと笑う

「本当

似合ってるよねー」

亜紀も二号を褒める

「麻倉先輩はどう思います？」

一号が達也に聞くと、

「似合ってるんじゃないね」  
達也は苦笑いを浮かべた

「本当に思ってますか？」  
一号は疑問に思ったようだ

「あ、今思い出したんですけど、達也さんってメイド服って嫌いですよね？」

亜紀は思い出したように言った

「え？そうなの？」

「じゃあ、何でメイド服をおしたの？」

Aは達也がメイド服を嫌いな事を知らなかったらしい

「面倒くさかったから

「太一も女の子もどっちも折れそうになかったからさ、メイドカフェのメイド服じゃなくて、本場のメイド服にしたんだよ  
そしたら、どっちも納得するかなと思って」

達也は淡々と言った

「何その事勿れ主義的な感じ？」

Aは軽蔑した目で見ている

「意味が違うと思う

「事勿れ主義って言うのは解決すべき問題があるのにそれを避けたり、見て見ぬふりをしたりして関係を避けて問題を放置する消極的な考え方だよ

例えば物事が済めば良いという考え方だから、多数決などを取るときは、多数の意見に賛成するとかね

まあ、人間の半分はこの考え方だけだな」  
達也は最後の方は馬鹿にしたような感じで言った

「そんな事はどうでもいいんです

麻倉先輩が二号に頼んだから、最後まで責任を持って下さい  
そうじゃなきゃ、二号が可愛いそうです」

一号は怒涛の勢いで言った

「俺そんな悪い事言ったか？」

達也は鈍感だから分からない

「女友達がたくさんいるんだから、分かるはずだと思っている皆さん  
それは違う

達也と友達になる女の子には、達也の冷たさと鈍感と言つ性格を気にしないか、我慢できる女の子じゃないと無理なのである  
もちろん、達也も一応女の子には配慮したりするが、所詮達也である  
だから、女友達がたくさんいても、（こう言う言い方は失礼かもしれないが）女の対処法は女友達がいらない人と同様でほとんど分からないのである」

「頼んどいて、その態度はないと思うよ」

Aは一号の言葉に自分の考えを付け加えた

「そうかあ？」

達也がそう言った瞬間

亜紀、A、一号の三人からブリザードのような（ブリザードがどれ  
だけ凄いか知らないが）凍てつく視線を受けた

「（これはちょっとやばいな）」

鈍感の達也でも分かるぐらい冷たい視線のようだ  
まだ甘く見ている感じは否めないが

「確かにな

自分が言いだしたんだから、最後まで責任を持たないとな」

達也は一刻も早く三人の表情を和らげたくて、思ってもない事を言  
った

今思ったのだが、達也は冷たい人ではなくて、無責任なのではない  
だろうか？

「二号ちゃん」

達也はさっきの言葉を言って、すぐに二号の側に駆け寄る

「は、はい」

二号はこの重い空気のせい緊張している

「その服凄く似合ってるよ

マジで可愛いよ

もう、惚れちゃうぐらい凄いよ」

達也は早くこの状況から逃れたい為か、心にもない事を言う

「え？」

二号は達也にそう言われて、顔を真っ赤にする

またまた思ったのだが、この様な事で顔を真っ赤にする高校生は、  
言い過ぎかもしれないが絶滅危惧種に当たるだろう

「いやー、顔を真っ赤にするのもまた可愛いね  
最高だよ」

今の言葉には前の言葉程嘘はないだろう

しかし、少々変態っぽい感じがする

「そ、そんな事ないです」

二号は更に真っ赤になる

まるでりんごのようだ

(余談だが、りんごは赤色の他に青や黄緑もある)

「いや、そんな事あるよ

二号ちゃんは世界で1番メイド服が似合うよ」

達也の言う事がどんどん大袈裟になっている

すると、誰かが達也の制服の襟を引っ張った

当然達也は後ろへ引っ張られる

達也は何だと思って振り返ると、亜紀がなぜか怒っていった

「(何でまだ怒ってるの?)

俺にこれ以上どうしろって言うんだよ)」

達也はそう心の中で思った

「言い過ぎです」

亜紀は声に刺がある

「言い過ぎ?」

達也は亜紀の言っている事が分からない

「私にもそんな事言ってくれた事ないのに、二号に言っなんておかしいです」

亜紀は眉間にシワを寄せた

「はあ?」

お前に言う必要ないじゃん」

達也は呆れたように言った

「ひどい

私にあんな事をしておいて、そんな事を言うなんて」  
亜紀は顔に両手をあてて、泣いた振りをした

「うわー

そんな事するなんて最低」

Aは嫌悪感を漂わせている

「本当

人間としてどうかと思いますよ」

一号も軽蔑の目で見た

「ええー？

あんな事やそんな事って何？

俺何もしてないけど」

達也は何の事が分からなくて焦っている

何の事が分かってても、焦ると思うが

「どうせ、お前は俺の事事好きなんだから、エッチしても言いよな  
とか言って無理矢理したんですよ」

一号は馬鹿にした言い方だ

「うわー

それ人間として最低だよ」

Aは軽蔑を通りこして、怒りさえ見える

「いや

そんな事言っていないから

……って、二号ちゃん信じないで」



やはり、達也は何の事が分かってても焦っている

二号は達也の恐怖の目で見ている

「二号ちゃん、違うからね」

達也は二号に近付こうとすると、

二号はびくつと身体を震えて、後ずさった

「いや、本当違うからね

俺がそんな事する奴に見える？」

達也は違つと言ってくれる事を願って聞く

達也がそう聞くと、二号は小さく頷いた

「え？」

達也はそれを見てを驚く

「嘘だよね？」

達也はまだ信じられないらしい

亜紀やAや一号なら冗談で言う事も考えられるが、二号はそのような事を言わないと思っっているからだ

「あ、麻倉先輩はそんな事をしないと思いますけど、亜紀ちゃんや

一号ちゃんが言ってるから」

二号は達也より友達を信じたようだ

「麻倉先輩って信用ないんですね」

一号は馬鹿にしたように笑った

「こんなのに信用がある訳ないじゃん」

Aは言っではいけない事を言った

「はあー」

もう俺女性恐怖症になりそうだよ  
達也は凄い落ち込んでいる

「それは駄目です

……じゃあ、もうこの冗談はやめましょう」  
亜紀はちよつと焦って言った

「え？

冗談だったの？」

二号は驚いている

「当たり前じゃん

麻倉先輩がそんな事する訳でしょ

そんな度胸もないし」

一号は完璧に達也を馬鹿にしている

（言っておくが、無理矢理女の子を犯す度胸などいらぬ  
女の子を守る度胸ならあつた方が良いが）

「へたれだからね」

Aも本人を目の前にしてひどい事を言う

（もう一度言うが、女の子を犯すぐらいなら、へたれで良いと思っ  
ている）

「うつせえなー」

そう言う事を度胸があるとかへたれじゃないと言つのなら、俺は  
生へたれでいいよ」

達也はそう言い切った

「さすが達也さん

やはり私の目に狂いはなかった」

亜紀は嬉しそうである

「褒められてるはずなのに、悲しいのは何でだろう?」

達也は複雑な表情をした

「そろそろ焼却炉に行きませんか?」

一号は話しの流れを無視した

「そうだね

皆は隠れてないといけないからね」

Aもそれに同意した

「なあ

別に俺達行かなくてよくねー?

身の危険を感じた時はAが暴ればいいんだから」

達也はめんどくさい感を丸出しである

「暴れたら、私の本性が分かっちゃってモテなくなるでしょ?」

Aは暴れるのは否定しない

「元々モテないと思いますけど」

一号は言っではいけない事を言ってしまった

一号に言われたAは

「達也の馬鹿」

達也に八つ当たりをした

「なぜ俺？」

「モテないと言ったのは一号ちゃんじゃん」

達也はAにいきなり怒られて驚いている

「達也が素直に行くって言えば良かったのに、めんどくさがるからいけないの」

Aは完璧に達也に八つ当たりをした

「ええー？」

達也は納得がいかないらしい

「まあまあ

早く行かないと、相手来ちゃうから行きましよう」

亜紀は話しの流れを中断させた

喧嘩を止めたというより、自分の楽しみを失なわれる事を恐れたようだ

「はあー

わかったよ」

達也は渋々納得した

「わ、私はこんな状態だから行けません」

二号はメイド服なので、教室から出る事が恥ずかしいようだ

その言葉を聞いて4人は焼却炉へ向かった

焼却炉のちよつと離れた所に隠れる所があったので、亜紀・達也・一号はそこに隠れた

Aは焼却炉の前に立っている

5分ぐらい経った後に、多分ラブレターを出した相手だと思わしき人（手にゴミ袋など何も持っていないので）が来た

焼却炉から離れているので、話しの内容は聞こえないが、告白に対しての返事をしているのだろう

しかし、その相手とは

「男じゃないですね？」

一号は誰にもなく言った

「男じゃないね」

達也は一号の言葉に同意した

「女ですね」

亜紀も誰にもなく言った

「女だね」

達也は亜紀の言葉に同意した

「レズって事なんですかね？」

一号は今度は達也に聞いた

「多分同性愛で間違いないんじゃない」

達也はそう言った

「まあ、A先輩性格男っぽいですからね」

亜紀はAはそんな風に見ていたようだ

「Aが男っぽい事は認めるが、女の同性愛者が男っぽいのを好きになるとは限らん」

達也の病気とも言える自分の知識をひけらかしたい癖がまた出たよ  
うだ

「そんなんですか？」

亜紀と一号は驚いている

「そう言う考えは異性愛者から出てくる考えであって、女の同性愛者が自分が女らしくても、女っぽいのを好きな場合もあれば、自分が男っぽくても男っぽいのを好きな場合も多いにある

これは男の同性愛者にも多いにある」

達也はそう返答した

「じゃあ、彼氏役と彼女役は存在しないんですか？」

一号は疑問に思ったようだ

「それも異性愛者の考えから出てくる物だよ

男性同士の場合で言えば、どちらか片方が彼女役をしているのではなく、お互いに相手を彼氏とし、自分も相手の彼氏だと考えているのが多いよ

これは女性同士にも当てはまる」

達也は一号の疑問に答えた

「よく知ってますね」

亜紀は達也の知識に驚いたようだ

「世間の普通や常識を疑うと、いろんな知識を手に入れるからな」

「達也さんって捻くれてますからね」

亜紀はズバズバと言った

「批判精神を持っていると言って欲しいな」  
達也は亜紀の言葉にやんわりと反論した

「行っちゃいましたよ

あの女の子」

Aは二人にそう言った

「じゃあ、Aの所行こっか」

達也がそう言くと、3人はAのいる焼却炉へと向かった

「良かったな

可愛い子で」

達也は心からそう言ってるようだ

「で、OKしたんですか？」

一号は興味深々のようだ

「何でOKするの？」

私女の子好きじゃないから」

Aは一号に言われた言葉にびっくりしている

「え？」

そうなんですか？」

亜紀は亜紀でAの言葉に驚いている

「あれ？」

Aって同性愛者じゃなかったけ？」

達也はAをそのように見ていた

「違うよ

私は男が好きだよ」

Aは達也の言葉を否定した

「男が好きって聞くと、何か男遊びが激しいように聞こえますよね」  
一号は本当にAが嫌いなようだ

「あー、分かる」

と亜紀は一号に同意した

「それはお前らがおかしいからそう聞こえるんじゃないのか？」  
達也は呆れた声で言った

「ええー」

異性が好きって言った方が良いと思いますよ」

一号は達也の言葉を否定した

「どっちでも一緒だと思うんだけど」

達也は苦笑いを浮かべながら言った

「ニュアンスが違っんですよ」

なぜか亜紀は自身満々に言った

「そんなのはどっちでもいい

私は男が好きだけど、男遊びは激しくない」

Aは激怒した

「って言うか、さっき私の事同性愛者って言ってたよね？  
何でそういう事思ったの？」

Aは当たり前だが、まだ怒りは収まっていない

「なんとなく」



達也はAの疑問に一言で済ませてしまった

「私は面白そうだったからです」

亜紀はその発言はどうなんだよ的な事を言った

「私はA先輩の困った顔が見たかったからです」

一号は明らかに駄目な発言をした

「皆最低

特に達也」

Aはなぜか達也だけ名指しした

「なぜ俺？

亜紀や一号ちゃんの方がひどい事言ってるじゃん」  
達也は反論した

「だって、私達は親友でしょ

それなのに、なんとなく言うなんて」

Aはまだ怒りが収まらないようだ

「親友は親友だけど

同性愛のどこが悪いんだよ

同性愛を馬鹿にすんなよ」

達也は論点がずれている

「別に同性愛を馬鹿にしてないよ

でも、事実じゃない事を言われて怒るのは当然でしょ」

Aは興奮しているせいか、徐々に声が大きくなっている

「確かにそれは怒って当然ですよね」

亜紀は達也が全て悪いとでも言うような口ぶりだ

「事実じゃない事は言っちゃいけませんよね」

一号も自分は悪くないような口ぶりだ

「二人は黙ってて」

Aは水がお湯になるぐらいの熱さで怒っている

さすがの亜紀と一号もAの剣幕に恐れをなして黙った

「達也は事実じゃない事を言われてもいいの？」

「嫌だけど」

達也はAに対して自分が言った事に負い目がある為か、声が小さい

「自分がされて嫌な事は人にしちゃ駄目でしょ」

Aは小学生にも分かるような事を言った

「それはそうだけど」

……でもさ、Aも事実じゃない事言ってたよね？」

事実じゃない事とは達也が亜紀を無理矢理犯したと言う嘘を指しているのだろう

Aは上記の事は言っていないが、それを嘘だと分かっている達也を非難したので同罪だろう

「そ、それは

……じゃ、じゃあこれでおあいこだね

仲直りしよう」

Aは形勢不利と見ると、態度を一変させて和解を求めた

「はあー？」

当然達也は何言ってるのこいつという顔をする

「ほら、握手握手」

Aはそう言つと、無理矢理達也の手をとって握つた

「（すっげー自己中）」

内心そう思った達也だったが、

「（まあ、Aが自己中なのはいつもの事だし、俺にも否はあるからな）」

達也はそう思つて、

「そつだな

仲直りしよう」

と言つた

「達也さんつて、本当甘いですよね」

亜紀はこの良い雰囲気をぶち壊す事を言つた

「そこが達也の良い所なんだよ」

とAは言つたが、良いと言つのは、Aにとって都合の良いと言つて意味だろう

「駄目ですよ

時には厳しくしないと」

一号はそう言つた

「お前らよくそんな事言えるな

さつき自分は悪くない見たいに言つてたけど、お前らも十分ひどい

事を言ってるぞ」

「あはは」

二人は明らかに作った笑い方をした

「（何で俺の周りにはこんなものしかないんだろ

まあ、俺も似たようなのだから、類は友を呼ぶって奴なのかなあ）」  
そう思わずにはいられない達也であった

第22話：愛は地球を救わない（前書き）

メロスとセリヌンティウスは竹馬の友です。  
出ますよ

ここに試験に

## 第22話：愛は地球を救わない

ゴーン、おっす、早く起きねえとやっべえんじゃねえのか  
ゴーン、おっす、早く起きねえとやっべえんじゃねえのか  
とド ゴンボールに出てくる大人バージョンの悟空の目覚まし時計  
から声の流れてくる

達也は目を開けないままよろよろと右手を伸ばして、目覚まし時計  
を叩く目覚まし時計は、やっど止まった

今日は日曜日なのでいつまででも寝ててOKである  
なので、達也はまた夢の世界へと旅立つのであった

（2時間後）

「ふぁー」

達也はようやくやく起きて、大きく背伸びをした

なにげなく目覚まし時計を見ると、

「やっべえー」

達也は大きな声を出した

近所迷惑な奴である

達也は何か用事があるのか、急いでパジャマから私服に着替えて、  
二階の自室から一階の居間へと降りて行った

「たつくん

おはよう

あのね

達也の母が達也に話しかけた

たつくんとは達也の事である

「おはよう

母さん

「ごめんね、今話しを聞いてる余裕はないんだ」  
達也はあんパンを探しながら言った

「だめ

話しを聞いてくれるまで逃がさないから」

「（別に逃げれるんだけど、後がめんどくさいんだよな）  
わかったよ、何？」  
達也は椅子にドカッと座った

「たつくんってまた女装するの？」

「しないよ

何でそんな事思ったの？」

「だって、女物の服縫ってたから」

「あれは友達の為に縫ってたんだよ」

友達とはAの事である

Aは言つては悪いが、料理も裁縫もできないのである  
（後、私事だがAって村人A見たいで嫌なので、あいきわほのか藍沢炎夏と言つ名前にする）

「そうなんだ

せつかく、また、たっくんの女装姿見れると思ったのに」  
母は世界が終わるぐらいに残念そうだ

「俺は二度と女装なんてしないから」  
達也は凄い嫌悪の念を表わしている

達也は物心がついてからは一度だけ女装した事がある  
それは中二の時の文化祭である

達也の中学校では文化祭は演劇をやると決まっていたのだが、達也のクラスは、生物学的には男だが性自認（自分のことを男と思っているのか、または女と思っているのかという自己イメージのことを指す）は女と言う所謂性同一性障害の話しの演劇をした  
その時に性同一性障害の役を達也がやったのである

もちろん、生物学的には男で性自認が女であっても女装するとは限らないが、そこは中学生なので、あまり知識がない為しょうがないだろう

その時に達也は女装したのである

「ええー、似合ってたのに  
文化祭の時写真まだ持ってるとよ」  
母は自慢げに言った

自慢げに言う意味がわからないが

「そんなのはすぐ捨てて下さい」  
達也はなぜか敬語になった

まあ、親だから敬語でも別に問題ないと思うが

「ダメ

これはたっくんの成長の思い出だから」  
どういふ成長の証なんだろうか



「はあー」

もういいよ」

達也は抵抗する事を諦めたようだ

「もう行つていい?」

「うん」

いいよ」

母の言葉を聞くと、達也はあんパンを手に持って夕食までには帰るからと言つて、玄関へと向かった

外に出て行くこととする時

「通り魔に気をつけてね」

と妙に生々しい事を言う母であつた

達也はハアハアと息が荒い

別に変な事をしてた訳ではない

達也の家から全速力で走つてきたからである

もちろん、あんぱんはとっくの前に食べてある

今達也は亜紀の家の前にいる

なぜいるかと言つと、一号はメイド服を縫うのが上手いし、達也はクレープの作り方がうまい

しかし、一人だけでは教えるのが大変なので、亜紀・一号・二号・達也が集まるうと約束したのである（炎夏は料理はできないし、太一は異性と喋るのが苦手だから呼んでいない）

（またまた私事だが、一号二号も人造人間見たいで嫌なので、一号

を山本未来、二号を森山あおいと言つ名前にする

「やっぱり嫌だな」

嫌なのは亜紀の家に行く事だろう

しかし、行かない訳にはいかない  
そう思つて達也は呼び鈴を押した

「はい」

と言つて、亜紀はドアを開けた

「よう」

申し訳なさそうに言つ達也

「遅いですよ

何時間待つたと思つてるんですか？」

亜紀は機嫌が悪いようだ

まあ、当たり前と言えば当たり前だが

「しょうがないんだよ

異世界の人が俺を必要としてたんだから」

異世界とは夢の世界の事だろう

夢の世界で魔王でも倒していたのだろうか

「頭大丈夫ですか

病院行きますか？」

亜紀は冷たく突き放す

「大丈夫です」

達也がそう言つた後、亜紀の家にいれてもらった

「そう言えば、家には何度か来た事があるけど、お前の部屋に入るのって初めてだよな」

「そうですね」

そう言つて、二人は亜紀の自室へと向かう

亜紀の自室のドアを開けると、

「うわー」

と達也は声を上げた

驚くのも当然である

部屋を見渡すと、深夜やそっち系の人しか見ないようなアニメの人物やギャルゲーやそっち系の漫画やアニメが散らばっていた

すこしは整理しようとは思わないのだろうか

偏見かもしれないが、この部屋に女の子が住んでは思わないだろう

「うわー」

達也はうわーとしか言えないくらい驚いている

「そんなに女の子の部屋が見れて嬉しいんですか？」

亜紀は勘違いをしている

「女の子の部屋に入った事あるし、そもそも別に女の子の部屋を見たいとは思わない」

「女の子の部屋に入って何したんですか？」

あれですか？」

亜紀はすぐに不機嫌になる

「あれって何だよ  
意味わかんねえよ」

「あれはあれはです  
と意味不明な事を言う亜紀

「はあ？」

何言ってるんのお前  
病院行く？」

達也はさつき言われた事を言い返した  
子供の喧嘩である

「そつちこそ刑務所行きですよ  
浮気したんだから」

「何度も言うけど、付き合ってるねえから浮気じゃねえよ  
しかも浮気で刑務所行ってる何だよ？」

確かに結婚してたら法律で貞操義務はあるけど、それで捕まる訳ないだろ」

(これは日本での話で韓国では姦通罪と言つのがあります)

「捕まらなかったら何してもいいんですか？」

「そんな事言ってるねえよ  
付き合ってるのに浮気っておかしいだろって事を言いたいんだよ」

「そんな事はどうでもいいんです  
誰の部屋に入った事があるんですか？」

そんな事をけしかけてきたのは亜紀なのに、何と言つ言い草だろう

「結構女友達の家に行った事はあるけど、一番多いのは炎夏かな」

「藍沢先輩の家で何してたんですか？」

炎夏と言う事を聞いて、安心したのか、少し機嫌を直す  
炎夏となら何も起こらないと思ったのだろう

「マ オテニスかな」

ちなみにNINT NDO64のマ オテニスである

「何でそんな古いのやってるんですか？」

亜紀が疑問に思うのも当然である

「ばっか、お前

マ オテニス舐めんなよ

故きを温ね新しきを知るって諺があるだろ

古いもの舐めんなよ

ちなみに四字熟語にすると温故知新である

「まあ、どっちでもいいですけど」

二人の温度差に明らか違いがある

「お前つてさ、母さんと気が合いそうだよな」

達也はため息をつきながら言った

「そうなんですか

これで嫁姑関係も大丈夫ですね」

気が合うからと言って、嫁姑関係がうまくいくとは思わないが

「そうなんだよ

父さんがいる時にテレビで不倫とか浮気と言つ言葉が出る度に母さんが父さんに浮気したら死刑ねつて言つだよ  
目がマジで怖いんだけどね」

嫁姑関係の事は聞かなかつた事にした達也

「お父さんはそれに何て答えてるんですか？」

「ああつて一言真顔で答えただけだよ」

「それだけですか？」

「ああ

父さんつて、表情をあまり顔に出さないし、必要以上つて言つか、無駄口は叩かないからな」

「それじゃあ、食事の時とか静かなんじゃないですか？」

「父さんは喋らないけど、母さんが一人で喋ってるからうるさいくらいだな」

「本当私と気が合いそうですね」

亜紀は達也の母を思い浮かべながら言つた

「妄想癖もあるからな」

そう言つた瞬間達也はふと思つた

「（俺何でこいつが苦手か分かつた

母さんと似てるからだ）」

それは達也にとって達也の母が苦手と言つ事になる  
事実だけれども

「す、凄いお母さんですね」

突然の出された声に二人はびっくりした  
振り返ると、そこに森山あおいがいた

「あおいちゃん、いつからいたの？」

達也は森山あおいが後ろにいるのに全然気づかなかったようだ

「女の子の部屋って所からです」

あおいは申し訳なさそうに呟いた

「最初の方じゃん

言ってくればどいたのに」

二人はまだ亜紀の部屋に入ってなくて、ドアの前に突っ立っていた  
ままだったのである

だから、トイレに行って戻って来たあおいは二人が部屋に入るのを  
ずっと待ってたのだ

「い、ごめんなさい

お話を邪魔しちゃいけないと思って」

凄いいい子である

「謝られても困るんだけど」

「い、ごめんなさい」

達也はこれでは無限ループになると思って、話しを変えようとして、  
「そう言えば未来ちゃんはどっしたの？」  
と聞いた

「未来は何で人に教えなきゃいけないの、めんどくさいと教えるなら、三人でやればって言ってました」

「未来ちゃんらしいな」

達也は苦笑いを浮かべた

それから三人は亜紀の部屋に入って、森山あおいに本物のメイド服のデザインと合っているかとか全体のサイズが合っているかをチェックして貰った

達也が縫った炎夏のと亜のメイド服はデザインはほぼ合っていて、細かい所がほんの少し違っていただけだった。

「お前って、裁縫もできるんだな」

達也は感心したように言った

亜紀は料理の他に裁縫もできるようだ

達也に褒められたので、ニコッと笑って

「これでお嫁に行っても大丈夫ですね」

と弾んだ声で言った

「でも、ホントにあおいちゃんって上手いよねー」

達也はわざと聞こえない振りをした

その為亜紀は不機嫌になって、達也を睨む

亜紀が機嫌が悪くなった為か、褒められたからか分からないが、あおいは困ったような嬉しいようなという複雑な心境に陥った

「そ、そんな事ないです」



「いや、マジで上手いって  
もしかして、あおいちゃんって料理もできる？」  
達也は亜紀の方を見ないようにしている

「ちょっとは」

あおいは恥ずかしそうに言った

「凄いな

これでお嫁に行けるじゃん」

高校生でそんな事を考えるのは早いと思う

それを聞いた瞬間亜紀は世にも恐ろしい非難の形相になって、近く  
にあったそつち系（そつち系ってどつちやねん）の人形を達也に投  
げ付けた

「痛っ」

達也は人形が顔に当たった

「何すんだよ」

達也は怒った

かの暴君に（意味不明）

「私というものがあいながら、あおいといちやいちゃしてるからい  
けないんです」

あおいは困ったような顔をしている

「てめー、何度もいわせんじゃねえーよ

てめーと何か付き合ってねえんだから、誰と仲良くしようが人の勝

手だろうが」

さすがの濃厚(?)な達也も我慢の限界のようである  
お前からためーになっっている

「女の子にためーなんて言っちゃダメですよ」  
論点がずれてるような気がする

ああいはこの場を何とかしようとして、おろおろしている

「ストップ」

この呪文は相手の動きを止める事ができるのである

この呪文の為、亜紀・あおい・達也は止まった

と言うのは嘘で、そこに小夜とみゆきがいたからである  
亜紀の部屋にはクーラーや扇風機がない  
だから暑い

その為、ドアも窓も開けていたので、話しは丸聞こえだったのだろう  
と言うのも違い、小夜とみゆきは二人で遊びに出て行ってまだ帰っ  
てくる時間ではなかったからである (Maybe)  
文章が意味不明になってきたので、話しを戻すと

「二人とも何でここにいるの?」

小夜は達也の質問に答えずに、達也の前に立ちはだかった

「な、何?」

さっきの怒りはどこへやら、今は恐怖におののいている

パチンと小夜が達也の頬を平手打ちした音が部屋に鳴り響く

いきなり叩かれたので、達也はびっくりしたのか、目を大きく見開いた

そして、痛みを感じても信じられないのか、自分の頬を手で摩さすっている

「な、何で？」

達也は声の上擦っている

「達也がお姉ちゃんにひどい事言ったから」

小夜は激怒した

彼の残虐非道な王に

「ひどい事？」

達也は見に覚えがないらしい

「亜紀ちゃんにためーって言った事だよ

女の子にためーって言うっちゃ駄目なんだよ」

みゆきもいつも以上に達也を非難の目で見ている

達也はみゆきにいつも以上に嫌われた事にショックを受けた

最愛の妹にそうされたら誰だって傷付くだろう

「お姉ちゃんに謝って」

小夜に睨まれた

達也は小夜に睨まれて怖かったので、謝ろうと考えたが（へたれです）ふと思ったのである

確かにてめーと女の子に言う事は悪い事かもしれないが、そもそも亜紀が（達也にとって）意味が分からない事で怒って人形を投げ付けたのがいけないのではないだろうか

そう思つて、じゃあ俺謝らなくていいじゃんと思つて小夜を見たら、頭に角が生える勢いの形相だったので、すぐさま

「ごめんなさい」

と亜紀に謝つた

「いい……」

と亜紀が何かを言おうとした瞬間、

「駄目

心がこもつてない」

となぜか小夜と言う第三者が割り込んできた

「めっちゃ心こもってたよ」

「不満と言う心はこもってたけど、ごめんなさいという気持ちは入つてなかった」

名探偵並の推理力である

「だつて、」

と達也が反論としようとしたが、

「うっさい

文句言わずに謝れ」

とみゆきが達也の腹を蹴つた後に言った

達也は後ろに吹き飛びはしなかったが、声が出ないくらいの衝撃を受けた

ホント思っんですけど、これ逆だったら、警察呼んだり、非難されまくりですよ

それなのに、女の子がやったらあまり非難されないんですよ  
不公平ですよ

何が男女平等だって感じですよ

だいたい男女平等だと言いながら、平等じゃないんですよ  
女の子は男に平気でひどい事言う癖に、男が女の子に酷い事言ったら、女子全員で最低とか　ちゃんが可哀相じゃんとか言っんですよ  
これは男尊女卑ならぬ、女尊男卑ですよ  
と日頃の愚痴を言った所で話を戻すと、

「分かった

謝るから、蹴られないで」

達也は哀願するように言った

もう不満はないようだ

その代わり悲しみと恐怖が湧き出てきてるようだが

「てめーなんて言っでごめんなさい」

達也はこれ以上何かされないよう必死で謝った

こんな事で謝られて、被害者は嬉しいのだろうか

「私も人形投げてごめんなさい

達也が怒るも当然ですよ

付き合っていないのに、怒って、人形まで投げちゃって」

亜紀は途中からうつむきながら、話した

「いや、別に嫌いって言ってるんじゃないんだよ

だけど、恋人って言うのはどうかなと思った訳で」

達也はこういう場面が苦手なのか、焦っている

それでもまだ亜紀は下を向いている

「好きじゃないと言ってる訳でもないんだよ  
親友として好きなんだけど、愛し合う関係ではないかなと思いまし  
て」

達也は自分でも何を言ってるのか分からなくなっている

「もうそろそろいいんじゃない？  
お姉ちゃん」

「そうだね」

亜紀は顔を上げた  
涙を流してないし、涙の跡もない

「え？」

達也だけでなく、あおいも驚いている

「泣いてたんじゃなかったの？」

「ただ下を向いただけですよ

別に鼻をすすった訳でもないし、鼻声になってませんし  
達也さんが勝手に思ってただけでしょ？」

亜紀は嘲るこらように笑った

「それはそうだけど……」

達也は納得できないようだ

「騙すよりは騙される方が悪いんだよ」  
小夜は事もなげに言った

「いやいや

絶対騙す方が悪いでしょ？」

「そう言えばみゆちゃん驚いてなかったけど、みゆちゃんは亜紀が泣いてないって事知ってたの？」

達也はみゆきに聞くと、うんと頷きながら、

「だって、見れば分かるじゃん」

と当たり前のように言った

「まあ、良い経験になったでしょ

これで、女に騙される確率減りましたよ」

それは偽善と言うものではないだろうか？

「それ炎夏にも言われたけど」

達也は苦笑いを浮かべながら言った

「え？

炎夏さんにもされた事もあるの？」

みゆきは言った

「藍沢先輩知ってるの？」

亜紀が驚いてみゆきに聞いた

「うん

結構家に遊びにくるし」

「まあ親友だからな」

「ふーん

……それで藍沢先輩がした事って何ですか？」

亜紀は少し声のトーンが下がった

「え？」

涙流してたからやべえと思ってたら、嘘だよって言って目薬見せられた事だよ」

「藍沢先輩がやりそうな事ですね」

「まあな

……ええっと、これって許してくれたって事でいいの？」「  
達也は恐る恐る聞いた

「いいよ」

なぜか、小夜が答えた

「うん、私も許してあげる」

さらに、みゆきも便乗した

「え？」

何で二人に許してもらわないといけないの？

本人に許してもらわないと意味ないと思うけど」

そうである

いくら、周辺が許しても、本人が許さないと意味が全くない

「もうとつくの前に許してますけど」

亜紀はあっけらかんと言った

「ほら、許さないって

……ええー



もう許してたの？」

「ベタなノリツツコミですね

はい、あんなんでいつまでも怒ってたら、達也さんの相手できないでしょ？」

正論だ

あんな事と言ったら失礼かもしれないが、あの程度でいつまでも怒っていたら、達也と友達などやってられない

「確かにあんなんでずっと怒っていたら、妹なんてやってられないよ」

実の妹にまで言われてしまった

実の妹だから言われるのかもしれないが

「何か達也が凄い可哀相になってきた」

小夜は憐れみの目で見てきた

そんな目で見られると、余計悲しい

「俺蹴られ損じゃない

何だよ

殴られたり、蹴られたりひどい事も言われたし」

「まあ、いいじゃん

解決したんだし

じゃあ、私とみゆきは部屋にいるから」

そう言っつて、小夜とみゆきは小夜の部屋へと向かった

「（あの二人がいなければ、もっと早く解決したんじゃないのか？）

」  
心の中で毒づく達也であった

確かに周りが騒がなければ、早く解決する場合もあると思う

「ねえ、好きな子の話ししませんか？」

亜紀は唐突に言った

まるで修学旅行のノリである

修学旅行と言えば、好きな子の話しをしたり、枕投げをしたりであるが、絶対先生は枕投げしている事に気付いてるはずだ

なぜなら、枕はあちこちにばらまかれてるし、人は明らかに先生が来たから急いで寝るふりしましたって感じだからである

後、枕投げする時は器物破損をしないように注意しましょう

「どついう経路でそんな話しになるの？」

達也は何こいつという顔をした

達也にそう言われた亜紀は、

「じゃあ逆に聞きますけど、どついう経路を辿れば好きな子の話しになるんですか？」

と聞き返した

「もついいよ

好きにすれば」

達也はさっきの一連の騒動で肉体的にも精神的にも疲れているから、これ以上反論する気力はないらしい

「じゃあ、まず達也さんから」

亜紀はみ　んたばりにズバっと達也に指をさした

人に指をさすのはいけない事である

「俺？」

恋愛感情で好きな人なんかいないぜ」

「はあ」

達也の言葉を聞いた亜紀はこれみよがしに達也の顔を見てため息を  
はいた

「（何か俺が悪い事した見たいに思えてくるな）」

と何ら悪い事をしてないのにそういう気分になってしまう達也

「まあ、いいですけど

じゃあ、次は私ですね」

「私は達也さんが好きです」

と亜紀は顔を赤らめず、恥ずかしさも全くなく言った

「（こいつの事ある意味尊敬するな）」

達也からすれば、告白という一大イベントは死ぬ程恥ずかしいので  
ある

それを平然と言える亜紀はある意味で凄いと思ったのである

「じゃあ、次はあおいだね」

「わ、私？」

あおいにそう言われた瞬間、顔を真っ赤に火照ほてらせた

「（そう、これが普通なんだよ）」

言わせてもらえば、亜紀もあおいも所謂普通と言うモノではないだ  
ろう

あおいは俯うつむいてしまった

「別に嫌なら言わなくても言いんだよ」  
達也はあおいを見兼ねて言った

「駄目です

私も達也さんも言ったんだから、あおいも言わないと」  
連帯責任見たいな事なのだろうか

「別に俺達が言ったからって、あおいちゃんが言う必要ないだろう？  
そもそもいるかどうか分かんないし」

「いますよ

私聞きましたから」

「じゃあ、わざわざ言わなくていいじゃん」  
聞き出す為に私達も言ったんだから、あおいも言えと言うなら（それもそれでおかしいが）分からなくはない  
しかし、知っているのなら、聞く必要はないだろう

「駄目です

なぜなら、あおいが好きな人は達也さんが知ってる人だからです」

「俺の知っている人？」

達也は訝げに言った

達也は友達または知り合いを思い浮かべた

「分かんないけど」

ヒントも何もなしで分かる訳がないだろう

「何と、山口先輩です」

ここでジャジャーンという効果音でも鳴りそうだ

「ええー」

あんなの好きなの？」

達也はあおいを見て言った

友達にあんなの呼ばわりとは酷い奴だ

「は、はい」

あおいは顔をこれ以上できない程真っ赤になり、消え入りそうな声で言った

「あいつのどこが好きなの？」

明らかに顔じゃないよね」

確かに、太一はかつこ良くはないから、一目惚れはされないだろう

「あの、髪飾りを拾ってもらったんです」

「それだけ？」

達也は疑問に思ったようだ

それもそうだ

髪飾りを拾ってもらったぐらいで好きにはならないだろう

その人がカツコ良くない限り

「髪飾りを落としちゃって探してたんですけど、見つかなかっただけです」

「はい」

亜紀はあおいをフォローした

隣であおいがそうだとわんばかりに頷いている

「それでどうしようかと迷っていたら、山口先輩が来て一緒に探して

くれたらしいんです」

「はあ」

で、髪飾りは見つかったの？」

達也はどうでもよさげに聞いた

「それが何と

……見つかつたんです

あおいが髪に付けてたんです」

亜紀はもつたいぶつた言い方をした

「何だそれ

馬鹿じゃん

どつちかが普通気付かない？」

達也は呆れ果てている

「しょうがないですよ

山口先輩はあおいの顔見ずに喋っていて、あおいは異性と喋つたて事で、どきどきしてたらしいですから」

「ああー

そう言えばそうだったな」

達也は懐かしむように言った

太一は異性と喋るのが苦手で、あおいは人見知りか激しいのである

(異性はもつと苦手である)

「それでも怒つたり馬鹿にしたりせず、よかつたねと喜んでくれたですって」

「それで好きになっただんだ」

（まあ、怒ったり馬鹿にしなかったの余裕がなかったただけだろうな）

「  
太一は異性と喋ってると言う事で頭が一杯だったのだろう」

「は、はい」

あおいは恥ずかしがりながらも嬉しそうに笑った

「そこで達也さんの出番です」

山口先輩の好きなタイプを教えて欲しいんですけど」

「あいつ異性だったら、誰でもいいんじゃないのか」

「でも、限度はあるんじゃないですか？」

「ああー」

うーん

あいつ、妹が好きだから年下が好きなんじゃない？」

達也は少し考えながら言った

「妹と言っても色んなのがいるでしょ」

朝お兄ちゃん起きてと行って身体を揺すったりとか、愛妻弁当作って来てくれるとか」

亜紀はいきなり力説しだした

「そんな妹いねえよ」

しかも愛妻弁当っておかしいよ  
もし言うのなら、愛妹弁当だろ」

「みゆきちゃんとは違つかもしれないけど、世の中は広いんですから、  
いるかもしれませんよ」

亜紀の話は一理ある  
なぜなら、全ての妹を見てきた訳ではないから、本当にいないかどうかわからないからだ

「現実になんかのいねえよ  
大体ギャルゲーとか恋愛物って言うのは、有り得ないから面白いんであって、現実でも有り得たらつまらないだろ」  
達也の言い分にも一理ある

「うっ  
確かに現実にいる恋人達や兄妹の日常をドラマにしたら凄いつまらないと思いますけど」

「だろ  
確かにみゆちゃんだったたまには起こしに来てくれるが、布団をはいで枕をテーブルクロス引き見たいに奪って、その枕で起きるまで叩いてくるからな」  
達也は自嘲気味に言った

あおいはそれを聞いて  
「え？」  
と驚いた顔をした

「悲惨な朝ですね」  
憐れみの声で言った亜紀だった

「何か自分で言ってる悲しくなってきたけど  
まあ、あおいちゃんは太一好みだと思っけど」

「そ、そうですか？」



でも、私可愛くないですし」

確かにあおいは万人受けするような可愛いさではないだろう

あおいは身長は150センチぐらいで髪は黒で首までかかっている前髪は目が隠れるぐらいだ

髪と髪の間隙から無垢で純粹そうな瞳が見えた

化粧を全くしていないので、地味に見えるがリス見たいな小動物のような可愛いさなのである

「そんな事ないよ

凄く可愛いよ」

と達也は言った

達也と太一は外見では好みが一致していると言えよう

あおいのような外見に制服のスカートを短くしたり、加工してない買ったまんまの長さの子がタイプなのである

あおいは制服のスカートも今履いているスカートも長いので達也と太一のストライクゾーンばっちりである

しかし、中身の好みは正反対である

太一は守ってあげたいタイプが好きで、達也は短気で気が強いのがタイプである

なので、太一はあおいの事を恋愛感情で好きになるかもしれないが、達也は妹見たいにしか思っていないだろう

また、あおいも達也は兄見たいにしか思っていないだろう

「あ、ありがとうございます」

あおいはまさか褒められと思ってなかったのか、驚きながら言った

「まあ、太一にそれとなく聞いて見るわ」

「お願いします」  
そう頼んだ亜紀であった

**第23話：自分を救えるのは自分だけ（前書き）**

この話しは前の話しと同じ時間です  
つまり亜紀とおお  
いと達也が亜紀の部屋にいて、みゆきと小夜は小夜の部屋にいてと  
言う事です

### 第23話：自分を救えるのは自分だけ

「達也、ちよつといい?」

小夜はみゆきを連れて亜紀の部屋にやってきた

「いいけど、何?」

達也は珍しいなと思いつながら聞いた

「いいから、私の部屋に来て

みゆきはごめんだけど、ここで待っててね」

小夜はみゆきに謝りながら言った

「小夜の部屋で禁断の世界が幕を開けるんですね」

亜紀はうつとりとした表情で言った

「禁断の世界って何だよ

近親相姦とかじゃないんだし、別に何したって良いだろ」

達也はちよつと引いている

「何で男ってすぐエロい方に持つてこうとするんだらうね」

みゆきは馬鹿にした口調で言った

「ホント、だから男って嫌なんですよ」

亜紀もみゆきに同意した

「え?」

だって、禁断の世界ってそう言う事じゃないの?

他に何があるんだよ?」

達也は焦っている

「あるじゃないですか  
ホームクルス作るとか人体実験するとか」

「うわあー」

裏の世界来たー」

達也も意外にノリノリである

「終わった？

早く私の部屋行かない？」

小夜はいつもなら乗ってくるはずが、今日に限っては冷めている

「ああ、分かった」

達也は小夜がいつもと違う事に気付いたのか、素直に従った

小夜の部屋は亜紀の二つ隣にある

「はあー」

達也は驚いた

小夜の部屋は亜紀の部屋と違って、熊（プ）さんも入る（や犬（ス  
ーピー）は犬なんだろうか）などのぬいぐるみが所々にあった  
そっち系の漫画などはなくて、少女漫画が多いようだ

「亜紀の部屋とは大違いだな」

達也は床に座りながら言った

「まあね

前にも言ったと思うけど、私は男を試す為に言ってたんだからね」  
小夜も床に座りながら言った

亜紀は趣味でギャルゲーをやっているが、小夜は男を試す為にやっていたのだ

「何あれ？」

達也は一つのぬいぐるみを指して言った

それは、全体は黄色で、団子のように三つの丸い突き刺さったのが5本ぐらいばらばらに頭に生えていて、頭が身体の3倍とバランスが悪い何とも言えないぬいぐるみだった

「ああ、これ？」

これも しもんっていうアニメに出てくるのだよ  
可愛いでしょ」

小夜は嬉しそうに言った

「（これが可愛い？

小夜ちゃんの美的感覚が分からない

……もしかして、これが世に言うキモ可愛いと言う奴なのか」

思ったのだが、キモ可愛いって何なんだろうか？

キモいならキモいで可愛いとは相反するものなのに

「あの、お姉ちゃんの話しなんだけど」

小夜はいきなり切り出した

「亜紀の？」

ああ、だからこっちに移動したんだ」

達也は納得したようだ

「うん」

あのね、私達二人がレイプされたって事は言ったよね？」

「うん」

真面目な話しな為か、達也は背筋を伸ばした

「だからって訳じゃないかもしれないけど

お姉ちゃんね

下ネタ好きじゃないんだ」

「好きじゃない？」

でも凄く楽しそうに喋ってるけど」

達也は亜紀を下ネタ大好き人間だと思っっているのである

「あれは私と同じように試してるんだよ

私と違うのが、私は全ての男を試す為にやったけど、お姉ちゃんは達也を試す為にやってるんだよ」

「俺を試す為？」

達也はよく分からないらしい

「信じたいんだよ

男でも下ネタとかエロい事に興味ないのもいるって」

「そりゃいるでしょ」

達也はしごく当然のように言った

「聞いてはいても、自分の目で見なきゃ分からない事ってあるでしょ？」

百聞は一見に如かずである

「目で見える事が全てじゃないよ  
これは物質主義の弊害だな」  
論点がずれている

「意味分かんない事言わないですよ  
ともかく、達也はOKだと思つよ」

「何がOKかが分からないけど」  
この文脈で分かる人がいたらお目にかかりたい

「達也は合格つて事だよ」

「合格つて何か嫌だな  
あのさ、亜紀つて一応俺の事好きなんだよね？」  
達也は小夜の方を見ずに頬をポリポリ掻きながら恥ずかしそうに言  
つた

「うん」

小夜はすぐに頷いた

「つて事は試す必要ないんじゃないの？」  
「お姉ちゃんあれで結構うたぐり深いんだよね  
第一、第二の試練があるんだよ  
今は第三ぐらいじゃないかな」  
小夜は亜紀の性格を思い浮かべながら言った

「なんかRPG見たいだな  
でも、あいつが下ネタが嫌いなんて信じられないんだけど」  
達也はまだ疑っている



「じゃあ一つ聞くけど、お姉ちゃんの部屋にエロい本とかエロDVDあった？」

「ああー」

うーん、見た感じはなかったな」

確かにギャルゲーとかそつち系（一部の方達が読む）の漫画はあったが、エロいのはなかった

「でしょ？」

お姉ちゃんって下ネタ言うけど、表面的なのが多いじゃん後は、保健とかで習ったりとか」

「ああ、そういうえばそうかな」

達也は亜紀の言った事や行動を思い出した

小夜が言った事から考えれば、そうかもしれない  
下ネタを言った時に達也がニヤニヤしたり、平然と話しをして言たら、達也の事が好きだとしても拒否反応を示して嫌いになっていたかもしれない

パンツあげると言ったり達也の前で着替えようとしたのも私は全然平気ですよと言う振りだったのかもしれない  
達也はすぐに反論したので、合格だったのだろう

「そう考えると、あいつって結構純情なのかもな」  
達也は新発見をしたようだ

「凄い純情だよ」

お姉ちゃんがギャルゲーやってるのも純情だからだよ」

「ごめん

ギャルゲー＝純情の意味が分からない」

達也は首を傾げた

「いい？

ギャルゲーとエロゲーは違うだよ

ギャルゲーって言うのは18禁じゃないの

対してエロゲーは18禁なの」

小夜は力説した

ギャルゲーとは18禁要素のないものである

確かに偶然着替えを覗いちやっただくらいはあるが、所詮その程度である

エロゲーは18禁要素のあるものである

二人が愛しあつて　　をする場合もあるが、犯罪行為や人として最低な場合のも多くある

さらに言えば亜紀の好きなギャルゲーは主人公が高校生で鈍感で純情で一途で年齢＝恋人いない暦と言う条件でなければならぬ

「ああー

うーん、まあ、それならうーん、納得できるかな」

達也は明からに納得していない

なぜなら達也は、ギャルゲーと言うものを馬鹿にしている節が見られる

あんな上手く行く訳ないし、あんな女の子がいる訳がないと思っ  
ているからである

それでも、亜紀がそう考えてギャルゲーをしてるんなら、まあいいかなと思っただのである

「後ね、お姉ちゃんに触った時に嫌がられても達也が嫌いって訳じゃないからね」

小夜は突然悲しそうになった

「どうゆう事？」

達也は不思議に思った

「お父さんにレイプされたのが、私が小6でお姉ちゃんが中2の時なんだけどね

まだ、男の人が怖いんだ」

「ああ、そうなんだ」

達也はそれしか言いようがなかった

「うん、だからね、男の人に触られたりするとダメなんだ」

と小夜に言われたが

「俺触った事あるけど」

と達也は疑問を程した

亜紀にデコピンをしたり秋葉原のホテルで亜紀の胸を偶然触った（これは達也がそう思っただけの可能性もある）事を言っているのだろう

「デコピンは触ったって言うのかな

それに達也がお姉ちゃんの胸を触ったって言う確証はあるの？」

デコピンは一瞬だけの場合もある  
それで触ったと言えるだろうかと言う事である

「ああ、横に亜紀がいたからそう思ったんだけど  
そう言われればそうかな」

確かに達也は柔らかいものを手で触ったが、それが亜紀の胸と言う  
確証はどこにもない

横に亜紀がいたからそう思っただけである

ホテルの枕はふかふかだったので、それを触ったのかもしれない  
しかしまた、枕を触ったと言う確証もない

達也は女の人の胸を触った事がないので（物心がついてから）、そ  
れが女の人の胸かどうか分からないと言う事もある

「まあ、そう言う事だから  
じゃあ、お姉ちゃんの部屋に戻るっか」

小夜がそう言ったので、二人は亜紀の部屋に戻った

亜紀の部屋に戻った達也は何か考えているのか、ずっとふさぎ込ん  
だままである

みゆきと達也とあおいは時間になったので、亜紀の家を出た  
あおいは達也達とは帰り道が反対だったので、今はみゆきと達也の  
二人である

「どうしたの？」

とみゆきは達也に聞いた

「へ？」

何が？」

達也は驚きながら聞いた

「深刻そうな顔してるから、何かあったのかなと思って」

「全然そんな事ないよ

大丈夫」

達也は無理に笑って見せた

「ならいいんだけど」

みゆきは変だなとは思ったが、達也にそう言われてしまっただけはどうしようもない

二人は家について夕食を食べた後、達也は自分の部屋に戻った

「はあー」

達也はため息をついた

そして、本棚から埃を被<sup>ほこ</sup>つた『強姦神話』と言う本を取り出した。達也がなぜこの本を買ったかと言うと、世間ではレイプや痴漢された時被害者に隙があったからだとか、露出が高い服装をしているからされたんだと言われるが、それは本当にそうなのかと思ったのである

しかし、買ったのは良いがなぜか読むのをためらわれた為一度も本棚から出されなかったのである

達也は『強姦神話』を開いて文章を読み始めた

世間に広く知れ渡っているレイプの認識には加害者を弁護して被害者に責任があるというような責任を転嫁している強姦神話が数多くある。

被害者が長年ずっと声をあげることができなかった為にこうした神話がまかり通ってきた。

今でもメディア、例えばそれが性犯罪事件を描いたものであっても、強姦神話を助長するような描き方をしている。

警察官や弁護士、裁判官文部省までこの神話を信じている。

そのために被害者が中々声をあげることができなかつたり、セカンドレイプでますます傷つくことになっている。

この本はそれは間違いだと言う為に書いたものである

1. (神話) 性的欲求不満が強姦の原因である。

(実態) 性的欲求不満は強姦の数多い原因の一つでしかない。レイプの動機は性的欲求ではなく力の誇示・支配である。

性欲があるからといって相手を無視した、暴力的な性行動にはではないはずである。

また、ほとんどの加害者にはレイプという手段に及ばなくても性行為のできる相手がいる。

「じゃあ、女にモテたりとか、カッコ良い奴でもレイプするって事なのかな」

達也はボソッと呟いた

2. (神話) レイプは性的欲求を爆発させた男性によって衝動的に行われる

(実態) 通報された強姦事件の四分の三は計画的なものである。ほとんどのレイプは計画的犯行である。

元々レイプをする気の無かつた人が相手を見て衝動的にレイプしたと主張するのは全体の1割前後しかない

3. (神話) 強姦は加害者が被害者に悩殺されたせいである。

(実態) 強姦は無防備な被害者を相手に行われる。  
多くのレイプは部分的、あるいは全体に渡って計画的に行われている  
挑発的な服装や言動が原因として起こるなら、レイプの多くが突発  
的に起きているはずである。

この迷信の問題は、責任を加害者でなく被害者に責任転嫁している  
ところにある。

被害者がどんな服装をしていたとしても、また、どんな行動を取っ  
ていたとしても、レイプが正当化されることは絶対にならない  
被害者にはなんの責任もないのである。

報告されたレイプ犯罪の内、被害者が挑発したと加害者が主張して  
いるのは、4%ほどにしかならない。

そしてその挑発のほとんどが特に何かをした訳ではなく、単に露出  
が高い服装をしていたというだけの事である

警察庁が性犯罪加害者544人に

「何故その人か」と調査したところ(複数回答あり)

1 番多かったのが(45%)被害者が警察に届け出ないと思ったから  
2 番目に多かったのは(10%)好みのタイプだったからである  
挑発的服装はたったの4%だった

4・(神話) NOと言わない限り性交しても構わない

(実態) 相手が心のおくからYESと言わない限り合意ではない  
恐怖の中でNOと言うのは並大抵の事ではない。

加害者の中にはしてる途中で濡れてきたから合意だと思ったと言う  
人までいた。

しかし、それは大きな間違いである。

恐怖にあつて言えないことを考えなくてはいけない。

被害者の方もNOと言わなかったからと言って自分を責める必要は  
全くない

暴力や脅迫がなくても、男性と二人つきりになったり、男性が迫ってきたら女性は恐怖を感じるものである。

その中でNOと言えるのは余程じゃなくては無理であろう

男性は自分の存在が例え何でもなくても、恐怖を与えるものだと自覚しなくてはいけない

あなたが要求して相手からの合意を得たからといっても、相手はあなたに恐怖心を抱いてYESと言ったかもしれないのである

「と言う事は嫌や嫌やも好きの内って事は間違いつて事だな濡れるのは防衛本能だと聞いた事があるな」

あそこが濡れるのは発情の時だけでなく、異物によってあそこを傷つける危険を最小限に留める時にも起きる。

つまりその気になんかなくなってなくても、傷を負わない為に体がその準備を整えると言う事である

「俺も神話に騙されてたな」

達也はそう言ってから、『強姦神話』をとじて、本棚にしまった

そして今度は『性暴力被害におけるPTSD』を取り出した

これも以前に買ってそのままほったらかしにしたままだったのである

達也は『性暴力被害におけるPTSD』を開いて文章を読み始めた

PTSD (Posttraumatic Stress Disorder) とは心的外傷後ストレス障害の事で、トラウマ(こころの傷のことをトラウマと言う)によって起こる

PTSDの原因となるトラウマは、死に直面するかまたは重傷を負



うような出来事や、自分や他人の身体が存在にかかわる危険な出来事によってなる。

阪神・淡路大震災や、地下鉄サリン事件などがその実例である。

そういう出来事の体験や目撃を原因として、いろいろな症状が続くのがPTSDで、思い出したくないのにそのトラウマを何回も思い出してしまうたり、それどころか白昼夢のようにまた同じ体験をしているように感じたりする。

逆にトラウマの一部をどうしても思い出せないと言う事もある  
不眠やイライラと言う症状もよく見られる。

「あの人は今でも忘れられないと言ってるからな」  
達也はぼそつと呟いた

あの人達とは、阪神・淡路大震災や、地下鉄サリン事件の被害にあつた人達の事だろう

そして、また読み始める

PTSDの発症と主要な症状と言うサブタイトルが書いてある  
症状とは、

「加害者の顔が浮かぶ」(視覚)

「押さえつけられた身体感覚が思い出され、布団がかけられない、時には痛む」(触感・圧痛感)

「言われた言葉が頭の中で響く」(聴覚)

「外に出ると被害にあいそうな恐怖感」(感情)

「外に出ない」などの回避症状、

反対に刺激とこころを切り離すことによって起きる

「感情がわからない」などの麻痺症状

「眠れない」

「イライラする」

「闇が恐い、電気を消せない」

「ちょっとしたことでもビクッとしてしまう」という過覚醒症状などは、ますますひどくなっていく。

性暴力を受けたという体験記憶は、あまりに強烈なので、いわゆる「外傷性記憶」と言う、その時の体験がそのまま凍りついたかのような記憶のネットワークが出来てしまったと考える事ができる  
性暴力特有の自己認知や感情や身体感覚

「私は悪い」

「私は汚い」

「私は生きていけない」など訂正不能の自己認知の変化にもなつて、罪悪感、恥辱感、孤立無援感、希死念慮（死にたいという気持ち）が強く現れることがある。

PTSDから回復する人もいるが、症状が出なくなっただけで、傷が癒えた訳ではない

また、一生症状と付き合っていかなければならない人も大勢いる

「結局、自分を救えるのは自分だけか」

まず救うとは何だろうか？

性暴力を受けて男性不信になったけど、好きな男の人ができて恋人になったら、それで救われたのだろうか？

そんな訳がない

いくら男の恋人が出来たとしても、症状が改善する訳でもないし、傷が癒える訳でもない

男の恋人がレイプした相手に見えて物やナイフを投げ付けたりして、恋人を傷付けた人も大勢いるのである

と言う事は、恋人が出来たぐらいでその人が救われる訳がない

他人はその人が救われる（救われると言い方はおかしいが）のを手

助けするだけで、救う事などできない  
その人が救われたと思わなければならないのである

しかし、  
「どうにかしたいよな」

例え、自分を救えるのは自分だけだとしても、人の為に何かしたい  
と思うのは当然だろう

「よし、あいつに電話しよう」

あいつとは亜紀の事だろう

そう言えば、達也は亜紀の家の電話番号を知らないのにどうやって  
かけるのだろうか？

達也はそう言って、2階の部屋から一階の居間へと降りて行った

そこにしか家の電話はないのである

達也は電話のあるボタンを押した

それは着信記録のボタンである

着信記録は何月何日何時何分と非通知でない限りかけていた人の電  
話番号が分かるのである

「多分これだな」

この前小夜がかけてきたときの時間から探し当てたのだろう

達也は携帯電話にその電話番号を登録した

そして、2階の自分の部屋に戻った

家の電話からかけると、両親に話しを聞かれる可能性があるからだ

部屋に戻って

「よし」

と意気込んでから、亜紀の家と思われる所に電話した

「はい」

しばらく経ってから女性が電話に出た

「俺麻倉達也って言うんですけど、そこに亜紀さんっていらっしやいますか？」

「亜紀は私ですけど」

その声は達也さんですよね？」

「ああ、そうだよ」

「何で家の電話番号分かったんですか？  
もしかして、達也さんってストーカーだから極秘に調べたんですか？」

「ちげえよ」

と達也は言っつて、着信記録の事を説明した

「なんーだ

達也さんがストーカーって思っちゃいましたよ

そう言えば、何の用ですか？

達也さんからかけてくる事なんて有り得ないと思ったのに」

亜紀は不思議に思ったようだ

「あ、あのさ」

達也はかなり緊張している

「はい」

一方亜紀はのほほんとした感じである

「二人の事身体目当てじゃないから」

二人とは亜紀と小夜の事である

「え？」

と亜紀が驚いたのと同じぐらいに

「じゃあ」

と達也は言って、電話を切った

「はあー」

俺何やってんだろう」

達也は携帯をほつりだして、大の字になって寝転だ

「何だよ

身体目当てじゃないって

意味分かんねえだろ」

言った本人が意味が分からないのなら、言われた方はもっと意味が分からないだろう

「こんな事しか言えない自分が情けないよ」  
そう呟いた達也であった

### 第23話：自分を救えるのは自分だけ（後書き）

このサイトにはないかもしれないけど、某サイトにはレイプされてとか、妊娠したと言う恋愛物が多いので、この話しはそんなんじゃないと言う事を示したくて書きましたあらずじに書いてある通り、何を伝えたい訳でもありません

俺の好きな作家が言っていたんですが、命とは何か？とか兄弟愛とか家族愛とかをテーマとして面白い物を作るなら良いが、自分はこの作品を通して平和の尊さを伝えたいんだと言ってかいた小説は小説じゃないと言ってました  
そんなプロパガンダは他でやれと言ってましたから

第24話：いぞ鎌倉（前書き）

これは1時間目の前から昼休みに起こった出来事である

8：20～13：20

## 第24話：いざ鎌倉

「おはよう、達也」

太一は朝っぱらからテンションが高い

「ああ、おはよう」

対して達也はテンションが驚く程低い

「俺いいもん買ったぜ

これ見るよ」

太一がそう言つて、手に持っていたのを見せた

それは携帯のストラップになりそうなくらい小さい土偶どぐわいだった

（土偶が分からない人は自分で調べましょう

自分で調べないで人にばかり聞くのは自分を成長させませんよ）

「こんなしょうもないの買ったのか？」

「しょうもなくなんかねえよ

これはモテモテ土偶君と言つてな、これを身につけているとモテモテになるんだつてよ」

何と言つネーミングセンスの無い名前なのだろう

「お前、馬鹿だろ

土偶でモテモテになんかなる訳ないだろ」

達也は呆れたような口調だ

「これはな、オーパーツと言つてな、かの有名なムー大陸から発見されたものなんだ



だから、土偶でもモテモテになれるんだよ」  
太一は気持ち悪いぐらいに力説している

「それ何円で買った？」

「5500円で

道端に並べて売ってたんでな」

「お前やっぱ馬鹿だろ

ムー大陸なんて存在しないんだからさ

もし存在したら、歴史的快拳なんだから、そんな安い値段で売らずに莫大な価格で博物館なり考古学者に売りつけるだろ」

「そんなー

じゃあ、これは偽物なのか？」

太一は椅子にへなへなともたれかかった

「当たり前だろ

と言うか本物なんてないと思うが

そんなんでモテモテになったら、皆買うだろうが」

達也の言葉を聞いて、太一は魂が抜けたようにぐったりとしている

「（こいつにあおいちゃんはもったないよな

でも、聞かないと亜紀に怒られるしな）」

達也は二つを天秤てんびんにかけている

「なあ、お前って妹系と付き合いたいと思うか？」

達也はそれとなく聞く

「当たり前だろ

俺は妹と結婚する会の会長なんだからな」

太一はがばつと起き上がった

「ああ、そうだったな

じゃあ、あおいちゃんはタイプなのか？」

達也はそれとなく聞いて見ると言った割りには、ストレートに聞いた

「あおいちゃんって水樹の友達の森山あおいちゃんの事か？」

「そうだよ」

「あの子だったら俺の彼女にはぴったりだな」

その言葉を聞いて、達也はお前はどんだけ自分に自信があるんだよとか、お前なんかあおいちゃんと全く釣り合わねえよと思ったが、

ぐつと抑えて

「じゃあ、告れば？」

と冷静に聞いた

「それはちよつと」

太一は小さい声で言った

「はあ？

何でだよ？」

達也は訝しげに聞いた

「俺とあおいちゃんは全然お互いの事を知らない訳だから  
まずは交換日記から始めないと」

「お前はいつの時代の人なんだ？  
確かに高校生で交換日記やっっているのもいるけど、それは女同士でやるんじゃない  
恋人で交換日記なんて今時珍しいぞ」

太一は机をバンと叩いた

「ばっか

俺をそこら辺の高校生と一緒にすんじゃないねえ  
俺はな清き正しい交際をしようとしてるんだよ」

「お前からそんな言葉が出ると思わなかったよ」

「校則に書いてあるだろ  
不純異性交遊はしてはいけないってな」

「うちの高校にそんな校則はない  
それに不純異性交遊って性行為をするって事じゃないのか？」

「違うな  
不純異性交遊って言うのはな、異性と付き合っちゃいけないって事だよ」

「それ10年くらい前の話しじゃないか？  
それに、もしお前の言う通りだとしたら、お前からカップルになれねえよ」  
と達也は当然の事を言った

「あ

そっか」

太一は今更気付いたらしい  
大きく口を開けてびっくりしている

「何かすげえシヨック

馬鹿に馬鹿って言われて」

達也は悲しみを漂よわせている

そうやって話していると先生が来たので、太一はじゃあなと言って  
自分の席へ戻って行った

1時間目の授業が終わって休み時間になったので、達也は亜紀のい  
るクラスへ向かおうとした

なぜ亜紀のクラスを知っているかと言うと、文化祭の時に何組とく  
むか分かるからだ

「ここか」

扉の上の板に1・6と書いてある

達也は外から亜紀がどこら辺にいるか探してから教室に入った

「よし」

達也は右手を上げながら言って、近くの椅子を拝借した

そこには亜紀の他にあおいと未来がいた

亜紀とあおいは自分の席の椅子に座っているが、未来はどこからか  
椅子を持ってきたようだ

「どうしたんですか？

もしかして、私に愛の告白を？」  
亜紀は目を輝かせている

「そんな事する訳ねえだろ  
あおいちゃんの話して来たんだよ」  
達也は冷たく言い放った

「どうでした？」  
未来が心配そうに聞いた  
もしかしたら、未来ちゃんは友達思いなのかもしれない

あおいもびくびくしながら答えを待っている

「清き正しい交際なら良いってさ」

達也の言葉を聞いて

「え？」  
三人とも同時に言った  
何言ってるのって感じである

それを察した達也は、さっきの太一との会話を三人に話した

「うわー  
凄い重い」  
未来は顔をしかめた

「あんなんからは想像できませんね」  
亜紀は馬鹿にしたように言った

「あんなん言うなよ」

「一応お前らの先輩なんだから」

「先輩だからってあんなんって言っちゃいけない事なんてありません  
それにあれの前ではちゃんと名前に先輩付けて呼ぶんで大丈夫です」  
亜紀は堂々と言った

あれとは山口太一の事である

「何が大丈夫か分かんないけど  
あおいちゃんは、本当に太一で良いの？」

「は、はい」

私は、その、そんな、山口先輩が好きですから  
あおいは顔を赤らめながら言った

達也は今時こんな子珍しいなと思って、

「（こんな良い子太一にはもったいないよな）」と心の中で呟いた

でも、

「じゃあ、交換日記から初めよつか  
余ってるノートとかある？」  
と言った

まあ、太一も変な奴ではあるが、悪い奴ではないからいいかなあと  
思ったのである

「すみません  
ないです」

とあおいは申し訳なさそうに言った

「いや大丈夫だよ  
持っていないと思っただけど、一応聞いただけだから」

「男って何でこうも、ぶりっ子が好きなんだろうね」  
未来ははあーあため息をついた

「そうそう」

その癖ぶりっ子なんか嫌いだけどって言うんだよね  
男って単純だからすぐ騙されてるのに、それに気付かないんだから  
亜紀は達也を見ながら言った

「あおいちゃんはぶりっ子じゃないだろう」  
達也はすぐに反論した

「もうそれが騙されてるんですよ  
だって、あおいトイレでタバコ吸いながら、学校なんてかったりー  
よって言っていましたから」

と未来が言ったら

「そ、そんな事してないし、言っていないよ」  
とあおいはおろおろしながら言った  
おろおろすると、やっているように見える

未来が友達思いと言うのは撤回しなければいけないかもしれない

「あのオヤジ生でいれた癖に、金まけようとするんだよ  
セコいオヤジだとも言ってました」  
亜紀はにやっとなりながら言った

「そ、そんな事してない」

とあおいは顔を真つ赤にしながら言った

顔を真つ赤にすると言う事は、あおいは意味が分かっているのだろうか？

それならば、純粹ではなく純情にランク（？）が下がってしまう

達也は二人をキッと睨みながら、

「お前らさ、何でそんなひどい事言うんだよ  
友達だろ？」

といらいらした声で言った

「冗談が通じない男はモテませんよ」  
亜紀はまだにやにやしている

「これは冗談の範囲に入るのか？」

達也は亜紀のにやにや顔が気に入らないのか、イライラ度を増している  
電流イライラ棒は越すのが難しかった

「だ、大丈夫です

い、いつも、こんな風にされてますから」

あおいは達也を落ち着かせようとした

しかし、それが大丈夫と言えるのだろうか？

「そう

ならいいんだけど」

と納得する達也

そこは大丈夫じゃないだとツッコむ所である



「（あれ、あおいちゃんはいつもこんな下ネタを二人に言われてるんだらうか？）」

あおいのちよつと可哀相じゃねえ的な立ち位置には納得して、その事は疑問に思ふ達也

未来が下ネタを好きだろうと嫌いだろうと、どっちでも良い問題は亜紀である

小夜が亜紀は下ネタは好きじゃないと言っていたしかし、今あおいはこのような状況はいつもの事だと言っていたと言ふ事は、亜紀は下ネタが好きとなってしまう

いや待てよと達也は思い直す

未来だけが下ネタを言っであおいをからかっているだけではないだろうかと

と言うかそう思いたいのであろうなぜなら、小夜に亜紀は達也を試す為の下ネタを言っているのだと言われたのである

だから、身体目当てじゃないと言ふ情けないやら恥ずかしい事を言ってしまったのである

もし、小夜の言ってる事が間違いなら、身体が漫画見たいにバラバラに砕け散ってしまうであろう

そう思ったので、

「あおいちゃんはいっつも二人に下ネタ言われるてるの？」  
と恐る恐る聞いて見た

すると、あおいは首を横に振って、

「未来はたまに言いますが、亜紀はそう言う事は言いません」

と途切れ途切れに言った

「女に言ったって詰まらないですしね  
近くに男がいたら、女に言って男の表情を確かめたりはしてますけどね

面白いですから」

と亜紀は何となしに言った

「そっか」

達也は安堵の声を出した

やはり、亜紀の言動からすると小夜の言う通り亜紀は下ネタが好きじゃないとか達也を試していると言うのは間違いではないかもしれない

これで、達也が身体目当てじゃないと言った事は無駄だったかもしれないけど無駄じゃないのである

「じゃあ、もうすぐチャイム鳴るからダメだけど、後で太一の所行  
こっか

やっぱこう言うのは自分で言った方が良いと思うから」

「ええー」

とあおいは顔をりんごのように真っ赤にした

「女なら当たって砕けないと」  
と未来はさも楽しそうに言った

「そう言えば、当たって砕けた人っているんですかね？」  
と亜紀は違う事に疑問を持ったようだ

「例え話しなんじゃないの？  
砕けるぐらい辛いとか」

達也がそう言うのと、  
キーンコーンカンコーン  
とチャイムが鳴った

「まあ、授業中ゆっくり考えといて  
また後で来るから」

そう言っただ達也は自分の教室へと戻って行った

教室に戻ると先生がいて遅いぞと言われたので、すいませんと微塵  
にも思っただない事を言っただ、自分の席に着いた

達也は2時間目の授業が終わったので、あおいの所に行こうと思っ  
たが、あの調子だとまだ心の準備が出来てないから次の休み時間で  
良いかと思っただ、ボーっとしていると、

「なあ、お前さっきの時間どこへ行ってたんだ」  
と太一が聞いてきた

「それは秘密だ」  
まあ、お前に良い事をしてやろうと思っただな

「俺はゲイじゃないぞ」  
太一は真剣にそう言っただ

「一回お前の思考回路がどうなってるか見てみたいね

と言つた、そう言つて意味じゃないから  
達也は呆れながら言った

「じゃあ、どう言つて意味なんだよ？」

「それは見てのお楽しみだな」  
と達也はもったいぶつた言い方をした

たわいもない話しをしていると、チャイムがなつたので太一は何があるんだろつと顔をしながら自分の席へ戻つて行つた

「（やっぱり止めようかな）」

太一にはあおいはもつたいたいと言つた、性格の不一致から付き合いつてもすぐ別れるんじゃないかと思つた訳である

恋人として付き合い合つと言つ事は好きだけじゃ駄目なような気がするのである

お互いの時間も合わず、話も合わず、趣味も合わずだと駄目なような気がする

達也はそう思つたのである

「（まあ、その時はその時か）」

何度も言つたが、太一は性格的にも悪い奴じゃないし、女の子にひどい事をする様な最低な奴でもない

だから、お互いが好き同士なら良いかなと思つたのである

そう思つてから、達也は数学自体は面白いのかもしれないが、つまらない授業をしている先生の声を遠くに聞きながら夢の世界へと旅立つたのである

「ふあー」

と言いながら、椅子に座りながら大きく背伸びする  
変な態勢で眠っていた為か、首を寝違えたようで少し痛い

「やっぱり寝るんだったら、保健室だな」

そう思つて辺りを見回すと、教室には誰もいない

そして誰もいなくなつた

by アガサ・クリステイ

「あれ？」

おかしいなと思つて黒板の左横に壁に貼つてある授業時間割表を見ても、

「今国語じゃないの？」

確かに4時間目は国語と書いてある

おかしいなと思つて教室全体を見回すと、後ろの黒板（達也の学校の教室には、教壇の後ろと1番後ろ席の壁の所に一つずつ黒板がある）を見ると、

国語の授業は図書室でやりまーすと書いてあつた

「うそー」

と言いたくなるのも無理はない

普通は前の黒板に書くだろう

達也は何だよと悪態をついた

そして、全速力で走るとかと思つたが、教室の前の方へゆっくり歩  
きながら黒板の右横にかけてある鍵をとつて教室を出た

「ったく

誰か起こせよな」

そう文句を言いながら、教室を閉めて鍵をかける

いまさら走つても無駄と思ったのか、ゆらゆらと歩きながら図書室へと向かった

案の定、先生に遅いぞと怒られた

表面上はすいませんと謝りながら太一がいる方向に向かって行って太一の左に座った

「何で起こしくれなかったんだよ」

と達也は太一に小声で聞く

「起こそうとしたけど、後5分と言つべたな事言ったから、置いてつたんだよ」

とこちらも小声で言った

「ってか何で図書室何だよ？」

ともつともな事を言う達也

「好きな本を読んで、あらすじや背景やらこの本は何を伝えたいのかとか考えて書くらしいよ  
読解力がつくとか何とかで」

「ふーん」

自分で聞いた癖に興味がなさそうである

その後は太一が漫画も本ですと言ったら先生がじゃあ今日欠席にし

た事にしようと言われたので、しびしび漫画を戻の場所に帰しに言ったりと有り触れた事件が起こって、今は昼飯を食べている最中である

「なあ、良い事って何だよ？」

「まあ、そう焦るなって

この昼休みには分かるからさ」

「まさか、風俗に連れてつてくれるとか」

「そんなのは自分で行け

お前はいい加減エロい事から離れろ」

「男は皆エロいんだよ」

と太一は無駄にカツコ良く言った

「俺も一応男だから、エロい事に全く興味がない訳じゃないけど、お前見たいにエロい方向にはいかないな」

「それはお前が異常だからだ」

さもお前は男とじゃないと言わんばかりである

達也は太一を見てはあーとため息をついて

「焼却炉に行つて、そこで待ってる

そしたら何か起こるから」

と言つて、あおいがいる教室へと向かった

達也は今あおいの教室へ向かっている

「（まあ、あいつもあおいちゃんにはエロい事言わないだろ）」

太一は女の子と喋るのが苦手だから、エロい事は言わないだろう  
なぜ言つて欲しくないかと言つと、あおいちゃんにはいつまでも純  
粋でいてほしいと言つ達也の完璧なるエゴからである  
しかし、下ネタを聞いて真っ赤にすると言つ事から、その願いはす  
でに打ちすてられたが

しかし純潔と言つのは失つて欲しくないのである

「（しかし、つくづく俺は焼却炉に縁があるよな）」  
達也は前世で焼却炉と関係でもあつたのだろうか

そうやって考えているとあおいがいる教室に着いて中へと入ってい  
った

「心の準備はできた？」  
と達也はあおいに聞いた

「は、はい  
だ、大丈夫です」

「じゃあ、行こっか？」

「フアイト」

と無駄に元気な亜紀と未来はあおいを応援した

う、うんとあおいは頷きながら、達也と一緒に太一のいる焼却炉へ  
と向かつて行つた

ついに焼却炉にいる太一が見える所まで来てしまったと言つ顔をす



るあおい

あおいは二、三回深呼吸してから太一の所へと向かって行った

そんなに緊張する事かよと思いつながら後に続く達也

「あ、あれ？」

何で森山さんがいるの？」

と驚く太一

「用事があるのがあおいちゃんだからだよ

わざわざ俺がこんな所に呼び出す訳ないだろ」

「いや、何か危ない物くれるのかなと思って」

「危ない物って何だよ

核兵器の作動させるボタンとかか？

……まあ、そんな事はどうでも良い

あおいちゃんから話があるんだよ」

「は、はい

あ、あの、こ、交換日記しませんか？」

あおいに言われて

「え？」

と驚く太一

まあ、無理もない

いきなり交換日記しませんかと言われて驚かない人間はそういない  
だろう

この二人では埒があかないと思ったのか、

「あおいちゃんはさ、太一の事が好きなんだよ  
お前もあおいちゃんも異性と喋る事になれてないから、交換日記か  
らの方がいいんじゃないかなと思ってさ

それにお前もまずは交換日記からと言ってたし  
とフォローした

「え？

俺の事好き？

え？」

太一は状況把握ができないようである

モテない男によくある事だ

「ああ

な？」

と達也があおいに確認すると、

「は、はい

す、好きです」

と恥じらう乙女

「だろ」

と言って太一を納得させようとした

「マジで？

達也のいたずらなんじゃないの？

それが藍沢とか

……もしかして、水樹の仕業か」

一応言っておくと、藍沢とは藍沢炎夏の事であり、水樹とは水樹亜紀の事である

「お前本当馬鹿だろ

確かに俺はいたずらは好きだが、こんないたずらはしねえよ  
炎夏や亜紀も同じだよ

それにあおいちゃんがそんな事了承する訳ないじゃん」

達也は最初からめんどくさかったが、(一応)友達の太一と妹的なあおいの為にこの役にかけて出たのだが、太一のこの態度によってどうでもよくなってきた

「わ、私は、本当に、山口先輩の事が、す、好きなんです」

凄く恥ずかしいはずなのに、自分の想いを精一杯伝えようとするけなげさに達也はあおいを抱きしめたい衝動にかられたが  
それを見ると、犯罪行為にあたるんじゃないかと思ってやめたのである

まあ、この時点で変態じみてる気はするが

「お前はさ、ここまで言われてまだいたずらだと思ってるのか？」  
いらいらしながら聞いた

「そ、それは  
違うと思う」

やっと、あおいの想いに気付いたのか、あおいと同様に顔を赤らめる太一

「じゃあ、その返事はどうなんだよ？」

と聞きながら、何か俺が告白してるみたいじゃんと思う達也

やはり、告白と言うものは、自分で最後までしなければならぬと思いついながらも、ついつい手助けしてしまうのである

「そ、そりゃあ

も、もちろん、あおいちゃんの事好きだよ」

「じゃあ、いいじゃん」

しかし、太一はいつあおいの事を好きになつたんだろうか？

あおいには一応好きになつた理由があるが、太一にはあまり理由が見受けられない

髪飾りを拾つた時に一目惚れでもしたのだろうか

「わ、私じゃダメですか？」

涙目になりながら聞いた

もしこれで太一がNOと言つたら、半殺しにしてやると思つ達也

「お、俺で良ければ」

「良かったな」

達也は良かったとは全く思つてない声で言った

一連の事でもう本当にどうでも良くなつたのだろうか

「じゃあ、二人で教室まで帰れば

予行演習見たいな感じで」

達也は自分で言っておきながら、予行演習ってなんだよと思つた

あおいと太一は見つめ合って、それから教室へ歩いて行った

「あの二人大丈夫なのか？」

二人は、全く喋ってないようだし（口が開いてないので）、物理的な距離もだいぶ離れていて、これを見て二人が恋人同士だとは思わないだろう

「大丈夫なんじゃないですか？」

少女らしき声が聞こえた

「うわっ

何でお前からここにいるんだよ」

と達也はびっくりした声で言った

振り返ると、亜紀と未来がいた

「だって、こんな楽しい事私達が逃すはずないですよ」と笑いながら言った未来

「お前ら、それ人としてどうかと思うぞ」

「私は心配で来たんです

未来と一緒にしないで下さい」

「麻倉先輩の前だからってぶりっ子しないでよ」

未来がそう言うと、自分だってぶりっ子の癖にと言り返す亜紀

それを聞いて、お前らのどこがぶりっ子なんだよと疑問を持つ達也

「達也さん知ってます  
未来に好きな人いるんですけど、その人の前では猫被ってるんです  
よ」

「そんな事言ったら、亜紀だって麻倉先輩が好きな癖に、あの人力  
ツコ良いよねって言うじゃん」

低レベルと言うか不毛な闘いである

「それとこれとは別  
ジャーズ見たいに憧れの人って言うだけで、恋愛感情は持ってな  
い」

「まあ、別にどっちでもいいけど」  
と達也は興味なく言ったが、一つだけ思った事がある

女って怖いなと

第25話：事実は小説よりも奇なり（前書き）

この小説は嘘のようなのが実話で、実話のようなのが嘘で、  
実話の  
ようなのが実話とどれが実話かは分かりません

## 第25話：事実は小説よりも奇なり

「学校の七不思議探しません？」

亜紀は突然不可思議な事を言った

「七不思議探して知ったら死ぬんじゃないか？」

達也は怪訝な顔をした

「じゃあ、六個まで探すとか」

「六個まで探す意味が分からないし、六個まで探すという偶然に七個目見つけちゃったら死ぬじゃん」

そうである

授業に三回までなら休んで良いと言われて三回さぼった時、四回目高熱が出て休んでしまつて単位が取れない事だつてあるのである  
だから、授業にはぎりぎりまで休むんじゃないかと、毎回出た方が良いのである

「そんな危険をさけてちゃ何もできませんよ」

「六個まで探すという止めるつて言う方が危険をさけると思ふけどな」

「だから、七個全部探して死ぬかどうか確かめましょう」

「俺はこんな若い身空で死に急ぎたくはないな」



「それは達也さんが苦しいと思ってなくて、幸せだからですよ」

「意味合いが違うと思う」

それは自殺の話であって、わざわざ呪いとかで殺されに行くのは違うと思う」

達也は苦笑いである

「とか何とか言って、本当は怖いでしょう  
だから一々否定するんですよ」

「ファイナルアンサー？」

炎夏はどこからかやって来た

「うーん

テレフォン使います」

「テレフォンって誰に電話するんだよ」

達也がすかさず突っ込む

「達也さんで」

「俺？」

普通本人にしないよ」

「もしもし

そこに誰がいますか？」

炎夏が手をグーにして耳にあてた

「え？」

電話してる設定なの？

しかも俺って分かってるじゃん」

「これから亜紀さんが質問しますので、30秒以内に答えて下さい」

「達也さんが学校の七不思議を探索する事を一々否定するのはなぜでしょう？」

a・怖いから

b・びびりだから

c・小心者だから

d・ヘタレだから

さあどれ？」

「言葉は違うけど、意味はほとんど同じじゃん」

「終了」

炎夏はそう言っつて、電話を切った振りをした

「うーん

じゃあ、50/50使います」

亜紀は悩みながら言った

「どれ消したって一緒でしょ」

「コンピュータが二個選択肢を消します  
テンレン

おおつと

cとdが消えました」

「aとb完璧意味同じだよ」

さつきから一々達也は突っ込んでいるがことごとく無視されている

「うーん

悩みますね

じゃあ、オーディエンス使います」

「これで全てを使ってしまった」

炎夏はどこぞのサッカー解説者のように熱い

「どうやってオーディエンスするんだよ」

「今コンピュータに集計結果が出ました

aが51%でbが49%とチョコレートケーキを食べながら、オレ  
ンジジュースを飲むぐらい微妙だよ」

あるサッカーの解説者と同じように時間が経つとうざくなってきた

「意味分かんねえよ」

無視されながらも一々突っ込むとは、なかなか律儀な男である

「じゃあ、bで」

「ファイナルアンサー？」

炎夏はさっきのテンションから一転して重々しい口調に変わった

「ファイナルアンサー」

亜紀がそう言うのと、ギネスブックに載った司会者ばりに凄い間を作っている

まだなお亜紀の顔をじーっと見ている

「正解

賞品は達也との一日デート権です」

「え？

本当ですか？

凄い嬉しいんですけど」

「勝手に俺の日常を売らないでくれ」

「いつにしようかな？」

亜紀は嬉しそうに悩んでいる

「え？

もうデートは決定なの？

俺に拒否権はないの？」

「被告人が裁判員裁判を拒否できないように、達也にも拒否権はありません」

なぜか炎夏はそう断言した

「人権侵害で訴えるぞ」

「そんな事したら、最強の弁護士を雇って、社会的に抹殺してあげますよ」

と亜紀が言った

「そんな弁護士を雇う金がどこにあるんだよ

お前は政治家か金持ちの娘かよ」

「そんな事しなかったた大丈夫だって

ちよつと噂流せば、すぐ社会的に抹殺できるから」

炎夏は平然と言った

「あつ

そうですね」

「いや納得しちゃうダメだからね

それ犯罪行為だからね」

「黒板に達也さんのない事やない事書きますか？」

「いやいや

ない事やない事って？

普通ある事ない事じゃない？」

指摘する所が間違っている

「それだと誰が書いたか分かるんじゃない？」

「違う教室に書きに行けばいいんじゃないですか？  
誰もいない時に」

意外と計画的である

「手紙ばらまいた方が皆にしれ渡るんじゃない？」

「でもばらまくんだったら、コピー代がかかるじゃないですか？  
お金をかけずに抹殺したいですから」

「凄いせこいぞ、それ」

せこくなかったら、良いのだろうか？

「生徒会室にコピー機あるから、それ使えばいいんじゃない？」

「ああ

そうですね

でも何枚ぐらい刷ればいいんですかね？」

「うーん

50枚ぐらいでいいんじゃない？」

その手紙を友達とかに見せると思っから」

「合成写真とかも作りましょっか？」

「お前そんな技術持つてるのかよ」

合成写真はちょっとしたぐらいなら、初心者でもできるが、ある程

度以上をしようとする、それ相応の技術が必要だ

「でもどう言うの作る？」

「やっぱり面白いのがいいよね？」

「絶対いじめだよ、それ

マスコミに訴えたるか？」

「何で学校じゃなくてマスコミなんですか？」

亜紀は首を傾げながら聞いた

「わあー、やっと話しかけてくれたよ

こんなに無視されるのが辛いとは思わなかったよ」

達也は苦笑いをしながら半ば棒読みで言った

マ　ーテレサイわく、愛の反対は憎しみではなく、無関心だそうだ

「いつまで言うのか見てて面白かったよ」

「うん

お前は最低だ」

「だから、なんで学校じゃなくてマスコミなんですか？」

三人は話しが噛み合っているようで噛み合っていない

「学校や教育委員会にいたって揉み消されるかもしれないだろ  
教師に言ったって無駄だからな

マスコミは全盛期は過ぎたが、まだ学校のいじめに対しては敏感だからな

マスコミに言った方がいじめが世間に知れ渡る可能性が高い」

「でもそう言うのって後で仕返しくらうんじゃない？」

「その為に社会的に抹殺するんですよ」

そして、いじめをしたのを自殺に追い込む」

「それって殺人だろ」

「いじめをした奴なんか死んでいいですよ」

「確かにそんなのは死んでもいいのかもしれないけど、もし殺したら警察に捕まるよ」

そんなの奴の為に捕まるなんて馬鹿らしいだろ」

「警察にはれなきゃ良いんだよ」

「そんな警察は甘くないと思うがな」

殺人の検挙率は戦後から現在まで90%を超えているつまり、人を殺せば、ほぼ確実に捕まると言う事だ

「達也さんってびびりなんですか？」

「何か話しがずっと前に戻った」

……はあ、お前と話すと疲れるわ」  
達也はため息をついた

話しがころころ変わるので着いていけないのだろう



「達也って凄いびりだよ  
だって、お化け屋敷に二人で入った時、幽霊の格好した人が出て来たら、びっくりして先に走って行っちゃったから」  
炎夏は楽しそうに言った

「女の子を置いていくなんて最低です」

「しょうがねえだろ

怖いもんは怖いんだから

それに大丈夫だ

炎夏なら幽霊だって倒せるから」

「幽霊って肉体ないんだから、倒せないと思うけど」

「大丈夫

炎夏は霊力持っているから」

「え？

霊 とか撃てるんですか？」

「私は漫画の登場人物じゃないし  
それに選ぶのが古い」

「精神統一すればできるんじゃない？」

「ああー

大昔の信者とかが神を見たり神の声を聞いたって言うのは麻薬見たいなの吸ったり、厳しい修行をし過ぎて聞こえるようになるらしいですよ

要は幻覚って事ですね」

「微妙に話しがずれてるよ」

炎夏はそう言った

「話しがずれてるのはいつもの事ですから大丈夫です」

「大丈夫がどうかは知らないが、確かに話しがずれるのはいつもの事だな」

「物事は色んな所から攻めないと」

「使い方間違ってると思うよ」

炎夏はそう指摘した

「使い方なんてその時代事が変わるんですよ

全然を肯定で使っていた時代もあるんですから」

今の若者は普通に使っているが

「あ、もうすぐチャイム鳴りますから行きますね」

そう言っただけで亜紀は教室を出て行った

「あいつに口で勝てないと思うな」

「それは男の場合でしょ

私なら勝てる」

炎夏は手を堅く握りしめながら言った

「まあ、確かに男より女性の方が口がたつけどさ」

基本的に言えば、男より女性の方が口がたつ傾向にある

そうすると、男は女に口で勝てないので、暴力を振るう

「さっきは様子見だったけど、次からはそうはいかないんだからね」

ここにいない亜紀に向かって宣言した炎夏

そう宣言すると、炎夏は自分の席へと戻って行った

「お前は例外だと思っけどな」

基本的には女の方が口がたつが、炎夏は口より先に手が出るタイプだから、男とそうたいして変わりはない

キンコーンカーンコーン

キンコーンカーンコーン

とチャイムが鳴った

先生が来たのかと思ったたら、太一は教室の外からきよるきよると教室の中を見回している

何をしているのか分からないが、太一はほっとしたようで、自分の席へと向かった

「あいつは何やってるんだ？」

達也は呆れた顔をしながら、小声で呟いた

「（そっか

亜紀がいなかどうか確かめたんだな）」

太一は泣かされたせいかわ、亜紀が凄く苦手らしい

前に亜紀に立ち向かうとか何とか言っていたが、文化祭の準備などで会う場合は仕方ないが、それ以外は何とか亜紀と会わないようにしている様である

「（しっかし、あいつは亜紀が来る時間どこに行ってるのかねあいつ俺以外に友達いねえしなこれぞ学校の七不思議ってか）」

気の聞いた台詞を思いついたつもりなのだろうが、何にも面白くない達也

「（そう言えば、あいつ、あおいちゃんとどうなったんだろう？授業終わったら聞いて見るか）」

授業は歴史だったので、真面目に聞いた達也

授業が終わると、（亜紀がいない時の）いつものように太一が達也の所までやって来た

太一が来たので、達也は

「なあ、太一ってさ、あおいちゃんとあれからどうなってるの？」と聞いた

「俺とあおいちゃんはラブラブだぜ」

達也は明らかに顔をしかめて、吐く振りをした

「気持ち悪い事言つのやめてくれない？」

「ラブラブのどこがいけないんだよ」

「別に言いけど、お前が言つと気持ち悪い」

「お前それ差別だぞ」

差別はだめだよと小学校で教わらなかつたか？」

「差別はだめだよと言っている奴が差別している事ってあるよな？」

「話しがずれてるぞ」

「いつもの事だから気にするな」

達也はそう言ってから、ふと思った

「（俺、何が聞きたかつたんだっただけ？）」

ちよつとの間をあけてから、思い出したようで

「太一とあおいちゃんってさ、交換日記してるんじゃないか？  
それ見してくれない？」

「いいぜ」

太一はそう言つて、自分の席へと向かつて、自分の机をぐそぐそと  
漁つた

やっと見つかったらしく、ノートを持って戻ってきた

達也は太一からノートを貸して貰うと、そのノートを開いた

そこには

月 日

森山あおい

- 1 時間目：理科総合A 仕事と熱
- 2 時間目：体育 サッカー
- 3 時間目：オーラルコミュニケーション ALTの先生と会話
- 4 時間目：現代社会 需要と供給
- 5 時間目：美術 自由に絵を描く
- 6 時間目：国語総合 走れメロス

と、絵とかも何にもなく、色ペンなども使わずにシャーペンで書かれていた

次のページには太一が書いているが、同じような事が書いてあった次のにも今度はあおいであるが、これまた同じような事が書いてあった

「これ、交換日記じゃなくて、日誌じゃん」

自分のコメントなどを入れてたら、交換日記に見えなくもないが、これでは学級日誌に見られても仕方がないだろう  
欠席者も書いてあれば完璧な学級日誌である

「え？」

交換日記ってこんなんじゃないの？」

「今日何々があつてこうだったよとか、あの先生うざいよねとかし  
ようもない事を書くのが交換日記だと思うが」

「え？そうなの？」

あおいちゃんが書いてるから、そうなのかと思ったんだけど」

「あの子も交換日記って書いた事ないんじゃないか？」

「ああ、携帯も持ってないしな」

「携帯持っていないからと言って交換日記をしない意味が分からないむしろ逆じゃないか？」

「そこには崇高な理念があるから気にすんな」

「お前がそんな難しい言葉知ってた事に驚いたよ」

「馬鹿にすんなよ」

愚公移山って言う四字熟語だって知ってるんだぜ」

「意味は？」

意味が分からなきゃ熟語知っても意味ないぜ」

この意味には二重の意味が含まれているようだ

「馬鹿が山を移す？」

「まあ、間違いではないが、当たり前ではないな

何か疲れたからさ、話し元に戻すけど

交換日記の書き方分かったんだから、今からあおいちゃんの教室に行って交換日記の仕方言いにいけば？」

この言葉に自分はいかないと言う意思が表れている

「それは駄目だ

水樹がいるからな」

「はあ？」

お前まだ亜紀の事怖がってるのかよ？」

「しょうがないだろ

怖いもん怖いんだから」

どこかで聞いたセリフである

「まあ、別にいいけどさ

じゃあ、どうやって日記交換してるんだ？」

「それは、昼休みに焼却炉で会って交換してるんだよ  
天才的なひらめきだろ？」

「ただの馬鹿じゃん

なんでわざわざそんなめんどい事するんだよ  
廊下とかで渡せばいいだろ」

「あおいちゃんが恥ずかしいって言ったからだよ」

「ああ

そりゃ、お前と付き合ってるって言うのが分かったら、恥ずかし  
いわな」

「お前本当に友達かよ

普通に友達にそんな事言うか？」

「友達には言わんが、親友には言うよ」



「そっか

親友だから、そんな事言うのか  
納得したよ

……って、おい

親友でもおかしいだろ」

「微妙なノリツコミだな」

「うるせえよ

別にいいだろ

芸人じゃないんだから

ああ、もうまた話しがずれた

あおいちゃんが恥ずかしいって言ったのは、俺と付き合ってる事じやなくて、冷やかされたりするから恥ずかしいって事だよ

義理子ヨコは教室で渡すけど、本命は隠れて渡すのと一緒だよ」

「義理子ヨコさえ一度も貰った事がない奴に言われても説得力がない」

「うるせえよ

言いんだよ

そう言うもんだと納得すれば」

「すげえ強引」

「うるせえよ

女の子にはちよっと強引な方がいいんだよ」

「ちよっとだろ

お前はちよつとを外れてると思う  
それにお前に強引さはないと思う」

「それなら、さっき言った達也の言葉が嘘になるぜ」

「訂正しよう」

お前は特殊な事に対しては強引な理論を持っているが、女の子に対して1ミリでも強引にはなれないと言う事だ」

「それなら納得しよう」

随分潔い奴だ

「だろ？」

あれ？

俺達何について話してんだっけ？」

「俺も分からんくなって来た

だって話しがどんどんずれてくからさ」

「思い出した

お前が今から交換日記の説明にあおいちゃんの教室に行くんだっ  
たな」

「絶対亜紀がいる限りいかねえよ」

面倒くせえ奴と思う達也

こいつは何言っても無駄だなと思ったのか、達也は席から立ち上  
って違う人の席に座っている太一の前に立った

「な、何だよ」

ちょっとひびつている太一

「おりゃ」

達也は太一の（男の）急所を正面から蹴った

太一はうっと唸って、ボタンと倒れた

達也は一步下がっていたので、ぶつからなかった

「本当は下から蹴る方が効果的なんだけど、座ってるからしょうがねえ」

「no、……no more war」

（もう戦争は嫌だ）  
と途切れ途切れに呟いた

「おおー」

今日は新発見の連続だな

お前がそんな言葉知ってるなんてな」

「知ってるよ」

鑑真が言ってたんだろ？」

太一はまだ痛いのか顔をしかめているが、話せるようにはなっただよ

「それって、もしかしてマトマ・ガンジーの事言いたいのか？」

「おおー」

それぞれ」

「鑑真とマハ マ・ガンジーは違うよ

まず、時代が違うし、鑑真は唐から来た僧で、マハトマ・ガンジーは非暴力・不服従で独立運動をした人だよ」

「でも、マ トマ・ガンジーが言っていた事は確かだろ？」

「マハトマ・ガンジーとずっと一緒にいた訳じゃないから分からないけど、ガンジーは言っていないと思うよ

その言葉が日本に広まったのって、ガンジーが死んだ後でしょ」

「あの め

嘘教えたな」

には先生のあだ名を 御自由に入れて下さい

「いや

ただ単にお前が聞き間違えたただけだろ」

「それでもいいんだ

俺は雨にも風にも負けないぜ」

「前から変だったけど、より変になったな」

かわいそうな奴と上から目線で見た達也であった

第26話・恋愛感情の欠如（前書き）

この小説は一体何なんでしょうね

## 第26話：恋愛感情の欠如

「達也さん

これ読んで下さい」

亜紀は教室に入って来て達也に近付くなりそう言った

「これ？」

と言って、達也は亜紀の持っているのを見ると、それは本だった

しかも達也が大嫌いな絵が表紙のライトノベルだった

「やだ」

達也は絵が目に入った瞬間に拒否した

「何ですか？

面白いのに」

「なんかもう美少女ゲームに出てきますよって言う絵が嫌だから」

「何ですか

可愛いじゃないですか」

「現実でそんなに目が大きい人間がいたら、化け物だ」

「はあー」

亜紀は大袈裟と言える程大きいため息をついた

「達也さんは何も分かってない  
何も分かってないよ」

そう二回も同じ事を長　　みに言われてしまった山　　久はシヨ  
ツクを受ける

これでは過去に戻ってきた意味がない  
思うんですけど、何でさっさと告白しないんですかね？」

「場所とか雰囲気とかにこだわってるからじゃない？」

いきなり話しが変わったのに、ついていける達也は凄  
もう慣れてしまったのだろうか？  
だとしたら、慣れとは怖い物だ

「それがダメなんですよ  
だって、場所とか雰囲気にこだわってたらいつも経っても告白で  
きませんよ  
好きなら好きとすぐ言わないと」

「そんな事言ったら、あのドラマ一回で終わるだろ。  
それにお前ならできるかもしれないが、できない奴なんて大勢い  
る」

「あれ？  
私何話そうとしてたんですか？」

「その絵を化け物と言ったら、何も分かってないって言われたけど」  
また話しが変わった  
それでもめげずに亜紀に教える達也

「ああ、そうでした  
達也さんは何も分かっています  
ですから、私がみっちり教えてあげます」

「いえ、結構です  
遠慮しますます」

「そうですね  
まず、リアルとリアリティについて話しましょう」

「（誰かこいつを止めれる奴いないのか）  
慣れたと言うより諦めていたようだ

「リアルとリアリティは違いますが、どう違うか分かりますか？」  
「リアルは形容詞でリアリティは名詞？」

「馬鹿ですか」

「いや、だってそうでしょ」

「元々の英語と日本で使われているのでは全然違う場合があるでしょ」

「確かに和製英語って、元の英語と全然意味違う事あるけどさ」

もし英語圏でマンションに住んでるなんて言ったら、金持ちか有名な人かと思われます

もしかしたら、拉致られて身代金を要求されるかもしれません



英語のマンションは大邸宅と言う意味ですからね

「日本で言われるリアルとは現実で、リアリティは現実的と言う意味なんです」

「で、どう違うんでしょうか？」  
なぜか敬語になる達也

「例えばです

現実で、はうとかふえと言う女の子がいますか？」

「いないね

もしいたとしても、いらつときて殴ってるね」

「そう、現実ではいくら美少女だったとしても、うざがられるに決まっています

しかし、小説では違います

浮いていたりしていても、少なくとも男にはうざがられたりはしません

何故このような違いがでるんでしょうか？」

「いや、俺に聞かれても」

「それは小説、特にライトノベルでは、願望やありえない事を基本としているからです。

魔法やファンタジーを望むから、SF小説や異世界物が売れるんですつまりリアリティとは、空想の世界を現実だと思わせるもつともらしさの事を言うんです

そしてライトノベルでは、リアルとリアリティが大きく離れていきます」

「ああー」

だから、俺ライトノベル嫌いなんだ」

「達也さん」

魔法や異世界物好きって言ってましたよね？」

「ああ、好きだよ」

それがどうした？」

「それだって、リアルとリアリティは掛け離れてるでしょ」

「あれはいいんだよ」

俺が嫌いなのは、その絵と出てくる女が嫌いなもの」

「そんな事言ったら、最近の漫画でもこう言う絵はありますし、全てのライトノベルに変な女の子が出てくる訳じゃありません」

「ええー」

太一が持ってたのとか、お前に前買わされた奴読んだけど、こう言う嫌悪感を持つ絵で痛い女の子の奴だったけどな」

「それは不本意ですけど、山口先輩と私がそう言うのが好きなので」

これは言うのやめよっかなと思ったけど、言いますね」

「何だよ？」

達也は怪訝な顔をした

「達也さんが思っている理想の女性なんか、小説や漫画にしかいません」

達也の好きなタイプは散々言われているが、今一度言つと、黒髪で髪のは長さは目が隠れるぐらいで、眼鏡をかけている。そして、制服のスカートを短くしたり、加工してない買ったままの長さで、性格は気の強い子がタイプなのである。

「別に言いんだよ、それはなぜなら、理想の国が存在しないように、理想の人間なんか存在しないからな」

今まで様々な国が理想の国だと言われて来たが、それは後になって幻想だったと思わせられるのである。

長所がない国も存在しない様に、短所がない国も存在しないのである。

それと同じ様に理想の人間など存在しない。端から見ていれば完璧に見えるのでも、友達になって見たり、恋人として付き合つて見たりすると短所が見えてくるのはよくある事である。

人間は不完全なのである。もし長所だけの人間がいたら、そいつは人間ではない。

「それにさ、もし恋人にしたい理想の人がいたからって、その人と付き合いたいとは限らないだろ？」

理想と正反対なのを好きになる場合だつてあるんだし」

ジャーズ大好きな人がジーズと付きたいと思うとは限らないのである。

「ああー」

確かに達也さんは私の理想とは掛け離れてますからね。

まあ、可愛い系と言うのは合ってるんですけど」

「やな所だけ合ってるんだな  
ちなみにお前の恋人にしたい理想の人ってどんなんだよ？」

達也はほんの少し興味があるようだ

「私のですか？」

私は、さっき言った通り、まず第1に可愛い系の人で、次に優しく、頭がよくて、運動神経が良くて、私が危機の時はさっそうと駆け付けてくれる人が良いです」

「そんな人間いねえよ

いたら逆に気持ち悪いよ

しかも最後のはどっかのヒーローみたいだし」

「さつき達也さん、理想の人間なんて存在しないって言ったんだから、別に良いじゃないですか」

「別に良いけど、それだとさっきの言いくるめようとした事が無駄になると思うが

あれ切り札っぽかったし」

「あれは本当の切り札じゃありません

切り札をつかってそれを相手が潰して余裕ぶってる時に出すのが、  
真の切り札です」

余裕とか優越感に浸ってる時はちよつとした事に動揺するのだ

「ほおー

「じゃあ、真の切り札とやらを見せてもらおうか？」

「これです」

亜紀が見せたのは、ハサミが何かで切った札であった

「何これ？」

「切った札、切り札

これぞ真の切り札です」

「しょうもな

お前ゲ ツやってた黄色い服着たおじさんより面白くないよ」

「ええー

あれよりは面白いと思うんですけど」

「いやいや

あれの方がまだマシだ

って言うか、お前は何をしたいんだ一体？」

達也は呆れ果てている

「リアルとリアリティについて説明してたんですよ」

「最初はそうだったかもしれないけど、徐々に離れて行ったが」

「離れて行ってはいません

これもリアルとリアリティについての説明の範疇です  
物事は広い目で見ないとダメですよ」

「そうですね」

と達也は馬鹿にしたように言った

「じゃあ、結局リアルとリアリティはどう違うんだよ」

「だから最初に言った通り、リアルとはこの現実で起こってる事です  
この世界では最後に愛は勝つ訳ではないし、正義のヒーローが勝つ  
訳でもありません」

いえ、むしろ正義のヒーローなどいません

しかし、小説や漫画にはそのような事があります

しかし、あまりにもそれが荒唐無稽だとリアリティがないと言われ  
ます

最後に愛は勝つとしてもいいんですけど、それを現実に有り得ると  
思わせるようもつともらしくしなければなりません

つまりリアリティとは現実では有り得ない空想をいかにもつともら  
しくするかと言う事です」

亜紀は握りしめた手を前に押し出しながら、熱く語った

「長い説明ありがとうございます」

何となーく分かったような分からないような」

「こんなに説明してあげたのに、何でわからないんですか？」

「お前の話しつてさ、二転三転してるから、要点が掴めなくてよく  
わからないんだよ」

「それは達也さんが話しを逸らそうとするから悪いんです」

「ええー」

俺が悪いの？

あれだよ、何でも他人の責任にするのっていけないよ」

他人と書いて

「ひと」と読む

「違いますね

他人の責任にする時、下手な押し付けと上手い押し付けがあるんです  
下手な押し付けはだめなんです」

「何その理屈

それを言うなら、お前のは完璧に下手な押し付けだろ」

「つべこべ言わないで、これ読んで下さい」

亜紀は手に持っているライトノベルを達也の机に置く

「だから嫌だつて言ってるんだろ」

「一回読んで見て下さい

面白いですから

じゃあ、私は行きますね

あ、次の休み時間に感想聞きますからね」

そう言つて、亜紀は教室を出て行った

「あ、おい」

達也は引き止めようとするが、すでに遅い

「ったく

次の休み時間つて、授業中に読めつて事か？」  
ぼそつと呟く達也

「（まあ、歴史じゃなくて数学だから良いけどさ）」

はーあとため息をつく達也

そして達也はライトノベルを読み始める

嫌だと言った癖に読むとは、意外とお人よしである

「（やっぱり、主人公って顔平凡なんだな）」

そう思いながら、読み進めていく

「（うわー

ヴァンパイア出てきた）」

そのヴァンパイアは女の子である

しかもお約束の美少女である

その後は坦々と読み進めていく

「（主人公の父さんすげえな）」

父親は高校を卒業してすぐに海外に旅立つたらしい

今はツアーコンダクターをしており、しょっちゅう海外に行っている

その先々で日本人や外国の女性とよろしくやっているのである

そして主人公は手紙と一緒に家の前に捨てられていたのである

先々で女性とよろしくやっているので、主人公の母親は誰かわからない

その後は、ヴァンパイアの女の子と主人公のいざこざやら、敵との戦いがあった終わった



「（これって続きあるのかな？  
いや、読みたい訳じゃなくて、何となくそんな終わり方だから、そ  
う思ったただけだよ）」

達也はだれに弁解しているのだろうか

「（読み終わったから寝るか）」

達也は寝ようとするが、授業の終わりだと知らせるチャイムが鳴る

「（って授業終わっちゃったよ）」

数分後に亜紀が約束通り（と言うか亜紀が勝手に決めたのだが）来る

「どうでした？」

「お父さんがすげえな

色んな女とやってたり、ヴァンパイアの女の子が泊めてって言った  
ら、すぐOKするんだぜ」

「豪快でおおざっぱですからね

2巻では、地上八階の窓から帰宅したりしますからね」

「やっぱりすげえな

ってか、2巻あるんだ」

「はい、5巻までありますよ

それで、面白かったですか？」

「つまらなくはなかったけど、面白くはないって感じだな」

「よつするに普通って事ですか？」

「まあ、そう言う事になるかな」

はあーとため息をつく亜紀

「まあ、嫌いって言ってたんですから、読むだけでも進歩ですけどね」

「何でそんなにこう言うの好きになって欲しいんだよ？」

達也は疑問に思ったようだ

「やっぱり好きな人とは、趣味を共有したいじゃないですかそれに好きな人が自分の好きなのを好きだと嬉しいですし」

「そう言うもんかねー」

達也はイマイチよく分からないらしい

「そう言うものですよ」

と亜紀はニコッと笑う

そう言うってから、亜紀は達也が読み終わった本を受けとる

「じゃあ、次はもっと面白いのを持ってきて、ライトノベルを好きにしてみせます」

そう言うって教室を出ていった

「忙しい奴だな」  
苦笑いする達也

「（好きな人と趣味が合うって嬉しい事なのかね  
恋愛感情持った事がないからよくわからないけど  
好きな人を人間としてとか友達とか妹を好きって言う意味だとして  
も、みゆちゃんと趣味が合っても別に嬉しくはない  
むしろ、みゆちゃんが趣味は人間観察って言ったら嫌だな）」  
と自嘲気味に思う達也

「（それよりもみゆちゃんに呼び捨てじゃなく、お兄ちゃんって呼  
んでほしいけどね）」

達也の切なる願いである

「よっ」  
と太一が言った

「お前さ、最近休み時間教室にいないけど  
どこに行ってるの？  
あおいちゃんの所か？」

「だから、それは水樹がいるから嫌だって言っただろ  
達也は俺が妹と結婚する会の会長だって言う事は知ってるだろ？」

「一人なんだから、会長もくそもねえだろ」

「それがな、二人同志が入ったんだよ  
それで正式に会長になったんだよ

良かったら達也も入っていいぞ」

「そんな痛いグループには入りたくない  
何でこんなのおおいちゃんは付き合ってるのかねー  
まあ、ダメ男を好きになる女性もいるからな」

「俺はダメ男じゃねえよ」

太一は即座に否定する

「そうだったな」

ダメ男じゃなくて、痛い男にレベルアップしたもんな」

「それはレベルアップじゃなく、ダウンだろ」

太一はすかさずツッコミをいれる

「いや、レベルアップで合ってるよ」

なぜなら、ダメ男よりも痛い人間の方が精神は強くなるからな」

「そんな精神の強くなり方は嫌だ」

「ってかき、今まで一人だったのに、何でいきなり二人も入ったんだ？」

「それは妹系のあおいちゃんと付き合い始めたからだぜ」

あの二人は情報通だからな」

「何か話しただけ聞くと、凄い危ない奴らに思えるのだが」

「凄い良い奴だぜ」

あ、そろそろ授業始まるから、じゃあな」

そう言つて太一は自分の席へ戻つて行つた

「本当にあおいちゃんがあんな奴と付き合つてる意味がわからん  
（まあ、俺も何でか分からんけど、あいつと友達やつてるから一緒  
のようなもんかな）」

日本史の授業が終わると、

「達也ー」

と気持ち悪いぐらいの笑顔をした亜紀が来た

「はあー」

達也は凄い嫌そうな顔をする

「何でそんな顔をするの？」

「お前が気持ち悪い声を出して俺の所に来る時は、だいたい面倒く  
さい事が多いから」

「気持ち悪くないよ

甘えるような声出してるのに」

「甘えるような声はただでさえ気持ち悪いのに、似合わないお前が  
やると余計気持ち悪いんだよ」

「女の子に対してそれは失礼だよ」

「（うつせえよ

この男女が）」

「何？」  
炎夏がギロリと睨む

「何でもないよ  
それより何だい？」

お兄さんにできる範囲なら、やってあげるよ  
達也は無理矢理方向転換した

「達也の方がキモいけど  
あのさ、歴史教えて」

「歴史と言っても色々があるし、歴史とは何かだったら、エド  
ド・カ の著者を読めばヒントは提示してくれるぞ」

「そうじゃなくて、さっき日本史の授業だったでしょ  
それを教えて欲しいの？」

「お前歴史に興味ないんだから、教えても無駄だろ」  
「だって、もうすぐテストなんだよ  
いつも赤点ばかりだから、そろそろやばいの」

「んな事知るか  
教科書全て暗記でもしとれ」  
達也は投げやりに言った

「歴史は暗記物じゃないって言ったの、達也じゃん」

「はあー  
しょうがねえな」

その代わり俺の疑問に答えてくれ」

「いいよ

何？」

炎夏がOKをしたので、達也はさっきの亜紀との会話の内容を話した

「へえー

亜紀ちゃん、そんな事言ったんだ」

「まあ、お前に聞いても分からないと思ったんだけど、一応女だからな」

「一応じゃなくて、ちゃんとした女だよ

それに私だって、恋愛感情くらい持った事あるよ」

「ええー、嘘ー

全然想像できないんだけど」

達也は馬鹿にしたように言った

「中二の時、中三の先輩の事好きだったから」

「その人かっこよかったの？」

「うーん

普通かな

でも凄い優しい人で、いつも笑ってたよ」

「うわー

俺の嫌いなタイプだ」

炎夏は達也をキツとした目で睨む

「いや、何でもないです  
すいません

まず疑問なのが何で顔が普通なのを好きになるんだ？」  
達也は身の危険を感じたのか、すぐに謝った

炎夏は達也の言葉を聞いてため息をつく

「確かに顔で好きになったり恋人を作る人は多いけど、顔はあんま  
関係ないって言う人もいるんだよ」

「いや、そう言う人がいる事は知ってるんだよ  
俺が聞きたいのは、なぜその人は顔で選ばないのかって事だよ  
動物の世界ではそんな事有り得ないだろ？」

「動物と人間と一緒にするのがおかしいよ」

「人間だって動物の一種だよ  
赤ちゃんの場合は完璧にそこいらの動物と変わらんぞ  
ヒトは動物の一種だが、社会によって人間になるんだ  
そこで疑問なのがなぜその社会では顔で選ばない人が出てくるのか  
と言う事だ」

「達也さ、感情って言うのは論理的に説明できないんだよ」

「一年の頃にさ、恋に落ちるのは論理的に説明できるのもあるって  
言ったよな」

つり橋の上の方が告白が成功しやすいと言われる



あれは心理学的にも脳科学的にも実証されている

脳科学的には恐怖する時に出てくる物質と恋をしている時に出る物質が同じなのである

心理学的には恐怖によるドキドキを恋と勘違いするとされている

この事から、愛または恋は思い込みや錯覚と言われるのもある程度当たっているのである

しかし、これには条件がある

それは、好意にもいろいろあるが、この場合は異性または同性に対しての恋愛感情と言う好意にする

人間の精神を数値化などできないが、敢えてすると好きでも嫌いでもない、いわゆる普通の好意度を50にする

さっきのを言ったのを成功させるには、最低でも、55なければいけないのである

ちなみにこれは亜紀や太一にも話している

「うん、覚えてるよ

でも確かにそう言う部分もあるけど、なぜそのようになるかは分からないでしょ」

なぜ恐怖によるドキドキを恋愛感情のドキドキと勘違いするのは分からないと言う事だ

当たり前だが、心理学でも脳科学でも人の心が100%分かる訳ではないのである

なぜなら、人間と言うのは単純でもあり、不可思議な存在でもあるからだ

「そう言うのって知的好奇心をくすぐられるんだよな

だから、恋愛はしょうもなく馬鹿らしいと思ってても、論理的に説明したい為に恋愛をしたいとほんの少しは思うんだよな」

「そんな事で恋愛されたら相手迷惑じゃん  
それに恋愛してたら、論理的に説明できないよ」

炎夏はもっともな事を言う

「まあ、恋は人を馬鹿にするって言うからな  
でもさ、もしかしたら論理的に説明できるかもしれないだから、  
やる価値はあると思わないか」

「だから、そんな事で恋愛されたら相手が迷惑でしょ」

……はあー、本当亜紀ちゃんも大変なの好きになっちゃったね  
「本当だな」

今だにあいつがなぜ俺を好きになったか分からんし

しかし、あいつ凄い精神力だよな  
恋愛感情と言う好きじゃないって何度も言われてるのに、めげない  
もんな」

「それはたまーに達也が優しくするからじゃない？  
それに亜紀ちゃん無理に笑ってる時あるよ」

「あ、そうなの」

達也はあんまり興味ないと言う口ぶりだ

「ってかよく見てるな  
やっぱり、炎夏は女性が好きなんだな」

「やっぱりって何？  
だから、私が男が好きだって言ってるでしょ」

「ここに未来ちゃんと亜紀がいたら、この前の繰り返しになるな」

この前の繰り返しとは、炎夏が女の子にラブレターを貰った時、達也が炎夏は女の子が好きなのと聞くと、炎夏が今と同じように私は男が好きなのと言ったら、未来が何か男が好きって、男遊びが激しいように聞こえますよねと言って、  
亜紀がぁー、分かると同意した事を指す

「本当良かったよ  
いなくて

……私は亜紀ちゃんを恋愛対象じゃなくて、妹として見てるの  
なんかほっとけなくて」

「お前に心配されるようじゃ、亜紀もおしまいだな」

「殴るよ」

炎夏はドスのきいた声で言う

「冗談だよ

冗談が通じないと社会では生きてけないぞ」

達也はおどけてるように言ったが、顔は引きつっている

「しかし進歩したな

前なら言う前に殴ってたからな」

「何殴って欲しかったの？

達也ってMだったんだね」

「な訳ねえだろ」

「達也と亜紀ちゃんとの会話と今まで話した結果、達也ってさ感情

を異様に論理的に説明したくなるって事が分かるね  
何でそうなるか分かる？」

炎夏はいきなり話しを本題に戻す

達也の周りには人の話しを無視するのが多い

「うーん」

達也はちよつと考えてから、

「怖いからかな」

と自分で自分を軽蔑し、あざ笑うように言った

「え？」

炎夏は驚いて、目を見開く

「どう言う事？」

「あ、もうすぐチャイムなるから、自分の席に戻った方がいいぞ」  
柔らかだが、有無を言わせぬ口調で言った

その為炎夏は怖いの意味を問い質したかったが、達也をちらちら見  
ながら、自分の席に戻らざる終えなかった

炎夏が去った後、達也はただただ全てを見通すような晴々とした青  
い空を憂鬱そうに眺めていた

## 第26話：恋愛感情の欠如（後書き）

俺には全く関係ないのでどうでもいいんですけど、受験生の皆さん頑張って下さい。電車乗っていると、参考書を読んでいる方がちらほらいらっしやるんで

第27話：疲れさせる才能（前書き）

貶めるつもりは全くありません。後旬を過ぎていてもそんなの関係  
ねえです

## 第27話：疲れさせる才能

「何読んでるんですか？」

教室に入って来て達也の所に来た亜紀が聞いた

「ロバート・K・レスラーのFBI心 分析官だけど」

「何でそんなの読んでるんですか？」

亜紀は訝しげに聞いた

「何でって？」

面白いから」

「達也さんの趣味って分かりませんよね」

亜紀はやれやれと言う顔で言った

「別に分かってもらわなくても良いし、そんな顔される筋合いもない」

「達也さんって友達いないんですか？」

「俺は一応太一や炎夏やお前は友達だと思ってたんだけど違うのか？」

（何か本当に話しが急に変わってもついていけるようになったな）」

達也は苦笑いしながら聞いた

「しょうがないですね

私が友達第一号になってあげますよ」

亜紀は達也の前の誰かの席に座りながら言った

ちなみに達也の席は廊下側ではなく、運動場側で一番左の一番後ろである

ここは先生にばれなくて寝るのにはちょうど良いと思うかもしれないが、意外と先生は見ているのである

「話しは急に変わっても良いから、せめて人の話を聞いて下さい」

「良かったですね

やっと友達ができて」

「だから、俺は友達いるって言ってるの」

「だって、達也さん、休み時間いつも一人じゃないですか」

「確かに6割ぐらいは一人だけど、いつもじゃねえよ」

「じゃあ、何で一人が多いんですか？」

「一人の方が好きだから

わざわざしゃべりに行きたくないから」

「うわー

だいたいそう言うタイプ って自己中なんですよ

自分の方に来ると邪険にする癖に、自分から行った時はしゃべれって言うし

本当迷惑」

「確かに自己中って事は自覚してるけど、改めて言われるとすげえショックだな」



「分かってるなら、直したらどうですか？」

「何で直さないといけないんだ？」

「公的な時は一応協調しようとするから別にいいと思うが」

「それならいいのかもしれませんが、人に好かれませんよ」

「なぜ人に好かれなきゃいけないんだ」

「例えばどんなに良い奴だとしても、嫌う人間はいるんだぜ」

「またさつき言ったの似たようなのだが、皆に好かる奴はいねえよ」

「もしそんな奴がいたら、個人的にはつまらない奴だと思うけどな」

「例えば皆から好かれる人間がいたとしても、必ずそのような人間が嫌いな奴がいるのだ」

「人間とはそう言う生き物である」

「それはそうですけど……」

「亜紀は反論したいようだが言葉がでないらしい」

「皆から好かれるようになるのは不可能に近いが、嫌われないようにはなれるかもな」

「愛想笑いとか全ての意見に同意したりとか何でも嫌がらずにやってくれる奴とかな」

「でも、俺はそんな奴は嫌いだから、やっぱり無理か」

「達也は自分の言葉が矛盾していると分かって、自分を馬鹿にするように笑った」

「そんなに屁理屈ばかり言うから嫌われるんですよ」

「……はあー、何でこんなの好きになっちゃったんでしょう」

「亜紀は大袈裟にため息をつく」

「それ最近よく聞くけどさあ  
だったら好きになるのやめればいいじゃん」

「だから、好きになった人をそう簡単に諦める訳ないでしょ」

「まあ、人の心って言うのはよく分からんもんだからな」  
達也は他人事のように言った

亜紀はさっきのより深いため息をつく

「もういいです  
私帰ります」

「コ ン星にでも帰るのか？」

「私は小 子じゃありません」

亜紀はそう言った後、達也の教室から出て行くつもりだと、

「ちよっ、待てよ」

と達也は立ち上がって亜紀を引き止めようとした

亜紀は達也の方に振り返った

「何ですか？」

キ タクの物まねでもしてるんですか？」

「そんなのしてねえよ」

「ああー、分かりました

キ タクの真似をしているホ をやっているんですね」

「いやそれも違うから」

「じゃあ、キ タクの真似をしているホ の真似をしてる素人やっ  
てるんですね」

「それかなり原型から離れてるじゃん  
とゆうか、いい加減物まねから離れる」

「じゃあ、何なんですか？」

亜紀は明らかに面倒くさそうに言った

「お前って今生理前なの？」

達也がそう言うのと、亜紀は達也はじーっと見つめた

亜紀は何かを考えてるような仕種をして、よしと小声で呟いた

そして、すぐ亜紀は達也を平手打ちをした

教室に響き渡る程凄い良い音であった

「達也さんって、ほんつとにデリカシーないですね」  
そう言っつて亜紀は去って行った

「よしって何だよ」

平手打ちされた事よりそっちの方が気になる達也

「何やってんの？」

炎夏は呆れたような顔をしている

「何って

突っ立ってるの」

「そう言う意味じゃなくて、何で亜紀ちゃんに叩かれたのかって事」

「お前何でそれ知ってるの？」

もしかしてストーリーカーみたいにずっと見てたのか？」

「違う

音がした時に叩かれたのを見たから

皆知ってるよ」

「みんな？」

達也は教室を見渡す

見ると、男も女も達也の方を見ながらこそこそ喋っている

「ああ、確かに

本当に人間ってこう言う事好きだね

人の不幸は蜜の味って奴か」

「何で亜紀ちゃんに叩かれたの？」

炎夏は達也の前の席に座った

「全く分かん」

達也も自分の席に座った

達也はもしかしたら凶暴と言う名の炎夏でも一応女の子なんだから、分かるかもと思ってさっきの全容を話した

「それは叩かれても仕方ないよ」達也と亜紀の会話の内容を聞いた炎夏は言った

「はあー？何でだ？

俺は生理前かどうか聞いたただけだぞ」

「だからそれが駄目なんだってば  
普通女の子に生理前とか聞かないでしょ」

「俺は普通じゃないから聞くんですー」  
嫌みな言い方をする達也

「完璧子供だね」  
炎夏は呆れたように言う

「高校生なんてただのガキだろ」

高校生と言うのは、都合が良い時だけ大人と一緒に扱えと言  
い、都合が悪い時には自分達は子供だと言う、なんともおかしな生  
物である

「ガキだからって何でも言っていていい訳じゃないでしょ  
この前のも言っちゃ駄目なんだよ」

この前とは、達也と炎夏と女の子（達也や炎夏の友達ではなく、学  
校行事で一緒になった）と喋っていた時、達也がその女の子にこの  
露出狂がと言ったのである

「あれはあいつが悪いんじゃない  
あんなひどい事言ってる」

誰にどんなひどい事を言ったかは想像にお任せする  
決してどんなひどい事を言ったかを忘れた訳ではない

「確かにあれはあつちが悪いけど、露出狂って言う必要ないじゃん  
そもそも、何で露出狂って言ったの？」

「あんなどうぞパンツを見て下さいみたいな凄いミニスカ穿いてる  
奴なんて露出狂以外の何者でもないだろ」  
女子高生が聞いたら、非難がたくさん来るであろう事を言う達也

「そうかな  
あれぐらい普通だと思うけど」

「いやいや  
そこら辺の女子高生はもうちょっと長いだろ」

人によって短いと思う基準が違うのでご想像にお任せする  
決して説明するのが面倒くさい訳ではない

「まあ、達也が心の中で思ってるのは勝手だけど、口に出しちゃ駄  
目じゃん  
相手怒ってたし」

「怒ってたって事は凶星だって事だろ」

「……はあ

そんなんだから亜紀ちゃんも怒るんだよ  
達也って本当怒らせる才能があるよね」

「そんな才能はいらん」

「だったらさ、別に達也が普通にしくなくても良いから、デリカシー  
くらいは持っててよ」

「女って言うのは本当面倒くさいな」  
達也はぼそつと呟いた

「何か言った？」

「いえ、なーんにも言ってますん」

「……はあ」

炎夏の口からため息がこぼれる

最近達也の周りではため息つく人間が多いようだ

「ため息つくと幸せが逃げるって言うよな」

「誰がため息をつかせてると思ってるの？」

「自分が勝手にため息ついてるんだから、炎夏だろ」  
達也は何言ってるのこいつと言う感じで言った

「…はあ」

達也は人を怒らせる才能以上に疲れさせる才能があるんだね」

「だから、そんな才能いらないうて俺にはもつとマシな才能ないのかよ」

「うーん

人に嫌われる才能とか、人を貶める才能とか人に誤解される才能かな」

ロクなの一つもねえなと自らを嘲り笑う達也

自嘲していた達也は

「人に誤解される才能って何だ？」

と疑問に思っていたので聞いた

「うーん

達也つてさ、よく冷たいって言われるけど、本当はお人よしじゃないかな  
いかなって思うんだよね

だから誤解される才能があるって言ったんだよ」

「その人の本質なんて分かんないだろ」

「どうゆう事？」

「例えばさ、まあ俺を実験台にすると、ある人は俺の事を冷たいと言っけど、炎夏はお人よしと言っ

これはどっちも本当の俺なんだよな」

「え？

どうして？」

本当の達也は一つじゃないの？」

「確かにその人の本質があるとすれば、本当の俺は一つなんだろう。」



しかしな、そいつの本質なんて自分にも、ましてや他人にも分からなねえだろ」

その人物の印象はその人物の本質（それがあればの話だが）よりも自分にとってどうなのかと言う事でその人物を見るのであるだから、達也という存在が地球上に一人しかいなくても、達也に関わる人が10人いれば、10人の達也がいると言う事である（子供の数だけ答えがあるのと一緒です）

「だからさ、その人にとっては冷たいのが本当の俺なんだよ」

「ああー」

言われて見ればそうかな

…… って事は、本当の達也は違うよって言うのは、私にとっての本当の達也とは違うって言う事だよね？」

「そう言う事だ

だから、本当のその人はそうじゃないから、その見方は間違ってるとは言えないと言う事だ」

ある人にとってはそれが本当のその人なのだから、否定するのは違うのではないかと言う事である

「まあ、嘘、捏造やその時の状況を配慮しないでその人を悪く言うのはどうかと思うけどな」

「あつ、もう一つ才能見つけた人につまらない話しをする才能」

「やっぱりロクなのないな

って言うか、つまらない話しするのって才能なのか？

しかも、つまらない話って言われて結構ショック受けたんだけど」

「しょうがないでしょ

つまらない物はつまらないんだから」

「まあ、確かにはつまらないかもしれないけどさ  
面と向かって言わなくても良くない？」

「私は陰でこそそそ言うのは嫌いな  
言うんだったら、その人の前で堂々と馬鹿にするね」

「前半は賛成できるけど、後半はおかしいだろ」

「達也には言われたくない  
達也だって私と同じ事してるのに」

確かに露出狂じゃない人に露出狂と言うのは馬鹿にしていると  
も過言ではないだろう

「同じ事してるからと言って、おかしいと言っちゃいけない事  
はないだろ」

「確かにそうだけど、おかしいと言うのなら、自分のしてる事を直  
せて事

直さない癖におかしいって言う方がおかしいでしょ  
だから私は、こう言う事にはおかしいと言わないよ」

ある意味潔よい

炎夏こそ武士の中の武士なのではないだろうか

「それは「もつともですな」  
達也は棒読みで言った

「もつ

達也のせいで話しがずれちゃったじゃん」

「それはすいませんねー」  
達也は嫌味ったらしく言った

これだから、達也を嫌いな人が多いのではないだろうか

「何でこんなのと友達やってるのか分からなくなってきた」

「それはお互い様じゃないか  
俺も何で炎夏と友達やってるか分からないし」

こんなの扱いや暴力を振るわれる事を指して言ってるのだろう

「まあ、やっぱり達也は私にとってはお人よしだからかな」  
炎夏はしみじみと言った

「俺のどこがお人よしなんだろうね  
捻くれてて、冷たくて、つまらない話しをする人間のさあ」  
微妙に論点がズレている

「おっ

ちゃんと自分で分かっているんだ  
よしよし」

炎夏はなぜか上目線である

「凄い子供扱いされてる気がするんだけど」

「子供なんだからしょうがないじゃない」

「わがままなお前に言われたくないが」

「私はわがままじゃない

ちよつと自己主張が強いだけ」

物は言いようである

「ちよつとねー？」

達也は含みを持った言い方をした

「そう

ちよつと自己主張が強い、可愛い女の子なんだよ」

自分で可愛いと言っなんて凄い自信である

「そうだ

達也、少女漫画読めば良いじゃん」

「いきなり何言ってんの？」

「少女漫画読んだら、女の子の内面が良く分かるよ」

「別に分からなくても良い

だいたいさ、少女漫画に出てくる男って外見的にも内面的にも現実  
にいないじゃん

あんなんから何を学べと言っんだ」

「だから女の子はああ言う恋愛したいって事が分かるじゃん」

「そうか？」

今時の女子って凄く現実的だから、あんな恋愛したいとは思わない  
だろ？」

愛さえあればお金なんていらなと思うのは男の方が多いのである

「ああー」

そうかもね

私も思わないし」

「じゃあ、言うんじゃないよ」

「でもさ、亜紀ちゃんは少女漫画とかの恋愛したいタイプじゃん」

「確かにあいつは少女漫画とか好きそうだけどさ

だからって、何で読まなきゃいけないんだよ

ただの友達なのにさ」

「そうだけどさ

……じゃあ、亜紀ちゃんに謝れば良いんだよ

そしたら、許してくれると思うよ」

「何で謝らなきゃいけないんだよ

俺悪い事してないのに」

「謝まってくれるよね？」

炎夏は満面の笑みでポキポキと手を鳴らしながら言った

「も、もちろん

当たり前だろ

俺謝るの大好きだから」

達也は焦りながら言った

「良かった

じゃあ、次の休み時間行ってね」

そう言っただ炎夏は自分の席へ戻って行った

「（ってか何であいつはあんなに他人の為にやろうとするのかね）」

達也も他人の為に何かしない訳ではない

亜紀との出会いもヘアバンドを探した事から始まったのである

しかし他人の為に積極的に何かしようとは思わないのである

ゆえに達也には炎夏のようにあそこまで他人の為に何かをする事が理解できないのだろう

「（そう言えば、小夜ちゃんが亜紀は下ネタ嫌いって言ってたな）」  
達也は前に小夜が言っていた事を思い出した

「（変な意味で聞いたんじゃないんだけどな）」

達也はゲヘヘと卑猥な事を考えて気持ち悪い笑みを浮かべながら聞いた訳ではない

ただ単に怒ってる理由を生理前と判断したから、そう聞いただけである

まあ、こう言うのをデリカシーがないと言うのだろうか

「人付き合いって言うのは難しいもんだな」

当たり前のように当たり前でない事を思った達也だった

く昼休みく

太一はチャイムが鳴ると、すぐに教室を飛び出して行った

「（そう言えば、あいつすぐ出てくから最近喋ってねえよな  
何やってんだろうね

危ない事じゃなきゃいいけどな）」

達也は一般人にも分かるぐらいの殺気を感じて振り向くと、炎夏は  
達也を睨んでいた

「（はいはい、行けばいいんでしょ  
行けば）」

達也は心の中で愚痴りながら、教室を出て行く

亜紀の教室の前

「腹減った」

さっさと終わらせて帰る」

人に謝る態度としてどうなんだろうかと言う事を発言する達也

達也は面倒くさそうに教室に入って、亜紀の席まで行く

そこには、亜紀、あおいの二人が仲良く(?) 昼ご飯を食べていた

「何の用ですか？」

亜紀は不機嫌な声で言う

「随分な挨拶だな

まあ、いいけどさ

……あれ？

未来ちゃんは？」

「図書委員で図書室に行ってます」

亜紀はぶっきらぼうに言った

「よし、まだ喋ってくれるから、望みはあるぞ」

「亜紀ちゃん、あのさ」

なぜかちゃん付けである

「亜紀ちゃんなんて気持ち悪いから止めて下さい」

「(だ、だめだ

望みは絶たれた)」

諦めの早い男である

「用事ないんなら帰って下さい

邪魔ですから」

「用事なかったら会いに来ちゃいけねえのかよ」

お前はどこのラブコメの主人公だ

「達也さんがそんな事言っても全く似合いませんよ  
むしろ気持ち悪いです」

全くその通りである



「どうせ、そう言ったら私が喜んで機嫌が直るとでも思ったんでしょうけど、そんな馬鹿らしいので私が喜ぶ訳ないでしょ」

「うっ」

図星だったようである

「私も落ちぶれたものですね  
甘く見られるんなって」

「それってさ、ある程度の地位とか強い人が言うセリフだよな」

「昔の私だったら、睨んだだけで気絶させられたんですけどね」

「お前はどこの漫画の登場人物だ」

「来るならさっさと来なさい」

あなた達のような雑魚を相手にしている暇はないんです」

「どんなキャラ設定だよ」

しかも達って何だよ」

あおいちゃんも入ったのかよ」

「わ、私も？」

あおいはいきなり名前を出されてびっくりしている

「来ないのですか」

しょうがないですね

ではこちらから行きますよ」

「だからお前は何なんだよ  
あれか、昔は凄かったんだよ的な設定か？」

「今でも相当強いですよ  
しかし、人間ですから年には勝てずに昔よりは弱くなったんです」

「あ、人間なんだ  
俺はてつきり悪魔か何かと思ったよ」

「正確に言うと人間ではありません  
人間と悪魔のハーフで悪魔狩りをしています」

「お前はデビル イクライのダ テか」

「あれは男でしょ  
フィオナは女です」

「クロ トリガーにフィオナって出てきたよな」

「あんな脇役中の脇役と一緒にしないで下さい  
このフィオナはれっきとした主人公です」

「フィオナを村人Aと一緒にすんじゃないよ  
サブイベントと関係するんだから  
森が復活するんだよ」

「こっちのフィオナはそんなちやちな物じゃないんですよ  
世界を救うんですよ」

「ばっか

森を馬鹿にする奴は森に泣くんだぜ  
森を増やす事は世界を救う事に繋がるんだよ」

「森を増やしたって悪魔に絶滅させられたら意味ないじゃないですか」

「だから魔物とかはク ノ達に任せて、フィオナは自分のやれる事をしてるんだよ

フィオナはさ、信じてるんだよ

ク ノ達がラ スを倒してくれるってね」

「ええー

フィオナはラ ス知らないでしょ

そんな話しなかったですよ」

「本とか読む時は行間が大事なようにな、ゲームも言われてない事が大事なんだよ」

「何なんですか、その理屈

そもそもフィオナはあんま頑張つてないと思いますよ

ロボがほとんどやってたと思いますから」

「確かにそうかもしれないけどさ、フィオナが何度枯れてもク ノ達が来るまで頑張ってきたから、森は復活したんだぜ  
やっぱフィオナのおかげだろ」

「それにしてもク ノ達は可哀相ですよね  
だってあの若さで死んじゃうんですよ」

「ああー

ク ノ ロスで死ぬもんな」

「何でク ノ達を殺す必要があつたんですかね」

「勝手に未来を変えたからじゃない

それで迷惑かかった人や、タイムパラドックス的な事も起きるだろうし

そもそもラ スを倒して本当に良かったのかって言う話しだろ」

「どうゆう事ですか？

だって、そうしなきゃ人間は救われなかつたんですよ」

「そこだよ

ラ スだつてさ、星の生命を吸う以外に生きる方法がなかったのかもしれない

ラ スだつてさ死にたくなかつただろうし

それを自分達が死にたくないからって殺していいのかって話しになる訳だよ

だから、人間のエゴの為にラ スを殺した報いとして死なせたんじゃないの？」

「だったら、別に死なせなくたって良かったじゃないですか

王国は滅んだけど、生死は不明で

そもそも、なんでラ ス倒したク ノが人間ごときに負けなきゃいけないんですか」

「不意打ちとか？」

「不意打ちでも人間ごときにはやられないでしょ」

「じゃあ、あれ

人質とられたとか

ク ノは正義感強いから、人質と交換に敵に殺されるんじゃない？」

「うっ

それはそうですけど

で、でもやっぱリク ノク スは駄作です

ク ノク スなんて、ク ノト ガーファンにとっては、意地汚い以外の何物でもありません」

亜紀は何としてでもク ノク スを貶めたいらしい

「そうかな？」

確かにク ノ達を殺す必要はないし、あの時代設定もおかしいけどさ、それを除いたら結構面白いと思うけどな」

一方達也はそうでもないらしい

「私にとっては人生で1番の駄作です

あんなに必死になってク ノト ガーを否定するなんて」

「15、6歳のガキが人生で1番なんて言葉を使っているのかね」

「人生に古いも若いも関係ありません

結局達也さんは、何をしに来たんですか？

ク ノ リガーの話しをしにきたんですか？」

「違うよ

お前が意味分からんキャラ出して来たから、ク ノ リガーの話しに繋がったんだろ」

「私の所為って言うんですか

達也さんがフィオナってク ノ リガーに居たよなって言うからい

けないんです」

「それこそ俺の所為じゃねえだろ  
そこはそうですねって言えば良い話しだろ」

「本当男って嫌ですよ」

自分は言いたい放題言う癖に、女には黙ってるって言うんですよ」

「それだったら女だってそうだろ」

男にはひどい事言う癖に、女に同じ様な事言ったら人間として最低  
見たいな事言うし

女にひどい事言うのが最低なら、男に言うのも最低だろ」

「じゃ、じゃあ、こ、これで、おあいこって事でどうですか？」

あおいは恐る恐る言った

「どこがおあいこなの？」

元はと言えば達也さんが悪いんだよ  
デリカシーがないから」

「あつ、そうだ」

俺はそれを謝りに来たんだった」

「今まで忘れてたんですか？」

本当にクノリガーの話ししに來ただけなんですね」

亜紀は呆れたように言った

「しょうがねえだろ」

俺の辞書にデリカシーと言う文字は存在しないんだから」

「そんなに威張る事ですか  
ある意味尊敬しますね」  
亜紀は鼻で笑った

「何その笑い  
せつかく謝ろうと思ったのに」

「絶対謝る気なかったでしょ  
それに心がこもってない謝られ方はして欲しくありません」

「（やつべえな  
許してもらわないと、炎夏にひどい目に遭わされるんだよな）  
本当に悪うございました  
どうかお許しを」  
達也は頭を下げた

「土下座したら、許してあげても良いですよ」  
と悪魔の様な笑みを浮かべる亜紀

「それは、ちょっと  
土下座の代わりに何か買ってあげるから」

「じゃあ、月の土地買って下さい」

「ええー  
そんなん買ったってしょうがないでしょ  
しかも買う金ないし」  
「そんな事ないです  
これ見て下さい」

亜紀は携帯を見せる

携帯はあるサイトを開いて、そこには月の土地を買いませんかと書いてあった

下の方にいくと、次の様に書いてあった

月の土地は、1人1エーカー（約1200坪）の広さから購入する事ができ、一人どれだけ購入してもOKです。

1エーカー（約1,200坪）と言うと、サッカーグラウンド1つ分に相当するのですが、驚くべき所はその値段です。

何と1エーカーで2700円なのです

「意外と安いな

でもこれ権利書だけで月に行ける訳じゃないから、意味ないじゃん」

「夢のない男ですね

望遠鏡とかで私達の土地であそこら辺かなって語り合つのが良いじゃないですか」

「全く良いとは思わんが

ただの馬鹿だろ

それに、ドラマじゃあるまいし、本気でそんなのやっとするのがどれくらいいるのかね」

「人がやらない事をやってこそ意味があるんですよ  
偉人は皆そうです」

「人がやらない事って言うなら、月の土地を言うって言うのは違う



だろ  
結構買っている人いるだろうし」

「では、アイスランド買って下さい」

「いや、あれジョークだし、俺に億単位の金なんてないから」

「うーん」

そうですね、じゃあ、世界征服して欲しいです

世界征服をしようとした人はいたかもしれませんが  
しかし、成し遂げた人はいませんから」

「確かにそれは人のやった事がないのだろう」

けどさ、世界征服する意味が分からないし、した後はどうすんだよ」

「世界征服は愛を広める為です」

した後にする事は、世界中に愛を届ける事です」

「言ってる事だいたい同じだよ」

何だよ、愛を広める為って

愛を届けるって、別に世界征服しなくてもできるだろ」

「達也さんには愛と言う物が何か分かってませんね」

愛とは恋愛や家族愛などと言う程度の低い物ではないのです  
見返りを求めない、どんな人にも降り注ぐ祝福こそが愛なのです」

「どっかの宗教みたいだな」

もう一回言っけど、それは世界征服しなくてもできるよね」

「達也さんは世界征服を悪い事と思ってませんか」

それは違います

愛と言う名の祝福によって世界を征服するのです  
それによって世界は平和になるのです」

「凄いな、愛って

俺にはどうでも良いけど」

「何でどうでも良いんですか？

平和とはとても尊い物なんですよ」

「そりゃあ、平和は大切かもしれないけど、俺はお前の言う恋愛や  
家族愛ではない愛なんて言うのを信じてないから」

「私だって恋愛や家族愛でない愛なんて信じてませんよ  
さっきのも冗談ですし」

「冗談かよ

……時々、お前が真面目に言ってるのか、冗談で言ってるのか分  
らなくなるよ」

「私はいつも真面目です

真面目に冗談を言ってるんです」

「はた迷惑な奴だな」

「迷惑をかけない人間なんていません

それに迷惑を迷惑と思わない場合だつてあるでしょ  
迷惑と思うかは人それぞれなんですから」

「うーん

まあ、子供って言うのは親に迷惑かけてるもんだけど、それを迷惑  
と思わない親もいるからな  
でもだからってさ、迷惑かけていい訳じゃないだろ  
迷惑をかけないようになしようと思う事が大事だろ」

「本当達也さんって説教臭いって言うかオヤジ臭いですよね」

「すみませんねー  
説教臭い高校生で」

「まあ、それが良いんですけどね  
デリカシーないのが大きな欠点ですけど」  
亜紀は達也をじろりと睨んだ

「それは本当にごめんって  
許して下さい  
この通りです」  
達也は嫌がっていた土下座をした

当たり前だが、クラスにいる人達は達也と亜紀とついでにあおいを  
変な目で見る

あの人何したんだらうねとか、さすが水樹さんとか言う声がちらほ  
らと聞こえてくる

「（何してんだらうな、俺）」

「そう言えば、ジャンピング土下座って言うのがありましたよね  
あれやって欲しいです」

「あれは謝る気持ち全くないだろ」

「謝る気持ちとかどうでも良いです  
あれやったら爆笑ですよ」

「心がこもってない謝り方して欲しくないって言ってたじゃん」

「最初はそう思ってたんですけど、私と同じくらいの恥ずかし目を  
受けて欲しいなと思って」

「お前実は人間じゃなくて悪魔だろ」  
達也は立ち上がって亜紀を指さした

「人に指さすって言うのは、最低な行為ですよ  
達也さんが私にどんなだけ恥ずかしい思いをさせたか分かってるん  
ですか

それを思えば簡単な事です」

「土下座するって事は、相当恥ずかしい事なんだから、それで許し  
て下さい」

「では、もう一回土下座したら許してあげても良いですよ」

「（こいつ絶対悪魔だよ  
ドSに決まってる）」

「も、もういいんじゃないかな  
それぐらいで」

あおいはそう言った

「そうですね

十分楽しめましたから、許してあげますよ」

「やっぱりな

お前自分と同じ恥ずかしい目にあわせると言っより、自分が楽しめれば良かったんだろ」

「違います

恥ずかしい目にあわせようと気持ちと、自分が楽しみたい気持ち、両方あるんです

物事って言うのは様々な要因からなるんですから」

「そうですね

分かりましたよ」

達也は深くため息をついた  
精神的に疲れているようだ

「これで達也さんの事は許してあげます

まあ、そもそも許すも許さないもないんですけどね」

「は？

どうゆう事だ？

俺が生理前かって聞いたから怒ってたんじゃないの？」

「いえ

確かにデリカシーないなあと思いました  
でも、私って心広いですから」

「じゃあ、何で怒ってたんだよ」

「達也さんの前提が間違ってます  
私は何にも怒ってませんよ」

亜紀の言葉に何言ってるのこいつと言つ顔をする達也

「あれは漫画を読んで私もやってみたいなあと思ったんです  
痴話喧嘩した後に仲直りして、絆がより深くなるって言つのはなんで  
すけど」

「そ、そうか

それでよしって言ってたのか」

達也は膝から崩れ落ちて、両手を地面についた

「あ、聞こえてたんですね。

でも、騙し通せたんですから、私って演技上手いんですね」

絶望に身を沈めていて言い返せない達也

「私って何でこつも心が広いんですかね

やはり私が聖母マリアだからですかね」

「（お前がマリアだったら、この世界は終わりだ

いや、マリアにそんな力はないか）」

達也は心の中で毒づく

「そう言えば何で達也さんは土下座してるんですか？  
もうしなくていいんですよ

それとも達也さんにそういう趣味があるんですか？」

「そういう趣味って何だよ

土下座を趣味とする奴なんていないだろ」

達也は立ちあがって、最後の力を振り絞り、亜紀に反論した

「そう言う奇特な人もいるかなあと思ってた」

「さようでございますか」

さっきの反論で力を使い尽くした為、疲れて言い返せない達也

「達也さん、明日デートしません？」

「何でお前とデートしなきゃいけないんだよ」

「明日土曜日ですし、罪滅ぼしとしてです」

「土曜日だから理由はなってねえよ

罪滅ぼしって言っても、そもそも怒ってないんだろ？」

「最近痴漢冤罪って多いですよね」

ほとんど男、いや女でさえも惚れてしまうんじゃないかと言つづぐらしいの微笑みで言う亜紀

「はあー

……分かったよ

いけばいいんだよ」

しかし、達也にとっては悪魔の微笑みのようだ

「（微笑み恐怖症になりそうだな）」

もし微笑み恐怖症になったら、微笑みの国タイと言うパンフレットを見ただけで恐怖を覚えるだろう

「じゃあ、明日の10時に 駅前の銀時計で待ち合わせしましょう」

「分かった

……じゃあ、俺帰るわ」

達也は凄い疲れてますよオーラを纏いながら、自分の教室へ戻って行った



## 第28話：怒られるうちが花

ニヤー

早く起きないと噛み付くぞ

ニヤー

さっさと起きやがれ

物騒なのが目覚まし時計から聞こえる

ドラ ンボールの目覚まし時計は壊れたので、これに替えたのである

達也は眠たそうな目をしながら目覚まし時計のスイッチを切る

「ふあー

……やっぱり目覚まし時計替えようかな  
憂鬱になるし」

と言いながら、ちらつと目覚まし時計を見る

「まだ8時じゃん

もっかい寝るか」

そう言つて、布団に入り込もうとする

しかし、

「あれ？

俺何か用事なかったけ？」

と思ひ悩む

うーんとしばらく考えたら、

「あ、そっか

俺亜紀とデートするんだった

……良かったー

思い出して」

達也は恐怖からの解放という安堵の気持ちを表すのに十分な声で言った

「（強制的なデートだけど、一応俺にも負い目はあるし、遅刻したら何言われるか分からんからな）」

「さてと、じゃあ、飯でも食べるか」

そう言って、達也は二階の寝室から一階への居間へと降りて行く

達也は居間に入ると、一人余計なのがいた

「あ、おはよう」

達也を見た炎夏が朝の挨拶をする

「何で炎夏がいるんだよ」

「私が呼んだ」

そう炎夏の隣に居たみゆきが言った

「何で？」

こんな朝っぱらから」

達也は椅子に座りながら聞く

「9時からちよつと用事があつて、炎夏さんと一緒に行くの」

「へえー」

まあ、炎夏がいれば大丈夫だな

……お前はさつきから何で他人の家で朝飯食つてるの？」

達也は炎夏に言った

炎夏はさつきから、朝の定番、ご飯とみそ汁を食べている

「だって、たつくんの彼女だよ

当たり前じゃない」

と台所から居間に来た達也の母は言った

「だから、何度も言ってるでしょ

俺と炎夏はそんな関係じゃないって」

「そうですよ

私達は親友なだけですから」

「炎夏さんが私のお姉さんだったら、良いのにな」

「俺はこんなのが姉だったら、毎日地獄だと思うけどな」

「人にこんな呼ばわりするのって人間として最低だよ」

「ごめんね

私の育て方が悪いばかりに」

「いえ、おばさんは悪くないですよ」

「そつだよ」

お母さんは悪くないよ

悪いのは全部達也だよ」

「わあー」

凄いアウエー

誰か味方はいないのかよ」

「私、準備してくるね」

みゆきは言った

「うん、分かった」

私はご飯食べたなら、達也の部屋に居るから」

炎夏がそう言つと、みゆきは頷いて、自室へと歩いて行つた

「無視かよ」

しかも、何で俺の部屋に来るんだよ」

「すみません、おばさん

ご飯お代わり良いですか？」

「ええ

良いわよ」

達也の母は炎夏からお茶碗を受け取って、母は炊飯器へと向かう

「ずうずうしい奴」

「いいじゃん」

私とおばさんとは家族みたいなものなんだから」

「親しき中にも礼儀ありつて言葉知ってるか？」

「私は親しくなくても、礼儀はないから大丈夫」

「それは人間としてどうかと思うぞ  
そんな奴に最低と言われたくないな」

「良いの」

私は適当に生きるんだから」

炎夏がそれってダメ人間じゃねえの的な事を言う

「はい」

召し上がれ」

母が炎夏に茶碗を渡す

「ありがとうございます」

炎夏はそう言うのと、凄い勢いでご飯を食べる

「じゃあ、行こっか」

食べ終わった炎夏が言う

「まあ、暇だから良いよ」

達也がそう言うと、二人は達也の自室へ向かった

「相変わらず殺風景な部屋だね」

「まあな

……っつて、何してるの？」

炎夏は本棚にある本の中身をパラパラめくったり、ベッドの下を覗いている

「うん？」

何って？

エロ本チェックだけど」

「ねえよ

そんなの

っつていっつか何でお前は母親みたいなマネしてるの？」

「おばさんに頼まれたから

自分で探すのは後でばれた時達也に嫌われるのやだからって」

「体よく押し付けられたって訳か」

「後、おばさんはこうも言ってた

エロ本を見るのは健全だけど、過激すぎるのは嫌だなんて」

「だから、持ってねえよ」

「うーん

探したけど、ないみたいだね

つまんない」

と炎夏はがっかりした声で言った

「やっぱり、自分が楽しみたいだけなんだな」

「準備できたよ」

達也の部屋に入ってきたみゆきが言った

「そう」

でも、9時まで後30分もあるから、達也にレッスンしてあげよう」

「レッスンって何の？」

達也は訝しげに聞いた

「デートを成功させる為のレッスンだよ」  
炎夏は言った

「あ、それ面白そう」

「結構です

俺は別にデートを成功させたくないから

そう言うのは、もっと必要な人にやってやれよ」

「ダメだよ

デートするんだったら、亜紀ちゃんを楽しませないと」

「まずは、亜紀さん以外の女性を見ない事だね」

「それは無理だろ

歩いていたら、絶対目に入るんだから」

「そう言う意味じゃないんだよね  
見とれちゃダメって事だよ」

「見とれはしないけど、女性を見るのはしょうがないだろ」

綺麗な人だなとか可愛いなぐらいは思うであろう

「はあー」

本当達也は乙女心が分かってないね」

炎夏は呆れたように言った

「（炎夏に乙女心とか言われたくないな）  
心の中で毒づく達也」

「まあ、達也に分かかって言う方が無理なんじゃない？  
妹にまで言われてしまった

「確かに」

亜紀ちゃんに生理前とか聞くぐらいだからね」

「えー」

何それ？」

みゆきは嫌悪感丸だしの声で言った

炎夏はみゆきにあの事件の内容について話す

「うわー」

最低」



「本当  
人間の風上に置けないよ」

「（何でそこまで言われなきゃいけないんだよ）  
それはですね、もう十分反省してますから、広めるの止めて欲しい  
んですけど」

「ダメだよ

これ10人の人に言わないと呪われるから」

「何その不幸の手紙みたいの」

「あ、そういえば昨日チエーンメール届いたよ  
血液足りないから輸血して欲しいって」

「で、それ送ったの？」

「うん、5人くらいに一斉送信で」

「で、だいたい結局自分の所へ戻ってくるんだよね」  
炎夏がしみじみと言う

「チエーンメールって例え善意だとしても、送らない方がいいよ」

「何で？」

みゆきは不思議そうに言った

「嫌がらせの為に他人の名前を語って善意を装って送ったり、楽し  
くてやってるの多いからな

それなのに、病院や行政に問い合わせが来て、業務を遂行できなく

なるんだよ  
それにチエーンメールって言うのは迷惑以外の何物でもないからな  
だから、送らない方がいいし、送られてきたらすぐ消すべきなんだ  
よ」

「あ、もうそろそろ出ないと」  
炎夏が言う

「本当だ

じゃあね、達也

あ、後ちゃんとエスコートするんだよ」

二人は達也の自室を出て行った

「絶対あの二人は教育がなってないね  
……みゆちゃんは俺にも責任があるか」

みゆきがあのようになったのも、達也が甘やかしたのに一因がある  
だろう

「しかし、あと一時間何するかね」

「たつくん

下に降りてきて」

一階から母の声が聞こえる

「次は母さんかよ  
面倒くせえな」

達也はぶつぶつ言いながらも、一階に降りて行った

母は居間に戻っていたので、達也は居間に行った

「何？」

「何か用？」

「みゆと炎夏ちゃんに頼まれたから、私がデートを成功させる方法を教えてあげる」

「（何やってくれてんだろっな

あの二人は）

いいよ、そんな事してくれなくても

気持ちだけで十分だよ」

達也は心にも思っていない事を言う

「だーめ

本当は炎夏ちゃんとかくっつけたかったんだけど、炎夏ちゃんは亜紀ちゃん？って言う子を応援してるらしいから

あ、でも、付き合っただったら、一度家に連れてきてね」

「母さんの考えを俺に押し付けないで

それに、何で家に連れてこなきゃいけないの？」

「だって、付き合っただったら、親に紹介するのが普通でしょ」

「普通じゃないでしょ

そんなのはごく少数だと思うよ」

「周りなんかどうでもいいの

それが麻倉家の家訓なの」

「そんな家訓聞いた事ないし、そもそも家に家訓なんてあった？」

「聞いた事ないのは当たり前だよ

だって、今作っただから」

「うわー

今聞き捨てならない事言っただよ

そんな事で良いの？」

「今法律作ったから、その前は裁けないけど、今からは絶対だから」

「なんか法律にランクアップしてるんですけど  
しかも破ったら、裁かれるの？」

「うん

罰は毎日私と2時間喋る事」

「（それ凄いきついな）

そんなの罰にしていいの？」

少し悲しくならない？」

「だって、そうまでしないと、たっくん喋ってくれないでしょ？」

「それは俺と母さんは心で通じあってるからだよ  
だから、話さないんだよ

（自分で言っただけ気持ち悪いな）」

「本当

じゃあ、この罰はやめにしよう」  
母は嬉しそうに言った

「うん

やめよ

(この人、あんなんで信じちゃったよ)」

「ええっと、何教えるんだっけ？」

あ、そうそう、たっくんにデートの成功法を教えるんだったね

女の人にみとれちゃいけないって事とエスコートするって言うのは  
習ったよね？」

「はい、習いました」

達也はもうどこにでもなれという感じだ

「じゃあ、次は共感だね」

「それって、教官は自分の恩人でありますみたいなの？」

達也の母は首を傾げる

「何、それ？」

共感って言うのは、共に感じるって書くのだよ」

「いや、分かってますよ

ただ言ってみただけです

で、その共感が何だって言うの？」

「話しをする時、男性は反論やアドバイスをするけど、女の子は共  
感して欲しいんだよ」

「そう？」

「そうじゃないよって言って欲しい場合もあると思うけど」

「なぜか知らないが、全く頼りにならないのを知っているのに、女性に彼氏について相談と言うか愚痴を聞かされた事がある」

「本当うちの彼氏って最悪なんだよと悪口を聞かされたから、じゃあ別れりゃいいじゃんと言ったら、でもね良い所もあるんだよとなぜか説得されそうになった事がある」

「あ、そんな事ないと思うよと言えば良かったのかもしれない  
ここから女性は面倒くさい生き物だと言う仮説も立てられる」

「そこは見極めないとモテないんだよ」

「全くモテなくても問題ないけどね」

「達也のような考えと姿勢でモテようとしていたら、馬鹿以外の何物でもない」

「あ、もうそろそろ時間じゃない？」

「そうだね」

「これでデートはばっちりだね」

「そうかもね」

「（全く役に立たないと思うな  
どこか間違ってる気がするから）」

達也はそう思いながらも、表には出さない

財布など取りに行こうと、一度自分の部屋に戻る

部屋の中に入って財布を取る

一応財布の中身を確認すると、

「すげえ

500円玉二枚しかない」

「さすがにこれじゃまずいよな

(いや、いいか

中国では理想の上だとしても、誘った方がおごる習慣があるからな

」

「まあ、何とかなる」

そう言って、達也は自室を出て玄関へと向かった

「行ってきます」

「頑張つてね」

そう言う母に達也は愛想笑いをして、家を出た

## 駅前の銀時計

「5分遅れか

ええっと、あいつは来てねえか

まあ、予想通りだな」

達也はやれやれと言う感じだ

待つ事10分

「おはようございます」

亜紀がやって来た

「応服装を説明すると、上は黒いインナーの上から白い服を着て、下はミニスカートである、以上」

「誘つといて遅れるってどう言う事だよ？」

「女は遅れてるのが常識ですよ」

「ずっと前も言ったけど、それは絶対間違ってるよ  
それにこんな事毎回やってたら、待たされた方怒るだろ」

「他の人はダメかもしれないけど、達也さんは何だか言ったって、最終的には許してくれますから」

「何かそれだと、俺がダメな奴みたいじゃん」

「良い事ですよ」

懐が深いって事なんですから」

「そうかね」

（良い用に利用されてるとしか思えないんだが）

「そうですね」

あ、今日の予定ですけど、まず映画見ますから」



「映画？」

「はい

この近くに映画館あるじゃないですか  
そこで見ようと思って」

「俺1000円しか金ないから、無理だよ」

「何でそれだけしかないんですか？  
普通デートにそれだけで来ます？」

「俺は誘った方が全ておごるって言う習慣だから」

「まあ、いいですけど  
もらった券がありますから」

「券？」

「映画鑑賞券です  
母の友人がくれたんです  
ちよつと二枚分あります」

「まあ、する事何もないからいいけどね」

達也が了解した事によって、二人は 駅近くにある映画館へ仲良  
く(?) 向かった

現在映画館の中

「何見ます

私は赤い糸の伝説が見たいんですけど」

「そんな恋愛物は嫌だ

俺はアクション系が見たいね」

「ええー

アクション系つまらないですよ

やっぱり恋愛物の方が面白いです」

「じゃあ、最初から聞かないでくれる？」

「一応達也さんの意見も聞こうと思って

まあ、私の見たい物と違ったら無視しますけどね」

「もう一度言うけど、だったら最初から聞かないで下さい」

「後で言われるより、聞いて無視した方が良いじゃないですか

ほら、行きますよ」

亜紀はチケットカウンターにすたすたと歩いて行く

「何その凄い自己中の考え

つて、おい待てよ」

達也も急いで亜紀の後を追う

亜紀はチケットカウンターの人に手際良く答えていく

映画鑑賞券を座席指定券に引き換えてもらった

「さて、行きましょうか」

「何か手慣れてたな」

歩きながら喋る二人

「そうですね」

あれぐらい普通だと思いますよ」

「そうなのか」

あんまり映画館来た事がないから分かんないんだよな  
ってかどこに向かってんの？」

「NO・6です」

「NO・6？」

何だそれ？」

「番号です」

ここは複合映画館だからたくさんスクリーンありますよね  
その為にそれぞれに番号をつけてるんです」

「へえー」

凄いな」

達也は感心しきりである

二人はNO・6に到着して、両開きの扉を開けた

扉を開けると広いホールになっていて、大勢の人がいた

「やっぱりカップル多いですね  
恋愛物だから当たり前かもしれませんが」

「男と女が一緒だからってカップルと言うのは飛躍してると思うけどな」

「でも、そう考える人多いと思いますよ  
私達もカップルに見えてるかもしれませんがね」

「そうかもね」  
達也は淡々と言った

「でも、達也さん私より背低いですから、弟と思われるかもしれませんね」

「ああー  
そうかもしれんな」

「大丈夫ですか？  
どこか調子でも悪いんですか？」

「何で？」  
「だっていつもの達也さんなら、お前とカップルに見られるなんて最悪だとか、背低くて何が悪いんだとか言うはずですから」

「そこまで言わないよ  
……あのさー、いつまでここに突っ立てんの  
さっさと席につきなせ」

達也がそう言ったので、亜紀はわかりましたと言って、歩き出した  
達也は亜紀の後に続く

「（そう言えば、エスコートが何か言って言ってたけ  
つてか、エスコートってなんだよ  
そんなの舞踏会ぐらいしか知らないぞ  
舞踏会行った事ないけどな）」

「達也さん、達也さん」

亜紀の声が聞こえる

「え？」

声が出た方を振り向くと、亜紀はワンプロック後ろにいた

あれと思って達也は亜紀の所に戻る

「どこまで行ってるんですか？」

席はこの列にあるんですよ」

「ごめん

ちよつと考え事してたから」

「本当大丈夫ですか？」

亜紀は心配そうに聞く

「大丈夫、大丈夫」

達也はそう言って、一人で階段を下りて行った

「どこか分かってるんですか？」

亜紀はそう言っ、達也を止める

「いや、知らない」

達也は苦笑いだ

「だったら、先に行かないで下さいよ」

亜紀は呆れたように言う

達也はあははと笑う

亜紀はもうと言っ、（達也にとってはどこにあるか分からない席へと進む

「（ちょっと

まじったかな）」

「結構良い位置じゃん

前過ぎず、後ろ過ぎずで」

「でしょ？」

二人は席に座る

ちなみに達也は一番右の通路側、亜紀はその隣りである別に説明した意味はない

「あ、ポップコーン買って来ましょうか？」

やっぱり映画館と言ったら、ポップコーンですから」

「これ終わったら昼飯なんだから、別に良いだろ」

「それもそうですね」

その後は雑談をしながら、映画が始まるのを待つ

ホールが暗くなる

「あ、始まるみたいですよ」

「え？」

ブザー鳴ってないけど」

「最近は何もないんですよ」

「マジで？」

時代を感じるね」

予告やらCMがあつて、ついに本編が始まる

一時間経った頃

達也は大きくあくびをする

「（凄いつまんないんですけど  
良かった、金払わなくて）」

達也はふと亜紀の方を見ると、亜紀はぼろぼろと涙を流している

「（うわ、泣いてるよ、こんなので

まあ、趣味って言うのは人それぞれだから別に良いけどさ」

「(でも、亜紀とは趣味合いそうにないな)」

いつもの達也なら、(達也にとっては)つまらない映画をエンドクレジットなんぞ見ないのだが、亜紀がまだ感動して涙を流しているので、留まった

「良かったですね」

亜紀はハンカチで涙をふく

「そうだね」

(ある意味な)」

達也は努めて本心を語らないようにした

それを聞いて亜紀が怪しい物を見る目つきになる

「な、何？」

「絶対怪しいです」

……あ、分かりました

あなたは達也さんじゃなくて、双子の兄か弟ですね」

「そんな奴いねえよ」

俺の兄弟はみゆちゃんだけだよ」

「それは達也さんが知らないだけです

実は双子がいたんです

それがあなたです」



「何だそれ？」

お前は漫画やドラマの見すぎだ」

「え？」

本当に達也さん何ですか？」

「はい、そうですよ

私が達也ですよ

やっと分かりましたか？」

「分かりました

達也さんの皮を被った宇宙人ですね」

「おおー、それなら俺であって俺でないな  
って、違うわ」

端から見たら、何このカップルと思われるような会話をする二人

二人は映画館を出る

「どこに食べに行きます？」

「マクで良いんじゃない？」

「フランス料理が食べたいです」

「そんな金が高校生にあるか」

「冗談です

私はチロルチョコで大丈夫です」

「一気に小1レベルに下がったな」

「そう言う事でマクに行きましようか」

「日本語の使い方間違ってると思うんだけどな」

何だこのしょうもないのは、と言いたくなるやりとりをしながらマクに向かうのであった

マクに入る二人

「俺が買ってくるから、亜紀は席とっとして」

「え？」

「良いんですか？」

「ああ」

映画おごってもらったから、マクは俺がおごるよ割に合わないかもしれないけどさ」

「そんな事ないですけど、雨が降りそうですね」

そう言って、亜紀は席をとりに行った

「俺っていつもどんな風に見られてんだろ」

達也は軽くシヨックを受けながら、カウンターへと並ぶ

「（しかしマクって凄いね  
500円でたくさん食べれるんだから）」

言っておくが、マクの回し者ではない  
マク一年分とか欲しくはない

「（そう言えば、俺、亜紀の食べたい物聞いてない）」  
今更ながらに気づく達也

「（ま、いつか

チズバーガーは世界最強だからな  
後はオレンジジュースか）」

達也の順番が来たので、店員と（これは）手際よく注文する

あまり待たされずに注文した物全てが用意される

注文した物が乗っているトレイを持ちながら（当たり前）、亜紀を  
探す達也

探してると、手を振っている人を発見

達也はそれが亜紀だと分かって近づくと

達也は注文した物を置いて、席に座る

「ありがとうございます」

「いいよ、別に

あの、亜紀の食べたい物聞いてなかったけど、チズバーガーとオ  
レンジジュースで良かった？」

「あ、はい  
大丈夫ですよ  
私好きですから」

「良かった」

むしゃむしゃと食べる二人

「やっぱチーズバーガーは最強だな」

チーズバーガーを食べ終えた達也が言った

「食べ物に最強って日本語おかしくないですか？」

「確かに食べ物に使うのは間違ってるけど、チーズバーガーはそれで正解なんだよ

芳醇な香りなんて言う馬鹿げた表現はいらないんだよ」

「でもチーズバーガーが最強なんて可哀そうですね」

「そんな事、テレビに出てた4、50代のおっさんがいつてたな  
まあ、一理あるけどな」

ファーストフードが1番うまいなんて味の分からない人が言う事だ  
という考えがあるのだろう  
これは決して間違いではない

「でもさ、食事って言うのは何を食べるかではなく、誰と食べるか  
だろう」

「言つてて恥ずかしくありません？」

「ちよつとな  
でも事実だろ

凄く美味しいのでさ、一人で食べててもあまり美味しくないだろ  
でもさ、コンビニのサンドイッチでも友達とわいわい楽しく食べる  
物は凄く美味しく感じるだろ」

「そうですね

私は今達也さんと一緒にいるから、凄く美味しいです」  
亜紀がにこつと笑う

「それはどうも」

「何ですか？

その反応

もっとこう、ありがとう嬉しいぜマイハニーとか言えないんですか」

「全体的に有り得ないな

最初の方は付き合つてたら言うかもしれないけど、マイハニーなん  
て言つてる奴がいたら、俺はそいつを殴るね」

「警察に捕まりますよ」

「示談金を払うから大丈夫だ」

「達也さんにそんな金ないでしょ

それにお金で解決しようだなんてダメです  
ちゃんと罪は償わないと

ほら、私も一緒に警察行きますから」

「したら行くけど、してないからね」

「ノリが悪いですよ」

「こう言う時は、お、そうだなって言って下さいよ」

「こう言うのに、ノリとかいららないと思う  
もうそろそろ行く？」

ずっと前に二人が食べ終わっていたのだが、少し落ち着く為に留まっていたのだ

「そうですね」

亜紀が了解したので、達也はトレイを持ってごみ箱へ行って、トレイの上に乗っている物を捨てる  
そしてトレイをごみ箱の上に載せる

そして、マックを出す

「これからどうする？」

「って言っても、俺もお金ないから、服を買うのについてくべらしいし  
か出来ないけど」

「私も500円しかないので、それもダメです」

「俺に文句言った癖に、何でお前はそれだけしか持っていないの？」

「ほら最近不景気ですから」

お母さん内定取り消しとかされちゃって」

「亜紀の母さんって働いてたんじゃなかったけ？  
それを言うなら、派遣切りとか給料カットじゃないの？」

「いえ

母は正社員ですし、給料カットもされてません  
ただ、言ってみただけです」

「何だそれ？」

「お金ないですから、私の家でのんびりしましょうか？」

「別にいいけど、それはデートって言うのか？」

「家で仲睦まじくしてるカップルは意外とたくさんいますよ  
不景気でもっと増えました」

「もうその不景気ネタいいから

まあ、お前が良いんなら良いけどさ」

「じゃあ、そう言う事で」

亜紀は嬉しそうに言った

そして、なぜか亜紀は深呼吸をする

「（何で深呼吸なんかしてるんだ？

嫌な予感って言うより、面倒くさい事になりそうだ）」

第28話・怒られるうちが花（後書き）

ユニークアクセスが2万突破しました。これも読者の皆様のおかげです。      こんなつまらない小説を読んでくださってありがとうございます



## 第29話：別に路線は変わってない

今達也と亜紀はマクから亜紀の家に向かう途中である

二人はゆったりとした歩調で、亜紀の家までの道のりを歩く。前からずっとそうだったのだが、道ゆく男達からチラチラと視線を感じる。もちろん、それは亜紀に対しての視線である

「何かさつきから視線を感じるんですけど」

「まあ、亜紀は可愛いからな」  
達也は黙っていればな

と言つのもう少して口から出そうになるのを飲み込んで、努めて笑顔で言う。

男の視線を感じながら、やっと家につく二人

「さ、入りましょう」

そう言つて、亜紀はドアを開けて、一人でさっさと入つて言った

「あいつつて、どんどん一人で進んでくよな  
まあ、ここはあいつの家だから当たり前だけど」  
達也はぼそつと呟きながら、亜紀の言つた事に従う

二人はリビングに向かうと、

「あら、お友達？」

そこには亜紀の母親らしき人がいた

「あ、こんにちは  
俺、麻倉達也って言います

……あの、亜紀さんのお母さんでしょうか？」

「ええ、そうよ

あなたが麻倉君ね

亜紀からうるさいくらい話しを聞いてるわ

「そんなに言ってるよ」

「あら、そうかしら

いつも達也さん、達也さん言ってるのはどこのどなたかしら？」  
亜紀の母はふふっと笑う

「もう、お母さんったら」

亜紀はちよっと焦った顔で言う

「（亜紀の悲しい顔は見た事あるが、焦った顔は初めて見たね  
やっぱり、母は強しなのか）」

「達也さん、私の部屋ちらかってますから整理してきますね  
お母さん、変な事言わないでよね」

そう忠告してから、亜紀は二階へと上がって言った

「時間がかかるだろうから、座って」

そこには四人掛けのテーブルがあった

「あ、はい

ありがとうございます」

そう言って、達也は亜紀の母と向かいあって座る

「さっきも言ったけど、亜紀ったらいつもあなたの事ばかり話すのよ」

「そう……なんですか？」

「ええ」

もう、それは凄い嬉しいって顔に現れているのよ」

「へえー、そうなんですか」

……何か二人はやっぱり家族なんだなって思いました」

「うん？」

「どうして？」

「亜紀さんの焦った顔は初めて見ましたから」

それに嬉しい顔って言うのもあんまり見た事ないんで」

「あの子無理して笑ってたり作り笑いをする事が多いからねでも、私にあなたの事を話してる時、本当に笑ってるのよ」

「それは嬉しい事なんでしょうね」

達也は苦笑いをしながら言った

亜紀の母はそれに気づいたのか、

「亜紀の言っていた通りね」  
と言った

「え？」

何がですか？」

「あの子がね、達也さんは私の事嫌いって言ってたから」

「え、まだそんな事言ってたんですか？

確かに恋愛感情はないけど、友達としては好きだよって前言ったんですけど」

「あの子は麻倉君が優しいから気遣って言ってるんだと思ってるわ」

「俺は他人から冷たいと言われますし、自分でも優しいなんて思いませんよ」

「私は麻倉君優しいと思うわよ」

亜紀の話を聞いてるとそう思うわ

それに本当に優しい人は自分で優しいって言わないと思うけどな」

「まあ、友達の一にはお人よしって言われましたけど」

「ほら」

やっぱり

冷たいと言われるのは麻倉君が他人とあまり関わりたくないと思ってるからじゃないかな？

あ、ごめんね

失礼な事言っちゃって」

「いえ、大丈夫です

事実ですから

……それにしても、まだ嫌われてると思ってたんですね  
凄いプラス思考だと思ってたんですけど」

「あの子はマイナス思考なのに無理にプラス思考に見せてる所があるからね

その点であの子はどこにでもいる普通の女の子なのよ  
少し口が悪いだけのね」

あれは少しと言うのでしょうかと問いたくなくなったが、何とか堪えた

「そうですね

(だいぶ妄想癖がある普通の女の子だけど)「  
とも思った

「終わりましたよ」

二階からリビングに来た亜紀が言った

「早く二階に行きましょう」

「ああ

じゃあ、失礼します」

「ええ、ゆっくりして言ってね」

亜紀の母はにっこりと笑いながら言った

はいと達也は答えて、亜紀と一緒に二階へと上がって行く

亜紀は自分の部屋のドアの前で止まって、くるっと振り返る

「お母さんは達也さんに何も変な事言ってますんよね?」

「うん?」

ああ、今日の天気とかイスラエルとパレスチナの話しぐらいだね」

「何でそんな嘘つくんですか？」

「じめんなさい」

亜紀は全くと言いながら自室の部屋のドアを開ける

「（北朝鮮の話の方が良かったかな）」

何か根本的に間違っている達也は亜紀に続いて部屋に入る

「アルミ缶の上にある蜜柑」

達也は決してくだらないダジャレを言った訳ではない  
本当にアルミ缶の上に蜜柑があるのである

「何でこんなのがあるの？」

「達也さんにダジャレを言わせる為です  
案の定言いましたね」  
亜紀は嬉しそうに言った

達也は呆れた顔をしながら、ドアを閉めようとすると、

「あ、開けといて下さい」

「え？」

何で？」

当然のように疑問に思う達也

「ごめんなさい

まだ男の人と二人だけで密室にいるの怖いんで」

「そ、そっか

じゃ、じゃあ、しょうがないよね」

亜紀はごめんなさいと謝るが、達也は別に謝る必要はないと言う

その後は、静寂が辺りを包んで、気まずい雰囲気になる

「と、とにかく座ろっか」

達也は何とか言葉を口に出す

達也がそう言ったので、二人は床に座る

なおも、重い空気が辺りを包む

「あれ？

そう言えばさ、ホテル行った時に一人で部屋にいたけど、あれはいいの？」

「あそこは大きかったですけど、ここは狭いですから」

「そうなんだ」

達也はそう言ったが、少し疑問に思った

「（そう言う問題なのか

まあ、された事ないから分からないし、された後どうなるかも人そ

れぞれだけどさ

でもさ、俺の布団に入ってきたよな

あれは良いのか？

そもそも入ってない？

小夜ちゃんも枕じゃないのって言ってたしな」

達也は頭が混乱している

「これ見せたくて、家に呼んだんですよ」

亜紀が何か物を達也に見せてきた

それはゲームソフトであった

タイトルは英語で書かれている

一般人なら最後の幻想

ちよつと知っていれば、最後の夢

ファンならば、

究極の幻想と訳す物である

「これ？」

達也は頭が混乱しているのに、いきなりソフトを出されて更に混乱した

「これがこのシリーズの中で一番好きなんですよ」

達也に構わず突き進む亜紀

「そ、そうなんだ」

「やっぱりこの魅力は人間が人間を救うって所だと思っんですよ



ほら、主人公って人間としては何か欠けてる所があるじゃないですか  
それをヒロインが人間にするって言うのか、戻すって言うのか、そ  
れが好きなんですよ  
もちろん、それは一方的じゃなくて、ヒロインも主人公に支えられ  
るって所が良いんですよね」

亜紀はさっきの静けさはどこへやらと言う程、マシンガントークを  
する

「何かそのゲームを俺があたかも知っているような話し方なんだけ  
ど」

達也は混乱状態から抜け出せたらしい

「え？知らないんですか？  
こんな名作を」

「そりゃあ、やった事はあるけどさ  
まずやった事があるかどうか聞かない？」

「やった事あるなら良いじゃないですか」

「（亜紀に言っても無駄だったか）」

毎度のように、諦めが早い達也

「後、二人が純粹に想いつてる所が良いんですよね  
誰かを好きになる時ってこんな感じなんだらうなって」

「あれはただのバカップルだと思うけどな」

「でも、この名作はなぜかネットでは凄い叩かれてるんですよね」

「まあ、このゲームはヒロインで決まると言っても過言ではないかな」

ヒロインのうざさ加減にリモコンを投げてテレビを壊しそうになった奴だっているはずだ

「それもあるかもしれませんが、私はシステムが面倒くさいって言うのが一番だと思うんですよ」

「ああ、確かに」

俺は全員レベル100にして凄い苦労したしレベル上げた方が苦労するって何だよって思ったよ

「後魔法を取るのが面倒くさいですからね」

「これで名作と言えるのかな？」

「本当に達也さんは分かってないですね」

面倒くさいからこそやりがいがあるんですよ

簡単のをクリアしたって何も面白くありません

難しいからこそ、クリアした時に達成感があるんですよ

「そう言う考え方もあるか」

「だから私は名作だと思ってるんです」

そして私はあの二人のようなカップルになりたいと思ってるんです

「え？」

あんなバカツプルになりたいの？

ああ言うの見てると、無性に腹が立つんだけど」

「そんな事言ってる、主人公に斬り殺されますよ  
ヒロイン命なんですから」

「あの武器って撃てないんだよな」

弾丸は飛ばなくて、発砲の振動で攻撃力が増えるそうだ

「いいですよね

何が何でもヒロインを守るって言うのは  
素敵だと思います」

話しが噛み合っていない上に、堂々巡りである

「ちょっとあれは異常だと思うけどな

亜紀ってこう言う普通のもやるんだな」

「普通って何ですか？

私にとってはギャルゲーも普通です」

「さようですか」

「そう言えば、達也さんってみゆきちゃんと血繋がってます？」

「繋がってますけど、何か？」

「ほら、よくあるじゃないですか

血が繋がってない妹と恋愛するのって」

「よくねーよ」

それはお前が持つてるゲームぐらいだ」

「いえ、血が繋がっててもする事はありませんね  
禁断の恋と言つのですね」

「(さすが妄想少女  
ちよつと気持ち悪い)」

「達也さん、本当にみゆきちゃんに恋愛感情持ってないんですか？」

「何度も言いますが、持ってませんよ  
つて言うか、普通持たないでしょ」

「分かりませんね  
達也さん、普通じゃないですから」

「俺は自分を普通じゃないと思っている  
でもな、本当に普通じゃない人は、自分で普通じゃないとは思わな  
いよ」

自分は普通って思ってるよ」

本当の変人は自分を変人と思っていない  
自分は一般人と何も変わりはないと思っているのである  
狂人もまたしかり

「それもそうですね  
でも、本当良かったです

達也さんがみゆきちゃんに恋愛感情持ってなくて

もしそうだったら、私に勝ち目はないですから」

「恋愛に勝ち負けってあるのかな？」

「まあ、勝つと思うな

思えば負けよと言う歌詞がありますからね」

「それは元々の意味と違うと思うが」

「そうですね

じゃあ、達也さんの言う普通じゃないゲームしますか」

そう言って、亜紀にとっては普通のゲームソフトを出した

「いや、結構です」

「何ですか？

これ面白いのに」

「それは趣味の押し付けって言うんだよ」

自分の好きなのを他の人にも好きになって欲しいと言う気持ちも分らないでもない

しかし、嫌いなのを押し付けられるその人の気持ちも考えて欲しいもし、それでも分からない人がいたら、対策として、その人の嫌いなのを押し付けるのである

嫌がっても嫌がっても押し付けるのである

なお、これは周囲の人間からの痛い視線とその人との人間関係が壊れる可能性大なので、それでも良いなら、止めはしない

「それもそうですよね  
それにこれはバッドエンドがメインですから、達也さんは嫌いでし  
ようね」

「何でそんなの持ってるの？  
亜紀って、バッドエンド好きだったか？」

「私もハッピーエンドの方が好きなんですけど、これはバッドエン  
ドの方が好きなんです」

「どんななのなの？  
それ？」

「主人公かヒロイン、どちらかが死にます  
正確に言えば、主人公は殺されて、ヒロインは自殺または事故死ま  
たは病死します  
更に言えば、友達もどんどん殺されていきます」

「聞いている限りでは良いと思えないんだけど」

「それは、これはギャルゲーと言われてますが、実は推理物だから  
です  
ヒロインに色々あつて、その為に主人公またはヒロインの友達を殺  
していつて、ヒロインが犯人であると突き止めないと主人公が死に  
ます  
突き止めても死ぬ場合もありますが  
もしくは、これもまたヒロインに色々あるのですが、さっきも言っ  
たように自殺または事故死または病死します」

「かなり省いた説明だな」

「しょうがないじゃないですか  
ちゃんとした説明だと、一日かかります  
それでも良いんですか？」

「いえ、結構です」

「これってハッピーエンドもあるんですけど、どうしても矛盾して  
いると言うか、雑に作られてるんですよ  
だからこそ、バッドエンドが面白いんです  
人を殺したり自殺するのには共感できませんけど」

「そうかな」

そのゲームをやった事がないから内容は分からないし、人を殺す  
るのは確かに共感できないけど 自殺と言うのは分からなくもないよ  
俺自信、積極的じゃないけど死んでも良いって思ってるから  
条件付きだけだな」

「どうしてですか？」

自然と亜紀の声が尖る

「生きる理由が無いから」

かと言つて、死ぬ理由も無いがな  
まあ、だから生きてるんだろうな」

ジャック・リゴーは次のように書き残している  
生きる理由はないが、また、死ぬ理由もない  
人生への軽蔑を示すべく我々に残された唯一の方法は、それを受け  
入れることである

人生は、苦勞して捨てるほどの価値もないと  
余談だが、ジャック・リゴーは自殺した

「駄目です」

そう言うのと同時ぐらいに亜紀が達也を抱きしめる  
それも、何かに耐えるように力強く

「あの、痛いんですけど  
つてか震えてるよね」

亜紀はわなわなと全身が震えている

「震えてません」

亜紀は大声を出し、前よりも抱きしめる力が強くなる

「余計痛くなっただけど」

「我慢して下さい

そんな事より、死んじゃ駄目です

死んだら、何もできませんよ

無なんですよ

確かに辛い事もいっぱいあるかもしれないけどそれが生きてるっ  
て事なんです」

亜紀は声を震わせながらもはっきりと達也に伝わるように言う

「（何かありきたりなセリフだな）」  
しかし、達也には届かなかったようだ

「あのさ、俺死んでも良いと言っただけど、死にたいとは言っていない



からね

「え？」

亜紀は達也から離れて達也の目を見る  
その瞳は涙で濡れていた

「（泣いてらっしやる  
俺何か悪い事した？）」

「どうゆう事ですか？  
死にたくはないけど、死んでも良いつて  
同じじゃないですか」

「いや、違うだろ  
死にたいって言うのは積極的な発言だろ  
それに対して、死んでも良いつて言うのはもし何々なら死んでも良  
いつて言う消極的発言じゃん」

「そんなのおかしいです」

「おかしい？」

これについて、お前におかしいと言う権利なんてあるのか？  
じゃあ、お前はこう言う事思った事ないのかよ」

「死のうとした事はありません  
父親にされたちよつと後に」

「ごめん」

達也は気まずそうに言った

「いえ、いいんです」

……達也さんは生きる理由はないと言っていましたけど、私にはありません

それは他人の為に生きると言ってます」

「奉仕活動でもしろって事？」

亜紀がかすかに首を振る

「違います」

その人の支えになると言う事です」

「意味が分からないんですけど」

「私が死んで何とも思わない人もいれば、私が死んで悲しむ人もいます」

私はその悲しむ人を悲しませたくないんです  
だから生きる事によってその人を支えたいんです」

「やっぱり今いち意味が分からないんですけど」

まあ、それは俺はそう言う考えがないからなのかな  
でも、何でそう言う風に思うようになったの？

あ、ええっと、話したくないなら、話さなくて良いよ」  
「大丈夫です」

亜紀は大きく息を吸ってはいてをしてから話し始めた

「今でもその事は覚えてます」

忘れる事はできません

私が父親にされた後は言葉にできない程の苦しみでした  
ふいに父親にされた事や言葉を思いだしたり、ちよつとした事でびくびくしたり、人と話すのが怖かったりと  
私はそれに耐えられなくて、死のうとしました  
なぜか分かりませんが、ビルの屋上に行つて、フェンスを越えて死のうとした瞬間に携帯の着信音が鳴つたんです  
そのまま気にせず死ねば良かったんですが、なぜか気になってしまつて携帯を見てみたら、母からのメールでした」

亜紀は少し疲れたのか分からないが、ふつーとため息をつく  
そしてまた話し始める

「母からのメールには今日の夕食何にすると」

「それだけ？」

「はい  
それだけです」

最初は凄く母の事を憎みました  
母が父と結婚したせいで私がこんな目にあつたのに、何呑気にこんなくならない事をメールしてくるのって  
でも、その後小夜からもメールが来たんです」

「小夜からのメールには今日の夕食お姉ちゃんの大好きなハンバーグだよって

それを見た瞬間に死ぬ事が馬鹿らしく思えたんです」

「え？」

「何で？」

「だって、小夜も父親にされて私と同じ、いえそれ以上に苦しんでるんです

それがですよ、表明的かもしれないませんが、あんなメール送ってきたんですから、馬鹿らしく思えます」

「そんなもんなのかなあ

……それで他人の為に生きようと思ったの？」

「いえ、違います

家に帰って、夕食の時に母に私が死んだら悲しいって聞いてたら、当たり前前の事聞かないでって言われたんです

小夜にも私もお姉ちゃんも死んだら悲しいよって言われたんです

その時に私は他人、母と小夜の為に生きようと思ったんです

私は父親を絶対に許さないですし、これが神様の試練だとも思っています

他の被害者はそう思わないかもしれないし、綺麗事かもしれませんが、でも、私はそう思ったんです」

レイプが神の試練などと言うのは馬鹿げた話しである

レイプされた被害者の一人が次のように言っている

その日、私だった人間は私から奪われ、私の家族から奪われた。

私は今後死ぬまで決して元通りにならないだろうと

また一部の女性は乱交に走り、その人らしくない行動をとる。

乱交する理由は様々だが一例を上げると、無理矢理されるのではと言う恐怖がいつも付き纏うが、乱交している時は、自分が積極的にするので、その時だけは無理矢理されると言う恐怖から逃れられるかららしい

その人の人生を壊して置いて、それが神の試練だとか、前世の行いが悪かったからだと言う馬鹿はこの事を知っているのだろうか

知っていないのなら、許せないだろうが、まだ救える馬鹿である  
知っていて言っているのなら、極悪非道な人物である

「でも、それってさ、悲しんでくれる人がいたらの話しだろ  
そういうのがいない人はどうすんだよ

それにそういう人がいたとしても、自分なんかと思っただらどうする  
の？

別に亜紀の考えがおかしいって訳じゃないし、父親に酷い事された  
のにそう考えるのは凄いいけどさ」

「それは無責任なようですが、私にも分かりません  
考えるのは自分であって強制されるものではありませんから  
でも、達也さんには悲しむ人がいるじゃないですか  
達也さんだって、それは分かってるはずですよ」

「悲しむ人ねー  
母親ぐらいしか思いあたらないけど」

「十分じゃないですか  
それに、達也さんが死んで悲しむ人は、みゆきちゃんや藍沢先輩や  
山口先輩、いっぱいいるじゃないですか」

「いっぱいねー」

亜紀が言ったのは俺が死んでも悲しまないと思うけどな」

「そんな事ないです  
みゆきちゃんは妹だし、藍沢先輩や山口先輩は親友なんですよね  
だったら、思うに決まってるじゃないですか」

「仲が悪い兄妹って結構いるよね  
それに俺は親友だと思ってるけど、あの二人はそう思っていないかも

しない」

「達也さんとみゆきちゃんは今仲悪くないでしょ  
達也さんはみゆきちゃんの事好きだし、みゆきちゃんも達也さんの  
事が好きです」

藍沢先輩と山口先輩は達也さんの事親友だと思ってますよ  
そうじゃなきゃ、達也さんなんかと一緒にいませんよ」

「最後のがひつかかるけど、そう信じたいね  
……まっ、考えてみるよ」

「考えた末に死ぬなんて言わないで下さいね」  
亜紀は心配げに言った

「そんな事言わないから安心しろ」

「良かった」

亜紀は安堵の声を出す

「蒸し返して悪いんだけどさ、自殺ってさ人から見たらそんな事で  
死ぬなんて言うのが大半だよな

でも、その人にとっては重要なんだよな、うん」

と達也は自分で言っただけで納得してしまった  
何だこいつはって感じである

人の悩みの大半は他人からみたら些細でくだらないものである  
しかし、本人にとっては重大で深刻なものなのである  
悩んで言うのは当人になってみないと分からないものと言う事な  
のである

「私の悩みは些細な事なんですネ」

「そ、そんな事ないぜ」

亜紀の悩みは世界で一番重大だよ」

達也はしまったと言う顔をする

しかし、時既に遅し

「男の人がそう言う考えだから、性犯罪はなくならないですよネ」

亜紀の言葉を聞いて、ナイフでぐさつと刺されたような痛みが胸に走る達也

お前はナイフで刺された事あんのかよと言うツッコミはなしでお願いしたい

「ごめんなさい」

達也はいたたまれなくなつて、謝りの言葉を述べる

「何で達也さんが謝るんですか？」

この空気が嫌だったからとは言えないので、

「男を代表して謝つたんだよ

一応俺も男だからさ」

と達也は言った

「達也さんって男だったんですネ」

あまりのショックに、達也は床に倒れる

「大丈夫ですか？」

言葉とは裏腹に、全く心配していない声である

達也はぴくりとも動かない

「返事がない

ただの屍のようだ」

「俺死んでねえよ

って言うか、何でお前それ知ってたんだよ」

達也ががばっと起き上がる

「何でって、そのゲームした事がありますから」

「え？」

亜紀ってそう言う系統もやるの？」

「はい

色々なジャンルのやりますよ

ギャルゲーばかりしてると思ってたんですか？」

「はい、そう思っていました」

「さっきもそうじゃないのについて話しましたし、前の時も話したじゃないですか」

「ああ、そう言えばそうだったけな

でも、俺の中では亜紀〓ギャルゲーの図式が出来上がってるんだよね」



「それも間違いではありませんがね

あ、そう言えば、前も土下座してましたよね」

「前もって？

今日は土下座してないけど」

「床に頭を擦りつけてる点では一緒ですよね？」

「そうですね

もう本当にどうでもいいやと言う感じに、今まで以上になる達也であつた

第29話：別に路線は変わってない（後書き）

何でこんな話しになってしまったかと言うと、一つはもしかしたらレイプされたから達也と出会えたと思われなくなかったからです。

その為にこの内容を書いたんです。

しかし、

どうしてもその内容になってしまう。昔の自分に会ったら、お前絶対後で苦勞するから、レイプされた話しは書くなつてね。

なぜこの話しを書いてしまったのかは秘密です。そして自殺についての話しなんですが、親友と呼べる女性に、何で人って生きようとするのかなんて聞いたんですよ。これは一概には言えませんが、半数ぐらいは生きようとするでしょう。それは何故かなって思つてこう言うの他の友達には聞けませんから。はあ？とか言われ

たり、死んじやだめだよと言われたりしますから。でも、この親友は考えてくれるんですね。

その親友が言ったのは、死

ぬ理由がないからだと言つたんです。

その後も話しあいま

したそれをこの物語に当てはめて書いたんです。ギャルゲーと

かの知識はまたまた女友達が大好きでして、その子にいつも無駄な知識を聞かされてですね。まあ、半分以上聞き流し

てるんですけど。

それで思ったのが、ギャルゲー大好き女の

子とギャルゲーに全く興味ない男のやりとりって面白いんじゃないかと作ったのがこれなんです。まあ、あんまり面白くないのが実情ですが

**第30話：同情するなら金をくれ（前書き）**

サブタイトルと内容は関係ありません。

### 第30話：同情するなら金をくれ

「ふぁー」

と達也は大きなあくびをした

今いるのは教室で、達也は先程まで寝ていたのである

達也の席の前に人が立っていたので、達也は誰だと思って寝ぼけ眼で顔を見上げた

その人はあおいであり、何故か文化祭の時に製作したメイド服を着ていた

「おはようございます

ご主人様」

あおいはどこぞの喫茶店のメイドが言いそうな言葉を口に出した

達也は寝ぼけているのか、ぼーっとした顔であおいを見る

そして、何を思ったか、達也はまた寝ようとした

その瞬間後ろから思いつきり叩かれた

「痛っ

何すんだよ」

後ろを見ると、そこには亜紀がいた

「何すんだよじゃないですよ

あおいがメイド姿なのに、何で寝ようとするんですか」

「夢か寝ぼけてるのかなって思って  
目の前にメイドがいたら、誰だってそう思うだろ」

そもそも目の前にメイドがいる事自体おかしいのである

「目の前にメイドがいたら、萌えーと言うのが普通です」

「そんなもん、普通じゃねーよ」

そう言うのは、気持ち悪い奴らが言ってるだけだ」

「テレビに出てくるオタクは気持ち悪いですが、そうじゃないオタクも一杯います」

萌えと言うオタクではないが、電車オタクなら二人見た事がある

一人は言っては悪いが、明らかにオタクと言う感じの男、もう一人はおしゃれなかつこいい男である

よって、萌えと言うオタクにも（かつこいい人は少ないかもしれないが）普通以上の人は多いのかもしれない

「さ、さつきから、ず、ずっと見られてるんですけど」

あおいは顔を真っ赤にし、恥ずかしそうに聞いた

「その格好じゃね」

そう達也は言った

教室にメイド服姿の女の子がいたら、男女関係なく好奇の目で見るか、目をそらすかのどちらかだろう

「は、恥ずかしいので、着替えて来ます」

そう言っただあおいは教室を去った

恐らくトイレにでも行ったのだろう

「男って言うのは何でこうも幼馴染が好きなんでしょうね」  
亜紀は達也の前の席に座って言った

「いつもほんつとに唐突に意味の分からない事言うよな  
で、どう言う経路でそう言う結論になったか、馬鹿な俺にも分かる  
ように説明してくれる？」

「やっぱり裸エプロンと同じぐらい男の夢なんですかね」

「裸エプロンって男の夢なのか  
初めて聞いたけど

ってか俺の質問は無視ですか」

「男なら誰だつて一度ぐらいは思いますよ  
まあ、達也さんは変だから思わないかもしれませんが」

「誰に聞いたのそれ？  
だから、質問に答えやがれ、この野郎」

「漫画やゲームで幼馴染と裸のエプロンは男の夢って言っていました  
私は野郎ではありません」

「漫画かよ  
お前の情報源ってほぼ漫画とかくだらないゲームだよな  
何でそこには食いつくんだよ」

「漫画やゲームは売れるからそう書いてるんですよ  
だったら男はそう思ってるって事ですよ」

食指が動くからです」

「それはお前の読んでいるのが特殊だからじゃないのか？  
って言うか俺もだけど、最後の文意味繋がってないよ」

「マ ジンヤジ ンプは特殊ではありません

そもそも私の読んだりゲームしているのは至って一般的です  
私は分かるから大丈夫です

これが愛の力って言うんでしょうね」

「お前のやってるのは特殊じゃないかもしれんが、一般的ではない  
と思う

それが人間愛だと言うのなら納得だが、決してお前の思っている物  
ではない」

「幼馴染なんてこの世からいなくなれ」

「（もしド ゴンボールを7個集めたら、亜紀にコミュニケーショ  
ンと言う能力を与えて欲しい）

幼馴染に何か恨みでもあるのか？」

「とあるゲームで攻略できるのが幼なじみだけなんです  
他にも女の子たくさんでてるのに」

「ギャルゲーって相手を選択できるの？」

「選択って言うか、一般的な物には女の子が何人かいて、どんな選  
択肢を選ぶかによってそれぞれのストーリーに入る事ができるんです  
そのストーリーに入れる女の子を攻略できるキャラと言っんです」

「へえー」

「それでさっき言ったとあるゲームに戻ると、攻略できるのが幼なじみだけなんです

後は引き立て役なんですよ

私は幼なじみより真由美ちゃんの方が好きなのに」

「誰だよ、真由美ちゃんって」

「真由美ちゃんは凄い良い子なんですよ

ちよつと口が悪いんですけど、根は良い子なんですそれに引き換えあの幼なじみは確実に性格悪いです瞳をうるうるさせるなんてあの馬鹿女が」

「だから真由美ちゃんって誰だよ」

「ゲームの中で私が応援しているキャラの名前ですそれぐらい話しの流れで分かるでしょ」

「分かるとしても、一応言うのが筋つてもんだらつがそれにお前確実に真由美って言うのに偏り過ぎだろ幼なじみはそんなに性格悪くねえんじゃねえか」

「だから、お前って言わないで下さいって、何度言えば分かるんですか

馬鹿なんですか

ここ的高校に通ってるぐらいですし」

「ここ的高校は頭良くねえけど、馬鹿ではないよって言うか、お前も今通ってるじゃん」



「私は家から近かったからここを選んだんです  
私の実力なら、もうワンランク上にいけました」

「ワンランクぐらいで馬鹿扱いすんじゃないよ」

「ワンランク違ったら、大分違いますよ」

「なんなら、格の違いを見せてあげましょうか」

「ぜひ見せてもらいたいね」

「逆に帰りうちにしてやるよ」

「どうせ男なんて演技している女に騙されるんですよ」

「は？」

「何か話し変わってない？」

「あんな天然なのが現実にいる訳ありません  
絶対あれは計算です」

「何言ってるのか全然分からないんだけど」

「幼なじみの話ですよ」

瞳をうるうるさせて可愛いく謝ったりとか、喋ってる途中に噛んだ  
りとか、あんな女は現実にいません

いるとしたら、馬鹿な男を騙す為に演技している女です」

亜紀の声にあんな女絶対許せないと云う嫌悪の念がはっきりと表れ  
ている

計算された純情さや可憐さは、どこか汚いものを含みつつも、大半  
の男は魅了される

同性である女性は、この汚さを敏感に感じ取る為、男に媚びる女性を嫌う傾向にあるのだ

「まあ、確かにそう言うのは演技だろうけど、そんなにその幼なじみは聞いた限りでは性格悪いって訳じゃないと思うんだけど」

亜紀は馬鹿にした目で達也を見る

「はあー」

何で男って言うのは、こんな女が好きなんでしょうね」

「別に好きって言うてる訳じゃないよ

でもさ、別に演技して男に好かれたっていいじゃん

何も悪い事してないんだから」

「だって汚いじゃないですか

そんな事してまで男に好かれないんですかって話しなんです」

「世の中は綺麗事では回ってかないぜ

まあ、そんな大それた話しじゃなくても、現実の人間関係って言うのはドラマでやっているのなんかより、百倍汚いぜ

亜紀の言う演技を汚いと言うならな」

「何か的外れな気がします

例え達也さんの言う事が正しくても、男の前では180度変わるって言うのは駄目でしょ」

「何で駄目なの？」

別に変わったっていいじゃん

人によって態度が変わるって言うのは悪い事みたいに言われるけどさ

だつてそうだろ

友達に対しての態度と先生に対しての態度は違ふべきだと俺は思つただけど、それは悪い事じゃなくて良い事だと思つたよ」

「それは礼儀つて言う物ですよ

男の前で態度が変わるのは違います」

「あれだ、親しき中にも礼儀ありつて言うだろ  
そんなもんだよ」

「態度変わるつて言うのが礼儀なんですか？」

「礼儀と言うか、現代社会を生きていく為には賢い選択だな

本能なのか教育などによつて植え付けられているのか分からないが、男の大半はプライドが高く、女の上に立たれると嫌なんだよ

俺には全く理解できない話しなのだが、男が女を恋人として選ぶ時、自分より頭が悪い大学や高校の出身か給料が低い女性を選ぶらしいこれもプライドのなせる事なのかもな」

「自分より給料が高い女性や頭の良い大学出身の人と付き合つたり結婚したりする人もいますよ

この人達にはプライドがないつて言うんですか？」

「そうじゃない

プライドはあるよ

俺の周りの大人に妻の方が給料何倍も良い人がいるが、その人はその金を家の為に使うな、外で使つてくれつていつたんだぜ

これは自分のプライドを守る為だろ

夫より頭の良い女性は夫を立てる為に、わざと単語や事件を知らない振りをする人もいるんだよ

まあ、こんな事をするのは恋愛感情としての好きとか色々な事情が

あるんだろうけど、何でわざわざプライベートでこんな面倒くさい事するのか、全く理解できないがな」

「好きな人だったら、その人に嫌われない為に、我慢したりしますよ  
少なくとも、私はそうします」

何を思ったか、とち狂った事を言う亜紀

「（何言っちゃってんだろ、この人は  
やりたい放題やってるだろ）」

「何ですか？」

亜紀にじろりと睨まれる達也

「いえ、何にもです」

「たこ焼き食べる？」

炎夏が二人に声をかけてきた

手にはプラスチックの容器に入ったたこ焼きを持っていた

「何で炎夏はたこ焼き食べてるんだ？」

学校に売ってないだろ？」

「学校の近くにたこ焼き屋さんあるでしょ

そこで買ってきんだよ」

「学校を出る門とか先生とか見張ってて、外に出れないだろ」

「あんな見張り方じゃ私を捕まえられないよ

グラウンドの方も見張らないとね」

「お前は忍者か」

「そうさ」

あたいはくのいちの炎夏って言うんだよ  
よろしくな」

「うわっ」

今この人凄い恥ずい事言ったよ」

「かなり痛い人ですね」

「何それ？」

せっかく乗って上げたのに」  
不機嫌になる炎夏

「別に乗ってくれて言った訳じゃねえし」

「それに乗り方が違うと思います」

「ってか、齒に青のり付いてるよ」

「え？」

本当？」

炎夏は咄嗟に手で口を押さえる

「ああ

鏡で見てこいよ」

炎夏はこくつと頷いて、たこ焼きを持ったまま、トイレへと向かった

「あ、たこ焼き全部食べてからのの方が良かったんじゃないか  
どうせまた、青のり付くんだし  
ってか、食べ物トイレに持ってくか？」

「ほんとつに達也さんは乙女心が分かんないですね  
一体何回言ったら分かるんですか？」

「多分何回言っても分かんねえよ  
俺、乙女じゃないから」  
と達也は言った

また、

「（第一乙女なんているのかね  
少なくとも、炎夏や亜紀は乙女じゃないな）」  
と思った

「ギャルゲーをやって、少しでも乙女心を分かって下さい」

「ギャルゲーやっても乙女心は全く分かんないと思うが  
それより、少女漫画読んだ方がよっぽど有益だろ」

ギャルゲーは多くは男が作って、男が消費する娯楽物である  
女性では、男の欲望というのが今いち分らない為に、どういう女  
性キャラクターが男に支持されるのか、今ひとつ理解できないよう  
である

すなわち、ギャルゲーに出てくる女性キャラと言うのは男の欲望の  
産物であり、女性から見れば、生理的嫌悪を覚える場合がある

しかし、少女漫画はその名の通り、男より少女が読む物であるから、  
亜紀が言う乙女心が分かる確率は高いだろう

「じゃあ、少女漫画読んで下さい」

亜紀はお願いするのではなく、命令口調で言った

「嫌だね」

ギャルゲーも少女漫画も大嫌いだから」

「親友の頼みが聞けないって言うんですか」

「いつからお前と親友になつたんだよ」

つてかそれ、親友に対する頼み方じゃないよね」

「親友と言うのはいつなつたか分からないから親友なんですよ」

「良い事みたいに言ってるじゃねえよ」

……はあー、もう何か疲れた」

「ネ口状態ですか？」

「ネ口状態って何だよ」

暴君ネ口のように狂った状態の事ですか？」

達也はなぜか丁寧語である

暴君ネ口と言われて久しいが、最初の頃は善政だったのである

また、尾鰭がついただけであって、そこまで酷くはないと言つ説もある

「違いますよ」

ネ口状態と言うのは、パト ッシュ、僕、もう疲れたよという状態を言います

つまりド クエで言うHPが赤色の状態です」

「そりゃやばいね

でも、俺はそんなに危ない状態じゃないから」

「じゃあ、あれですか

もう少しでボス倒せそうなのに、仲間のHPが少なくって、しかもM  
Pや薬草がない状態」

「確かにそれは危険だけど、違う意味だよね」

「じゃあ、次は……」

「いや、もういいから

次って、わざとですか、この野郎」

今の達也には暴君ネロ状態の方が正解かもしれない

「そう言えば、二人とも遅いですね」

「ああ、そうだな

なんか用事でもできてどっか行ったんじゃない？

あおいちゃんは自分の教室に帰ったかもしれないし」

「ちょっと二人を探してきます

面白い事になってるかもしれないので」

亜紀は二人を探しに、教室を出て行った

「はあー、マジで疲れた」

達也は椅子にだらけたようにもたれ掛かった



「あいつといると、本当に疲れる」  
心底そう思ってるような声だ

「お疲れのようだね、ワト ン君」  
そう炎夏が言った

「はあ〜」  
炎夏を見て、達也は盛大にため息をついた

「何、そのめんどくさい奴が来たみたいなのは  
人の顔見てため息つくなんて失礼だよ」

「めんどくさい上に痛い奴が来たと思うと、ため息をつきたくもな  
るよ」

炎夏は達也の席の前に座った

「ええー、私痛くないよ」

「本当に痛い奴は自分で痛いつて言わないから、やっぱり炎夏は痛  
い奴と言う事だ  
つてか、まだ歯に青ノリついてるよ  
トイレで取ってきたんじゃないの？」

「取ってきたんだけど、その後に残りのタコ焼き食べたの  
もう一回行ってくる」

炎夏はそう言つて、青ノリを取りにお花畑へと向かった

「二度手間だな」

「やっぱ、全部食べてから行けば良かったじゃん」  
達也は誰にともなしに文句を言った

達也が疲れたのか、いつもの事か分からないが、ぼーっとしている  
と、

亜紀、太一、あおいの三人がやってきた

「あれ？」

太一、亜紀と一緒にいても大丈夫なの？」

「かなり危険だが、いないともっと危険な事になるんだよ」

「人を猛獣扱いしないで下さい」

ほら、あおい、達也さんに聞く事があるんですよ」

「うん、うん」

あおいは亜紀に急かされてそう言った

「あ、あの」

「うん、何？」

めんどくさそうにではなく、優しく聞く達也

「や、山口先輩って、え、えっちなビデオ見てるんですか？」

あおいは顔はゆでだこのように真っ赤で、恥ずかしと云うのが十分  
伝わる声で聞いた

「え？」

「ええっと」

達也はまさかそんな事を聞かれると思わなかったので、戸惑う

太一をちらつと見ると、  
顔に言わないでくれ、お願いだと書いてある

亜紀の方も見ると、嘘ついたら、どうなるか分かってるでしょうね  
と言いたげな目である

「うん、見てるよ」  
達也は友達より、我が身を優先した

その言葉に対しての反応は三者三様である

「え？」

そうなんですか？」

あおいはシヨックを受けた顔をした

太一は絶望の淵に沈んでいる

亜紀はそれを見て楽しんでる  
まぎれもない悪女である

「でも、大半の男は見てるから、そう変じゃないと思うよ」  
達也はフォローかどうか微妙な事を言った

「麻倉先輩は見るんですか？」

「俺は見ないけど」

「じゃあ、変です」

あおいはこの時だけはなぜかきっぱりした口調で言った

「(何で俺基準なんだろう?)」

「それに山口先輩は特殊なのを見てますからね  
追い討ちをかける亜紀

「特殊?」

「分かった

金輪際見ないから

俺が見てるのはあおいちゃんだけだから」

太一は危ないと思ったのか、話しをずらした

「(くさっ)」

「本当ですか?」

あおいは太一の目をじっと見つめる

「本当だよ

俺にはあおいちゃんが必要なんだよ」

「(気持ち悪っ)」

言いたい放題ならぬ思いたい放題である

「約束ですよ」

にっこりと笑うあおい

「じゃあ、私次は移動教室だから行きますね」

あおいはぺこりと頭を下げて、教室を出て行った

ちなみに今は昼休みである

「あれ？」

亜紀は行かなくていいの？」

「私は自分の教室ですから」

「じゃあな

俺はまた旅に出るぜ」

「今回は見逃してあげましたけど、次はないと思って下さい」

「ふっ

貴様ごときにわしを倒せるとも思っておるのか？」

「お前らはどこの漫画から出てきたんだよ」

「さらばじゃ」

太一は教室を颯爽と言いたい所だが、どたどたと出て行った

「（本当俺の周りって変なの多いよな  
テンションの高さについていけないし）」

「本当炎夏先輩と言い、山口先輩と言い、達也さんの周りには痛い  
人が多いですね」

「ええー

さっきまでのってたのは、どこのどなたですか？」

「あれは山口先輩の精神年齢に合わせてたあげたんですよ」

「さようございますか」

丁寧な言い方ではあるが、明らかに馬鹿にした口調である

「でも、あんなにあおいが嫉妬深いなんて知りませんでした」

「確かにな」

あれには俺もびっくりしたよ」

「いつかヤンデレになりそうで怖いです」

「ヤンデレ？」

何それ？

ヤンキーがデレデレする事か？」

「違いますよ」

ヤンデレとは病むとデレを合わせた言葉です

誤解を恐れずに言えば、ストーカーと似たようなものです」

「犯罪者って事？」

「確かにヤンデレの中には犯罪者も多くいますが、そうでない人も多くいます」

一般的に言う普通とは違うのは確かですが」

「まあ、病んでるんだから、普通ではないだろうね  
で、ヤンデレって何を言ったり、行動したりするの？」

「ヤンデレと言うのは実に多種多様なんです  
それを説明するには時間がかかります」

ですので、帰りに説明します」

「そんなに時間かかるならいいです  
興味がある訳じゃないから」

「すぐ帰らないで、ちゃんと待って下さいよ」  
そう言っつて、亜紀は自分の教室へと帰って行った

いつも通りの達也に有無を言わせない展開である

T o B e C o n t i n u e d

第30話：同情するなら金をくれ（後書き）

同情するだけでは何の役にも立ちません。そう言うのは行動が伴ってこそ意味があるんです。何か自分の価値観を主張する所になってますね（苦笑）



第31話：パロディって言うのはさ（前書き）

いまいちパロディとパクリの違いが分かりません

### 第31話：パロディって言うのはさ

「俺この戦争が終わったら、結婚するんだ」

「はあ？」

何言ってるんだ、お前は」

俺 が終わったら××するんだ

これは死神を呼ぶ言葉である

これを言った人はだいたい死ぬ

「見てくれよ

すごい可愛いだろ」

太一は恋人のあおいと一緒に写っているプリクラを達也に見せた

「プリクラかよ

ふつうこう言うのって、写真とかロケットペンダントじゃねえの」

「プリクラを馬鹿にすんなよ

プリクラを馬鹿にする奴はプリクラに泣くんだぞ」

「一円を馬鹿にする奴はみたいに言うんじゃねえよ

そもそもこの戦争って何だよ

お前は傭兵か

はたまた自衛隊が戦争していい事になった時代の人間か」

「ネタにマジになってんじゃねえよ

馬鹿か」

「カッチーン」

お父さんはそんな子に育てたつもりはありません」

「お前に育ててもらった覚えはない

それにカッチーンって何だよ

口で言う奴初めて見たよ」

太一は至極まともな事を言った

「初めて言う奴は馬鹿にされるんだよな

あと初めては痛くて血がでるんだよ」

「下ネタかよ」

「全くそんな事はない

これだからエロ男は嫌なんだよ

勝手に違う方に解釈するから」

達也は盛大にため息をついた

「カッチンプリン

俺はエロ男ではない

エロ男の中のエロ男

キングオブエロ男だ」

「馬鹿だ

お前はカセ　ゴールドぐらい馬鹿だよ」

「何だと

そんな事言うのなら、強力な水中バレー工を見せて思いきり笑わせてや

ろうか

それともお前の鼻水を飲みつくしてくれようか」

「やれるもんならやって見る

台本見ないと喋れないお馬鹿さんが」

「いいんだ、いいんだ

どうせ俺なんてベムベームにやられて終わりだから」

太一は急にいじけ出した

「いや、勇者に弱点を刺されて死んだと思うよ」

「ああ、肩の後ろの2本のごぼうの真ん中にあるすね毛の下の口」  
「口の右だったよな」

「それ間違った奴だよな

「口口調って何だよって話だし」

「じゃあ、あれだ

「肩車して後ろ向きに乗り2本のゴボウを持った歌舞伎顔の男」

「うん、それはもっと間違いだね

「そんな人間いたら、誰でも怖がるよ」

「達也はそう言った

「太一はなぜかいきなり数学の教科書を台本に見立てて、床に倒れながらぐふつと言って目を閉じた」

「おい大丈夫か？」

しかし、返事はない

「返事がない

ただの屍のようだ」

と思ったら、太一は立ち上がった

「うわー、ただの屍じゃなく腐った死体だったか」

「俺は腐ってねえよ

俺は腐った死体じゃなくて死霊 騎士だ」

「どっちみち自分がゾンビだとは認めてるんだね」

「ふっ、俺にお札が貼ってないから自由に動けるぜ」

「それはゾンビって言うよりキョンシーだと思う」

「早くテ テンを連れてこい

でないとお前は亀になるぞ」

「亀になるんじゃないやなくて、亀に魂を入れたんだよ

それにやったのはテ テン自身だよ」

「貴様、わしを愚弄する気が」

「いえ、全く愚弄してません

愚弄する価値もないですから」

「貴様には我が真の力を見せてやろう  
そして知れ  
真の絶望がなんたるかを」

「戦ってもないのに真の力ですか  
普通、ある程度戦ってから見せるもんじゃないですかね」

「変身  
とう」

「もしかして仮 ライダーですか  
しかも昭和」

「くそつ  
MPが足りない」

「MPが足りないってなんだよ  
ベルトがないの間違いだろ」

それともドラ ラムでもしたいんですか、この野郎」

「いや、モシ スしようと思ったけど、MPが足りなかったんだ」

「それなら宿屋に泊まるか薬飲んでください」

「いや、俺最大MP1しかないんだ」

「最大MP1でモシ ス使おうと思うなよ」

メ ンテぐらいしか使えないんだから」

「メ ンテ使おうと死ぬから嫌だな」

「大丈夫だ」

俺、ザ リク覚えてるから」

「本当か」

「ああ、しかし、俺も最大MP1なんだ」

「「チャンチャン」」

「何やってんの？」  
炎夏が現れた

「えっ

普通の会話？」  
そう達也が言った

「何で疑問系」

「凡人には分からないから教えてやろう  
いいか、太一と俺は心の友と書いて心友と言うんだ  
心友との会話は凡人には普通の会話に思えないかもしれないが、俺  
らには普通の会話なんだ  
だから疑問系なんだよ」

「うん、確かに凡人じゃないね  
変態と馬鹿だから」

「ちよつと待て  
どっちが変態なんだ」  
太一は炎夏に尋ねた

「それはもちろん山口でしょ」

「良かった」

変態じゃなくて」

しかし、達也は何故か複雑な気分だ

「俺が変態だと

サナギから成虫にでもなるのかよ」

「うっさいわよ

この腐れ外道が」

「俺は腐れ外道じゃなくて腐っ 死体だ

そこを勘違いしないでくれ」

「あれ、死霊 騎士じゃなかったの？」

「もう、面倒くさいから

フェニクスノ尾」

「ぐふっ」

太一は床に倒れた

「それ違うゲームだから

せめて世界樹の葉にして」

「返事はないわ

ただの屍だから」

「いや、聞いてないから



「つてか、最初に戻った」

「楽しそうですね」

冷やかに見つめている亜紀が現れた

「楽しいと言われれば楽しんだろうな」

「ぬっ」

その声は「

太一は目を見開いて起き上がった

「そこにいるのは水樹ではないか」

「その喋り方うざいんですけど」

「ここで会ったが100年目いざ尋常に勝負じゃ」

「私100年も生きてないんですけど」

「人間じゃない設定なんじゃないの」

それだったら、100年ぐらい生きてるんじゃない」

「あっ、そうですね」

「納得するよな」

「つてか100年目ってそう言う意味じゃないからね」

「うるせえ」

「この泥棒猫が」

「いきなり何言いだしてんだよ  
泥棒猫って意味違うからね」

「へえー、私とやろうって言うんですか  
いい度胸してますね」

亜紀は太一をじろりと睨んだ

「いえ、滅相もございません、お代官様  
私は他の人のことを言ったんでございまして  
あ、人が呼んでるので、これで失礼しやす」  
太一は教室を出て行った

「ふっ

私に勝とうだなんて100年早いんですよ」

「お前も結構ノリノリだな」

「チ ノリダー？」

「いや、言っていないから

しかし、古いの持ってきたな」

「仮 ライダーV3」

「君達ね、何でも言えば言いつてもんじやないからね  
しかも、なぜV3？」

「仮 ライダーと言ったら、V3に決まってるでしょ」

「はあ？」

何言ってるんだ

仮 ライダーと言えば一号に決まってるんだろ」

「はあーあ

これだから年齢が高い人は嫌なんですよ

何でも昔は良かったって言うんだから

仮 ライダーと言えば、ディケドに決まってるでしょ」

「年齢が高いって一つしか変わらないからね

せめて五つぐらい違って年齢が高いと言ってください」

「でも朝8時だから携帯で見ないといけないんです」

「ああ、それはきついよね

私もいいも携帯で見てるけど、先生に見つからないようにするのが大変だから」

「そんなことは全く聞いてません

しかし、その二つはそうまでして見たいのか」

「当たり前です

何てたってアイドルなんですよ」

「そうだよ

明日来てくれるかなと言ったのに、用事で断られるんだよ」

「だから何でお前らはそんな古いこと知ってただよ」

「お母さんは中の人が好きで、子供は変身した後が好きなんですよ」

「子供より母親の方が熱中してる場合って多いよね  
子供をだしにして会いに行ったりとか」

「何度も言ってくどいかもしいけど、そんなこと聞いてないから  
ってか、お前らは人の話しはちゃんと聞こうと教わらなかったのか」

「達也さんは、仮ライダーに興味ないんですか」

「そうだよ」

「いっちゃっていいっすかとか興味ないの」

「うん、まず炎夏」

「それいい もじゃなくても聞けるよね」

「そして、亜紀」

「俺は仮面ライダーより戦隊物が好きなんだよ」

「なぜなら、幼稚園のアルバムに将来の夢は当時人気だった戦隊物に  
なりたいて書いてあったから」

「うわっ」

「痛い、痛すぎるよ」

「宇宙人と交信できるんだとか、妖精と話せるんだくらいの痛さで  
すね」

「確かにそれは痛いけどさ、俺その時まだ幼稚園だけ」

「大人だったら分かるけど、幼稚園児だったら痛くないだろ」

「どうせそんな人は、運動場にツヘビとかトカゲ 一郎とか描い  
てたんでしょ」

「うぐっ」

「あれ

トカゲ 一郎じゃなくて、トカゲ しっぱだとか突っ込まないの」

「図星だから、突っ込めないんですよ」

「ああ、そうですよ

ツ ヘビ描いて、何も起こらなかったのは、モンスターがいないからだと

で、次にトカゲ しっぱ描いたんだけどまた何も起こらなくて、一週間後に俺ミグ グ族じゃないじゃんと気付いた馬鹿ですよ」

それを聞いて、二人は大笑いをした

そう、王女の愛が生んだア ルマンを見た時のように

「面白いからちょっと他のクラスにいいふらしてくるね」  
そう言つて、炎夏は教室を出て行った

「良かったですね

また一個伝説が増えて」

「うん、だからそんな伝説はいらない  
つてかあいつに良心と言うものはないのか」

「良心があつたら今までしてきた行動はしなと思いますよ」

「だよな」

「他にも伝説ありそうですね  
いっけー、マグ ムとか言ってるそうですね」

「ああ、言いましたよ  
マグ ムトルネードも言いましたけど、それが何か」

達也は開き直った

「どうせ、マ ナムセイバーに飽きて、ビークス イダーに行つて、  
その次はレイス インガーに行つたんでしょ」

「えっ？」

何その見てきたような発言は  
お前は過去に行けるのか」

「そんなわけないでしょ

これだから痛い人間は嫌なんですよ

その世代は似たりよったりなことしてましたから、大体予想がつく  
んです」

「まあ、ミニ 駆はどうか知らんが、魔法陣描いてた奴は結構いる  
と思うな」

「さらにどうせそう言う人は、現実逃避で異世界へ行きたいと思っ  
んですよ」

「ああ、一時期行きたいなあとは思ったね  
現実逃避ではないけど」

「でも、考えて見て下さいよ

「ハ― ルンの世界とか嫌ですよ  
特に北の大陸

平和ぼけしてる日本人なんかすぐ死にますよ」

「日本人だけじゃなくて、こっちの世界の人達全員すぐ死ぬと思う  
な」

「まあ、この世界にモンスターとかいませんからね  
でも、ドラ もんとかしん やんだとモンスターとかいませんから、  
死ぬ確率はあまり変わらないと思いますよ」

「それはそうかもしれないけど、なぜわざわざその世界に  
その世界だったら今の世界で十分じゃん」

「だから異世界に行きたいと思う人は甘いんですよ  
大体ですね、今の世界で頑張れない人や落ちこぼれは、他の世界で  
頑張れるわけないし、落ちこぼれのままですよ  
それにその世界に生まれたとしても、それが当たり前だと思えます  
から、何でこんな世界について思うでしょうね」

「まあ、厳しい言い方だけど、そうなるかな  
でもさ、懂れるぐらいいいんじゃないの

俺もファンタジー好きだし」

「ああ、父と再婚する相手には連れ子がいて、その子が妹になって、  
なんかやあると言う設定ですか」

「それは確かにファンタジー（幻想）だろうけど、それを好きなのは  
お前だろ

俺は剣と魔法の世界が好きなの

A Mとかガ ブレードがある世界でもOKだけど」

「まあ、そんなことはどうでもいいですけど、昨夜はお楽しみでしたねってセクハラじゃないですか」

「どうでもいいんだ

(ちょっとシヨック)

そもそもお楽しみってそういう意味なのか」

「え、だってローラ姫と勇者ですよ

それ以外に何をするって言うんですか」

「色々あるだろ

ばば抜きとか人生ゲームとか

そもそも、男と女が同じ部屋に泊まったからと言って、何でそんなことになるんだよ

俺、そういう考え方嫌いなんだよな」

「甘いですね、達也さん

俺常識と言つものが嫌いなんだよと言っても、達也さんも所詮は常識に縛られてるんです

なぜなら、ローラ姫も勇者も女だからです

つまり百合です」

「ええー

勇者って男じゃないの

見た目完璧にそうじゃん」

「それが常識に縛られているということですよ

見た目完璧に男だったら、男なのですか

サラシ巻いたり男っぽい格好するのはよくあることです



ちなみに、勇者はAカップなのでサラシはいりません」

「うん、そんな情報もいらないね

ってか、一万歩譲って、お前の言うことをしていたとしても、何で宿屋のおっさんがそんな事分かるんだよ

覗いてたとしても言うのか」

「絶対とは言えませんが、見たところあの宿は防音がしっかりしているとは言えません

ですから、ローラ姫または勇者の声が聞こえてしまったのでしょ  
うベッドの軋む音が聞こえたと言う可能性もあります」

「うん、ごめん

お前に聞いた俺が馬鹿だった」

「ふはは

勇者よ、よくぞ来た」

魔王太一が現れた

「うわっ

達也さんより痛い人が来ましたよ」

「あれはハジケリストならぬイタイリストだな

すでにメーター振り切れてるぞ」

「勇者よ、もしわしの味方になるのなら、おまえに世界の半分をや  
ろう」

「いや、いらなです

どうせ闇の世界をとか言うんだろ」

魔王太一はいきなり倒れた

「勇者よ

よくぞわしを倒した」

「いや、俺何もしてないですけど  
つてか、倒されるの早っ」

「だが光あるかぎり、闇もまたある  
わしには見えるのだ

再び何者かが闇から現れよう

だがその時はお前は年老いて生きてはいまい

わははは  
ぐふっ」

魔王は息絶えた

「その魔王の言葉を聞いて、勇者は子作りに励んだのであった」

「えっ

それで

違うよね

嘘だと言ってよ、ジョー」

「外から冷めた目で見てると、馬鹿と言うより痛々しくて哀れだね」

炎夏Aが現れた

「冷めた目で見てるからだろ

温かい目で見たらまた違う風に見えるぞ」

「温かい目で見られたら、それはそれで私達が悲しくなってきましたよ」

「ああ、それはそうかも

ってか、お前私は違うよって感じで言ってるけど、同類だからね踊る阿呆に見る阿呆

同じ阿呆なら踊らにや損々って言うだろ」

「前半部分はいらないと思うけど

私もう冷めちゃったのよね

冷めたら阿呆には戻れない

そう、大人が子供に戻れないように」

「この人何言ってるんですか

達也さんは意味分かりますか」

「いや、俺も意味分からん

しかし、分かったら、あれと同類って事じゃないか」

「それは嫌ですね」

「何さ、思わせぶりな事言って、近づいてたったらそんなつもりはないとか、冷たい目で見えてくるんだから」

「それは断言します

炎夏先輩が勝手に勘違いしただけです

よくいるんですね

自分が勝手に勘違いしたのが悪いのに、相手のせいにする人」

「二人とも何かそんな経験あるの」

「私はよく勘違いされて告白されます

炎夏先輩はどうせ、消しゴム拾って貰って勘違いしたんでしょ」

「いや、それはないだろ

いくら炎夏が痛いからって

なあ、炎夏」

「何で分かったの」

炎夏Bは驚愕した

「炎夏先輩ならそうだと思ってです」

「まじでか

お前馬鹿だろ

消しゴムって

そんなん拾ってもらったぐらいで、勘違いするなんて」

達也は笑うのを我慢しているようだ

机を何度も叩いている

「あのー、お取り込みのところすみませんが、私はいつまで倒れていけばよろしいんでしょうか」

魔王 ではなくただの太一が言った

「ああー、すっかり忘れてた

ごめん」

「と言うか、何でここにいるのと思いました」

「お前らひどっ

後、藍沢

俺を踏んでじゃねーよ

っつか気付けよ

早くどかねーと、白い可愛い下着が見えたまんまんだぜ」

炎夏Bは躊躇いもせず、いつもの様に男の急所を蹴った

「我が軍団は永遠に不滅である」

そう言つて、太一は気絶した

すぐ気絶せずに、話せたことに驚きである

「（前から思つてたけど、これいじめじゃね

でも、言つたら、次は俺がされるからな

ああ、これがクラスの奴らが助けない理由か）」

達也は卑怯な技

「見て見ぬ振り」を覚えた

これで、達也は自他共に認める卑怯な人間になった

「聞いた

さっきの」

炎夏は恐怖の大王のようである

「えっ

いえ、聞いてません

炎夏さんが、白い可愛い下着をはいてるなんて」

「ありきたりな墓穴の掘り方ですね  
もっと上手く墓穴を掘って下さい」

「どつちみちダメだろ」

炎夏さん、落ちつこうぜ  
話せば分かる」

「ふっ」

世の中には話し合いだけでは解決しない事だってあるのよ  
さっき笑った件もあるしね」

「完璧に私怨ですね」

「力と言うのは他人の為ではなく、自分の為に使うのが正しいのだ  
よ」

「悪役の設定なんですか」

「達也がいない」

どこに行ったのだ」

「達也さんなら、私達が話している間に逃げていきましたよ」

「己、達也め」

……ふっ、まあいい

死ねのがすこし先延ばしになっただけだ  
恐怖を味わいながら、死なせてやるっ」

炎夏（恐怖の大王）はゆっくり教室を出て行った

「炎夏先輩は本当悪役が似合いますね」

亜紀は窓から外を見る

白い雲に青い空

「今日も平和で、何も無い一日ですね  
いい事です」

一度亜紀に平和の定義を聞きたい今日この頃であった

最終回：昔書いた小説を恥ずかしく思うのは、成長した証だってさ

「ほっぺについているご飯粒を取って、その取ったご飯粒を食べたら、それは間接キスなんですかね」

そう亜紀は言った

「ほっぺという言葉をはさしぶりに聞いたね」  
ずれている達也

ここは教室

二人はいつものようにくだらない話しをしている

「ほおをほっぺと言ったら、この子可愛いと思われるという計算です  
ですから、わざとほっぺと言いました」

「思われるって誰にだよ」

「もちろん、達也さんにです」

それ以外に思われたって何の意味もありません」

「全くもって思わないぞ」

あれか。ほっぺと言うなんて、可愛いらしい

お兄さん、ぎゅっと抱きしめちゃうぞとか言っただけなのか」

「気持ち悪いです」

そこまでして欲しくはありません」

「お前、人がせっかく乗ってあげたのに、傷つくこと言いやがって」



「誰も乗って欲しいなんて言ってますん」

「それは産んでくれなんて頼んでないと同じくらい禁句だ」

「達也さんだって、炎夏先輩や山口先輩に言ってるじゃないですか」

「いいか、人を批判するときは自分のことは無視するんだ  
そうじゃなきゃ、批判なんてできないからな」

達也の言っていることは、半分正解、半分間違いである

「ということで、間接キスかどうかが問題ですね」

「ということって

日本語おかしいよ」

「まず、間接とは何かですよね

辞書には対象との間に物を隔てて対する状態とあります  
辞書を引いたら余計に意味が分からなくなることってありますよね」

「そういう場合、具体的に考えたらいいんじゃないか」

達也はどんどん亜紀の発言、行動に順応していつている

それがいいことかどうかは分からない

「そうですよね

間接キスと言えば、好きな女の子のリコーダーを舐めるが具体的に  
すね」

「何でそっちの方に持って行くんだ

もつと違うのあるだろ」

「皆が帰った後に太吉は真子ちゃんのリコーダーを舐めるんです」

「誰だよ

太吉と真子って」

「太吉はリコーダーを舐めた次の日学校へ行くと、真子ちゃんが泣いてるんです

真子ちゃんの友達が、ちよつと太吉、あんた真子のリコーダー舐めたのって聞くわけです

太吉はえ、な、舐めてないよと焦りながら答えます  
そうしたら友達は反論します

『しらばつくれるんじゃないわよ  
見たって人がいるのよ』

太吉は『ふはは、よくぞ気づいたな  
そつだ私が真子のリコーダーを舐めたのだよ、明智君』と言います」

「太吉、キャラ変わってるよ

どこぞの犯人みたいになってるよ」

「友達は『まじきもいんですけど  
チヨベリバ』と言います」

「友達何歳

小学生じゃねえだろ

何でチヨベリバ知ってたんだよ」

「友達は新しいものが大好きなんです」

「全然新しくねえよ

小学生の間では、もう一回流行ってるのか」

「いえ、美保ちゃんの頭の中だけで流行ってます  
いわゆるマイブームです」

「ああ、だから、新しいのか  
って、違うよ

もう一回流行っても、新しくはならないからね」

達也は美保ちゃんは誰かとは聞かなかった

「リコーダをナメナメしてやんぜという物語を考えたんですけど、  
まだ辞書での間接の意味がわかりませんね」

「何だ、そのネーミングセンスのないタイトルは  
だから、お前は方向性間違ってるからね」

「次は、ストローのついたジュースですね」

「正直それもどうかと思うが、まあいい」

「太吉は真子が好きなんです  
好きと言っても性欲対象としてなんですけどね  
女子高生好きの多くは、性欲対象として好きなんですよね  
汚らわしいです」

「また太吉でたー」

小学生で性欲対象として好きって何だよ

もう、色々と凄いよ、太吉

まあ、二十歳過ぎたお兄さんたちはだいたい亜紀の言う通りだね」

「太吉は真子の口紅がついたストローを盗むことに成功しました  
太吉はそのストローを舐めようと思いました

しかし、考えました

これを売ればお金がはいる

そうしたら、真子と静かで落ち着いた宿泊施設に行けると」

「静かで落ち着いた宿泊施設って何だ

絶対あのアニメ見ただろ

というか、真子も何で口紅してんだよ

太吉は犯罪者の一歩手前だし」

「太吉はこのストローをインターネットで売るかお店に売りに行く  
かどちらが高く買ってくれるか考えました

ふと思ったのが、このストローを愛しのエンジェルが使ったという

証拠が必要ということですよ」

「まあ、使ったという証明は必要だな

愛しのエンジェルってなんだ

この分だと、ミスウィートハニーとかも言いそうだな」

「一番いいのは顔写真ですが、お店に顔写真を渡すのは危険です  
インターネットではもっと危険です」

「それぐらいの考えはあったんだな

えらいぞ、太吉」

「太吉はそこで美保の写真を使おうと考えました  
美保ならどうなるかと構わない

きもいとか言ってきたからなと」

「前言撤回

褒めて損した

もう太吉は犯罪者だよ」

「しかし、美保は不細工ではありませんが、可愛いくもありません  
それだと、高く売れるか疑問です」

「いい加減飽きてきたんだけど

MK5なんですけど」

「しかし、世の中には写真写りをよくする方法がいくらでもあります  
それに加えて眼鏡をかけると最高です」

「それは太吉の趣味だろ

ってか、設定作ったお前の趣味だろ」

「太吉は前から思っていました

プリクラで撮った写真は詐欺だよなと

ということは、美保のプリクラ写真があればいいんじゃないかと太  
吉は思いました」

「確かにプリクラ写真と実物は別人ってことはあるな

凄いよなああの機械」

「そういえば、美保はプリクラを撮ったという話しを聞きました  
太吉はそれを盗もうと考えました」

「窃盗罪きたー

もう、太吉の将来が怖いよ」

「太吉はまた皆が帰ったあとにプリクラ写真を探しましたしかし、なんと……ありませんでした」

「そりゃ、持ち帰るでしょ、普通  
つてか、疲れたんですけど  
ボタンキユーしそうなんですけど」

「そこで、太吉は真子のブルマを袋から取りだそうとしました」

「はいはいよかったね

ブルマがある時代なんだね」

達也は運動場をぼけつと見ながら、面倒くさそうに言った

「太吉はもう少しと思ったところで、教室の扉が開きました  
そこには中肉中背の男がいました

太吉『くそ、機関の追っ手がここまで来るとは』」

「ええー

いきなりジャンル変わってるんですけど

太吉、痛い子になってるんですけど」

達也はあまりの展開にテンション（誤用）が高くなった

「太吉『こうなったら、殺される前に殺してやる』」

「太吉、だめー

今までの犯罪とはわけが違っよ

凶悪だからね

少年法があるから死刑にはなんないかもしれないけど、凶悪には変

わりがないからね」

「中肉中背の男は太吉の前まで来てこう言いました  
君には変態の素質があるね

どうだい、修行して変態という名の紳士になってみないかいと」

「またジャンル変わったよ

何このいきあたりばったりな設定は  
作者、その時の気分で作ってるだろ  
つてか、変態紳士になる修行ってなんだよ」

「太吉『もしかして、あなたは伝説の変態マイスターのドクトルさ  
んでは』」

ドクトル『いかにも、私はドクトルだよ』」

「変態マイスターってなんだー

従弟制度があるのかよ

マイスターがいるなら、弟子とかいるのかよ  
なんだよ、その無駄な制度は」

「ドクトル『どうだい、私とこないかい』」

太吉『行きます

僕はあなたのような変態になるのが夢だったんです』」

「どんな夢だよ

夢は持つのはいいことだけど、その夢は先生お勧めしないな」

「太吉『そうだ、マイスターにこれをあげます』」

太吉はマイスターに真子のブルマをあげました

ドクトル『これはどうもありがとう

うーん、いい具合に使い古されてて素晴らしいね』」

「完璧に変態だよ

あ、だから、変態マイスターなのか  
っていうか、何でこの男小学校に入ってるの  
あの事件を教訓にしてないの」

「ドクトル』では、行こうかね

我が弟子よ』

太吉』はい』

僕の冒険はまだ始まったばかりだ  
これでこの物語は終わりです」

「よくある打ち切りパターンだけど、本当に冒険始まってないからね  
というか、始まったらダメだからね」

「どうでした、この物語」

「しりすぼみだな」

「しりすぼみ？」

「ああ、よくある話しだな

最初はノリがよかったり勢いがあったって面白いなと思うんだけど、後  
半はぐだぐだになってつまらなくなるんだよ

例えば、某小説サイトに投稿しているとある作者はさ、毎回6ペー  
ジぐらいを目標にしてるんだ

だからさ、1ページ目はノリノリでやってるんだけど、ページのば  
しをするために、いろんな話しをつなげるから、つまらなくなっ  
ていくんだよ



まあ、最初から面白くないのかもしいけないけど」

「某少年週刊誌にもよくありますよね

作者がそろそろ終わろうかなと思ってるのに、編集が終わらせてくれないんです

そのせいで話しがぐだぐだになって人氣がなくなつて、俺たちの戦いはこれからだと言って終わりになるんですね」

「ああ、冒険はまだ始まつたばかりだと同じくらいよくある打ち切りパターンだな」

「パロディとパクリつてどう違うんですかね」

「ほら、そう言うのがページ稼ぎって言うんだ

そして、それは前回作者も分からないって言ってただろ」

「最近の漫画つて、パロディも多いですけど、自虐ネタも多いですよね」

「例えば」

「偉人を汚すなやPTAからの苦情、または  
ラ・ブホテル  
です」

「全部同じ奴じゃねえーか

なんで一つなの、最低三つはあげるよ

みんな持つてるのみんなだつて三人以上だからね」

「私、伏せ字の意味が分からないんですよね

ラ・ブホテルの

の部分伏せなくてもいいと思います」

「いや、ダメだからね

P T Aから苦情が来ているアニメのスタッフの人たちには怖いものはないのかもしれない

でもね、俺たちは一般人なんだよ

一般ピーポーなんだよ

だから、伏せ字は必要なんだよ」

「例えばですよ、ブリはテリヤキとは限らない

これは魔法陣グルグルの引用です

この文章の魔法陣グルグルは伏せ字にしなくていいですよね」

「それは亜紀が言っている通り引用だからだろ

引用は法律で認められてるし、出典を明かさなきゃいけないから」

「では、トイラスはどうですか

これ有名で褒めようと批判だろうと悪口だろうと、伏せ字にしても分かりますよね」

「それは伏せ字が一字だからだよ

ト　　スにすれば、伏せ字の意味はあるよ」

「そこまでして会社名だす必要ありますか

某有名企業で十分でしょ」

「もうね、おじさんにも分からないんだよ

魔法　グルグルや魔法陣グ　グルにしても分かるから、  
グルにしたんだ  
グル

でもね、これだと伏せ字の意味がないんだよね

魔法陣            だったらある程度意味はあるのかもしいけど、それってどうなのってなるんだ  
もういつそのこと、そのまま出そうか悩んでたら、間違っつてそのまま投稿しちゃったんだ  
ええー、やばくねと思っただけけど、面倒だからいいかと考えて、そのままにしてあるんだよ  
こ、これはあくまで例えなんだからね  
べ、別に実話じゃないんだからね

「達也さん、キャラ変わってますよ  
それにそういうのは二次元だからいいんです  
三次元だと気持ち悪いだけです」

「人間に限らず何でもそうだが、日々変わっていくもんだよ  
お前、あれだろ  
どうせ、萌え系の参考書で勉強してんだろ  
このオタクが」

「周りがオタクばかりの達也さんに言われたくありません」

「炎夏は違うだろ  
あと、里奈先輩や未来ちゃんも違うだろ」

「里奈先輩？  
作者が名前も存在も忘れてそんなキャラは除外です」

「そんなこと言ったら未来ちゃんやあおいちゃんだっつてそうだろう  
というか、お前は何言っつてんの」

「大丈夫です」

未来やあおいは名前は忘れていましたが、存在は覚えていたと思います

しかし、達也さんの未来はオタクじゃないはもっともかもしれませんがあおいにはそういう設定がありました、未来にはありましたかね」

「設定って言うな

なんだよ、さっきから作者とか設定とか意味分からんこと言いやがって

あれか、作中でそういう設定なんですと言っている漫画を見て、それ面白いなどでも思ったのか」

「原作の漫画で言ってるかどうかは分かりませんが、私は漫画をアニメ化したの見て面白いと思いました」

「確かにそれは面白かったのかもしれない  
でもね、使い所を間違うと全く面白くないどころか、しらけるんだよ  
今の完璧間違ってるからね」

「読み返してみたんですけど、あおいはオタクだと思つような描写はありました

しかし、未来はそのような描写はありませんでした」

「何を読み返したの  
ねえ、何を」

「ですから、オタクは、私、あおい、山口先輩、藍沢先輩の四人です  
ね」

「えっ。何で炎夏が入ってんの」

「藍沢先輩は名前がギャルゲーに出てきそうだからです  
だって、炎夏って書いて「ほのか」と読むんですよ  
ふつう、「えんか」でしょ

もう、宴会で塩化ナトリウムでも食べてなさいよって話しです」

「名前批判か

別にいいんじゃないの、ほのかと読んでもさ」

「そうですね、

達也さんは、自分さえよければいいんですもんね」

「確かにそういう部分もあるかもしれないけど、  
本人が何とも思  
ってないなら、別にいいだろうってことだよ」

「じゃあ、不本意ですけど藍沢先輩は除外しますか  
そうすると、三人になりますね」

「そうすると、周りがオタクばかりは違うよな」

「まあ、作者が設定を忘れるなんてことはよくありますからね」

「まあな、かの有名なコ ン・ド ルも設定を忘れてるからな」

「どこの作者なんて言動が矛盾してますからね」

「あれは矛盾してるんじゃないと思うよ

あれ、俺何でこんな書いたんだろうやこんな嫌いだわ、あるいは  
これってあれと一緒にされるんじゃないかねえと思って、なんとか修正し  
ようとしてるんだと俺は思うよ」

「しかし、修正しきれなくて、余計おかしくなると」

「それは否定しないな」

「その作者はヒロインのキャラ設定のうちの一つを今でも消したいんですよね」

「後書きにそんなこと書いてあったな」

「それをなんとか修正しようとして、わざわざページをさいてなんとかあれとは違んだよというところを見せているんですね」

「そもそもあの人にシリアス物は無理だろ」

「文才ないですからね」

三作品の中で一番人気があるやつだと下手でもなんとかかなりますけど、シリアス物のだと一目瞭然ですからね  
なのにシリアスを書きたがる」

「あの人、そういうのも好きだからな」

「自己満足ですね」

「自己満足って悪い意味で使われることが多いよな  
でもさ、自分を満足させることができないう奴に他人を満足させることが  
できるのか」

「まずは、自分が楽しむことが必要だろ」

「しかし、そういうのは黒歴史と言われます」

「黒歴史？  
何だそれは」

「本当に今の子は何でもすぐに聞いてくる  
少しはググるぐらいしてください」

「ググるっていうと、グー ル先生怒るよ  
廊下に立たされちゃうからね」

「情報が古いです  
これだから情弱は困ります」

「もういいよ  
こうなったら、ヤー で調べてやる」

達也は携帯を取り出したそして、ヤー で「黒歴史」を検索した

<黒歴史くろれきとは、アニメ作品『ガンダム』に登場した用語。物語中  
では、過去に起きた宇宙戦争の歴史の事を指す。  
転じて、無かったことにしたい、あるいは無かったことにされてい  
る過去の事象を指すスラングとして用いられることもある。>  
Wikipedia 出典

「スラングとすれば、無かったことにしたい過去のことが」

「その通りです。  
例えば、若かりし過去や思い出せば、恥ずかしいことやってたなど  
いう過去ですね」

「しかし、黒歴史と思うってことは成長した証なんじゃねえのか」

「そういう場合もありますが、それは一つに過ぎません  
昔と今とでは考えが変わった

その時は徹夜のテンション（御用だ御用だ）だったから、冷めたら  
恥ずかしくなった

なんとか黒歴史から脱出したいけど、今でも黒歴史を作っている  
前よりは成長したから

このように様々な理由があります」

「まあ、恥ずかしいと思っても、思っただけなら何も変わんねえか  
らな」

「黒歴史があること自体は恥ずかしいことではありません  
誰にでもありますし、人は皆そうやって大人になっていくんですよ  
問題はその黒歴史をどう扱うかです」

「俺なら面倒だからそのままにしておく」

「それでは成長できません  
ダメ人間まっしぐらです」

「いいじゃん、ダメ人間  
ダメ人間は世界を救うんだよ  
それに自分をダメ人間と認めると楽だよ  
亜紀も認めて楽になるうよ」

「人間はすぐに楽な方に流れます  
ですから、流れに逆らうことが大事です  
自分をダメ人間だと思うなら、まずは平凡になればいいんです  
昨日よりは今日、今日よりは明日、そうやって少しでもいいですか



ら、平凡に近付けばいいんです」

「よりましになるんなら、それでいいじゃんという考えか」

「そうです」

天才に努力して勝てないから努力なんて無駄だと言う人がいますしかし、それは間違いです

努力しても勝てないから天才と言うんです」

「そもそも、俺には天才に勝つ必要性が分からない  
どんな世界に住んでるのかな」

「私は1か0の二分法を危惧しています  
経済学は将来を完全に予測することはできない。だから、経済学は机上の空論であると言ってしまったり、生きたくても生きることができない人がいるのと言ったり、学校に行きたくても行けない人がいるのと言ってしまうからです」

「確かに、それは別問題だからな」

「ですから、オタクかオタクではなく、オタクであり、オタクでない存在ということですよ」

「何言ってるの  
全く意味分かんないんだけど」

「神であり、神でない存在みたいなものです」

「やはり意味が分かりません  
神であり、神でない存在って何」

オタクのでもいいんだけど」

「だから、ヤフるぐらいしなさい」

「ヤフるなんてほとんど聞かないよ」

「何ですぐ突っ掛かってくるんですか  
コンプレックスでもあるんですか

あ、ごめんなさい、背が低いのがコンプレックスですもんね」  
亜紀は鼻で笑った

「劣等感という意味でのコンプレックスは誤用だよ」  
達也は努めて冷静に言った

「誤用指摘厨は黙っててください」

「亜紀って、時々意味分からん言葉言うよな」

時々なのだろうか

「これ以上言うと、誤用指摘厨がうざいので、これで終わります」

「俺達の学校生活はまだ始まったばかりだ」

「ご愛読ありがとうございました。

ハーネット先生の次回作にご期待ください

**最終回：昔書いた小説を恥ずかしく思うのは、成長した証だつてさ（後書き）**

うん、ごめん、黒歴史と言いたかったのと打ち切りがしたかっただけなんだ。

今のところ、後悔も反省もしてません。亜紀のレイプされた設定には後悔してますが。また黒歴史を作るかもしれないですが、シリアス物はやめにしようと思います。戦闘物も無理ですね。

少ないながらも読者のみなさま、読んでくださってありがとうございます  
いました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0002e/>

---

天使の皮を被った悪魔と俺と受難の日々

2011年3月16日14時46分発行